

青いチビの使い魔

だしいー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んでNARUTO世界にチート転生した主人公。

だが生まれた先の世界には自分以外の『転生者』『憑依者』『トリッパ』に他作品からの乱入者。さらにはオリキャラまでいるカオスなNARUTO世界だった。

それでも進む時間。原作ブレイク。無茶苦茶な人々。そして起こされた第四次忍界大戦（笑）。

大戦中、命の危機に立たされる主人公。敵の包囲網から逃げる為に使った飛雷神の術だが、その際に投げたマーキングされたクナイは突然現れた光る鏡の中へと入って行ってしまっていた……。

TINAMIにも投稿しています。ただし、誤字脱字や日本語が変な部分を多少修正しています。

目次

主人公の成立ち(笑)	1
召喚	6
話し合い	12
テイルズ オブ ゼロ	18
チートさんと不幸少女	25
買い物したらペットを拾う話	31
キキはペットを手に入れさせられた。	38
夜の出来事	45
2日目	51
主人公が主人公しない	57
喋らない主人公	63
リオンVSギーシュ	69
吸血鬼退治1	74
吸血鬼退治2	82
吸血鬼退治3	92
主人公語り。	98
日常編?	102
任務	108
任務2	113
買い物しよう	120
伝説の剣を手に入れた?	126
買い物終わり	132
フーケ捜索隊	137
VSフーケ(のゴーレム)	142

飲み会	319
天空の虹翼	311
冒険ごっこ	303
外伝 鮮血の使い魔 3	299
外伝 鮮血の使い魔 2	291
外伝 鮮血の使い魔 1	284
デルフの運命	276
レコン・キスタ	269
任務からの帰還	260
アルビオンの最後	248
ジンの憂鬱	239
追跡&合流	231
戦略的撤退	222
決闘	215
宿屋で一泊	209
盗賊の強襲	203
出立	196
姫さま訪問	190
姫さま来日	185
夢	178
ギャンブルは程々に	171
イカサマ探し	164
いざ潜入	160
新たな任務	155
舞踏会	149

戦争の始まり	327
虚無の魔法	336
外伝？ アツシユと老兵と	350
外伝？ アツシユと老兵と少女と	358
外伝？ アツシユと少女とコボルドと	367
外伝？ アツシユと老兵と少女と真実と	376
惚れ薬（恐）	384
またチトセか…	391
ラグドリアン湖へ	398
遭遇	407
水の精霊	414
治療完了	422
リオンとルイズのターン	430
逃走&追走	435
姫様奪還	442
オルレアン家にて	448
夏季休暇	452
魅惑の妖精（狂）	459
ルイズの夏休み	465
ルイズの帰郷	474
ルイズの日常	479
出発	486

主人公の成立ち（笑）

突然ですが、俺、死にました。

死因はとっても簡単。大学のサークルで休日に登山に行った際にハブに噛まれ、処置が遅れ、そしてポックリ。まあ、死んでしまったのはしょうがない。が、問題はその後だった。

「オマエノ、望ミヲ、叶エテヤロウ」

俗に言う、テンプレ転生空間へ俺はいた。しかもご丁寧にソレっぽいのも目の前にいる。見た目は、なんかよくマンガで見るブラックホールみたいなものなんだけど……、考えても分らないし神様でいいか。で、その神様が

「オマエニハ、『NARTO』ノ世界ヘノ、転生ヲ、許ソウ。サア、願イヲ、言エ」

なんて言い始めた。まあ、オタクとしてはとても嬉しいのだが、どう考えてもろくなことになりそうにないよな。まあ、うん、しようがない、諦めよう。

さて、願い事ってことはアレだよな？ チート能力でいいんだよな。うーん、どうしよう。俺って基本的にその世界のルールをガン無視したチートって好きじゃないんだけど……。あー、でもNARTO O世界だしなあ。……………うん。もういいや、テキトーで。ってことで

「えっと、スーパーコーデイネーターにして欲しい。Fateのスキルで天性の肉体と銀魂の夜兎族の戦闘能力とかか身体能力？ が欲しい。あ、あと天才にてもらってチャクラの量をナルトの倍にして欲しい。えっと……こんなもんかな？ うん、まあこれでいいや」

とりあえず、こんだけチートスペックにしとけば大丈夫だろ。多分。きつと。

「ソノ願イ、受理シタ。デハ、良キ、人生ヲ」

神様がそう言うのと、俺は何か引張られ、高速で周りの景色が流れ始める。そして俺は意識が少しずつ遠くなり始めたところ、

「あー、しまった。木の葉の里に生まれたいとか出来ればうちはに生

まれたいとか、外見は誰々がいいとか、まだまだ言うべきことが有ったわあ」

とか、ちよい後悔しつつ意識を手放した。

でだ、ちよい飛ぶが生まれて3年経過。俺の新しい名前は『日向キキ』。そう、俺が生まれた場所がなんと、木の葉の里、日向一族だったりする。やったね。あ、言つとくが宗家生まれではないよ。分家生まれ。まあ、そんなことはどうでもいい。日向一族で普通に生きてきて、去年から忍としての訓練をさせられるようになったのだが、とても面倒なことが起こった。それは、

「よろしく。俺はネジっていうんだ」

「僕はヒシヤク」

「私の名前はアカネ。ヒシヤクの双子の姉なんだ」

「よろしく。俺はキキだよ」

ネジは別に問題ない、原作キャラだし。それに別に近い年の奴らがいっても不思議でも何でもないが、問題はその後、ヒシヤク君が俺に近づいてきて俺に握手をしに手を出して来たので握り返したら、
(なるほど、やっぱアンタも転生者か。まあ、僕らの邪魔だけはしないでくれよ)

と、直接頭に言葉を流された。そう、俺以外にもチート転生してた人がいた。しかもどう考えても俺T U E E E E E E E E!!系の人。俺としては、言われるまでも無くお前らみたいのとは関わりたくねえよって感じだ。まあ、しばらくは皆で修行をさせられるみたいだから嫌でも関わるんだろうけど。

で、かくかくしかじかまるまるうまうま、あつという間に6年経過。只今9歳でっせ。とりあえず、この6年で起こったことをはなすよ。

とりあえず、アカデミーへ入学した。白眼が使えるようになった。チャクラ性質を調べてみたら風遁だった。ちなみにネジも風遁。ヒシヤクは全種類、アカネは風遁、雷遁、火遁だった。チート共め。たぶん二人とも隠してるだろうが、絶対血継限界の変化使えるぞ。閑話

休憩。

他は、ヒナタとハナビがなぜか双子だったり、例のヒナタ誘拐とヒザシさんの死亡イベントが阻止されたり。さらには、散歩という建前で里を散策しまくったら、うちは一族が普通に生き残っていたり、ナルトに妹がいたり、どころかナルトとサスケは憑依系の人が入ってた（しかもやつぱりチート）。

他にも、色々調べてみたら、うちは一族にもチートさん達が転生しまくっていたり、外から記憶喪失のオリキャラや、チート持ったトリップ（笑）が来たりと、木の葉の里は見事なまでにチート大国となった。

……バカだろ？

ドヤア〜つてな感じで3年経過。無事下忍となりますたく。で、俺の近況報告。

とりあえず、NARUTOのSSオリ主を見習い、様々な修行及び忍術の習得に精を出してました。まあ、チートスペックを願ったおかげで自分でもドン引きするぐらい色々覚えられた。忍術なら上忍レベルまでなら大体使えるようになった。他にも医療忍術、時空間忍術、結界忍術もある程度なら使えるようになった。体術も木の葉流と柔拳もほぼ極めた。

じゃじゃ〜んとさらに3年。中忍ですよー。で、しかも原作開始時期だったと思う。まあ、どうでもいいけどね。俺は原作キャラ達とは全く関わらずに普通の忍びとして色々な任務をこなしていたりする。時たまネジが修行相手になってほしいと言ってくるが、その程度だ。チート達はどうなったって？ 知らんよ。好き勝手に原作ブレイクしてんじやないの？

へいへい3年経過。俺は18歳になり上忍として日々忙しいくしている。どう忙しかって？ そりゃあ、里か半壊したり、チート達の一部が里の忍を連れて里抜けして新しい国作ったり、戦争が始まっ

たり、戦ったり、侵略されたり、……もう嫌だ。あ、ちなみに俺もそこそこチートになった。

チートになった部分は、修行で風遁以外にも残りの火、水、地、雷も使えるようになったこと。仙人モードを覚えたこと。血継限界や一族秘伝など、特殊忍術以外の普通の術が大抵使えるようになったこと。あと、ゲートオブバビロン出来るかなあ？とか思ってた作品の技を元に術開発してみたら色々出来たりと、そんな感じになった。

で、現在。白ゼツに囲まれてたりする。チート共もう止めて、俺の(精神的)ライフはもうゼロよ。

「大丈夫か？」

ネジがボロボロになりながらも俺に叫んでくる。

「いやいや。流石に出血が酷いし。…ッ、だっ！」

俺は背後からの白ゼツの攻撃を避け、掌底を叩き込む。

「大丈夫？」

「ちよつと辛いなあ〜」

アカネが心配ながら聞いてきてくれる。優しさが嬉しい。

「さて、どうしようか？これはマジできついし。戦略的撤退を俺は望むが？」

「しかし、これ以上退るのはマズイのでは？」

俺の案にネジが聞いてくる。そうなんだよね。どうしよう。……よし、こうしよう。

「よし、ネジ、アカネ。よく聞け。俺が何とか足止めする。その間にお前らは一度さがって応援を呼んできてくれ、できるだけ早く頼む。つてことで」

「!? 一人で大丈夫なのか？」

「おう、頑張る」

「……わかった。絶対死ぬなよ」

ネジは最後にそう言ってアカネと共に応援を呼ぶために離脱していった。まあ、仕切り直しと直感があるからそうそう死ぬことはない……はず？

「さあして、多重影分身の術！」

俺は影分身を大量に出し、

「必殺！・分身大爆連鎖！」

影分身たちを四方八方へ移動させチャクラを火遁へ変化、そして爆発させる。あちこちで大爆発を起こしまくって白ゼツを片っ端から吹っ飛ばす。

「いやー、爽快爽快」

俺は仙人モードで回復回復。失った分の血は増血丸でなんとか補充。傷も今のうちにふさぎぎ…ツ!?

「こっちくんたつ！」

傷を塞ごうとしたら、炎を纏った白ゼツが大量に突っ込んできた。ああ!! 前世でみたアニメの白ゼツなんかより全然強いってかもはや別物だろ！ ちくしよー!

「チート共があ！ お前ら一体何してくれてんのっ!!」

俺は炎を纏った白ゼツ及び新たに生えてくる白ゼツをまだ残っている影分身と共に倒し続けるが、無限湧き状態で、俺も仙人モードも切れて、

「はっ、俺もここまでか。なーんて言うと思おたかボゲエ！」

ハハハ！ 甘いぞ。俺は飛雷神の術だって使えるのだ！ と、白ゼツの多さと強さに半狂乱で俺はマキングしたクナイを思いっきり上空へと飛ばし、即座に印を結び術を発動させた。クナイが空中に突如現れた鏡に吸い込まれたのにも気づかずに。

召喚

タバサSide

シユンツ!

そんな音と共にソレは現れた。私はとっさに身をひるがえし飛んでくる刃物をかわす。そして召喚ゲートから現れた刃物は後ろにあった庭の木に突き刺さった。

「だ、大丈夫ですか。ミス・タバサ!」

コルベール先生が心配をして近づいてきたので私は領き無事を伝える。そんなことより、私は召喚ゲートから出てきた刃物を見る。一体なんなのだろう? 私も見た事が無い形をした黒い刃物だ。ショートソードにしては短過ぎるし、ナイフだろうか? とりあえず私はレビテーシヨンを唱え木からナイフを抜き取る。

「ミス・タバサ。それは一体?」

「わからない」

コルベール先生が聞いてきたが私だつて分るはずがない。それよりも、もつと気になることがある。それは、未だに召喚ゲートが開いたままと言う事だ。普通、何かが召喚されればゲートは勝手に消えるはず。なのにゲートは開いたままと言う事は、つまりはコレを投げた何かが出てくる可能性があると言う事だ。

私はジツとゲートを見続けていると、

「……なんぞ? ハン(?)??」

いきなり背後から人の気配と声が聞こえた。私はすぐさま相手から距離を取り杖を構え警戒する。一体何が? 現れた相手を見てみるとそこには所々刃物か何かでボロボロにされ、さらに血が付着した服を来た青年がいた。私はさらに警戒を強める。私には分る、アレは私と同じだと。

「ん?」

「おいおい、何だアイツ」「くくく、おいコイツマント付けてないぞ」「と言うことは傭兵か? 汚ねえ服着て」「どこから侵入したんだ?」「つまりは賊つてことだよな?」「貴族の学び舎に盗みに入るなん

てなんて恥知らずな平民だ」

周りが野次を飛ばし始めるが彼はそんなのをお構い無しに周りを観察し続けている。自然体を装いつつもどこにも隙が無く、こちらが何かしようものなら確実に返り討ちに会うだろう。彼はそれほどの使い手だと分る。

「ミスタ。少しよろしいかな？ 貴方は一体何者ですか？」

そんな中、コルベール先生が彼に杖を構えながら声を掛ける。その際のコルベール先生も隙が無く、さらに表情は今まで見たことも無いような厳しいものになっていた。まるで歴戦の兵のような佇まいであった。

「ふーん。それは攻撃の意思ありと考えていいのか？ だったら俺の敵つてことで……それ相応の対応をさせてもらぞ？」

彼は先生の敵意に対し変わらぬ表情で腰の入れ物から先ほどゲートから飛んできたナイフと同じものを取り出し逆手に構える。明確な殺気を感じたコルベール先生もそれに対し杖を構え直す。周りで先ほどまで騒いでいた生徒たちも、さすがにこの場のピリピリとした空気に戸惑い押し黙る。そして私は、

「!? ミス・タバサー！」

「？ なんだよ」

彼に近づいていった。コルベール先生は焦った声を出し、彼は怪訝な顔をした。

「……これは、あなたの？」

「ん？ ああ、それは俺が投げたやつだけど」

私は彼にゲートから飛んできたナイフを見せる。彼はナイフを見て直ぐに自分の物だと肯定した。つまりゲートの向こうにいて、この黒いナイフを投げた本人。と言う事は……。私は振り返りゲートを開いていた所を見た。

「??」

「……ッ!? これは」

そこには先ほどまでであったはずの召喚ゲートはキレイさっぱり消えており、私につられ、同じ所を見た彼は訳が分らないといったよう

な表情になり、コルベール先生は驚いていた。私は彼を再度見た後、コルベール先生に向き直り、

「彼が使い魔」

「……………うーむ。確かに彼が現れて、ゲートが消えていたってことは、そうなるのでしょうが……………」

コルベール先生は素晴らしいながらも彼への警戒を解かずに観察する。

「……………おい。人をおいてけぼりにして話を進めんな〜?」

そんな中、彼が先ほどまで出していた殺気を解き、気の抜けたような声で話しかけてきた。

「後で説明する」

私は彼にそういつた後、コルベール先生をジッと見続ける。

「……………ふう。分かりました。ミス・タバサ儀式の続きを」

渋々と言った感じのコルベール先生に私は頷き彼の方を向き

「しやがんで」

と言う。パツと見、彼の背は180 سانت前後。彼と『コントラクト・サーヴァント』をするには少々背丈が違い過ぎる。なのでしやがんでもらおうとしたら、

「ん〜やだ」

拒絶された。

キキSide

ん〜、あー、やつと思ひ出した。ゼロ魔だねここ。なんつーか、微妙だなく嬉しいっちゃ嬉しいけど、これも面倒臭い世界でもあるからなあ、特にピンクと青は厄介事の塊だし。いや、あのNARUTO世界よりかは全然マシか…、まあいいや。んで、俺は青い方に引き当てられたつと、ついなんとなく断ったけど俺タバサ好きだから本当は全然OKなんだよなあ。さて、どうゆう言い訳しようかな〜?

「……………しやがんで」

もう一回いつてきたよ。よし、ここはカツコつけて……………やめ

た、なんかめんどい、ゆうこと聞いて流れに任せよう。

「はあ、こうか？」

俺は青チビことタバサの言う通りにしやがんだ。まあ何されるか知ってるけどね。タバサはしやがんだ俺に近づいてそして、

「…ん」

「……」

唇を重ね合わせた。余談だけど、これ実は俺のファーストキスだったりする。いや、だってあの世界じゃあ、任務&修行で恋愛とか……。しかもチート達が大抵の可愛い子をハーレムにしてたし。はあくつて肩熱つ!!!

「痛っ!!」

「大丈夫、ルーンが…」

ガシッ

「お前も痛みを味わえ！」

俺は何か喋り始めたタバサの頭を冗談交じりに鷲掴んで締め付ける。

「……!! ……!! ……」

とりあえず痛みが引くまで…

「……エア…ハンマー」

ゴオオ!!

「うげえ!!」

締め付けてようと思ったたら吹っ飛ばされた。くうう、腹痛え。

タバサSide

私は『コントラクト・サーヴァント』を彼と行い、肩にルーンが刻まれてる事を確認し痛がつている彼にその事を教えようとしたらいきなり私の頭を片手で掴みそのままものすごい力で締め上げてきた。私はとっさに痛みの中で『エアハンマー』を唱え彼にぶつけて吹き飛ばした。それなりに力を込めたので意識は無いだろうと思っていたが

「痛いなあ。何すんだよチビ」

すぐに起き上がって文句を言ってきた。まさか近距離でしかもそれなりに力を込めたエアハンマーを食らって起き上がるとは思わなかった。

「おーい、聞いてるか?」

彼は攻撃を当てた場所をさすってはいるが、それ以外はまるで何事も無かったように私に声を掛けてくる。確かに先ほどの先生のやり取りを見て相当の使い手だと思っただけだが、まさかこれ程とは…。

「ミ、ミス・タバサ! 何をしてるんですか!」

コルベール先生が驚いて声を上げる。周りも私達に注目しており、私は杖を下ろし彼に説明と、そして彼のことを聞くために、彼を連れてこの場を離れた。

「……どこ行くんだ? チビ助」

「タバサ」

「へあ?」

「私の名前」

「タバサね、俺は日向キキ。まあ、好きに呼んでくれ」

「わかった」

ヒュウガキキ、変な名前だ、それにやはり彼の着ている服もとても珍しいものだ。私は行った事はないが闇市で東方からの服に似たようなものがあるのを聞いた事がある。ということは彼は東方の人間となる。もしかしたら彼は私の希望となるかもしれない。

ジンSide

クソツ! どういうことだ! なぜ、タバサちゃんの使い魔がシルフィードじゃないんだ!! これじゃあ俺のハーレムを作れない。何とかしてあの邪魔者をどうにかしないとって言っても俺には神様から貰ったチート能力があるからあんな顔だけの奴……でもなかったな。……あれの服、どう考えてもNARUTO忍者だったな。しかもあの目、日向一族だよな? ってことは白眼使えるのか……。おおう

o
r
t

話し合い

タバサSide

「あなたは何者？」

「忍だ」

私は彼を広場から離れた人目の付かない所まで連れてきて何者かを聞いたらシノビと言ってきた。シノビとは一体なんだろうか？

東方でのなにかしらの役職だろうか。

「それは何？」

「んん、そうだな。……なんていったらいいか。うーん……。……あ、そうだな。騎士とかアサシンとか傭兵なんかを足した感じみたいなもんか？」

……騎士とアサシン、それに傭兵を足した？ よくわからないが、つまりは私と同じような荒事の任務をするということだろう。確かにそれなら腕のある者なら危険な任務を言い渡されるだろうし、彼が強いのはそういう危険な任務をこなしていたからだろう。ということとは、彼は東方のメイジ。そういうえば、先ほど急に私の後ろに彼が現れたのは東方の魔法？

「……さつき、私の後ろに急にあなたが現れたのは何？」

「あ、あれは忍術だ。お前らでいうところの魔法だな」

東方の魔法、ニンジュツ。とても興味深い。

「そのニンジュツとは一体どんなことが出来るの」

「言いにくいなら魔法で構わないぞ。えつとだな、幾つかの残像を作り出す分身の術、他の物体に化ける変化の術とかだな」

残像を作るということは自分の幻を作り出すということだろうか？ あと他の物体に化けるといのは先住魔法の変化と同じ効果ということなのだろう。……彼の……東方の魔法は先住魔法に似ている。これは……。もしかしたら、母さまの病気を治すための手がかりを見つけられるかもしれない。私はそう思い、彼に他にも色々な質問をした。他にどんな魔法があるのか、どのような所にだったのか、どのような治療があるのか、そして、

「あなたのところでは、『心』の病気を治せる？」

と、ソレを聞いた。この質問に彼は

「うーん。症状によるなく。まずそれが、自然的なものか、術：・魔法によるもの、又は薬によつてか。それに、どれくらい重傷なのかつてこともあるからな。治るものもあれば治せないものもある」

そう答えた。それは、治る可能性があると言う事で認識してもいいのだろうか。

「あなたの、「なあ？」…なに？」

「次は俺が質問していいか？」

私はさらに詳しく聞こうとしたら、彼が私の言葉を止めてそう言ってきた。そういえばさつきから私ばかり質問していて彼はそれに答えるばかりだ。ここは一旦彼の話も聞いてみよう。もしかしたら私が知りたいことを話してくれるかもしれない。

「わかった」

キキSide

いやあ、タバサの俺への…というか忍術への食いつきがハンパないなあ。特に医療に関して。確か母親が精神やられるんだったよな。まあ、後でこいつが寝てる間に記憶操作してちゃんと情報を引き出せばいいか。んじゃ、とりあえず、

「ここは、どこだ？」

と、土地勘がないことをアピール(?)しておく。まあ実際土地勘無いんだけど。

「此処はトリステイン魔法学院」

「国の名前は？」

「? …トリステイン」

「ふーん」

俺は此処の名前を聞いた後、空を見上げて月を見る。なるほど月は二つあるな。まあ、だからってどうなるってわけでもないけどな。さて、使い魔のルーンについて確認しておくか。とりあえず警戒されな

いように言葉を選んで、

「俺の肩に付いた物はなんだ？」

「使い魔のルーン」

「それはなんだ？」

俺はタバサに対して上手い具合に質問して行き一番聞きたかった事を聞く。

「へえ、じゃあ俺の見てるものが見えたり、聞いた事が聞こえるのか？」

「意識すれば」

はあ、厄介だな。

「消す事は出来ないのか？」

「無理、それが消えるのは私が貴方のどつちかが死んだ時」

とりあえず予想通りだな。……封印術掛けてみるか。効かなかつたらどうしよう。まあいいや。それじゃあ聞きたい事は聞いたし、ちよつと試してみるか。

「んじゃ最後の質問、お前の本名は？」

「!? ……何故？」

ふむ、動揺してる……のか？ よく分からんがまあいいや。

「そうゆうの俺は分かるんだよ」

「ごめん。嘘です。前世で原作読みまくってました。

「で、名前は？」

「……それは言えない」

「へえ、俺はお前の使い魔なんだろう？ どうして」

「私は貴方の事まだ信用してない」

……あんだだけ人の話に食いついておいて言うことかい。よくSSだとすぐに色々話し出すけど現実はその簡単じゃないってことか。

「ふーん、なら信用してもらえるように俺も少し秘密を明かそうかな？」

「? ……秘密って」

「まあたいした事じゃないが、俺の使う術にはルーンを消せるものがあるってことぐらいだな」

まあ消せるではなく封印だし、試してないから成功するかなんて分からないけど、……大丈夫だろ。

「他には、人の心を限定的だか覗けたり、後はなんか色々できたりするぞ、シャルロットちゃん」

はい、嘘です。俗に言う原作知識です。よく覚えてたな俺。

「…ッ！ …私の心を覗いたの？」

「残念ながら俺としても色々あるし、信用できないって言うのは俺も一緒だな。おまえだって気持ちは解るだろ？」

「……他には、何を見たの」

「そうだな、お前がガリアって国の元お姫様って事、ある理由から国の暗部組織で働いている事ぐらいかな」

「…そう」

さすが俺だ。完璧な大嘘。なんかそれっぽく言ったら結構簡単に信じたな。

タバサSide

驚いたどころの話では無かった。彼は東方のメイジだし、彼自身、私の質問で色々と話をしてくれたからから、私が知らない知識や東方の魔法を使う可能性を考えていなかった訳ではないが。なんの詠唱も無く特別な動作も無しに人の心を覗く魔法を使っていたのもそうだし、本来消す事の出来ない使い魔のルーンを消す事が出来る事といい、一体彼はどれほどの力を持っているのだろう。……もう、私の事を知られているのなら隠す意味も無いか。それにいつかは知られてしまうこと。

「聞きたい事がある。あなたは、心の病を治すことは出来るの？」

私は彼に一番聞きたかったことをストレートに言った。

「あく、そうだな。さつきも言ったと思うが、実際にその患者を診ない事にはなんとも言えん。だが、俺もそれなりに医療忍術…、えっと、治療行為は出来るぞ」

「……治…せる…の？」

彼の治せると言う言葉に対し、自分の声が震えてるのが分かる。長年、母の心を取り戻すために様々な文献や本を読み、珍しい薬や万能薬が在ると聞けば手に入れては母に飲ませても無理だった病を彼は絶対ではないけど治せると言った。

「ほ、本当に、…本当に治せるの！」

私は知らず知らずのうちに声が大きくなっていた。彼は私の態度に驚いていたが苦笑いで

「落ち着けて。あくまで治療行為ができるってことで、完治する確証は全く無いぞ。でもまあ、試してみればいい。今の俺の技術で治せなかったとしても症状を軽くしたり、ここの技術を学んで治せるようになるかもしれないって…ッ」

私はその言葉を聞いた瞬間、座り込んでしまった。やっと、やっと母を救える、長い悪夢から起こして上げられる。そう思ったら足から力が抜けてしまい、拳句には

「あっ……治る…母様の…心が……」

ポロポロと涙を流していた。情けない、もう泣かないと誓ったはずなのに止めようと思ってもなかなか止まらない。

「ちよ、えっ、泣くなよ！ あーえっと、えええええっ?」

彼が物凄く動揺している。私は今のうちになんとか涙を何とか止めて、深呼吸をして心を落ち着かせる。

「……もう、…大丈夫」

「そ、そうか」

「お願い。私の母を…助けて」

私は彼にお母様を助けてくれるよう頼んだ。

「そうだな。世の中等価交換が原則って背の低い人も言ってる。俺の言う条件を飲んでくれるんならいいぞ」

「何でも聞く」

お母様が助かるのであれば私は何でもしよう。たとえどんなことだろうと。

「おう、そうか。それじゃあ……」

ルイズSide

ドツゴオオオオオオン!!!

また、失敗した。なんで！　なんで！　なんで!!!

「おいーwwwwまた失敗か？」「ハハハハハ、見りやわかるだろ」「ゼロ相手には使い魔の方も嫌がつてるんじゃないか」「そうかもな！」「もう、諦めて留年しちやえよ」

周りからたくさんの嘲りの声がある、うるさいうるさいうるさい!!

私は、私は！

「その…ミス・ヴァリエール？　今日はもうやめに止めに行きませんか？　明日また気分を変えれば成功するかもしれませんし」

コルベール先生がもう終わりにしようと言って来た。明日また『サモン・サーヴァント』をさせてもらえるのは先生の優しさだろう、でも！

「あ、あと一回！　あと一回だけやらしてください、お願いします！」
そんなの嫌だ！　周りに馬鹿にされたまま終わるだなんて…惨め過ぎる。

「それじゃあ、最後に一回だけですよ」

「はい」

私はもう一度呪文を唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従い…私の運命を変えてくれる！　…強く、最高の使い魔を召喚せよ！」

お願い！　始祖ブリミルよ、私に、何でもいいから召喚させて！
ドオツゴオオオオオオン!!!!!!

テイルズ オブ ゼロ

リオンSide

「どうやら僕の番のようだな」

「ジューダス!？」

カイルが悲痛な声で僕の事を呼ぶ。

「お前達との旅、悪くは無かった」

僕は仲間達に最後の挨拶をする。

「ジューダスは此処から消えたらどうなっちゃうの!？」

「わからない、次空間の彼方をさまようか、リオン・マグナスとして消滅するか…でも僕はこの運命に感謝している。お前達に会えた…一度死んだ男が手にするには大きすぎる幸せだ。ありがとう、カイル、ロニ…さらばだ」

少しづつ僕の体が光の粒となっていくなか、今にも泣き出しそうな顔をした友を見る。まったく、お前と言う奴は。僕はそんなカイルに笑みをこぼし、そしてこの世界より消えた。

(我…：ヴァリ…ンタゴン…：…)

なんだ？ …声？ …僕は消えたはず。僕は戸惑いを覚えながら自分の姿を確認をし周りを見渡す。そこは蒼くまるで海の中のような所だった。

「ここは、次空間の彼方と言うやつか。どうやら神は僕に永遠に彷徨えと言う事らしいな。まったく嫌われたもにだな」

自嘲気味に僕は呟く。ま、神に刃向かい倒しておいて嫌われるも何も無いな。

(…私の運命を…：…)

また？ 一体何処から聞こえるんだ？ 僕はこの蒼い空間を再度見渡してみるが、しかし周りは何処までも続く何も無い空間だけ。

「幻聴…：にしてははつきりと聞こえる」

一体何なのだ。それともあまりにも何も無さすぎるせいで、本当に気が狂ったか？ 今度は意識して声を聞こうと、僕は目を瞑り耳をすませてみる。すると、

(……を召喚せよ！)

その声が聞こえたが、しかしその声が今までのとは違い空間全体に広がるように響き渡る。僕は状況を見ようと目を開けたら僕の前に光る鏡の様な物が浮かんでおり僕を引き寄せていく。踏み止まる地面も、どこかに掴まる場所も無く、僕は鏡の引力に一切抵抗出来ずに飲み込まれた。そして、

ドオツゴオオオオオオン!!!!

と、気づくと僕は耳が壊れるのではというほどの爆音と煙の中にいた、僕はとつさに腰の剣を抜き構え、周囲の様子を窺う。周りは土煙でまったく見えず僕は感覚を研ぎ澄ませた。

「あーははははは、やっぱりゼロはゼロなんだよ。」

なんとも品の無い声が聞こえてきた。感じからして10代の人間の声だ、

「まったく、無駄な事しやがって。」「ホントホント、すぐに諦めちゃえばいいのに。」

それも周囲に十数人ほど、気配の感じや喋っている内容からから戦闘をする感じではない事が分かる。

「ミス・ヴアリエール、残念ですが……!!?」

「おい！ 何か居るぞ!」「うそ、ゼロが魔法に成功した!」

土煙が晴れていく、僕がそこで見たものは…

ルイズSide

「あんた、誰?」

土煙が晴れた後、そこに両手に剣を持った男の人が居た。

「……………」

「むっ…ちよっと！ 私の話聞いているの!?!」

男は何も言わないまま周りを見渡している。この私が話しかけるのに無視するなんていい度胸じゃない！ 大体、変な仮面なんかしちゃって何なのかしら！ 服は全身真っ黒な妙な刺繍の入った服に興味の悪いマン……ト……って、え? ……マント? あれっ? え!

「おい、あいつマント着けてるぞ」「つまり貴族^{メイジ}ってことか?」「でもあいつ剣持つてるぞ?」「剣型の杖じゃないか?」「って事は、ゼロは貴族を召喚したのか?」「それってヤバいんじゃないか?」「み、皆さん落ち着いてください!」

周りが男の事で騒ぎ出したのを先生がたしなめているが私はそれほど比ではない。男が別の国の貴族、しかも地位の高い家柄の人物だったら国際問題になりかねない。ど、どうしよお…。

「おい貴様等、此処はどこだ」

男が話しかけてきた。

「え、えつと、その、こ、此処は…」

「此処はトリステイン王国のトリステイン魔法学院です」

混乱していて上手く答えられない私の代わりに先生が答えてくれた。さらに…

「いきなりこのような事になり本当申し訳ございません。不躰な質問で申し訳ありませんが貴方は何処の貴族でいらっしゃいますか?」

私の聞きたい事も聞いてくれた。男は先生の答えに対し怪訝な表情をし、少し何かを思案したかと思うと、剣をしまい先生に質問をしてきた。

「お前、セインガルド王国、ファンダリア王国。この二つの国の名をしっているか?」

「す、すみません。そのような国の名前は聞いた事が無く…」

「なら、レンズと言われる物質はわかるか?」

「いえ、それも…まったく。」

男は先生に聞いた事の無い国の名や物の名を聞いた後また黙ってしまった。

「あの、貴方はさきほどの国の貴族なのですか?」

「…いや、僕は貴族ではない。」

なっ! 貴族じゃないの!? 貴族でもない無いのにマントを着けてるなんて!—

「ちよつと貴方!! 貴族でもないのにマントを着けてるなんてどう言うつもり!」

私は男対して文句を言う。

「ん？ なんだお前は」

「なっ!? なんだじゃないわよ！ 私は貴方を召喚したご主人様なの、わかる？」

「!?!…なんだ、ただのバカか」

「!?!」

「お!、聞いたか?」「ああ、アイツ貴族じゃないんだってな」「じゃあ、武器を持つてるし傭兵の平民か」「なんだ脅かしやがって」「所詮ゼロはゼロって事か」「しかも召喚した平民にバカにさせれてるぞ」「みっともなーい」

こいつ、私に向かってバカって言った！ このヴァリエールの三女である私に対してなんて無礼なヤツなのかしら!! きつとどこか遠い辺境の田舎者に違いないわね。周りの奴等もまた騒ぎ始めてうるさいのよ!!

「ふむ、ではミス・ヴァリエール。彼と儀式の続きを」

「えっ!?!」

まさか、こんな無礼な男を使い魔にしなければいけないのだろうか？

「待ってください。これはきつと何かの間違いです。もう一度やり直させてください」

「ミス・ヴァリエール。これは神聖な使い魔の召喚儀式だ、やり直す事はできない。さあ続きを」

そ、そんなあく。ううつ、こんな無礼で変な仮面を被ってるヤツを使い魔にしなきゃならないなんて、最悪だわ。

「あんだ、平民が貴族にこんなことされるなんて本当は無いだから一生感謝しなさいよね」

「お前は、なにバカな事をいつてるんだ?」

「くっ！ また、バカって…まあいいわ。五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

私は呪文を唱えて男のにキスをしようと……

「ちよつと、その変な仮面取りなさいよ」

「なぜ取らなくてはならない。それに使い魔とはなんだ」

「ああもう！ 私の言う事を聞いてればいいのよ」

いちいち口答えしてくる男に私は飛び付き無理矢理仮面を取る。

「くっ、貴様なにをする！」

「うつさいわね！ あんたが言う事…聞か、ない…から……」

「うそ…」
「カツコイイ♡」
「超美形♡」
「♡♡♡♡♡」
「私の王子様♡♡」

こんな変な仮面を被っているから素顔も変だと思っていたら…うわあ〜すごく…カツコイイ／／／／

たぶん歳は私達と同じぐらい、切れ長の目にサラサラな髪、そして美形。わっわっふえ！

「おい、それを返せ」

「……えっ！ あっ、いや…」

どうしよう、コレ返したらキスができ…キ、キス！ え！ この人とキス／／／。お、落ち着きなさいルイズ。コレは神聖な儀式であつてやましい事はなにもないのよ！ そ、そうよ！ ど、堂々としてればいいのよ。

「あああああんた！ こ、これを返して、その…欲しかったら！ そこに屈みなしやい!!!」

／／／／／／／／／／！！ か、噛んだー！！ あああー！

何やってんのよ私！ 恥ずかしいー。ハッ！ ダ、ダメよルイズ、こんな事で取り乱しちゃ。私はなんとか冷静を装いながら彼の顔を見る。

「ふっ」

鼻で笑われたあああ、うぐぐ、落ち着きなさい私、私はルイズなのよ、あのヴァリエール家の三女なのよ、ガンバレ私。

「わ、笑うんじゃない！ とにかく屈んで！」

「はあ、これでいいか」

……はあくカツコイイ。って見とれてる場合じゃない！ 私
は意を決して彼に近づき…

「んっ！」

「!?」

キスをする。

「!? ……ッ貴様何をする!」

「／／／／／／／／／／つ、使い魔の…契約をしただけ…よ」

「使い魔の契約だと? ……くっ! な、なんだ!」

「あつ! だ、大丈夫、使い魔のルーンが刻まれてるだけだから」

「つ、使い魔の、ルーンだと? ……うっ、意識が…」

「えっ! ちよつと!」

彼はルーンが刻まれ始めるとフラフラと倒れて意識を失ってしまった。なんで!?

ジンSide

な・ぜ・だー!ー!ー!!! おいおいおいおい!!! なんでり

オン・マグナスが召喚されんだよ! 才人じゃないんだよ! タバサちゃんには変な忍者、ルイズにはリオン、一体全体どーなってるんだ! クソツ、これじゃ俺の無双でハーレムな計画があああ!!

「ミスタ・アルベルト! 聞いているのかね? 君が最後だ。さあサモン・サーヴァントを」

「あ! はい、すいませんミスタ・コルベール」

「君が呆けているなんてめずらしいですな」

「あははは、俺も少しは緊張しますよ」

うるせーなハゲ、こちとらパニックって大変なのに! が、愚痴つても仕方ない。俺も使い魔を召喚してこれからの事を考えなければ。ついに「あの」アルベルトがサモン・サーヴァントを」「たった10歳でスクウエアになったて言う」「しかも全ての属性が使えるんだろ」「いったいなにが召喚されるんだ」

さて、俺にはなにが来るかねえ。まあチート転生した俺なんだから使い魔もそれ相応の物が来て当たり前だよな。タバサちゃんとルイズの件もあるし俺も異世界の魔獣とかくるかもな。ふふふふ。

「…我が名はジン・アークレイン・ロ・ランタ・グシセイア・キ・アル

ベルト、五つの力を司るペンタゴン、私の運命に従い、使い魔を召喚せよ！」

ブウン！

目の前に召喚の門が現れる。はてさてなにが……

「……………よ……………わ……………てい……………」

ん？ なん…だ、門から…声が？

「…れる。こ……………なのね!!」

……………き、聞こえる!! 確実に人の声！ しかも女性だと！ ええええええええええ!! 俺もか!? 俺もなのか!? い、一体誰が来るんだ!? 俺は門から少し離れて様子を見る。すると

「おお!! 神よ! …これが薄幸で宇宙一の美少女である私の運命だと言うの!! なんて、なんてすばああぶう!!」

なんかヤバイ事を言いながら女の人が出てきてすっころんだ。えーと、外見は黒髪のロングヘアで顔はチラっと見たけど結構可愛い。身長は160あるか？ まあそんな位、服装は…なんて言ったらいいのだろうか？ 白をベースに青と黒の色が入ったコート(?)でいいのか？ そのんな感じの物を着ている。

「また?」 「今年は一体どうなってるんだ?」 「アレベルトまで」

さすがに3人も人間が召喚されれば周りのバカ共も不審に思う。しかし…

「ふむ、……………ミスタ・アルベルト、儀式の続きを」

やはり、この世界のメイジはバカらしい、ってか見ず知らずの女性にキスしろと? さすがの俺でもそれは気が引ける。なにより初めてだし。

「ミスタ・コルベール。相手は女性ですので、さすがに一方的なものは善くないと思います。せめて事情を説明してからでもよいかと」

「ああ、そうですね。それでは私達は先に戻ってますので終わったら来て下さい」

そう言っただけでコルベールは生徒を連れてフライで教室に戻っていった。…終わったらって、この娘使い魔にするのアノ人の中では決定的だよ! とにかくこの娘を起こすか。

チートさんと不幸少女

ジンSide

「あ、あの大丈夫ですか？」

俺は門から出てきて転んでからピクリとも動かない女性に声を掛ける。

「……………」

返事が無いまるで屍のようだ、…………っつかホントに息してるか？

全然呼吸音が聞こえないんだが……

「な、なあ君、大丈夫か？」

もう一度たずねる、今度は彼女を揺らしながら起こそうとしたが……なんか、冷たい。

「えっ？ ……ちよっ!!!」

俺はあわてて彼女を仰向けにして抱きかかえるように上半身を起こす。まず呼吸……してない。次！ 脈……無し、え……死んでる？

!?俺は恐る恐る彼女の顔を見る、血の通ってない真っ白な肌、紫の唇、ぞ?して……瞳孔が開きハイライトが消えた眼………が動き俺を見つ

ぞ?!!!!!!
け!!わああああああああ!!!

!!!俺は驚いて彼女を思い切り投げ飛ばしてしまった。ハッキリ言っ
て怖かった、昔オーク鬼や盗賊とかをミンチにしたり焼いたり斬った
りして死体には慣れてるけど、今のはソレとは違った怖さだよ。しか
も美人なのがさらに怖さを倍増させてるし！ 彼女は3階ぐらいの
高さの宙を舞いそして、グシャツと頭から地面に落ちた。が、次の瞬
間、

「いったー………い!!!」

女性は大声を出して、頭のタンコブを両手だ押さえながらうずくま
る………つて

「なんでやねんっ!!!」

俺は思いっきり叫んだ。いや、だって息が！ 脈も無かった！ 瞳

せば万事解決じゃないか！ よし、まだ大丈夫だ問題は無い。

「……だから、キスしてください!!! ムチュウウウ」

……彼女が口を3の形にして突き出してくる。……ごめん、話しを聞いてなかった俺も悪いけどさあ、一体なにがどーしてそうなった？ 前言撤回、問題有り過ぎじゃあ!!! ぬぐぐうう、しかしどっちにしろコントラクト・サーヴァントでキスはしなくちやいけないし……くっ、しようがない。

「チ、チトセちゃん……」

「ムウムウムウ」

俺は彼女の3の口にキスをする、すると

「ああっ!!! 私の王子様アア!!! 貴方のキスのおかげでええええええええ!!!」

チトセちゃんは急に起き上がり芝居がかった感じでクルクル回りながら喋り始め、そして突如スツ転び首の後ろを両手で押さえながら地面の上でのたうち始めた。

「ぎやああああああ!! 熱いいいいい! 首が燃えるうううう!!!」

おお、神よ。いつか貴様を殺す。

キキSide

いや、驚いたねえ。だって俺がタバサの母親治せるかもって教えたら急に涙流すし。と思ったらさらに俺に助けて欲しいとか言い出すし。うん、現実には厳しいと思ってたら実はそうでもなかった。

それからは母親の治療の代わりに俺の生活を良くしてもらおう事とルーンに制限を掛ける事を条件にし話し合いは終わり、2人で広場に戻っている。

そうそう、俺、戦闘中にこっちに召喚されたから服がボロボロだったので変化の術でゴロゴロになる前のキレイな状態へと変化させた。さすがに血まみれ泥まみれじゃあれだし。あとで服を調達せねば。他はタバサがクナイに興味があったみたいだから、一つ譲った。簡単

に使い方を教えているうちに広場に着いたのだが、

「おや？ 人が居なくなってる」

「召喚が終わったから教室に戻った。私達も行く」

「あー、なるほど」

みんなで空飛んで教室か、才人君はさぞ驚いただろうな。タバサは飛ばずに歩いて行く。俺も後に続きタバサを追おうとして、ん？ あれ？ 俺は広場に人影が居るのに気づき足を止め目を凝らす。

「へ？」

そして俺はあまりの事にフリーズした、

「ん？ どうしたの？」

「いや、なんでもない」

タバサが急に止まった俺を見て声をかけて来たがテキスト―誤魔化して返事をする。この場合、俺の取る行動はただ1つ：見てない、聞いてない、喋らない、だ。はあ此処は原作基準の世界じゃなかったのね。

その後は2人で教室まで行き教師の話聞く。まあ入ったときに教室の空気が一瞬重くなったが、それはしょうがない。ちなみにルイズともう1人の生徒は使い魔の容態が悪いから早退、こっちは教師曰く午後からは使い魔との交流で授業無しだそう。そんな話し終わると俺達はすぐに教室から出て行く

「何処行くんだ？」

「私の部屋」

「そうか」

そんな感じで俺達は寮へと行く。しかししばらくして、

「ターバーサー」

後ろから声を掛けられタバサが止まる。

「タバサ！ 見て見て、私の使い魔。サラマンダーよ！ しかもこの艶、大きさ、そして尻尾の炎！ どう考えても火竜山脈の物に違いないの！ どお、微熱の名にふさわしいと思わない？」

わあ、キュルケが来たよ。俺こゆうタイプ苦手なんだよな。

……俺は隠れ蓑の術を使い姿を隠した。キュルケのマシガント―

クに入れられたく無いし。

「……でね、ルイズったら物凄くカッコイイ人を呼び出したのよ！ハッキリ言つてルイズには勿体無いぐらいなの。あ、そう言えばタバサも人間を召喚したわよね？ どこに居るの？」

うわ、隠れておいて正解。

「彼ならそこに……」

タバサが俺の方を向くが、

「へ？ 居ないわよ？」

「??？」

隠れ蓑の術。上忍クラスなら完全に気配を消すことができるので、タバサたちには見つけられないだろう。

「まあいいわ、じゃあまた後でねー」

キュルケはひとしきり喋つた後そそくさへ行つてしまった。あの手のタイプはホント苦手だ。俺は術を解きタバサに声を掛ける。

「なんていうか、元気だねえ」

「!!?」

「ブウン!!」

いきなり杖で殴られそうになったので避けた。

「危ないな」

「何処にいたの？」

「ずっと此処に居たが」

「……うそ、居なかった」

「だって、隠れてたもの」

「……」

「睨むな睨むな。俺はああゆうタイプは苦手なんだよ」

俺の言い訳を聞いたタバサは呆れたように嘆息して、

「行く」

と、言つて部屋へ足を向けた。そして、部屋に着き俺は椅子に座り、タバサはベットに座り本を読み始める。…暇だ、精神統一でもしよう。……お昼になった。

「そう言えば俺は飯、どこで食べばいい？」

「…厨房に頼んで貴方の分を追加してもらおう」

「わかった」

あの場所で食うのか、後でテキストに言い訳して次からは厨房で食べさせてもらおう。

「それと、午後に貴方に頼みたい事がある」

「ん？ …わかった」

……昼飯はとても美味かったが、周りの視線がウザかった。それとキュルケに遭遇して精神的に疲労した。タバサに頼んで次から厨房で食べられるようにしてもらった。以上。そして部屋に戻ると

「え？ 買い物？」

「そう、ここに書いてある本を買ってきて欲しい」

俺はタバサからメモを渡された。

「…どこに？」

ってか、この世界の地理全然分からない上に文字も読めないのに、なぜ俺に買い物させようとする？

とにかく、タバサにそのことを伝えたら、

「これ」

地図を渡された。

「印を付けた。迷ったら聞けばいい」

「…俺の条件忘れてないだろうな」

「忘れてない、だから貴方も必要なものを買ってくるといい」

タバサはそう言ってお金を渡してきた。

「むう、ならしやうがないか」

貨幣の単価もよくわからないが何とかなるだろう。それにルーンに封印術を掛けるのに人目の付かない所に行きたかったからちやうどいい。

「そんじゃあ、行ってくる」

コクッ

タバサはそれに小さくうなずいた。俺は本と私物を買いにトリステインの城下町に行く。

買い物したらペットを拾う話

イルククウSide

「きゅいきゅい！ 私、人間の居る所に行ってみたーいー」

「イルククウ、そんなわがまま言っちゃいけません。それに人間っていうのは昔から言うようにとても野蛮で残忍な生き物なの。人間は私達『韻竜』が絶滅したと思ってるから安全に暮らせているけどもしばれたら捕まえられて酷い目に合うのよ」

「そんなの精霊魔法で変化すれば問題ないのね、きゅい」

「なにいつてるの！ 大いなる意思の力をそんなくだらない事に使っちゃダメ」

「ううう、もういいのね！」

私は竜の巣での生活が退屈が嫌で両親にいつも外に出たいと言っていたの。でもパパとママは外は危険だからと絶対に外には出してもらえなかったのね。そしてついに私はパパたちと喧嘩して自分の巣を飛び出し近くの泉に家出してきたやつたのね。

「もう知らないのね、今日から此処で暮らしてやるのね。此処なら魚も取り放題だから問題ないのね。」

「そうだ、まずは寢床を、」

「おや、イルククウじゃないかね。こんな所に居るなんて珍しいね。何かあったのかい？」

「きゅい！ おじーちゃん！」

私はおじーちゃんに家出した事を話したのね。

「ふむ、なるほど。確かに外の世界はとても危険な事がいっぱい有るからなあ、お母さんの言う事は正しいな」

「きゅい!? そ、そんなあ。おじーちゃんもママの味方なのね！」

おじーちゃんなら分かってくれると思ってたのに。

「うむ、わたしも可愛い孫を危険な目に合わせたくはないからなあ」

「きゅい。私は全然平気なのね。そんなドジなんかしないのね」

「ふむ。しょうがない子だな。なら少しだけ見てきなさい、お父さんとお母さんにはわたしが言っとくからね。ただし日が沈む前には

帰ってくる事いいね」

「!? …ホ、ホント！ やったーなのね」

「わたしの巢に昔使っていた人間の服がある。持ってくるから待っていないさい。人間に変化したらそれに着替えるんだ、いいね」

「わあー！ おじーちゃん大好きなの！」

そして私はおじーちゃんが持ってきた人間の服を持って竜の巢を飛び出したのね！

キキSide

ふむ、空はいいと赤の星の人は言っていたが確かにその通りだよな。俺は今タバサにおつかいをたのまれてトリスティンの城下町に移動中だ。移動手段は『忍法・超獣偽画』ちようじゆうぎがで鳥を出し、それに乗って空を飛んでいる。修行の一環として陸を走ってもよかったが、さすがに馬と同等の速さで走っている人間を見かけたら騒ぎになるだろうと思つてやめた。

そういえばタバサが馬をどうの言つてたけど、あれつて今思えば学院の馬を使って買い物行けつて事だったのかね？ ……まあいいや。

しばらくして、ボケーつと適当なことを考えていたら城と街らしきものが見えてきた。

「お、アレか。…イメージしてたのよりショボいな」

しかも、なんかゴチャゴチャしててやだなあ。あ、そういえばスリが出るんだっけ？ まったく治安が悪い国つてのは。なんて考えてる内に町の上空に。

「あー、上空に来てどうすんの俺。ま、いつか」

俺はクナイを取り出しマーキング。適当な人気が無い場所へ投げつと…

「よし。飛雷神の術」

ほいっと。俺は先ほど投げたクナイの刺さった裏路地に一瞬で移動する。ホントこの術は使い勝手良いな。

「さてと。とりあえず、本屋行くか。先に代金払って本を取って貰つていて、残りの金で自分の買い物だな」

別に『忍法・黄金蔵』^{おうごんくら}で亜空間に仕舞っちゃてもいいんだけど、人前で使いたくないし。あ、ちなみに忍法・黄金蔵つてのは、俺がゲートオブバビロンみたいなのを時空間忍術で出来ないかなあ？ つて感じで開発したら出来ちゃった自家製忍法だ。閑話休題。

で、本の前に私物を買って本代が足らなくなったらバカだし。つてことで、

「えーと、本屋はどこかなあ〜♪」

俺は本屋を探して町をぶらつく。しかしホントにゴチャゴチャしててウザったいな。

「きゅい〜、なんでご飯が食べられないのねー！」

「金持ってねえんだから当たりめえだろ！ さっさとどっか行け！ 商売の邪魔だ。」

……………何かいたし。たしかに俺がタバサに召喚されたんだからアイツは召喚されずにこの世界のどつかにいるとは思ってたけど、まさかこんな所に現れるとは。接触するべきか？ どうしよう悩むな。う〜ん……………とりあえず様子を見よう。そう決めた俺はアイツを尾行しようとしたが、

「……………いや、尾行する意味あるか？ ……無いよな。うん。用事済ませよう」

俺はアレの尾行を止めて本屋を探す続ぎをした。

「しかしアイツ、普通に服を着てたな。アイツの事だから布切れ巻いて町を歩くものだと思ってた」

俺はそんなどうでもいい事を考えながら町を散策してたら、

「んと、ここだよな？」

俺は目的地を発見し、中に入る。右見て、左見て、うん、本屋だ。俺はここがちゃんと本屋だという事を確認して、店の店主らしき人に話しかける。

「おっちゃーん、このメモに書いてある本をくれ」

「ん？ あーはいはい、ちよつと待っててね」

店主にメモを見せると、店主は奥へ行き、大量の本を持ってきた。「はい、こちらになります」

店主はドサドサツと本をカウンターへ置き、メモの内容と同じか訊ねてくるが、分らないので適当に返事をし返す。しかし多いな。どっかで入れなきやな。

「あの、後で取りに来るので本を預かってもらっていいですか？
これ代金です」

「いいですよ。はい、お釣り」

俺が適当に置いた金貨を数枚取り、銀貨と銅貨を渡してきた。……ダメだ、さつぱり単価がわからん。まあいいや、俺は店を出で自分の買い物を開始する。

「さてと、とりあえず服屋を探さねば」

ボロボロの服をいつまでも着てたく無いし。とりあえず街を徘徊。……そして当たり前だが迷った。服屋ってどこだ？

「…あの、服を売っている店って何処にあるかしりませんか？」

俺は近くを歩いていたら人に話しかける。迷ったら人に聞くのが一番。たちの悪い人だったらボコれば問題無し。

「あらあくん、貴方珍しい格好してるのねえ。この町ははじめて」

わお！ まさかのアノ店長さんだった。普通の服着てるから全然分からなかった。関わりたくなかったのに。

「ええ、似たようなものです。それでお店の場所を教えて欲しいんですけど」

「いいわよ。でもどんな服がほしいの？ それによってお店の場所が違うんだけど」

普通のが欲しいんだけど、この人の基準の普通ってなんかヤバそう。うーん、なんて言えば……テキストに言えばいいか。

「えっと、極々普通の服なんですけど」

「あら？ 貴族様の御使いじゃないの？」

似たようなもんだな。

「まあそのついでに自分の買い物してる感じですね」

「そうなの、それじゃあ地図持つてる？」

「はーん」

俺は店長さんに地図を渡す。

「えっと、今居るのがココだから…お店はココよ」

店長さんは地図を指差し丁寧にお店の場所を教えてくれた。普通に親切だ。

「ありがとうございます。それじゃ」

「どういたしまして。あ、そうだ！ 貴方お名前は？」

名前を聞かれたので

「キキと言います」

「キキ君ね。私はスカロンって言うの、魅惑の妖精亭ってお店やってるから気が向いたら遊びに来てね、サービスしちゃうわ。じゃあね」

普通に自己紹介をし合った。スカロンさんはお店の宣伝を俺にして優雅(?)に去っていった。もうちよつとアレな人かと思ったら案外普通だった事に驚愕だ。

「ふむ、やっぱり先入観で人を見ちやいかな。そういえば昔転生者だからって、距離おいてたけど話したら気が合った、なんてよくあったなあ。あ、でも思考はやっぱり少しおかしかったな」

そういえば、戦争中に召喚されたんだよな。あれってどういう結末辿るんだろうか？ 俺は独り言をブツブツ言いながら教えてもらったお店へ行く。

「お！ なんか旨そうなもん発見」

途中露天でよく分からない串焼きの様な物があったので数本買う。うーん、いいに…

「良い匂いなね〜」

ジーンと俺の串焼きをガン見してくる青い長髪の頭の弱そうな女の子が現れた。ヨダレを垂らすな！

「……食べるか？」

「ハッ！ た、食べていいのね!!」

「ああ、……いいぞ。」

目をキラキラさせて俺に詰め寄ってくる青髪少女って言うかシルフィード。今はまだ違うか、あれ？ コイツのもう1つの名前ってな

んだっけ？ まあいいや。俺は串焼きを渡そうとして、

「ありがたいなのね！」

バシッ!!

袋ごと全部奪いやがった。お前はもう少し慎みを覚えろよ！

「きゅいゅ!! ハグハグハグッ！」

俺がそんな事を思つてるとは露知らず、物凄い勢いで串焼きを食べ
ていく。はあ俺の串焼きがあゝ

「つたく、それじゃあな譲ちゃん」

「ツングー！ 美味しいものくれてありがとなのねー」

俺はそそくさとその場から離れ本来の買い物に戻り服屋を探す。
途中、串焼きを食べられなかった代わりに別のものを買って食った。
あの平べつたいの美味しかった。

「んゝ、ココっぽいな」

町を徘徊しながら思つた事は飲食店以外の店は凄く分かりにくい。
そんな事を思いながら店に入りテキトーに買い物をする。とりあえ
ず、下着っぽい物はあつたのは僥倖ぎやうこうだった。他には店主に頼んで作
務衣や着流しを説明し作って貰つたりした。他にも色々買つたりし
てなんやかんやで買い物も終わり、本も取りに行きそして、

「とりあえず、荷物を蔵に入れて、ルーンに封印かけるか」

そんで町から出て近くの森にひとつ走り。なんか森が全然見つか
んなかったから結構遠くに来たが気にしない。しかも森に入つてか
ら気づいたが別に街の裏路地でよかつたんじゃないか？ とか思った。

「…………いや、まあ、うん。いつものことか。さつてと蔵入れしよ」

つて言つても印を組んで扉開くだけだし、後は俺が認識した物が勝
手にい空間へ入っていく。

「次は封印っど」

俺はルーンの特徴から封印術の種類と印を決め、術印を組む。

「きゅいきゅいきゅいきゅい!!」

そんな中、の奥の方からバカっぽい声と何かの大きな破碎音が聞こ
えた。が、面倒臭そうなので俺は気にせず、封印術を施そうとして、
「…………ツー！」

いきなり横合いから鉄の弾が飛んできた。俺はとっさに体を傾け、それを回避する。結果、封印術が中途半端な起動をしたせいか、式がバラけてしまった。

「……………うん。とりあえず、ぶっ転がしに行こう」

キキはペットを手に入れさせられた。

キキSide

俺は気配を消し、音を立てずに弾が飛んできた方へと向かう。するとそこには壊れた馬車と一匹の傷ついた青い竜。さらに銃らしきものを持ったガラの悪い男共如若い女の人達。……あく、大体理解できたわあ。

「この竜…、突然現れやがって…、いったいなんだっていうんだ？」「誰かがこの竜に女になる魔法でもかけたんだろうさ」「とにかく、仕事の邪魔だからやっちまおうぜ」

俺は気配も音も立てないまま男共に近づき、

「人攫いは犯罪ですよ？」

「は？…ぶっ!？」

振り返ったバカ面を殴った。殴られた男は吹っ飛び木にぶつかり気を失い、さらに俺は近くにいる呆け顔の二人にも拳を叩き込み意識を奪う。

「な、なんだ!？」「テ、テメエー! どこから現れやがった!」「とにかく敵だ! やっちまえ!」

わらわらと周りの男共が武器を構えて寄ってくる。わあ、面倒臭いなく。

「まあ、皆さん。一旦落ち着こう。ここは俺にボコボコにされるか、それともフルボッコにされるか、半殺しにされるか、ね?」

「ふ、ふ、ふぎけんじゃねえ!!」「今から殺されんのはてめえのほうだ!」「なめたこといってんじゃねーぞ! コラア!!」

俺の暴言に男共は次々に騒ぎ叫ぶ。まあ、当たり前だよな。俺も同じこと言われたらイラツとくるもん。

「あんたら落ち着きな」

「あ、あねご」「すいません」

男共が今まさに怒りに任せて襲い掛かってこようとした時、壊れた馬車の後ろからいかにも「私こいつらのリーダーです」的な女の人が出てきて男共を落ち着かせた。ちっ、余計な事を。

「ふん、だらしないねえ。で、あんた、一体何者だい？」

リーダー女は俺に対し杖を見せつけ威圧感を与えてくる。俗に言う、『私、メイジだぜ。ほらほらビビれやボケエ〜』ってことですね。……RPGみたい。まあいいや。

「通りすがりの者です」

「はあ？ 何言ってるんだいあんた？ 頭のおかしいヤツか？」

頭がおかしいとか、悲しいこと言うなよ。性格がおかしいって言葉よ。

「おねーさん酷いな〜」

「まあ、あんたが何者だっつかまいやしないよ」

「ん？ そうなのか」

「ああ。だって、あんたはここで死ぬんだからね！」

そう言ってるリーダー女は杖を振るい、空気の塊の様な物を飛ばしてきた。俺はそれを横に飛んで回避した。

「お前たち何やってんだい！ 奴に攻撃するんだよ」

「へ、へい！」銃持つてる奴はとにかく撃てー！」「やつちまえー！」

他の奴等もリーダー女に言われて俺に攻撃をし始める。が、俺は悠々と全ての攻撃を避け、尚且つ素早く敵に近づいていき、攻撃を叩き込む。頭部・腹部を殴り昏倒させたり、手足をへし折り動けなくなる等々。

「いい気になってるんじゃないよ！ ウインドカッターー！」

女が杖を振り魔法を放つが、俺は変わり身術を使い近くの男と入れ替わる。そして当然女の魔法は入れ替わった男に当たり倒れる。

「ぐああ!!」「な、なんだあ？」「いきなり入れ替わったぞ？」「あいつもメイジなのか!？」

俺は混乱している敵に容赦なく攻撃を当て昏倒させる。そして、

「で、あんたが最後」

「ぬあっ！」

女の背後を取り、俺は頭部に一撃を与えて昏倒させた。

その後、他にも敵がいなか気配を探り、いないと確信してから俺は縛られている女性達に近づき、手足を縛っている縄をクナイで切っ

ていく。

「えつと…。あ、ありがとうございます」

「いえいえ、たまたま偶然奇跡的に近くにいただけですから」

「それでも、お礼を言わせてください」

と、縄を解いていくたびに、女性達からお礼を言われる。うん、とてもいい気分だ。そして、全員の縄をといて、

「よし、今度から攫われない様に気をつけて暮らせよ」

適当にそう言っ、女性たちを解散させた。でだ、

「傷は大丈夫なのか？」

俺は青い竜を向き、傷を見る

「きゅい。これくらい舐めれば治るのね。それよりも助けてくれてありがとうなのね！ 何かお礼をしたいのね。きゅいきゅい」

おお。なんて律儀な生き物なんだ。でも、

「別にお礼とか要らないね」

「そんな事言わないでほしいのね。それに貴方には食べ物くれたお礼もあるのね！」

…？ あ、そういえば。でもあれは奪ったに近いものがあるぞ。って言うか俺は人間姿のお前には合っているが、竜の姿のお前には合っていない事に気づいてないのか？ 指摘してやるか。

「…俺は青髪の少女に食べ物を渡した覚えはあるが、喋る竜にあげた覚えはないぞ」

「きゅい!! それは私なのね！」

簡単に言っ、いいのか、それ？

「…えーつと、それは人間に変身してたっ、それとも今は竜に変身してるのか？」

もう、めんどいなあ。

「この姿が本来の私なのね！ 私は由緒正しい風韻竜で、あの姿は精霊魔法で変身してたのね」

「あはははははは、なあそれっ、喋っ、でもいい事なのか？」

「…きゅい!? あわわわ、ホ、ホントは私は人間でこの姿は偽者なのね！ さ、さっき言っ、たことは冗談なのね！」

「いや、無理があるって」

「きゅいつ!」

こいつは何がしたいんだ? …あ、お礼がしたいんだったな。

「まあ、おまえが竜か人間かなんてどうでもいいんだけど」

「私はよくないのね! どうしよー、おじーちゃんに怒られるのね…」

「あく、そんな顔をするな。誰にも言わないから」

「きゅいつ! ホントなのね? 嘘じゃないのね? 絶対なのね?」

俺の言葉にまくし立ててくるバカ竜。俺はそれに適当に返事を返していく。ああ、面倒臭い。そして早く帰りたい。

「言わん言わん。んじゃ、俺、帰るから」

「ちよつと待つからね! お礼をまだしてないのね!」

話の流れがおかしくね? …なんて言うか、相当な無理矢理感があるぞ。…うーん。これは、こいつにお礼をさせないと帰してくれなさそうだな。

「……はあく。それじゃあさ、俺を運んでくれ。目的地は指示するか」

「わかったのね! …じゃあ、背中に乗るのね」

竜は背中を向け、俺はその背に乗り学院へと戻る。とりあえず学院の近くの森にこいつを誘導して降りる。

「よつと。ありがとな。んじゃ、またな」

俺はそう言つて竜に手を振り、タバサの部屋へ戻ろうとしたが、

「ちよ、ちよつと待つからね! たったコレだけじゃ助けてもらった分のお礼に全然なつてないのね! それに、食べ物くれたお礼も、私の事を黙ってくれるお礼も出来てないのね! きゅいつ」

「……マジかあ。そう来たか」

俺は頭を抱えた。フラグを立てないように人攫い連中との戦闘で忍術使わなかったり、あえて自己紹介をしないようにしたり、こちらの話をしてないようにしたり、ルーンの封印も一旦保留にしたのにな。どうする? ……まあいいや。嫌って訳でもないし、仲間フラグ立てても別に困ることなんて無いしな。いや、むしろ便利な移動手段が手に入ってラッキーってことで。うん、そう思おう。

「わかった。とりあえず、俺の主人連れて来るから待ってろ」

「なんでなのね？」

「まあ、色々都合とかがあるんだよ」

「きゅい？」

俺はトンツと竜の体に触れてマーキングをした後、飛雷神の術を使い出かける前にマーキングしていたタバサの部屋へとい移動した。

タバサSide

私が部屋で本を読んでいると突如背後に人の気配を感じた。私は殆んど反射的に杖を持ち、背後へと振り向き様に杖でその気配に対して思い切り振るった。が、振るった杖はパシッと軽い音を立てて、あっさりど気配の人物に受け止められてしまった。そしてその人物は、

「ただいま〜」

と、彼：キキは暢気な声でそう言った。彼は人の背後に立ちたがる癖でもあるのだろうか？ 私は彼を非難の目で睨んだが、

「睨むな睨むなって。後で文句は聞くからさ、悪いんだけどちよつと来てくれないか？」

彼は一方的に言うど、返答を待たずに私の肩に手を置いた。そして彼は、もう片方の手を自分の顔の前に持っていく、

「???」

次の瞬間、気づいたらキキと共に私は外にいた。一体何が……。

「きゅい!?! いきなり消えたと思つたら、いきなり現れたのね?!」

私が混乱していると、背後から大きな声が聞こえた。その声に振り返るとそこには青い鱗の竜がいた。

「…説明」

色々いきなり過ぎて、私は思考が追いつかなくなってしまい、キキに説明を求めた。その際、多少不機嫌な声になってしまったのはしょうがないことだと思う。

「まあまあ、そんな怖い声を出すなって。えつとだな…」

キキは街でのことから、森であったこと、そしてこの竜がここにいる理由を説明した。キキの説明を聞いて私はとある疑問が上がった。「で、説明終わり。質問は？」

「貴方の話を聞くとその竜が喋ったり変身したりする事になる」と言うか、さつき喋っていた。そんな事が出来る竜と言ったら絶滅した韻竜ぐらいだが、

「ああ、こいつ韻竜ってヤツらしいから、そのおかげだろ？」

「きゅい!? ちよつと！ 秘密にしてくれるって言ったのに、なんで話すのね!? 嘘つきなのね！」

「まあこんな感じで少々アレだが」

ホントに韻竜だった、確かによく観察すると目の色や鱗が普通の風竜とは違う。バカっぽいけど。

「わかった。それでこの竜はどうするの？」

韻竜は絶滅されたと思われるから他人に見つかりでもしたら大騒ぎになる。できればソレは避けたいところなのだが、その相談だったのだろうか？

「こいつをお前の使い魔代理にしようと思う。って事で今日からこいつがお前のご主人様な」

「きゅい!? 待つのね！ どういう事なのね！ なんで私がこんなチビ助の使い魔にならなきゃいけないのね！ なにより、私の事は誰にも言わないって言ったのに教えちゃうなんて酷いのね！ そんな嘘つき人間にお礼なんかしないのね」

私がキキから話を聞いていたら韻竜が大声を出してきた。どうもキキに対し韻竜は怒っているみたいで、キキはそんな韻竜に近づいて話しかけ始めた。

「まあ〜落ち着けて。そうだな、いいか。まずな……」

キキの話の内容は、まるで詐欺師が言うような曖昧で、不明瞭で、屁理屈ばかりで、そして何故かそれが正しいように聞こえるものだった。そして、

「わかったのね！ この私が。この偉大なる風韻竜のイルククウがそのチビ助のために使い魔の代理になってやるのね。お兄様と私に

感謝するのねチビ助！」

……とても納得の出来ない形で落ち着いてしまった。しかもキキをお兄様と呼んでいる。私はこの竜を使い魔代理にするとは一言も言っていないのに、決定したというように話を進めるのはどうかと思う。キキが風韻竜をたぶらかしてから私の方を向く。

「タバサ」

「なに」

「もう、面倒だからペット感覚で飼っちゃえばいいよ」

説得でもなんでもなかった。キキは話術が効く相手にしか説得をしないみたいだ。

「世話はどうするの？」

「他の奴等の使い魔と一緒にしとけば勝手に使用人さん達が世話してくれるだろう」

…自分で拾ってきたくせに他人任せとはどうだろうか？ しかし、かといって自分で世話できるかといえば無理なものも事実だし、しようがないか。

「わかった。この子の事は私が先生に言っておく。今日は貴方がその子を世話をして」

「ああ、何とかしとく」

その後、私たちは改めて互いをちゃんと自己紹介しあった。そして私はイルククウのことを伝えるために学院の職員部屋に行く。もちろん韻竜であることは黙っているが。そうだ、イルククウと言う名前は少々独特だから何とかしないといけないな。新しい名前はどんなのが良いだろう？

夜の出来事

ルイズSide

「それはホントなの？」

私は彼の話聞いたが何というか信じがたいという感じで言葉を返した。

「ああ、本当だ。」

「ココとは別の世界ねえ。しかもシヨウジュツ？　っていうのが魔法の代わりにあるって急に言われても信じられないわ」

「それが普通の反応だな。昔の僕ならお前と同じ反応をした」

彼：リオンは私にそう言い返してきた。

あの召喚の儀式の後、私は意識を失ってしまった彼をジンに頼んでレビテーションで部屋まで運んでもらい、今まで彼を看ていた。その後リオンは夜まで目を覚まさず、先ほどやっと目を覚ましたので夜食を食べながらお互いの話しをしている。そういえばジンも私と同じで人間を召喚していた、一体今回の儀式はどうなっているのだろう。「ふーん、ねえリオン、その変な仮面外さないの？」

「思い入れがあるからな。それにあの儀式の様子から、あまり顔をさらしたくない」

「あー、そうね」

確かにリオンが素顔でいたら女子達がうるさそうだ。それにアノ女のこともある、気をつけなければ。

「ねえ、リオンが使う晶術つてのを私見てみたいんだけど？」

「別にかまわれないが僕は攻撃系の晶術しか使えないからココでは無理だぞ」

「む、それならしようがないわね」

やっぱり私達が使う魔法とは違うのよね。

「ねえリオンは元の世界にやっぱり帰りたい？」

この世界のどこかから来たのであれば時間を掛けてでも帰せるけど別の世界ならそうもいかない。私は少しだけ罪悪感を感じていると。

「先ほども話したが僕は本来なら死んでいたんだ、今更向こうに帰ろうとは思わない。まあ未練が無いとは言えないが」

リオンはそう言ってくれて私としては安心する。

「それよりも僕の寝床をもうちよつとマシにしてほしい所だな」

リオンは皮肉気に部屋の間にある藁束を見る。

「しよ、しようがないじゃない！ だって使い魔は何かしらの動物が出ると思っただからー！」

「別に責めてる訳じゃないさ、出来れば藁を多くしてシーツと掛け布団をくれればいいと言ってるんだ」

「ふえ？ そんなんでいいの?」

私はリオンの要望に首を傾げる。

「ああ、旅をしていた時野宿なんてざらだったからな、それだけで寝られるところは出来る」

「へえ〜」

リオンは向こうでは旅をしていたと言っていたけどホントなんだ。

「でもリオン。今は私の使い魔なんだし、旅をしてる訳じゃないから別に遠慮なんていいのよ。ちゃんとした寝床ぐらい私が何とかしてあげるわ。まあ今日はもう無理だからそこで我慢してもらおうけど」

「まあ期待しておこう。今日のところは椅子で寝させてもらう」

リオンはそう言ってそのまま俯いて休み始めた。私もベットに入り明かりを消す。

「おやすみ、リオン」

「ああ」

そうして私達は眠りに着いた。

ジンSide

「お前はッ、ホントにッ、何なんだあ!？」

俺は彼女に向かって叫んだ。儀式の後、俺は意識を失ったチトセちゃんとルイズが召喚したりオンをレビテーションでそれぞれの部屋に運び、俺は彼女が起きるまで部屋でのんびりしていた。そして夜

になってから彼女は意識を取り戻し改めて自己紹介しあったのだが、「は？ 今更何言ってるんですか？ さつき自己紹介したじゃありませんか」

「そう言う事言ってるんじゃないんだよ。アンタさつきから自分勝手な事言いきすぎたって事を指摘してるんだ！」

俺が召喚したチトセちゃん：滅茶苦茶自分勝手なんだよ!! 最初は俺も美人だし少しくらいはって思ってたけどこの世界の事や俺の事、チトセちゃんの立場を説明したら、

「チツとんだド田舎惑星かよ」

とか言い出したんだよ！ その後も

「ご飯たべたい」「お風呂は？」「このベットで私は寝るから貴方床ね」
：つてなんだよ！ 自分の立場分かっているのかつてーの！ そんなで俺がワガママ言うなら追い出すぞつて遠まわしに言ったら、

「いいんですか？ 私、自慢じゃないですが他人から同情されたり哀れみを受けたりするの得意なんですよ。しかも貴方の本性まで知っている、意味解りますよね？」

逆に脅された!! 悪魔だ、悪魔がいる。俺もここまで言われて大人しく引き下がる訳にもいかず、

「チトセちゃん君は不治の病なんだろう、僕ならそれを治せる訳だけど、どうする？」

俺は完璧な脅しを仕掛けたが

「ああ私、小さい頃から病弱だったもので、今ではもう自分の意思で自由に病を発症させたり治したりする事が出来るのでご心配なく」

とそりゃあ誰もが魅了されるようなとてもいい笑顔で言われた。もう人間技じゃないよ！ 俺はこのままでは打開策が見つからないのでチトセちゃんの事を聞き、対策を練ろうと思いつつチトセちゃんの事を聞いたが

「私は、トランスバール皇国軍近衛特別部隊ギャラクシーツインスター隊所属で主な任務としてはロストテクノロジーの回収や調査等、他にも反乱分子の鎮圧や……」

超SF単語の羅列をグダグダと聞かされた。そういえばさつきか

ら宇宙とか惑星とかソレっぽい単語がたくさん出てきてたけどチトセちゃんってSFキャラだったんだね。オリキャラか？ で、なんやかんやで今に至る。

「はあ私ってなんて不幸なのかしら。王子様と思つて唇を捧げたのに中身はこんな残念な殿方だったなんて。はああああ」

「俺は大切な使い魔の儀式で、お前の様なヤツが出てきて残念だよ。なんで召喚の門に入ってきたんだ？」

俺は一番の疑問を聞いてみる。

「別に好きで吸い込まれた訳じゃないですよ。先輩達と亜空間内で離れてしまつて一人で漂つてたら変な鏡の様な物に吸い込まれたんです」

「へ？ もうちよつと詳しく教えてくれ」

これは詳しく聞いておいたほうがいいと俺の勘がいつている。

「えー、話すと長いんでイヤです」

「話せよ!？」

「はあー、しょうがないですねえ。」

簡単に説明しますと、いつもの様に先輩達を貶め亡き者にしようと画策して、特製の猛毒を混ぜたクツキーを差し入れにエンジェルルームに行つたんです。そしたらミルフィーユさんが、またロストテクノロジーを発動させてましてエンジェル隊の先輩方共々、亜空間に吸い込まれました。その後は亜空間内でデブリの一つに追突されてしまい先輩とはぐれて、そしてさつき話した通りって訳です。

はあ、喋り疲れたんでちよつと飲み物持つてきてください」

「そこに水あんだろ！」

しかし、アレだな…ツツコミどころが多過ぎて対処できない。つてか職場の人間関係どうなつてんだよ!? 先輩殺そうとするって。

……俺は大丈夫だよな？

「なあ、チトセちゃんの先輩達ってどうなつたんだ？」

もしかしたらこの世界の何処かに居るかもしれないし。

「さあ？ まだあの亜空間で彷徨ってるんじゃないですか？ ふつ、いい気味ですね。いつも私を蔑ろにするからいけないんです。ざ

まーみろ！ おーほほほほほほ！」

わあー、ホントこいつろくでもないなあ。もういいや、疲れたし寝よ。

「はあ、わかった。大体理解出来たから、今日はもう寝よう。明かり消すぞ」

「え？ あ、はい。それではお休みなさい」

そう言っただけでチトセちゃんはパジャマになって布団にくるまった。

……… 一体何処からパジャマを出した？ そして何時着替えた？

もう俺は彼女の事で考えるのが辛くなり予備の布団に包まり寝た。
…床で。

タバサSide

「なあ、お前の母親は何時治しに行くんだ？」

あの後部屋に帰ってきたキキが椅子に腰掛けながら聞いてきた。私も本当なら童も手に入つたし、すぐにでも屋敷に帰り、母さまの心を取り戻したい。がしかし、あの男が屋敷に何もしてないはずがなく、私が妙な事をすればどうなるか分からない。

「今はまだいい」

「？ どうしてだ、泣くほど…うおっ」

私は横に積んであった本を投げつけたが、キキは難なくそれを受け止める。本は大切に扱わないといけないのに。…キキがあんな事言うから悪いんだ。

「屋敷に監視が付いてる可能性がある」

「まあ、そうだろうな」

キキは納得した様子でさつき受け止めた本をテーブルの上に置いた。そういえばちよつと気になる事が、

「帰ってきたとき服が変わってたけど、どうしたの？」

「ん？ 風呂入ってきたからだけど」

「…どこの？」

「地下にあったデカイ所」

あそこは確か警護用のゴーレムがいて使用中は生徒以外は入れないはず。…あの、急に現れたり消えたりする魔法を使ったのか？

「ああ、そうだ。忘れないうちに聞きたいんだけど、お前んとこの王様って使い魔いるか？」

「…判らない。」

キキは突然あの男の事を聞いてきた。

「うくん、タバサが知ってる範囲でいいから王様の事教えてくれ。」

キキが何故あの男の事を聞きたがるのか分からないが、私はキキにアイツの事を話し始めた。私がまだ子供だった頃、お父様ととも仲がよかった事、お爺様が亡くなった頃はまだ協力し合っていた事、少しづつお父様と仲たがいし始めた事、そしてお父様を手に掛けた事、お母様に毒を飲ませた事、私は無意識に感情を抑えて平坦な声で話していた。

「…：なあ、仲たがいし始めた頃、そいつの周りに見かけない奴等とか普段持ち歩かない物を持つようになったってのは覚えてないか？」

キキが私の話を聞いて当時の事に質問してきた。あの頃のアイツの取り巻き連中に見かけない顔、それに持ち物。

「…：分からない。あの頃は城中が慌しかったから、でも妙な剣を腰に挿す様になった」

「妙な剣？」

「詳しくは覚えてないけど、独特だったから印象はある」

「…：そうか。…：あいつが…：から、可能性はあるな」

キキは返事をする黙ってしまった。ブツブツと小声で何か言っているが聞き取れない。キキはしばらくすると、

「よし、寝よう」

そう言っつて部屋の端に勝手に作った寝床に行き眠ってしまった。彼はたまに行動が唐突過ぎる。…：夜も更けて来たので私も寝よう。本をベット横の棚に置き布団に入る。

2日目

キキSide

チチチチと小鳥が喚く朝。何故、太陽はこんなに眩しいのか……あゝ溶ける。俺は日が当たらない様に布団を被り包まろうとして、
「朝」

タバサに剥ぎ取られた。

「起きる」

「もう少し睡眠を…」

ゴンツと頭を杖で殴られた、痛い。

「…起きる」

「あゝ、分かったから杖を何度も振り下ろすな」

ブン！ ブン！ とタバサが振ってくる杖を受け止めながら、俺はヨタヨタと寝床から起き上がり体を伸ばす。

「これ」

タバサはそう言っただけで俺に水とタオルが入った桶を渡してきた。

「あんがと」

俺は受け取って顔を拭く。ついでに髪を濡らして整える。ってか

「……すばらしきかな、ヒモ生活」

「ヒモ？」

「いや、何でもない」

タバサにはヒモの意味は分からないよな。うん、ヒモはやだなあ。まあ実際は使い魔だけど、そんなこんなで準備を整え部屋を出ると、
「うるさい！ キュルケのバーカ!!」

通路の奥の方からくぎゅボイスが聞こえてきた。朝から元気だねえ、

「バカって何よ！ ゼロのルイズのクセに!!」

俺はタバサを見ると、テクテクと声のする方へ歩いていったので、
「厨房に行ってるからなく」

タバサに声を掛けてから厨房に向かった。さて、昨日の事を思い出しながら現状の情報整理だ。まず、このゼロ魔世界は原作世界ではな

くクロス世界であるという事。主人公組以外でもイレギュラーが在る事。うん、整理するほど情報無かった。そんな益体の無い事を考えながら厨房の裏口に着く。中を覗くと忙しそうに皆さん働いている。「落ち着くまで待った方がいいかな？」

俺はとりあえず厨房が落ち着くまで扉の横に座りのんびりする。で、しばらくしたら向こうからメイドさんと仮面の騎士つてかりオンがやって来た。

「あら？　こんな所でどうなさいました？」

メイドさんが聞いてきたので

「ああ。飯を食べに来ただけど、忙しそうだったから落ち着くまで待ってる」

俺は簡潔に返答する。

「そうなんですか。えっと確か昨夜、ミス・タバサが言つてた使い魔さんですよ？」

「おう」

「ならお話しは何ってます。たぶんもう厨房も落ち着いたと思うんで、リオンさんと一緒にどうぞ」

そう言つてメイドさんが中に入っていく。俺と彼はそれに続いて厨房に入っていく、すると

「お、シエスタ。戻ってきたか！　つて後ろの2人はなんだ？」

まさに親方と言う呼び名がピツタシな人が現れた。

「マルトーさん。こちらの人達は例の使い魔さん達です。朝食を頼まれたので賄いをお願いしたいんですけど」

「おお！　そうか。お前さん達も大変だなあ。貴族のガキ共に召喚されちゃあな。ちよつと待ってるすぐに用意してやる。シエスタ！」

「はい！」

2人はそう言つて奥に行つてしまった。俺達はとりあえず近くのテーブルに着く。……奥のほうで鍋が煮える音、食材を切る音、洗い物をする音、俺達は互いに喋らず唯々静かに待っているだけ。そんな何でも無い、はたから見たらとても声を掛け難い状況で、

「マルトーさん!!　ちよつ頼みが！」

奥の方から大きな声が聞こえてきた。その後は奥でギャーギャーと言ひ合いなのかコントのような掛け合いがあり、そして奥から髪の毛長い黒髪の女の子…烏丸ちとせがやって来た。

「どうも、おはようございます」

「おはよう」

「ああ」

挨拶をしてきたちとせに俺とリオンはそれぞれ挨拶を返す。

「えっと、お2人はもしかして私と同じで使い魔なんでしょうか？」

ちとせが席に座りながら話しをしてくる。

「おう、そうだ」

「ああ」

「まあ！ そうなんですか！ よかったあ。人間の使い魔は私だけだと思ってたんですが仲間がいてよかったです。それじゃあ今日から私達“友達”ですよね！」

なんか友達を凄く強調してきたけど、

「あ、自己紹介が遅れました。私は烏丸ちとせ、と申します。気軽にちとせとお呼びください。」

「んー、俺は日向キキだ。よろしく」

「：リオン・マグマスだ。呼び方は好きにしろ」

そんな感じで互いの自己紹介をし合っていたら
「お待たせしました。おかわりはたくさん在るので欲しかったら言って下さいね」

シエスタがそう言いながら朝食を持ってきてくれた。

「ありがとうございます」

「すまない、いただく」

「どうもありがとう」

ちとせ、リオン、俺の順にお礼を言っていく。その後は3人でワイワイと話しをしながらというよりちとせが1人で喋りまくって俺が相槌を打つ感じで食事をした。リオンは直接話をふられた時のみ話し返していた。で、それぞれ食事を終え、

「おちそうさま」

「おいしかったです」

「美味かった」

「はい、それはよかったです」

俺達はシエスタやマルトーさん達にお礼を言い厨房を出る。

「お2人はこの後どうするんですか?」

食堂入り口付近に来た時にちとせが聞いてきたので

「俺は主についていく予定だけど」

「僕も同じ様なものだ」

俺とリオンは答える。そしたらちとせが

「それじゃあ私も付いて行って良いですか?」

「まあ、別に」

「好きにしろ」

付いてきたいと言ったので俺とリオンは適当に返す。

「ホントですか! よかったあく。私ジンさんに『お前は絶対に来るなよ』って言われてましたがお二人が誘った事にすれば万事解決ですね。一人で学園内を徘徊なんてそんな寂しい事やってられません。お二人には感謝します。」

うくん、返答に困るような事を言うなあ。リオンも呆れた顔してるよ。今更だがこの面子にはツツコミが足りなさ過ぎだな。そんなこんなで時間が経ち食堂からタバサ達が出てきた。

ちとせ Side

ああ! なんていい人達なんでしょう。あのエンジェル隊の人達と違って私を蔑ろにしないし、話しても聞いてくれる。私こんなに幸せでいいのでしょうか、いや…いいに決まっています! だっていままで私がどれだけ不幸だったかそれは…(省略)…な訳ですし。ハッ、私つたらつい物思いに。さて私も皆さんの後に……

「って、いない!」

そんな…さつきまでそこにいたのに。また、私をハブるんですね。キキさんにリオンさん…友達だと思っていたのは私だけだったんで

すか。ああ、私っ…(省略)…ぐすんっ。

「くっ、こんな事で私はへこたれません。こうなったら自力で…つてあらう？ ポツケになにか？」

なんででしょう？ ポツケから紙が出てきたので読みましょう。

「これは？ ……キキさん！ 私は信じていました。やはり持つべきは友ですね！ こんなふうにもモを残してくれるなんて。えっと『先に教室にいきます。頑張つて。』…教室の場所を書いてくださいよ！』信じた私がバカでした。所詮人間なんて信じれるのは自分のみと言う事です。仕方ありません。

「自力で探します。幸い私はこういうのは得意ですから」

と言う事で私は皆さんが向かった教室に向かいます。ロストテクノロジーの探索で古い建物の遺跡に何度も行ってますし構造は似た様な物でしょう。楽勝楽勝。

「……ここは何処でしょう？」

迷いました。おかしいですね？ 確かこちらに人の気配がしたと思っただんですが……あ！ 居ました。

「くっ、やっぱり魔法はダメか。ま、焦っても仕方ないね。じっくりやるさ」

「あのすいません」

私は大きな扉の前にいる女性に話しかけます。

「!? ……な、誰！」

「あ、すいません。私烏丸ちとせと言います」

「…こんな所で何を？」

「えーっと実はお恥ずかしながら少々迷ってしましまして、それで教室の場所を教えてもらえないかと」

「え？ あ、あーそうなんですか。それでしたら私が案内してあげますよ。何処の教室ですか？」

なんて親切な御方なんでしょう、困っている私を助けてくれるなんて。えっと皆さんが行った教室は……

「どこでしょう？」

「へ？ あの、何処と私に聞かれても…、えっとその教室の生徒の名前

はわかります?」

「あ、それなら分かります。ジンさんと言う方なんですけど」

「ジンってもしかしてミスタ・アルベルトの事ですか?」

確かジンさんはそんな名前で呼ばれてましたね。

「はい」

「その失礼ですが、ミスタ・アルベルトとはどういうご関係で?」

「えっと使い魔って事になってます」

「使い魔? …ああ、では貴方がミスタが召喚したと言う。分かりました、今からご案内しますね」

「ありがとうございます」

これでやっと教室に行けます。ホントにこの人には感謝感激です。私は女性、ロングビルさんと言ってこの学園で秘書をやっている方に案内され教室に行きました。

「ここですよ」

「本当にありがとうございます。このお礼はいつかしますね」

「別にいいですよ。ではこれで」

ロングビルさんに教室前まで案内してもらって私は彼女にお礼を言います。さて私は教室に入りますか。

「へ?」

「……」

「…お」

私が扉を開けようとしたら、先に扉が開き中からキキさんとちっちゃい女の子が出てきました。あれ? もしかして終わっちゃいました? 私がオドオドしていると、

「ちとせ、こっち来い」

キキさんが少し離れた所から手招きしてきました。隣にはさっきのちっちゃい女の子が座って本を読んでいます。なんか見た目がミントさんに少々似てますね、小さくて髪が青いのか。私は困惑しながらキキさんの所までいったら突如爆音が響き、後ろを見たら扉が吹っ飛び、教室が爆発していました。一体何が起こったんですか!?

主人公が主人公しない

ロングビルSide

「ふう、まったくヒヤヒヤしたよ。まああの子は迷ってただけみたいだしバレてないだろ」

私はそう呟きながら学園長室に向かう。しかし宝物庫の扉はどうしたもんかねえ、あのエロジジイに媚売って学園に侵入できたけどお宝を盗れないんじやあ意味無いさね。私は今後の算段を考えていたら学園長室に着いた。

「ふむ、まあゆっくり調べるか。焦って正体がバレたら元も子もないからね」

私は小声でそう言った後気持ちを切り替えて、コンコンと学院長室をノックし扉を開く。

「失礼します。只今戻りました」

「おお、ミス・ロングビル少し遅かったが用事はすんだかね？」

部屋に入るとエロジジイじゃなかった学園長のオールド・オスマンがそう聞いてきた。

「すみません。迷っていた使い魔の娘を案内していたら遅れてしまつて」

「使い魔とな？」

「はい、例の人間の使い魔でミスタ・アルベルトの召喚した娘です」

私は仕事机に着きながら答える。

「おお、例の使い魔か。いやはや今年の使い魔召喚の儀は不思議じゃのお。ほっほっほ」

ジジイはそう言つて水ギセルを引き出しから取り出す。私はあまりあの煙の臭いが好きでは無いのでキセルをジジイから取り上げる。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね？ ミス…」

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ」

私はもつともらしい理由をジジイに言う。

「こう平和な日々が続くと、時間の過しかというものが、何より重要

な問題になってくるのじゃよ」

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ ミス…」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめてください」

「このエロジジイが！ 酒場で合った時から人の尻を何度も触りやがって。」

「あゝゝ、うゝゝゝ」

「都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめてください」

私はとにかく声を抑えて冷たく言い放った。

「真実はどこにあるんじゃないだろうか？ 考えたことはあるかね？ ミス…」

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめてください」

「モートソグニル」

ジジイが名前を呼ぶと私の机の下から白いネズミが出て行った。

「気を許せる友達はおまえだけじゃ。モートソグニル」

このクソジジイ、使い魔のネズミに私の下着を毎度覗かせやがって。学園の宝を奪うまでの辛抱だと思っていたがこれ以上のセクハラしようものなら、

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

私はネズミから下着の色を聞いているジジイに

「今度やったら…潰しますよ？」

「ひいつ、そ、その程度の脅しでこのワシが屈するものかー！」

無駄に迫力出してんじゃないよ、ただのエロジジイのクセに。

「下着を覗かれたぐらいでカッカしよって！ そんな風だから、婚期を逃がすのじゃ。はあゝゝ、生き返るのおゝゝ」

うふ♪ 笑顔で学院長と言う名のクソジジイに近づき、私は無言でエロジジイを蹴りまわした。特に下半身を集中的に

「あー！ ごめん。やめて。痛い。もうしないから。だからそこはああ!!」

ジジイが何か言ってるがそんな事は無視して私はとにかく踏み続けた。主に足の付け根辺りを。

「やめてー。い、だつ！ あんたそれでも人間か!? 年寄りになんてことをおおお」

そろそろとどめに片方を潰そうと足を大きく上げたとき、ガチャリとノックも無しに扉が開け放たれた。

「オールド・オスマン!!」

「なんじゃね?」

私達は部屋に誰かが入ってきた瞬間にそれぞれ元の位置に戻り何も無かった様に取り繕う。私はともかくジジイはなんである状態から元に戻るんだ?

「た、た、大変です!!」

いきなり部屋に入ってきたのは最近よく私に声を掛けてくるコルベールとか言う教師だ。まったくタイプじゃないし、いい迷惑なんだよね。ジジイと何かを話しているようだが一体何を? ブリミルがどうか、少しするとジジイが

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

真面目な、学園長としての真面目な声でそう言ってきた。私はそれに従い大人しく部屋を出て行く。下手に居座ろうとして怪しまれたら面倒だからね。私は部屋から出るとやる事もないので宝物庫の調査をしに行く事にした。

リオンSide

「ふう、これでいいだろ」

僕は手に持った雑巾を置き皆に言う。

「そうですね、これだけ綺麗になればいいですね」

そう返してきたのはチトセだ。今この教室には他にもルイズ、キキ、ジン、タバサ、の6人の人間がいる。

「そうだな、存外早く終わったな」

ジンがそう言いながら魔法で掃除道具を仕舞っていく。

「まあ、5人がかりでやれば早いよな」

キキがそう言う。教室には6人いるがタバサは端で本を読んでいただけで掃除には参加していない。

「すまない、助かった。僕とルイズだけだったら昼まで掛かっていた」
僕は皆に礼を言うが何故かルイズは端っこで俯いたまま何も言わない。

「おい、ルイズ。お前も礼ぐらいしないか」

僕はルイズにそう言って近づく。すると

「別に…手伝ってなんて…言ってる」

ルイズはふて腐れた様にそう呟いた。まったくコイツは…

「お前はバカか。頼んでも無いのに手伝ってくれたんだ、礼ぐらい当然だろ」

僕はルイズの身勝手な発言にをたしなめる。しかしルイズは

「っ！ バカってなによ!! 私は手伝って欲しくなんか全然無かったし、それにどうせ皆心のなかでは迷惑がってるんでしょ!! 恩着せがましいのよ!」

急に怒り始めて周りの者達に八つ当たりし始める。さすがにこの発言は看過できない。

「おいルイズ、今の発言は失礼だ。お前は…」

「まあまあ、別に俺達は気にしてないからさ」

僕がルイズを叱ろうとしたらジンが横から声を入れてきた。

「ルイズも別に迷惑なんて思ってるじゃないよ。友達が困ってたら手伝うのが当たり前だよ」

「そうですね、ジンさんの言うとおりです。友達は助け合うもの、助け合いに友達、なんていい言葉でしょう」

ジンとちとせはルイズを元氣付けようと声を掛ける。

「……………ッ」

しかしルイズはそっぽを向き、そのまま逃げるように教室を飛び出して行ってしまった。まったく世話の焼けるヤツだ。

「あ、ルイズさん! ああ、追っかけなくていいんですか!？」

ちとせが僕にそう言って来たが、ハッキリ言ってあの手合いは追

かけてもコチラの話しを聞かないどころかさらに不機嫌になつてしまふ。しばらくほつといて落ち着くのを待つのが無難だ。

「別にかまわん。一人にして少し頭を冷やしたほうがいい」

僕はそう言った。しかし、チトセにはそれが気に入らないらしく。「なんでそんな酷い事言うんですか！ ルイズさんは傷ついているんですよ。リオンさんが追っかけて優しい言葉を掛けて上げなくてどうするんですか!？」 いいですか、女の子と言うのは…」

ちとせがクドクドと話し始めてしまった。こいつは話し始めると周りが見えなくなるからほっとけばいい。僕は改めて皆に礼を言うとしたがキキとタバサはいつの間にか居なくなっており、ジンはちとせに魔法を掛けて眠らしていたので僕はジンに一言声を掛け教室を出た。

ルイズSide

なんなのよ！ 私だつて皆が親切にしてくれてる事ぐらい分かつてるわよ！ ……ううう、あーもう!!

「大体リオンはもう少し私に優しくするべきよ！ いつもいつも何かあるとバカバカつて、私はリオンのご主人様なのよ！」

始めは無愛想だけどカッコイイ私話を聞いてくれるからイイ奴だと思つてたのに！ さっきまで憂鬱だった気持ちがりオンへの不満でイライラに変わってきた。しかもこうゆう時に限って

「あら？ ルーイズ。こんな所ほつき歩いてどうしたの。貴方が爆破した教室の掃除はもう終わったの？ あ、もしかしてリオン一人に押し付けて来たんじゃないんでしょうね？ ソレはさすがにかわいそうじゃない？」

出やがった。この無駄乳女キュルケ。チツ、たれてしまえ！

「あんたには関係ないじゃない！」

「そんな事言わなくてもいいじゃない。彼とってもカッコイイ男じゃない」

また、なんか言い始めた。どうせいつもの盛り内容さかだろ、気分も冷

めっちゃったから相手する気にもならない。私はキュルケを無視して歩いていこうとすると

「ちよ、何処行くのよ。ねえ待ちなさいって」

「あーもう、なんなのよあんだ？」

「ルイズこそどうしたのよ？ いつもだったらキーキー猿のように言い返してくるのに。何？ ホントにリオンと喧嘩したの？」

「違うわよ！ ってか猿って何よ!? この万年盛り女！ もうほっといてよ、私今すつつつごく落ち込んでんだから」

「え!? ちよ！ ルイズ!! 待ちなさいって」

私は一人にして欲しいだけなのに。私は早足でキュルケから離れようとしたが、キュルケは駆け足で私の前に来ると、突然人の額に手を当てて

「……熱は無いわよね。頭も…ぶつけた様な痕はない。ルイズ、とりあえず医務室にいきましょう?」

とても心配そうな顔で言ってきた。

「って、私が落ち込んでちやあ悪いかー!!」

「あら、元気じゃない。落ち込んでるって言うから心配したのに…頭の」

「なに!? 頭のって！ 私は何ともないわよ！ いいから一人にしてよ、もう」

「なによー、いいじゃない。そうだ、外で一緒にお茶しましょ」

私の話しを聞かないキュルケは一人で勝手に話しを進めて私を無理矢理外に連れ出した。はあ、まったく。

喋らない主人公

タバサSide

「何をやっているの？」

時刻はお昼ちよつと過ぎ。私は友人であるキュルケと彼女が誘ったルイズとデザートと一緒に食べていたら、何故かキキがデザートを配っているのを見つけた。

「いや、成り行きで」

「説明」

別にキキの事を責めようとしてる訳では無いが、なんと言うか…気になる。

「……ちとせが『ご馳走になってばかりでは人としていけません、皆さんで厨房の手伝いをしましょう』って言い始めて、ほつといたら…手伝う事になった」

「そう、わかった」

とりあえず理由を聞いたので、私はデザートを食べ始める。相変わらず美味しい。しばらくしてルイズも自分の使い魔が支給の手伝いを見つけたらしく彼を呼んで文句を言っている。使い魔の方は呆れたのかさつきと別のテーブルに行ってしまう、それにルイズがさらに文句を言い少し騒がしい。

「まったく！ リオンの奴！」

「あらあら、ルイズは彼に相手されなくて寂しいの？」

「そ、そんなわけないじゃにやい!？」

「はいはい、そうですねー」

キュルケが何時ものようにルイズをからかって遊んでいる。この時のキュルケはホント楽しそうだ。そんな様子を眺めていると、

「誰が恋人なんだ？ ギーシュ」

後ろの方から男子達の声が響いてきた。とてもうるさい。

「つきあう？ 僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

ハッキリ言って馬鹿話を大声でされてとても迷惑だ。私はいつも

の場所に移動しようか考えてると、

「あの、すみません。これポケットから落ちましたよ」

女の人、確かチトセと言う人が何かしらの入れ物を薔薇を持った男子、ギーシユに渡そうとしているが彼はそれを無視して周りの人と話しをしている。

「? …あの! 落ちましたよ!」

チトセは聞こえてないと思ったのか、大きな声でまたギーシユに話しかける。

「……なんだね」

ギーシユは嫌々な感じでちとせに答える。

「あの、コレ貴方のですよね?」

「…違うよ。それは僕のじゃない」

ギーシユはちとせが見せた入れ物を見ることも無くそう答えた。するとちとせは

「あ、そうなんですか。分かりました」

そう言つて拾つた入れ物をポケットに仕舞い、スタスタと去つてしまった。ギーシユはそれにホツとしてまた話しを始めた。しかし、

「ジンさん! 見てください! 綺麗なビンを拾いました!!」

少し離れた別のテーブルでお茶をしていた彼女の主人であるジンの元に行くなり大声でそんな事を言い出した。

「しかもこれ、香水みたいなんです。凄くいい香りでこんなに良い物を只で手に入れられるなんて、私とても幸せです」

ちとせは幸せそうにビンを握り締めているが、ジンは頭を抱えている。ギーシユに関してはダラダラと汗をかき始めた。すると同じテーブルに居た女子の一人、モンモランシーが

「ねえ貴女、そのビン少し見せてもらつていいかしら?」

「はい、いいですよ」

そう言つてちとせからビンを受け取り、マジマジとビンを観察して。

「ありがとう。それは貴女が自由に使うといいわ」

ちとせにそう言つてビンを返し、代わりに置いてあつたワインビン

を掴みギーシュに近づいていく。

「ギーシュ……どういう事かしら？」

「や、やあ、僕の愛しのモンモランシー。そんな怖い顔をしてどうしたんだい？ 美しい顔がだいなしだよ」

モンモランシーの間にギーシュは声を震わせながら答える。

「そう言う事を聞いてんじゃないのよ。なんで私のあげた香水を、自分のじゃ無いなんて言ったのかしら？」

「そ、それはだね。えっと……」

ギーシュがしどろもどろになって答えに窮していると、

「ううう、ギーシュ様。やっぱりミス・モンモランシーと……」

「ケ、ケティ!? えっと、コレはだね違うんだ」

パシンツッ!

「うそつき! さようなら!! …うわあ……ん」

「うぐう、誤解だケティ!」

「へえ……。違うんだ? 誤解だ? …なるほど、

よ………く分かったわ。ギーシュ」

「ひっ! えっと、その、コレはね、その。そう! 彼女は……」

「ふんっ!!」

ガシャーンツッ!!

「がっ!」

「さようなら、ギーシュ。もう二度と話しかけないで」

一通り見ていたが見事な修羅場だった。

キキSide

あ。これ、どうなるんだ? 確かこのイベントってルイズの使い魔とがなんだかんだで決闘になるんだよな? しかし、どう考えてもリオンとギーシュの決闘のためのフラグが見当たらない。まあ、いつか。俺は関係ないし。

「……君。ちよつとこつちに来たまえ。」

あ、ギーシュが立ち直ってちとせに話しかけたが……ちとせは完全無

視だ。つてか自分に話しかけられてることに気づいてない。それがギーシユの堪に触つたらしく、

「その髪の毛の長い君だ！ 聞こえてるだろう！」

ちとせに薔薇の造花を向けて叫んだ。それでやっと気づいたちとせは

「どうかしましたか？」

普通に返事をした。今までの過程を見ている人達からすれば何故そんなに普通なのか疑問に思うが、そこは烏丸ちとせ、被害妄想が激しくせに他人の悪意に鈍感だからと言う以外に理由は無い。

「なんですか。じゃないだろう？ 君のせいで二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

ギーシユはスツと足を組みキザなポーズをとって、ちとせに言いかけをつける。

「……えっと、どちら様ですか？」

しかし、言いがかりをつけられたちとせは、その理由どころかギーシユの存在すら忘れていた。

「なっ!? 君は失礼な奴だな!! さつき君が拾った香水の持ち主だよ！」

「…………あ。じよ、冗談ですよ。覚えてますよ？ でもこの香水は貴方のじゃないですよね？ 私、確認したら違うって言ってましたし」
「そ、それは君…なんていうか、そう！ 貴族である僕の話に合わせるのがメイドの務めだろ。それなのに君は勘違いして、勝手に自分のだつて言いふらして。そのせいで可憐な乙女達が傷ついてしまったのだ！」

二人の言い合い？ を眺めていたが…ギーシユ凄いな、あんな言い訳を即座に思いつくとは。そのスキルを先ほどの二人に発揮出来ればよかったのにな。その後もギーシユとちとせはやんややんやと言いつ争い、そして、

「じゃあ、もう決闘です!!」

ちとせがギーシユに決闘を申し込んだ。

「ああ！ いいだろう！ 平民風情が貴族である僕に挑んだ事、後悔

させてやる！」

ビシツとギーシユは造花をちとせに向けてポーズをきめる。ホント何やらかしてるの？

「ふっふっふ、後悔するのはどっちでしょうね？」

「ふんっ！ 決闘はヴェストリの広場でおこなう。着いてこい」

ちとせが何故か自信満々に胸を張り、ギーシユは決闘場所を指示して歩いて行く。ああ、なんかどんどん話しが進んでいく。

「何やってんのかしらねえ。ギーシユもバカだけど、あの子…チトセって言うんだっけ？ あの子も相当よね」

キュルケが今のやり取りを見てそう呟いた。

「まあ、そうね。ねえジン、ほっといいていいの？」

「もう、自由にさせるよ」

ルイズもキュルケの言葉に同意して、何故か同じテーブルに移動してきたジンに話しかける。ジンはゲンナリした顔で返答した。

「あの、ジンさん」

そうこうしていると、ちとせがこちらに近づいてきて、

「ジンさん！ 決闘頑張ってください」

「……………何故、そう言う考えに至ったのか教えてくれ」

ちとせは理解が難しい事をジンに言った。ジンもそれを聞いて頭を抱えながら、聞き返した。

「ほら、昨夜言ってたじゃないですか。使い魔はメイジの大切なパートナーだって、それに使い魔の責任は主の責任だからって。だから私の代わりに決闘してきて下さい」

ちとせはそう言ってジンに対してニッコリ微笑んだが、

「ぶちのめすぞ!!」

ジンがキレた。今の発言とキレ方に周りの人達は目を点にして止まってしまった。特に女子生徒。猫を被っていたのは分かっていたが、人目があるところで素を出すほどちとせにストレスを感じていたのか、可哀そうに。

「あ、いや…………ちとせ、ちょっとこっちに」

ジンはちとせを連れて建物の裏の方に行ってしまった。

「えつと……ビツクリした。ジンが怒るところなんて始めて見た」

「ええ、そうね。でもアレがたぶん本当の彼かもね」

ジンがキレた事で、ルイズとキュルケがジンの事を話しているとジンとちとせが戻ってきて、ジンは椅子に座り、ちとせはリオンに近づき、

「私、代ワリ、決闘、お願い」

決闘代理を頼んだ。つてか何故そんな喋り方？ 目もなんか虚ろだし、何をしたんだよ。

リオンVSギーシュ

リオンSide

僕は今、ヴェストリの広場と言う所でバカ二人の言い合いを聞いている。

「さあ、頑張ってくださいリオンさん！ そんな薔薇くわえた趣味悪キザ男なんてチョチョイとやってくださいー！」

そう言つて、僕の後方から声を上げているのがバカその1、チトセ。「ちよつとまって！ 何故彼と戦わなければならんだね!? 決闘を申し込んだのは君だろ！」

と、叫んでいるのがボクの前方にいる薔薇を持った金髪のバカその2、ギーシュ。

「この、か弱い美少女である私に戦えとはなんて無茶を言うんですか！ ホント最低ですね」

「だからと言つて、他人に全てを丸投げは無いと思うのだが!？」

「あーもう！ 男のクセにグチグチと。貴方は黙って戦えばいいんです！」

会話から分かるとおり、僕はチトセの代理としてギーシュと決闘をしなければならなくなつてしまった。頼まれた時はもちろん断つたが、何故かルイズの奴が頼みを聞き入れてしまった。たぶん僕に対するちよつとした仕返しのもりなのだろう。

それでも僕は嫌だと拒否したが、『掃除手伝ってもらつたんだから恩返ししなさい』とニヤニヤしながら言い、周りの奴等も早く領けという空気を出し始めてしまい、渋々了承したのだが……

「キサマ等、いい加減にしろ！ 始めるなら早くしないか！」

いざ決闘をしようとしたらギーシュとチトセが言い合いを始めてしまい僕はずつと二人の間でバカナやりとりを聞かされていた。はあ、まったく。

「僕がこんなバカナ事に付き合つてるといふのに、貴様達はあーだこーだと無駄口ばかり。大題、貴様が出来もしない二股なぞかけるからこんな事になるんだ。こんな無駄な事をするぐらいなら彼女達を

追っかけて謝ったほうが何倍も有意義だ」

僕はそう言ってギーシュを睨みつける。

「うっ…なんだね！ 君も僕をバカにつ…」

「お前はあの娘達との関係が手遅れになってもいいのか？」

「そ、それは…：嫌だ。つて、なに平民が貴族に説教なんかしてるんだ！ もうとりあえず決闘開始だ！」

「はあ」

バカに付ける薬は無い、か。僕は剣を抜き構える。すると、左手に違和感を感じてみるとルーンとやらが光っており、体も心なしか軽く感じる。不審に思っていたがギーシュが薔薇を振り花びらを落とすとそこから青銅の人形が現れたので僕は眼を戻した。

「僕の二つ名は『青銅』青銅のギーシュだ。君の相手はこの青銅のゴーレム、『ワルキューレ』がお相手する」

そう言ってギーシュはさらに薔薇を振り人形を7体まで増やす。そして、

「悪いが代理といえ手加減する気は無いんでね。すぐに終わらせてもらうよ。ワルキューレ!!」

ギーシュが号令を掛けると人形が僕に向かってくる。しかし、まったくなっていない。この程度。僕は先頭の人形にまずどの程度の硬さなのかを調べるために軽く斬り付けると、シューインという軽い音と軽い手応えと共に人形の体に簡単に切れ込みが入る。

「ッ?…なんだ? 今の手応え」

違和感なんてレベルじゃないぐらいの妙な感覚。それに…：体の事、動かした時に異様な軽さを感じた。そういえばルイズがルーンには様々な効果が付属される事があると言っていたな。これはそのせい
か、

「これも色々試さないとな」

僕は人形の攻撃をかわしながら考える。まずは…

「くっ、ちょこまかと。逃げてばかりでは無く戦え！」

「では、行かせて貰う。」

僕は身を屈め人形の懐に入り、

「双連撃！」
そうれんげき

四つの斬撃を受けた人形はバラバラになり、さらに僕は他の人形に近づき、

「幻影刃！」
げんえいじん

目の前の人形に突きを放ち胴体を貫いた後すり抜け、奥の人形を双剣で斬り払って破壊し、

「そこだ！」

げんえいかいき幻影回帰で勢いを殺さず振り返り、先ほど貫いた人形をもう一度突ら抜き完全に破壊する。なるほど、身体能力の向上に攻撃力の上昇か。しかし、これは体に無理な負担がかかりかねないな、上手くコントロール出来る様になければ。僕が考え事していると

「何やってるんですか！ 後4体なんですから早くやってしまってくださいーい！」

チトセが野次を飛ばしてきた。ホントうるさい奴だ。そういえば先ほどまでうるさかった周りの声が急に聞こえなくなったが……まあいい。僕は構えをとり残りの人形を見据える。

ギーシュSide

なっ!? どうなってるんだ！ たかが平民に僕のワルキューレがやられるなんて。

「くそっ！ 取り囲んで一気に倒せ！」

囲んでしまえばいくら強くとも、如何にも出来まい。僕はワルキューレに命じて奴を囲ませるが

「粉塵裂破衝！」
ふんじんれつぱしやう

彼は地面を蹴って砂塵を巻き上げたと思ったら、

「な、なんだあ!？」

ドゴンツと彼を中心に爆発が起こりそして

「バ、バカな……ワルキューレが……」

彼を囲んでいたワルキューレが全てバラバラになっており、彼はそれらの残骸を避けながら僕に近づいてきて、

「コレで終わりか？」

そう言い、僕に剣先を向けてきた。僕は7体までのワルキューレしか出せないで、

「まいった。僕の負けだ。」

素直に負けを認めた。実際、始めに3体のワルキューレを破壊されたのを見て僕は勝てないと解ってしまったので簡単に言葉に出来た。これが清々しい負けと言うやつなんだろう。僕はそう思いながら彼にお詫びの言葉を言おうとしたら…

「おーほほほ、やりました！ 私の勝ちですね。さあ敗者は敗者らしく地面に頭をこすりつけこの私にこび媚び諂いなさい」

そんな僕の心の内をぶち壊すような暴言を吐きながらやってきたのは本来の決闘相手の女性、確かチトセと言う名だったかな？ 彼女は周りの白い目線なんか気にせずさらに続ける。

「ほら、早くなさい。それとも負け犬らしく私の靴でも舐めますか？

アーハハハハハっがは!？」

僕はさすがに我慢できなくなり、怒鳴ろうと顔を彼女に向けたらその瞬間、女性の声とは思えぬ声を出して倒れてしまった。そして、彼女が立っていた少し後ろの位置に太めの木の棒を持った男、確かミス・タバサが召喚した平民が立っており、

「ゴイツは悪い奴ではないんだ。ただ…少々頭が沸いてるだけだから。…その、気にするな」

そう言って彼女を引きずって野次馬の中に戻って行ってしまった。

…僕としてはどうゆう反応を示せばいいか困るのだが…まあいい。僕は改めて彼、えつと…

「そういえば、君の名前を聞いてなかったね。僕はギーシユ・ド・グラモン。ギーシユと呼んでくれ」

「…リオンド。リオン・マグナス」

「リオンか、わかった。その、今回の事はすまなかった。変な事に巻き込んでしまった」

「ふん。確かに。しかし僕もキツチリと断らなかつたのも原因だからな。気にするな」

僕はリオンに謝罪をする。しかし、彼はなんて偉そうなんだろう。「えっと、その、厚かましいとは思うのだが僕と友人になってくれないか?」

「……ふん、好きにしろ」

「ああ! よろしくリオン! それじゃあ僕は怒らしてしまったレディ達に謝ってこなくてはいけないから、それじゃ」

僕はリオンにそう言ってケティとモンモランシーに謝りに行くため女子寮に入ってしまった。

吸血鬼退治1

キキSide

はあ、決闘はつつがなく終わった。まあ、ちとせが最後にでしゃばったから一発かまして黙らしたけど、……アレ大丈夫だよな？

ギヤクキヤラだし大丈夫だと信じよう。おっと話しがズレた。で、俺がああ決闘で心配なのはリオンがデルフリンガーを手に入れるかどうかだ。もしもの時は俺が買って何とかしよう。さて、俺は今タバサと一緒にシルフィードに乗って任務とやらに向かう途中だ。

「きゅい〜♪ シルフィード♡ シルフィード♡ 私の新しいお名前なのね〜♪ きゅいきゅい」

今回の任務はとある村に出現した吸血鬼を倒す事らしい。

「きゅい〜、ねえねえ、お話ししようなのね。シルフィお話をしたいのね！」

それで、正式な指令書とやらを貰うためにお城に行く事になった。「もう!! お兄様だんまりは無いのね! シルフィ寂しくて歌っちゃいそうなのね!」

さつきから喋り捲っているイルククウ改めシルフィードの頭をガッンツ! と、タバサが持っていた大きな杖で叩いた。そして

「うるさい」

と一言文句を言う。

「きゅい〜。痛いよね〜。なにするのね、このチビ助! 私はただお兄様とお喋りしようとしてただけなのに」

あの時、こいつを使い魔代理にするために色々吹き込んだら、こんな感じの関係になってしまった。でも、なんやかんやでタバサとシルフィードはそこそ仲良くはやっているみたいだ。ちなみに、シルフィードと言う新しい名前はタバサが考えたものだ。風の妖精って意味らしい。閑話休題。しかし、まあ、なんというか……

「この、私が大人しくしていればいい気になって〜! 誰のおかげでこうやって移動出来るとおもってるのね! きゅい!」

こいつ結構うるさいな。ってかよくこんなに喋れるな…羨ましい。

「くうく何か言ってみるのねチビ助！」

「……………」

「…なんで何も喋らないのね！ お兄様！ このチビ助に言ってやるのね。この偉大なる風韻竜のシルフィが頑張って飛んでるのに優雅に本なんか読んじやって。きゅい！」

シルフィよ、もういつてる事がメチャメチャだぞ。このまま無視し続けるのもアレだな、タバサも俺の事ジツと見てきてるし。

「お〜い、シルフィ〜」

「きゅい！ お兄様やつとお喋りしてくれるのね。そうだ、お兄様さっきの決闘凄かったのねあの仮面の人がこう…剣でゴーレムをスパパーンってバラバラにして……………」

「あ、うん、そうだな。」

とりあえず声を掛けたら勝手に喋り出した。相槌打って、適当にに喋らしておこう。で、そんなこんなで、お城…プチ・トロワに着いたので俺は事前に決めていた通りに姿を隠し、シルフィは使い魔として振舞う、もちろん韻竜であることは隠して。そして城の庭に着くと兵士が近づいてきて

「イザベラ様がお待ちです」

そう言った。

「わかった。この子に飯をあげて」

タバサは兵士にそう言って返事も聞かず、スタスタと城の中に入っていた。俺はその後を变化の術でネズミとなり、ついて行く。タバサには待ってるよう言われたけど…イザベラを見てみたいという気持ちが強すぎてついね。さあ、噂の性格捻くれ美少女デコ姫をご拝見。

「え？」

と、中に居た青い髪の少女が声を出し呆けた顔をしていた。たぶんこの娘がイザベラだろう、意外と可愛かった。イザベラはしばらくすると怒ったような表情になり、

「きちんと知らせたはずよね？ 今回の相手」

と、訊ねてきてタバサは表情を変えずに頷く

「その相手の名前を言ってごらん？」

「吸血鬼」

イザベラが顔を引きつらせながらタバサにさらに問いかけてもタバサは淡々と言葉を言う。ああ、さっきの呆けた表情はタバサが恐怖で顔を青くしていると期待してたからか？

「だったらわかるだろ？ ピクニツク気分で出発できる任務じゃないよ？」

イザベラが負けじとさらに嫌味な感じでタバサを小突きながら言うがもうタバサは何も言わず、イザベラを見つめ続けるだけ、イザベラは反応を見せないタバサを憎々しげに睨みつけるが、しばらくするとタバサの圧力に負けしたイザベラが苛立たしげに目的地などが記された書簡を投げ渡す。

「ふん、それが最後の任務にならなきゃいいね。せいぜい、無事を祈らせてもらおうわ、シャルロット」

イザベラは皮肉気にそう言っつて、タバサは無言のまま一礼して部屋を出て行った。俺は…

「はあ、ホントに無事で…」

なんか面白そうな呟きを聞いたのもうしばらくイザベラ観察。イザベラはさっきまでの気丈さなぞまったく無くなり、そのまま窓の方へ歩いて行く。

「へえ、あれがあの子の使い魔か…私と違って才能あるあの子にピツタシじゃない」

アンニュイな感じで外のシルフィードを見ながら言う。

「今度は吸血鬼。お父様はシャルロットに何故こうまでして危険な任務を押し付けるのかしら」

イザベラは独り言を言いながら椅子へと座りこみ、

「何も出来ない無能な私は祈る事しか出来ないけど…今度も無事に帰ってきてちょうだい」

……うん、コレジャナイ感がハンパない。まあいいや。俺はその後、僅かに開いていた窓から外に出て、タバサより先にシルフィの所に戻り、術を解いて元に戻る。

「…あれ？　今なにか白いのが…まさかネズミ!?　ちよ、メイドたち！」

上からイザベラの悲鳴が聞こえる。すまない、メイドさん達よ。で、城から出てきたタバサと共に任務先の村へと飛び立つのであった。そして、しばらくして、

「サビエラ村、首都から500リーグほど南東にある山間の村。アレだな。」

俺は飛んでいるシルフィの背から目を凝らして村を発見する。

「見えない」

「まあ、普通の視力じゃ無理な距離だからな」

タバサも同じように見ようとしたらしいがまず無理だろう。まあ白眼もつてる日向一族の特権だよな。見えるぜ。

「降りて」

「きゅい」

タバサがシルフィに命じて村から少し離れた丘に着陸させる。

「で、俺が騎士のマネして、タバサとシルフィが従者のマネと」

ここに来るまでにタバサが色々と作戦を立てて説明してくれた通りに準備をする。まずシルフィを人間に化けさせる。

「え、あの姿は動きにくいから嫌なのね」

『化けて』

化ける』

シルフィがわがままを言うのでタバサと俺が同時に言った。

「うっ、うう、わかったのね…。ただし後でいっつっつぱい、ご飯貰うんだから！」

俺達の威圧的な視線に観念して、シルフィは渋々承諾した。

「我をまといし風よ。我の姿を変えよ」

シルフィがそう呪文を唱えると、しゆるしゆると風がシルフィの体にまとわりつき、青い渦となって包む。そして渦が消えると…、同年代位のマツパの美少女がいた。

「／／／／」

「…ツ!!」

ブウン！ とシルフィを見てにやけたらタバサに顔面を杖で殴られそうになったので、難なく攻撃を防ぐ。が、その後、睨まれたので、しようがなく後ろを向く。しかし甘いぞ。白眼で視界はほぼ360度良好だ。

「…？ 何やってるのね？ って、きゅい!?!」

ブウン！ と後ろで近づいてきた全裸のシルフィに対し、俺と同じ様に杖を振るい殴りにかかるタバサ。なんか楽しそうだねえ。

「お〜い。なるべく早くしてくれよ〜」

「…わかつてる」

タバサの声が背中に掛かった。なんだろう？ 妙に冷たいというか…まあいいや。しばらくするとゴソゴソと服のこすれる音がして、

「もういい」

「あー、もう！ この服ごわごわしてやな感じなのね。きゅい。」

OKを貰ったので振り返るとそこには、服を着たシルフィとマントを取ったタバサがいた。

「貴方も着替える」

と、俺もヒラヒラ(?)した服とマントを渡されたのでしようがなく着替える。…面倒臭いなあの服。…で、騎士(俺)、従者×2(タバサ&シルフィ)の一行が村に入った。

タバサSide

私達はそれぞれ変装をし、ザビエラ村に入る。私とシルフィードはキキの後ろに荷物を持ってついて行くと、

「今度の騎士様は大丈夫か?」「女子供を連れてくるなんて」「前に来た騎士も偉そうにしてたけどすぐ殺されちゃったのに」

遠巻きに見ている村人がひそひそと私達の陰口を言う。キキは周りを軽く見渡して、

「何見てんだ〜お前ら? 殺すぞ」

何でも無いような平坦な声で村人達に言う。

「な、なんだあの騎士は…」「最悪じゃ」「はあ、もう騎士なんて当てに

できねえ」「俺等で吸血鬼を倒すしかない」

キキの態度に村人達はさらに不信感を募らせて白い眼で私達を見ながらヒソヒソ話しを続ける。

「うゝゝもう！ なんなのねあいつ等！ お兄様を悪く言うなんて。ほらチビ助もなんか言つてやるのね」

シルフィードが村人の態度に文句を言う続けながらしばらく歩くと村の奥にある段々畑の一番高い所に建った村長の家に着くと、

「村人の態度が悪い。気分を害したから頭を床に擦り付けて謝ってくれよ」

村長に会うなりキキはそう言った。

「は？ そ、それはその…なんていいましようか…」

「ん、なんだ？ この俺がこんな辺鄙な村まで着てやったのに酷い村だよな。こんな小さな村、無くなつたつて誰も困りやしないよな。……帰るか」

「そ、そんな！ お願いします騎士様！ この村を吸血鬼から救つてください」

「ああ？ だったら、それ相応の態度つてのがあるたろ？ 平民」

……キキには無能なメイジを演じるように頼んだが、これではただの悪人にしか見えない。確かにこうゆう態度をとるメイジがいる事は否定しないが。村長はキキの前で膝をつき頭を床につけて

「ど、どうか…お願いします」

「うん、しよーがないねえ。この蒼炎のカイト様が吸血鬼を焼き殺してやる。感謝しろよ平民」

蒼炎のカイトとはキキの偽名だ、なんでも昔キキが好きだった物語の人物の名前らしい。しかしキキが妙に生き活きしてるのは私の気のせいだろうか？

「きゅ、きゅいゝ。お兄様…怖いのね」

シルフィードが顔を青くしながら小声で呟く。その後キキは村長から吸血鬼についての詳しい情報を聞いたがそれは報告書とたいして変わりなく、二ヶ月に少女が犠牲になったのを皮切りにもう九人の犠牲者が出ているのこと。

「二人ほど犠牲者が出たあと、夜出歩く村人はいなくなっただんすじや。でも……」

村長がそのあとも村で起きた事を話してくれた。キキは黙ってずつと話を聞き、シルフィードはさらに顔を青くしてガタガタと震え「こ、怖いのね〜」

と、言いながら私にしがみついていた。

「そうです。しかし、一番怖いのは吸血鬼が操る屍人鬼グールの存在ですのじや」

村長は悲しそうな顔でそう言った。屍人鬼、それは吸血鬼が操る死体のことだ。吸血鬼自体はあまり強くは無いが屍人鬼違う。その力は人間のそれを大きく超え、しかも死んでいるからいくら攻撃を加えても怯むことなく相手に襲い掛かるためメイジには天敵である。

「村人達も互いに屍人鬼じやないのかと疑い始めてしまい、村を捨てる者もおりますのじや」

村長は話してる内に悲しくなってきたのか表情が暗くなつていつてしまった。すると、

「屍人鬼には、吸血鬼に血を吸われた傷があるはずだわ」

シルフィードがそう言い、皆の視線を集める。村長はそれを聞いてさらに話しを進める。

「私等も調べたんですが、なにせこんな田舎ですから仕事中に虫や蛭に刺される者が多くて…。首に傷がある者だけでも、七人ほどおりましたわい」

と、だから吸血鬼につけられたかどうかは分からないと村長は言った。キキは話は終わったとばかりに椅子から立ち上がり、

「話は分かった。それじゃあ疲れたから俺は夜まで寝るな」

「へっ？ 吸血鬼退治は!?!」

「はあ？ 吸血鬼つてのは夜活動するもんだろ。こんな昼間っから探したって見つかるわけないだろ。分かったら部屋に案内しろ」

キキはそう言って村長に案内をさせる。私達もキキの後について行こうとすると、

「…？ なんだあのガキは？」

「…ッ!!」

キキがそう言って廊下の奥を見るとそこには10歳ぐらいの女の子がいたが、キキと目が合うと逃げてしまった。

「すいません騎士様。あの子はその…メイジを怖がっております…」

「あく悲しいねえ。まあ、子供一人に嫌われたところでなんとも思わないから安心しろ」

そして私達は村長に部屋に案内されて

「では、何かありましたらお声をおかけください。」

そう言って村長はリビングの方に戻っていった。部屋に入った私達はそれぞれ荷物を置いて、

「…やりすぎ」

「あはは。いや、分りやすい悪人貴族を演じたつもりだったんだけど。ダメだった?」

「きゅい。お兄様怖かったのね」

まあ、キキはそのまま演技を続けてもらって、これからの事を話す。

「キキはここで待機、私とシルフィードで村を調査して来る」

「おう。わかった」

「えっ、私も行くのね?!」

そう言ったシルフィードに私とキキが呆れたような視線を浴びせると、

「うっ…行きますなのね」

怯みながら答えた。そして、私達は村に調査をしに向かった。

吸血鬼退治2

タバサSide

私たちは村長の家を出た後、まず犠牲者が出た家を回り状況を確認した。どの家でも出入り口を全て塞いでいるのに侵入され、寝ずの番をしているのにか眠ってしまうとの事。

「眠りの先住魔法なのね」

と、話しを聞いたシルフィードは言った。空気があればどこでも唱えることが可能なその先住魔法で家人を眠らせ、犠牲者の血を吸うみたいだ。私とシルフィードは家の中を調べる。

「きゅい〜。ん？ チビ助どこ行ったのね？」

しばらくしてシルフィードが私の事を呼んだので、私は煙突の中から出て姿を現す。

「きゅいつー！ チビ助！ なんてどこ入ってるのね!? そんな所調べたって何も出るわけないじゃない」

と、そんなふうには村を回っている

「出てこい！ 吸血鬼！」

手に鍬や鎌、火のついた松明などを持って村人達が村はずれのあばら家を取り囲み口々にわめいていた。

「あらチビ助！ 吸血鬼ですって！ きゅい！」

シルフィードが震えながら抱きついてきた。鬱陶しかったがとっぴあえずほつといて、私は村人の様子を見てみると、あばら家の中から年のころ四十前ほどの屈強な大男が出てきて

「誰が吸血鬼だ！ 失礼なことを言うんじゃない！」

村人達に大声で怒鳴った。しかし、村人達は臆する様子も無く

「アレキサンドル！ お前達が一番怪しいんだよ！ よそ者が！ ほら吸血鬼をだせ！」

と叫び、アレキサンドルと呼ばれた大男も負けじと

「吸血鬼なんかいねえよー」

と叫び返した。その後もアレキサンドルと村人の言い合は続き、ついに強硬手段であれば家に村人が押し入ろうとしたその時、

「やめるのねー！ 争いはいけないのね！」

シルフィードが叫びながら騒動の中に飛び込んで行ってしまった。まったく、なにをやってんだか。もちろん急に現れたシルフィードに村人達は、

「なんだお前！ 邪魔すんじゃねえ！」

「きゅいっ！」

おもいつきり怒鳴られた。シルフィードは身を竦めて私に助けを求めるように見てきた。はあ、しょうがない。私はシルフィードの所まで行き、

「私達は騎士さまに吸血鬼の調査を命じられた従者です」

私は村人達に言う。すると、村人の一人が

「んあ？ あー確かにこいつら、あのメイジと一緒にいた二人だ」

と言い、それを聞いた他の村人は怪訝な顔をしながら一時的に大人しくなった。が、

「で、肝心の騎士は一体どこにいるんだ？」

村人はキキがない事を不審に思い聞いてきた。

「騎士さまは夜の警備のため今は休んでいます。なので私達が騎士さまの代わりに調査をしています」

私はもつともらしい理由を説明すると、

「おいおい！ こんな女子供に調査させるなんて、ふざけてるのか！」

と村人達はまた騒ぎ始めると、

「ごらごら！ お前たち！ 騒ぎを聞いて来てみれば！ 証拠も無いのに誰かを屍人鬼と決め付けるなんて」

村長が現れて村人たちを大人しくさせた。その後、村人と村長がしばらく言い合いをし

「とにかく！ 調査に来たんなら、そいつ等を調べてくれよ！ アレキサンドルもやましい事がないなら大丈夫だろ」

という事になり、私と村長、村で薬草師をしているレオンと言う青年で家の中のお婆さんを調べる事になった。もちろんアレキサンドルの事も調べて首に傷は在ったものの、さすがにあの程度の傷で屍人鬼かどうかは解らなかつた。

そして、お婆さんも調べたがやはりコレといった証拠も無く。村長はその事を村人達に伝えて、村人達も渋々ながら納得しあばら家から離れていった。私達も一旦キキに報告をしに村長の家に戻ることにした。

キキSide

「あくあ、何で俺がこんな田舎でこんなメンドクセエことしなきゃならないのかねえ」

俺は今、村長の屋敷の庭で酒を飲んで酔ってるフリをしている。何故こんなことをしているかと言うと、調査から戻ってきたタバサから囃作戦を提案されたからだ。タバサ曰く、調査の成果は無し。で、一旦この屋敷に村の若い娘を集めて、保護するのと同時に俺を囷にして吸血鬼をおびき出す、とのこと。ちなみにタバサは庭の隅にある納屋に身を隠している。

「んく、あーそうだ。おい、じいさん」

俺は酒を運んできた村長に声をかける。

「は、はい。なんでしよう、騎士様」

「あの子供、なんでメイジを怖がってたんだ？」

「も、申し訳ありません。あの子は両親をメイジに殺されております…。それで」

俺が幼女のことを聞くと、村長はそう教えてくれた。

「ふくん」

と、俺は適当に返事をし、また酒を飲み始める。で、そんなこんなで夜も更けてきて、二つの月が高く上がり辺りを妖しく照らし始めた頃、

「…きいやああああああああ!!」

屋敷からか細い悲鳴が聞こえてきた。タバサはすぐさま茂みから出て悲鳴が聞こえた部屋に飛び込んでいった。俺はのんびり歩いていった。だって急ぐ必要ないし。

「はいはい、どうしたく？ ゴキブリでも現れたか？」

俺は割れている窓から顔を出し、中に居る少女とタバサに訊ねる。が、少女はがたがた震えて答えないし、タバサも少女を慰めて答えない。村長とシルフィは動揺していて答えられそうになかった。その後、集めた村娘達が騒ぎ出しシルフィと村長がそれを納め、タバサは少女をリビングに連れて行った。

「……お、男の人がいきなり入ってきて。わたしの身体をつかもうとしたの」

始めは脅えていて震えていただけだったが、温めたスープをタバサが飲まして落ち着かせ、事情を聞けるようになったのでタバサが少女の話の聞いている。俺は近づくと脅えられるから離れた所で二人の様子を見ている。

「寝てたら……耳のそばで荒い息がしたの。わたし、びっくりして叫んだの」

少女はタバサに抱きつき震えながら襲われた時のことを説明していく。

「口から……口から牙が生えてて……、だらだら涎が垂れてきて……。ひっぐ、うっぐ、えぐ……」

喋ってるうちに泣き出してしまった少女をタバサは頭を撫でながら優しい声で

「もう大丈夫。その人は見覚えのある人だった？」

と言った。まあ、視たいもんは見れたし、俺は

「俺は周辺を見回ってくるから、その子供のことは任せた」

そう言っつて屋敷を出た。さーてと、準備準備つと

「しかし、うん。結構わかるもんだな。白眼で見たら、チャクラ……でいいのか、あれは？ まあ似たようなもんだし、いいか。アレ人間と流が全然違つてたな。さて、どうしてやろうかなあ？」

俺は考えながらとりあえず色々準備をする。バレない様に気配を消し隠れながら、屋敷の周りに結界術を仕込んでいき、村人達に気づかれないようにする。後は変化の術でネズミに変化して屋敷に戻り、タバサと少女を監視する。

「ごめんねえ。タバサ」

俺は部屋に幼女と一緒に部屋に入っていくタバサの後を追い部屋に侵入する。

「一緒に寝ていい?」

「いい」

幼女がタバサと一緒にベットに入ろうとしたが、そうはさせません。だってこれから幼女吸血鬼とO・H A・N A・S Iするから。俺は変化を解き、タバサと隣でグースカ寝ているシルフィに幻術を賭け、朝まで起きないようにし、そして、

「へ?」

突如現れた俺と、タバサが急に眠ってしまったことに呆けている幼女・・・吸血鬼の首に

「あゝっ! …ぐっ、…ううっ」

俺は手を伸ばし、わしづかみにして持ち上げる。

「そんなに力入れてないし苦しくないだろ、吸血鬼?」

そして、俺がそう言うのと幼女は目を見開き驚いた表情になり、すぐさま

「誰かつ! 助け…」

大声出してさらに近くにあった家具を蹴つたりして大きな音を出す、残念。そんなことは無意味なのだよ。

「そんなことしても、屋敷の中に居る人には気づかれないようにしてあるから無駄だぞ」

「くっ…」

俺がそう言ったら幼女は悔しそうな顔をした。

「さて、こんな所で話もアレだし、ちよつと森に…」

俺は話しながら窓を開け、

「行こうか!!」

「なっ! ひゃあああああああああああつああああ!!」

その窓から吸血鬼を思い切り森の方に投げ飛ばした。俺もすぐに部屋を出て森の方に跳んで行く。途中吸血鬼を大男らしき影が受け止めて森に入っていたが気にせず俺も森に入る。

「さてと…、あつちだな。」

森に入った後、白眼を使い吸血鬼ちゃんを捕捉する。吸血鬼ちゃんの方は離れていき、大男の方は迂回しながら俺の背後に回ってきている。

「大男の方はなんとでもなるから幼女を追うか。っとその前に」

俺は懐から小指程度の大きさの笛を取り出し、思い切り吹いた。

エルザSide

何なのあいつ!? 急に部屋に現れたと思ったら、私を屋敷から森まで投げ飛ばしてきた。いくら私が子供の体だからってこの距離を投げるなんて人間技じゃないって! 途中グールを使って地面への突撃はさけたけど、チラリと空中で屋敷の方を見たら、あいつが追ってきたのが見えた。

私は森の着地した後、グールをあいつに向かわせ、私は近くの契約した土地にいどうする。

「ついた。ここなら、いくらあいつでも手も足も出せなくなるでしょ。覚悟してなさい」

私は精霊と契約した、木々の開けた場所へとついた。ここは言わば私の狩場の一つである。契約した土地に娘達を誘って、油断した時にできるとは思わないけど、ここなら…。私が考えをめぐらしていると、どこからか高い笛の音が聞こえてきた、

「よっ、投げ飛ばした張本人が言うのはアレだけど大丈夫か?」

「ホントそうね。で、あなた一体何者なの?」

それと同時にあいつが現れた。奴は村に来た時や、村人たちという時の他人を見下したようなヘラヘラした表情ではない。自然な、本当に子共に向けるような笑顔で私に話しかけてくる。

「ははは、そうだな。それじゃあ自己紹介。俺の本当の名前はキキだ。」

「へえー、カイトって偽名だったんだね。わたしはエルザってゆうの。よろしくね、キキお兄ちゃん。そして……、さようなら。」

奴がいきなり自己紹介してきたので、私も名前を教えてあげた。ま、直ぐ殺しちゃうから無意味だけどね。

「枝よ。伸びし森の枝よ。彼の身体を拘束したまえ。」

私が呪文を唱えると、周りから枝が奴に向かって伸びていった。私は奴がどんな命乞いをするのか楽しみで笑顔でいると、奴は「あははは」

いきなり笑い出した。私は気でも狂ったかと思ったその時、

「…ッ!! な、なにっ!?!」

奴の周りから蒼い炎が燃え上がり、枝はその炎で瞬く間に灰となつてしまった。それを見た私は目を見開き、恐怖で顔を引きつらせながら後退りしていく。私はグルを呼び寄せようとしたが、グルの反応が無くなってしまった。私は近づいてくる奴を見て、殺されたい、森の枝を何十、何百と向けて串刺しにしようとしたけど、「ははっ、なかなか。でも、残念」

と、奴の周りの蒼い炎がその全てを灰へと変えていく。私は奴から離れるためにどんどん後ろに下がっていき、トンツと背に木が当たる。

「…ッ!?!」

私は後ろを向き、木で行き止まりになっているのに気づき逃げ場を探そうと周りを見るが、いつの間にか炎で左右を囲まれてしまった。逃げ道を無くした私に、さらに近づいてくる奴を見て、恐怖により足が竦みその場に座り込んでしまった。そして、目の前に来た奴は私の頭に手を乗せる。私はビクリと身体を震わせ奴を見上げた。

「んく、どうしようかな? 君のことを処分しないと色々迷惑かかるし」

「…ひっ!」

奴が呟いた処分と言う言葉に私は、恐怖で震えだしてしう。死にたくない。私は気づいたら涙を流し、小さな悲鳴を上げた。

「でも、吸血鬼って人間に血が食糧なんだし。一概に責められないしなあ」

しかし奴は、さっきとは違う、助けてもいいと言うようなことも

言ってきた。私はその言葉に唯一の希望を託し、奴にたいして、

「…！ た、助けて…おね…がい」

と、震えながら呟いた。

「もう、もうこの村では人を襲わないです！　すぐにでも出て行きま
すから！　お願い、見逃してください！」

涙を流し震えながら懇願し、頭を下げる。そしたら奴は、

「あ、そういうばお前。両親をメイジに殺されてるって聞いたが…
本当か？」

「…ツ!?…うん」

私の両親のことを聞いてきた。それはこの村に住む際に、私が村長
に話した数少ないホントのこと。

「元々私は、両親と一緒に森の奥で暮らしていたの。吸血鬼だから月
に何回かは近隣の村に食事しには行っただけど、でも殺さないように必
要最低限の量しか血を吸わない様にもしてた。

お母さんに編み物を教えて貰ったり、お父さんはよく遊んでくれ
た。代わり映えはしなかったけどとても幸せだった。そんなある日、
いきなりメイジが襲ってきたの。『森に住む化け物を退治に来た』つ
て。

それで…お父さんは私とお母さんを逃がすために囚になつてメイ
ジ達の相手をして、お母さんも追ってきた奴等に…。私は何とか逃げ
て…：その後は村や寺院を回って今まで生きてきたの。

始めは夜、人間達が寝てる間に少しだけ血を吸わせて貰ってたのだ
けど…私が吸血鬼だつてバレると、化け物と言つて私を殺しにくる
の。どこに行つても、だから…」

私は今までのことを一通り話した。そして、私の話を聞いた奴は私
の頭に手を載せたまま

「長いな。それと、俺はそうゆうお涙頂戴は好きくない」

そう言った。そして次の瞬間、私の身体を蒼い炎が包んだ。

「へー！　あああ！　いやあああああ!!　助けて！　助けて！　嫌だ
嫌だ！　死にたくない！　いやあああつああ!!」

熱い熱い熱い熱い熱いあついあついアツイアツイ!!

痛い痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイイタ!!! 体が燃えていく。焦げていく。炭になっていく。

「あ、っあ、ああ……だ、ずけて……いやだ、うっぐ」

私は自分でもう何を言っているか解らなくなっていたが、何かを叫んでいた。しかし、次第に意識がなくなつて……

キキSide

パンツと、涙で顔をクシャクシャにし、ガクガク痙攣し始めたエルザの顔の前で俺は手を打った。その瞬間、エルザはまるで悪夢から起きるかのように意識を取り戻し、

「……ッ!!? がっ? え、? ……えっぐ。…? ふえ、ふあ?」

辺りをキョロキョロと勢いよく見渡し始めた。さらに、エルザは恐る恐るという感じで、自分の体を見たり、触ったりして、

「ふえ? え? ……何? え、燃えてない? ……なんで…わ、私…生きて、る」

エルザは今も涙を流しているが、段々と状況が理解できていき、

「……ッ!!? な、何をしたの!!」

「いやいや、悪いな。お仕置きとかも含めて、死ぬ恐怖を与えてみたんだけど…」

叫んだエルザに、俺は笑いながらぐしゃぐしゃのエルザの顔を拭いてやり、色々説明してやる。

「簡単に言うとな、今のは幻覚、つまりは夢だ。森に入った時に、とある方法でお前に幻術…あー、幻覚を見せる魔法をかけたんだ。で、後は勝手にエルザがふらふらつとこの場所まで来て、倒れてっつな。まあ、途中色々喋つてたからこれまで経緯も理解できてるから安心してな」

エルザは俺の説明に目を丸くしている。

「まあ、もし悪党全開の発言していたら、後ろのアレみたいにバラバラにしてたけどな」

「ひっ!?!」

俺が背後にある四肢と頭がバラバラになっている大男を指すと、エルザはそれを見て可愛らしい悲鳴をあげた。

「さて、冗談もそこそこにしてと。この後はどうするかなく？ タバサと相談しないといけないし。けどまずは、吸血鬼の事をどう村人に説明するか。まあ、とりあえず」

俺はバラバラにしたグールの大男と幾つかの太い木（人の腕程度）を適当に並べて、

「火遁・豪火球の術」

口から等身大ほどの火の玉を吹き、並べたそれらを燃やしていく。もちろん大男と木が区別のつかないまでしつかりこんがり。結果、巨大な円状の焦げ後の上には大柄な人間と細身の人間…っぽいもの、二人分の炭化した物体が出来上がった。

「よし、あとは村人たちに適当に説明すればOKだな。よし、帰るぞエルザ」

「へっ？あつ」

俺はエルザの手を掴んで、いかにも今、吸血鬼から助け出しましたよ、つてな感じを出しながら村へと帰った。

吸血鬼退治3

キキSide

「さて、戻ってきてみれば、家を放火して騒いでいる村人達を見て感想をどうぞ」

「人間は不思議な事するね」

俺がエルザに話かけると、なかなか面白い冗談が帰って来た。俺たちは森から村に戻つてくると、村はずれが騒がしく、二人でそちらに向かうと村人たちがあばら家に火をつけていた。

「あー！ あんたは!？」

そして遠目に俺達が様子を見てみると、村人たちが気づき話しかけてきた。

「なんだ、ぐうたら騎士様じゃないか。こんなところでなにをしてるんだ」

「お前等こそ、なにやってるんだ？」

村人の一人が嫌味を言ってきたが、俺は気にせずに質問をした。

「見て分かるだろ、吸血鬼退治さ」

「…へえ。吸血鬼退治ね。ってことは、中に人が居るってことか？」

俺は、得意げ顔でニヤついている村人の返答を聞き、さらに質問する

「当たり前だろ！ ここのババア、占い師なんて嘘つきやがって」「そうだそうだ。アレキサンドルの野郎、やっぱり屍人鬼^{グール}だったんだ。」「俺も見ただぞ。あいつがとんでもねえ形相で動き回ってたのを」「俺も見ただ！ ありや人間の動きじゃねえ」

一人の村人が答えたら、周りにいた奴等も口々に言いはじめた。俺はそれを聞いてなんとなくエルザを見たら、

「こ、怖いね〜」

エルザは俺から顔を背けどもり気味に言った。まったく、この子は…。

「おや、エルザちゃん？ こんな夜更けに、しかも騎士様と一緒になんて…。どうしたんだ？」

村人はエルザが居る事にやっと気づき、声をかけたので

「ああ、さつき屍人鬼に攫われたから助けてきた。ついでに森の奥に住み着いてた『本物』の吸血鬼も退治してきた」

俺がそう答えると一瞬の沈黙があり、そして次第に村人たちは戸惑い始め、最後に自分達がしたことに関を青くして騒ぎ始めた。そんなふうに関人がパニックになってるうちにガラガラガシャン！ と、あばら家が炎に包まれて崩れ落ちてしまった。

「…ツ!? 火を…、火を消せー!!」「は、早くしろ!」「み、水! 水を!!」

村人たちはあばら家が崩れる音で我に返り、やっとこさ火を消し始めたが、

「もう手遅れだろ、これ」

「元々病気で弱ってたから、煙が充満した時点で手遅れね」

時すでに遅し。俺達は必死な顔で火を消しにかかっている村人たちを見てそんなことを言い合った。

「うくん。少々後ろ髪を引かれる思いだが、出来る事もないし帰ろうか」

「なっ! ちよっ、待ってくれ! 騎士様の魔法でこの火を消してくれ!」

俺が村長の屋敷に帰ろうとしたら、腕を捉まれそんなことを言われたので

「いやいや。俺はあくまで吸血鬼を退治しに来ただけだし。それに、これはあんた達が勝手にやって起こした事だ。助ける義務も義理も無い。大体俺、無駄なことはしたくない主義だし」

俺はそう言い切り捨てて、腕を振りほどきエルザと屋敷に戻った。

タバサSide

「ん…」

私は朝日の光で目を覚ました。……えっ? おかしい、私は確か怖がっているエルザを安心させるために一緒に部屋に入って、そして:

「思い出せない…」

私は眠ってしまう前の事を思い出そうとしたが全く思いだせなかった。が、しかし、こんな理解出来ない事を出来るの人物に一人、心当たりがある。

「うまく、お肉。お肉なのね〜。」

私が昨夜のことを考えていたら、隣からシルフィードのふざけた寝言が聞こえてきた。こいは…。私はベットから降りて、何故か立ってかけてあった私の杖を取り、そして…

「ぎゅっ！」

ガンツ！ と、シルフィードの頭に杖を振り下ろし、部屋を出て行った。

「きゅい〜、な、なんなのね〜」

部屋からうるさい声が聞こえてきたが、そんなことはどうでもよくて、今優先すべき事は…、

「キキと話す事」

私は杖を握り締めて、キキが寝ている部屋に行く。私は気配を消し、音を立てないように慎重に部屋に入り、眠っているキキに近づく。

「…ん？」

キキの掛けている布団が不自然に膨らんでいる。私は手を伸ばし布団を捲ると、

「ん〜、うゆ〜」

エルザがキキに引っ付いて寝ていた。確かエルザはキキを怖がっていたはずなのに、一体何が？

「ん〜、ふぁえ…。ん？ あ〜お姉ちゃん…おはよ〜」

私が動揺して考え込んでいたら、エルザが目覚めた。

「……おはよう。なんで騎士様と寝ていたの？」

私はエルザに質問をした。そしたら

「ん〜、だって私、キキお兄ちゃんの妹になるから〜」

とんでもないことを言いやがった。そう、これはなにがなんでも絶対に完璧にキツチリと話をしなければならぬようだ。

「エルザ。あなたにも聞きたい事はあるけど…、今は彼と話しをしな

ければならないから」

「う、うん。私……、ご飯食べに行くね」

私は優しく声をかけてエルザを部屋から追い出す。エルザは引きつった表情して走って出て行った。さて

「ラナ・デル・ウインデ」

ドゴオンツ!! と私はエア・ハンマーをキキに叩きつけた。キキはきりもみしながら吹っ飛び、壁にぶつかった。が、壁にぶつかったキキはボフンツと音を立てて、丸太へと変わってしまった。そして、

「せめて理由を聞いてから攻撃しようよ……」

「……ツ!？」

また、私の背後に音も無く彼がいた。しかもキキは喋りながらも私の杖を奪い取り、魔法を使えないようにしてきた。寝ている時なら攻撃を当てられると思っていたが、詰めが甘かった。さて、そんなことよりも、

「説明」

私は、昨夜何をしたのか、何故エルザと寝ていたのか、何故エルザがキキの名を知っていたのかと、とにかく説明してもらいたい。

「あく、それって、昨夜のことだよな?」

私は、キキを睨みながら頷く。

「そうだな。それじゃあ俺がタバサを眠らせた辺りから話すとだな……」

キキは私が寝ている間のことを説明してくれた。

「……で、エルザを村に置いとくわけにはいかないから、適当な理由をつけて連れて行こうかなって……。まあ、しょうがないことだった」

キキの説明を聞き終えたが、何というか

「無茶苦茶」

「あはは」

私が呟くと、キキは顔を背けた。しかし、説得しただけでそんなにアツサリとゆうことを聞くものだろうか? 屍人鬼もそうだ、キキは強いのは分かるが、吸血鬼と一緒に簡単に倒せるなんて……。今思えば私はキキの事を東方のメイジと言う事しか知らない。

「どうした？」

キキの顔をジツと見ていたら声を掛けられたので私は

「後で、また（ぐうぐ）……」

「……とりあえず飯食いにいこうか」

間が悪いことにお腹が鳴ってしまった。キキは苦笑しながらそう言って私の背中を押しながら部屋を出た。リビングに着き、朝食を食べていると

「おい、ジジイ。そのガキ俺の屋敷のメイドにするから、報酬の代わりに連れてかせてもらうぞ」

キキが突如そんなことを言い、村長は目を見開いて驚き

「そ、そんな！　お願いします！　お金ならいくらでも払いますから、エルザを連れて行くのはご勘弁を！」

そう言つて、エルザを後ろに庇い、キキに頭を下げて懇願してきた。「俺がもう決めたことだ。逆らうなんて許さないぞ。それに村の連中には色々な陰口を貰ったからな。その礼もかねて、そいつは貰っていく。」

「そ、そんな」

キキは村長の懇願を一蹴して食事を開始した。そして朝食後、

「エルザ、元気でやるんだよ」

「うん、おじいちゃん。今までありがとう、おじいちゃんも元気でね」荷物をまとめて、私たちは村の外れにいた。村長はエルザと別れを惜しみ、悲しい表情でエルザを抱擁している。しかし、村長と数人の子供達しか見送りに来ないのは、キキに聞いたとおり昨夜、勘違いで例のお婆さんを殺してしまったことに、大人達はまいつてしまつてるのだろう。

「それじゃあ、いくぞ」

エルザが別れを終えて、こちらに来たのを見計らつてキキはそう言い、私たちは村から出て行つた。

「あゝ、疲れた」

キキはそう言いながら身体を伸ばして寝転がった。私たちは元の姿に戻つたシルフィードで帰つてる途中だ。私は座つて本を読んで

おり、エルザは下を見てはしゃいでいた。

「キキ、エルザの事、どうするの？」

「ん？ あく、…タバサ頼むよ。適当に口利きしてくれ」

キキにエルザのことを聞くとそう返ってきた。自分で連れてきていて、他人に頼むのはどうかと…。はあ、しようがない。私が内心でため息をしていたら、

「ねえ、お兄ちゃん。昨日は色々あって聞けなかったけど、お兄ちゃんって一体何者なの？ 私に見せた幻覚もすごかったけど、口からでっかい炎の玉吹いたりして」

幻覚？ 炎の玉？

「きゅい。お兄様は姿を消したりする以外にもそんなこともできたのね？」

姿を消す…、それなら何度も見たことがある。例の東方の魔法なのだろうが、やはりちゃんと彼に自身のことを聞くべきだろうか？ 私は多少迷ったが、好奇心と、なにより母さまのこともあるので、

「キキ。私もあなたのことちゃんと聞きたい」

「あく、んく。まあ、タバサにはそのうち話そうかなと思ってたからな。そうだな、帰ったら話すよ」

キキはそう言ったら、そのまま寝始めてしまった。なんというか…モヤモヤした感じを残して私たちは学院まで帰った。

主人公語り。

キキSide

任務先から学院へと戻った後、俺たちはタバサの部屋に集まった。
「……いや、そんなにジツと見られると話し辛いんだけど」

俺は部屋にある椅子に座っており、タバサ、エルザ、人間モードのシルフィがベットに座って俺の事を見ている状態だ。俺はジツと見られてることに苦言を呈すが、

「早く」

「楽しみ」

「きゅいきゅい」

俺の言葉を無視して、二人と一匹は早く話せと急かしてくる。むく、しようがない。

「あく、そうだな。まずは、俺の住んでいた所の話をしよう。最初に、大前提として信じてほしいことが在るんだが、それは俺がこの世界とは違う世界からやってきたってことなんだ」

俺はまず、異世界の人間であると言う事を話した。

「…別の世界？」

「なにそれ？」

「きゅい！ 美味しそうなのね」

まあ、そう言う反応だよな。ってかシルフィ、食べ物じゃないから…。

「むく。まあ、そんな感じの反応をするのは、なんとなく分ってたので、一番手っ取り早い方法を取らせてもらう」

そう言っつて、俺は印を組み、

「口寄せ・夢幻館」

タバサたちを俺の精神世界へと口寄せした。この術は拷問好きのとある特別上忍が使っている術を俺が改造したものだ。改造コンセプトは『月詠』っぽい幻術できねえかな。で、考えた結果これが出来た。能力的にはぶつちやけ月詠の超劣化版である。

相手を自分の精神世界へ引き込むまではいいが、それ以降が問題

だったりする。精神世界なので、ある程度は体感時間を延ばせるが、外と中での時間差は頑張っても1/100程度しか延ばせなかつた。後、幻覚の質も高度な幻術程度なので、実力のある忍相手だと破られる。つてか戦場なんかでは使い物にならないし。

なので、最終的にこの術は、引き込んだ相手に自分のイメージ又は記憶を見せたりする、情報伝達系の術として使うようになった。で、それがまた、相当役に立った。だって、

「ッ!? へこは…」

「これって、あの時と同じ感じ…」

「きゅいきゅい!? 何なのね〜!」

こう言った相手。つまり人に対して細かいイメージを色々と教えるのに役に立つのである。で、この夢幻館内には俺の記憶、木の葉の里が映っている。なお、映している時期は俺が5歳の頃の物。まだチートさん達が暴れだすずっと前の平和な頃のものだ。

「へこが、俺の住んでいた世界。場所は火の国、木の葉隠れの里だ。こつちついて来い」

俺は里を案内しながらタバサたちに、細かいことを話していった。まずは俺の世界の国と隠れ里のことから、タバサたちに解り易いように、ハルゲギニアの体制と照らし合わせながら説明していった。

「質問がある」

「ん、なんだ」

俺が説明していたらタバサが質問してきた。

「…あなたの話を聞くがきり、忍は貴族の出ではないみたいだけど」

「ああ、後でちゃんと説明するけど、俺たちが使う忍術は訓練すれば誰でも使えるものだからな。基本的に貴族連中は特殊な家系とかでも無いがきり、忍にはならないさ。んじや、説明を続けるぞ」

次にタバサたちへ忍のことと忍術について説明する。忍についてはランクやどんな任務をしているか、忍術は基礎的な知識など。他にも、

「ルーン機能を封じたこれも、封印術っていう物だし。それと、これは特殊なんだが、俺の一族には『白眼』っていう特別な能力が使えて

な。エルザが吸血鬼だつてのもこの白眼を使つて見破つたんだ」と教えたり、

「は〜い。今度は私が質問。お兄ちゃんのランクは何?」

「俺は上忍だぞ。まあ、面倒臭くて上忍会議はほぼ欠席してるけど」

「あなたは主にどんな任務をしていたの?」

「あく、情報収集とか、かな。うん」

途中でエルザとタバサの質問に答えながら説明をし続け、そして、「と、これが俺のいた世界だ」

俺はタバサたちに一通りの説明を終え、皆で日向一族の屋敷の縁側で一息ついた。庭には、子供の頃の俺とネジが組み手をしている風景が映し出されている。いや〜、懐かしい。

「……ねえ、お兄ちゃん。ホントにこれ子供の頃のなの? 素手で岩砕いたり、地面を陥没させたりって」

「あはは。そりゃあ、チャクラで肉体強化してるからな。これぐらい当たり前だよ」

膝の上に座つて引きつった表情でエルザが聞いてきたので、俺は笑いながら答えた。そんな風に和んでいたら、

「あなたに聞きたい事がある」

「お、なんだ?」

「さつき訓練すれば誰でも使えるつて言った。それじゃあ私も、忍術をさせるの?」

タバサがそんなことを聞いてきた。まあ、なんとなく予想はついてたけど……。さて、どう答えよう。ぶつちやけチャクラの練り方を覚えてしまえば、確実に使えるだろう。が、教えてもいいものか?

う〜ん。……まあいいや。

「使えるぞ。何なら教えてやってもいい」
「…ホント?」

「ああ。そうだ、エルザもついでに覚えてみるか?」

「いいの? じゃあ、私も覚える!」

「きゅい〜。よくわからないけど私もなのね〜」

ふむ。色々面倒なことになりそうだが、もうどうにでもなれって感

じだな。うん。

「とりあえず説明も済んだから術解くぞ」

俺はそう言っつて、夢幻館を解除した。

「つと。さて、俺のことは話し終わつたし、次はエルザをどうするか決めるか」

俺はそう言っつて、エルザを見る。

「私はどうすればいいの?」

「とりあえず、食事に関しては俺の血を飲めばいいが、…つてどうした? 変な顔して」

俺の言葉にタバサとエルザとシルフェは眼を丸くしていた。

「きゅい! お兄様は怖くないのね!? この子はいくら懐いてるとは言え吸血鬼なのね! 血を全部吸われちゃつたら死んじゃうのね」

「別に大丈夫だろ。エルザはそんなことしないと信じてるし。それにもし、そんなことしたら…たぶん本気でボディブローを捻じ込むと思う」

シルフィの言葉に俺はニツコリと笑顔で拳をスイングさせながら答える。大丈夫だとは思うけど子共の躰はきちんとなしなとね。エルザは顔を青くしタバサのマントにしがみつきながらプルプルと震えていた。

「で、エルザの食事はそれでいいとして、ここに住まわしておくのに何かしらの仕事をさせておいたほうが良いと思うのだが。タバサ、なんとか頼むよ」

「…わかった」

タバサは嘆息しながらもそう言っつて承諾してくれた。いや〜ホントに助かる。さすがタバサだ。

「よし、これにて一件落着でいいのか? まあなんでもいいや」

そう言っつて俺が無理矢理まとめたら、

「…忍術を教えて」

タバサが早速そう言っつてきた。好奇心旺盛過ぎるのもどうかと思う今日この頃でした。

日常編？

リオンSide

「おい、ルイズ。朝だぞ」

僕がこの世界に来て数日ほどが経った。

「う、ん。あ、おはようリオン」

「寝ぼけてないで、早く起きろ」

今は現在、僕はルイズの使い魔というよりはお世話係のようなことをしている。ルイズ曰く『せっかく人間の使い魔なんだから別に構わないでしょ』とのことだ。はあ、まったく。

「分かってるわよ。ほら、服とって」

「そこに置いてあるだろ。僕は先に行ってるぞ」

「うん、じゃあ後でね」

僕は部屋を出て、朝食を食べに厨房に行く。

「あ、おはよう。リオンお兄ちゃん。今ぐ飯用意するから」

「ああ、たのむ。エルザ」

僕が厨房へ入ると、チトセとキキがおり、朝食の準備をしていたエルザが僕を見るとそう言って奥に入っていった。

「ホント、エルザちゃんは可愛くて働き者ですね」

「だなく。ぶっちゃけあんなにちゃんと働くとは思わなかった」

ちとせとキキがエルザの後姿を見ながら、しみじみと呟いた。エルザはキキがどこからか連れてきた10歳ぐらいの少女で、学園のメイドとして働かしてもらっているらしい。

その後、朝食を取り終わったら

「じゃあ、今日も軽く訓練やるか」

「ああ、そうだな」

ここ最近やり始めた剣の訓練をするため外へと行く。僕とキキはある程度距離を取り、互いに武器を構える。キキの武器はとても短い黒色のナイフ（クナイというらしい）を使う。ただし、一本ではなく数本程。奴の戦い方は距離を取ればクナイを投擲し、縮めればクナイと体術による攻撃と中々厄介だ。僕とキキは互いに隙を探しあい、そ

して・・・

「ふっ！」

「はあっ！」

同じタイミングで互いに接近しあい、切り結ぶ。僕は左に持ったダガーでキキの体勢を崩しにかかるがキキはタイミングを合わせてバックステップをし、さらにそこからすぐに接近してきてクナイを振るう。僕はそれを剣で受け止めたが、

「ぐっ・・・」

キキの掌底が腹に入る。こいつは流れるように懐に入ってくるので、ヘタに接近し続けるとこのような打撃を何度も入れてくる。しかし、僕だって負けていけない。

「…ッ!!」

僕は攻撃を耐え、ダガーでキキの腕を即座に斬りつける。ちなみに言っとくが僕たちは少々傷つけられても、訓練後はお互い持っている治療術で治すので問題ない。このあいだ、訓練を決闘とシエスタに勘違いされて大騒ぎになってしまったが…。

それからしばらく打ち合って、時間になったので傷を治し皆で食堂の入り口に行く。

「ん…？」

視線を感じてそちらを向くと、赤い生き物が見えた。また、あのサラマンダーか。ここ最近僕の事をずっとつけている。少々鬱陶しいが、危害を加えてくるでもないので放っておいている。ルイズたちと合流し午前の授業を共に受ける。僕としては外で身体を動かしていたほうが有意義なんだが、ルイズがうるさいので仕方ない。

昼食後はチトセの案で三人で厨房の手伝いをし、それが終われば、またキキと訓練をする。

「……ハッ！」

「なんのっ！」

いつものように何合が打ち合っていたら、

「きゅい〜」

上空からタバサを乗せた竜が降りてきて、

「任務」

「おう。すまんリオン、用事が出来たから今日はこれで」

そう言いい、竜に乗って行ってしまった。僕は剣を仕舞い軽く息を吐く。キキが出掛けてしまったから今日は地下の浴場には行けないか…。しようがない、キキが戻ってくるまで裏庭にあるチトセが作った鍋風呂を使うか。

キュルケSide

「ん〜と。今日もいい朝ねえ」

私はいつも通りに朝を迎えた。

「さーと、今日はどんな香水をつけようかしら」

私はベットから降り、髪を梳かしながら化粧道具を机から取り出す。

「ん？ あらあの子、もう起きたの？ 朝弱かったはずんだけど」

私はルイズの部屋の前に忍ばしておいたフレイムの目を通して様子を見てそう呟く。お化粧をしながら見ていると、部屋から愛しのダーリンが出てくる。ダーリンとはもちろんリオンのこと。

「はあく。ホントにダーリンって、素敵な人。ルイズなんかにはもつたないわねえ。フレイム〜、いつもの様にお願いな」

私はフレイムに命じてダーリンの後を追わせる。うふふ…、彼いつも無愛想だけれどもそこがいいのよねえ。学院の男子たちって積極的なのが良い所なんだけど…やっぱりダーリンみたいにクールなのがいいわよね。

「ん〜？ よし、今日も完璧」

私は鏡でお化粧の出来を確認して、化粧道具を仕舞い、ダンスから服を出して着て準備完了。私が部屋を出ると

「おはよう、ルイズ。今日も早いのね」

「おはよう、キュルケ。別に私が早く起きたってあなたには関係ないじゃない」

「そんなこと無いわよ？ 愛しのダーリンとお話できるじゃない」

「あんたまたまたあ?! いい加減にしなさいよ! それに、リオンは私の使い魔なんだから手出さないでよ!」

と、まあいつも通りのやりとりをしていると、タバサがやってきたので私たちは食堂へ向かう。最近こうやって三人で食堂に行くことが多くなっただけで…ま、楽しいからいいか。それからのんびり朝食を取り、食べ切れなかった分はタバサに上げた。いつ見ても良い食べっぷりねえ。

「……………」

「zzzz」

午前の授業が始まり、私たちが教師の話聞いてる間ダーリンは目を瞑り、ジツとしている。別に寝てるわけではないみたいだけど、はあく、カッコイイわ。タバサの使い魔君、確かキキって言ったわね。彼は普通に机に突っ伏して寝ている。彼もそれなりにカッコイイけど……タバサの使い魔だし、それにこれを機にタバサが恋でもしてくれればいいのだけど、うん彼にその気はあるかしらねえ。

それからお昼になり、私は本を読んでいるタバサの隣に行く。

「ねえタバサ、聞きたいことがあるんだけど」

私は本を読んでいるタバサに話しかける

「あの使い魔の彼とはどんな感じなの?」

「別に」

うーん、やっぱり素っ気ないわね。しかし、このタバサに恋の楽しさを教える絶好のチャンス。逃がしてなるものですか。

「別にじゃないわよ。あなたとても可愛いんだし、少しお化粧して笑えばあの使い魔の彼も、あなたの魅力にメロメロよ!」

「……………興味ない」

!?! 微妙な間があったわね! ふふふ、これはこれは…。まさかの反応! やばっ、なんか興奮してきたわ。

「そんなこと言ってるの? 彼結構カッコイイし、メイドの人たちに人気あるみたいよ。無愛想だけどよく働いてくれるって」

「……………彼の自由」

そこそこ反応らしいものはあるんだけどねえ。今一歩たりないわ

ね…、そうだ！

「タバサ、実はあたしねえ、最近、ちよつと恋しちやつたのかもしれないの。聞いてくれる？」

私の話をすればもうちよつとは気にするようになる…はず？

まあいいわ。とりあえず私も色々話したいしね。だけど不思議ねえ、なんでお喋りな私と無口なタバサとじゃ気なんて合うはずなのに、この子のそばにいると落ち着くのよねえ。うーん？ 私はそんなことを思いながらタバサに話をしていたら、

「あ！ そうか。そうなんだわ。無口なのに、そばにいて苦痛じゃない…。そんな相手はあなただけよ。だから、あたしはあなたが必要なの。なぜって、そんなの唯一無二だからよ。やっとわかったわ。恋人の代わりはいくらでもいるけど、あなたの代わりはいないってことね」

うん。なんだか納得したわ。私がそういう終わるとタバサがやつと顔を向けて

「…：必要？」

そう言ってきた。もう、そんなの…

「あつたりまえじゃない！」

私はそう言いながらタバサに抱きついた。タバサはしばらく私の顔を見ていたけど、また本に顔を向けた。そんなふうにはタバサとじゃれあっていたら、タバサの頭にフクロウが留まりタバサは無言のまま足に付いた書簡を取り、読むと表情が冷たくなってスツと立ち上がった。

「ん？ なに？ どうしたの？」

「出かける」

「はい？ 出かけるって、どこに？」

私は急に立ち上がったタバサに聞くが、あの子は何も答えずに行ってしまった。

「うーん。あの子たまにああやって授業サボって出かけるけど、いったいどこで何をしてるのかしら？」

ま、いいか。考えても仕方ないことだし。そういえば私何をタバサ

と話してたんだっけ？ ……ダメだわ、思い出せない。まあでも思い出せないってことはたいした事じゃ無いでしょ。

「あ、そうだ。今日ダーリンをあたしの部屋に招待しましょう！ うん、決めた」

決めたら早速、もてなしの準備しなくちゃね。うふふふ、今夜が楽しみだわ。

任務

イザベラSide

沈黙が辛い。今、私は任務を与えたシャルロットが来るのを部屋で待つてるんだけど…。私は部屋の隅にいる、赤髪の彼をチラリと見る。

「……………」

ううつ、メイドたちに何かさせてこの場を和ませたいけど…、

「…さつきから何チラチラ見てんだ？」

「なん…でもないわ」

あー、ダメ！ 彼の前でいつもみたいな傍若無人をしたら怒鳴られる。はあ、見栄を張ろうとして召喚の儀式なんてしたのがいけなかったのよね。あの時はホントビックリしたわ。

ゲートが開いたらいきなり血まみれの彼が現れて大騒ぎになるし、治療した後も意識を取り戻した彼と話をしたら私や周りの貴族たちのことクズだのゴミだのと遠慮無しに暴言はいてきたり、最終的に騎士のたちと決闘騒ぎを起こしては無傷で圧勝したり。

使い魔の契約は…もちろん出来ていない。かと言って、ほっとけば勝手に出て行きそうだし、使い魔に逃げられたなんて事になったらいい笑いものだし。だから、なんとか説得して私の親衛騎士としてそばに置いた。

彼は辛辣だけど強いから、暗殺者などの刺客に脅えなくて良くなったとこまではいいのだけれど…。城での生活を見られたら怒られた。その後も、一国の姫としてのどうのと説教を食らう始末。なんてこつたい。私が現実逃避気味に物思いにふけていたら、

「シャルロット様が参られました」

「…ッ！ そ、そうかい。早く通しな」

よくやったよシャルロット！ これでこの重い空気から解放される。いつものように無表情の彼女が入ってきた。

「…。」

シャルロットが部屋の隅にいるあいつを見て表情をわずかに変え

るがすぐに元に戻った。

「さて、今回の任務について説明するよ。つつても言うことは無いんだけどね。内容はガキの世話だよ。詳しいことは向こうに着いたら聞きな。それと今回はあいつ、アツシユを連れてつてもらおう」

私は任務の説明をした後、隅にいる彼を指差して言う。すると

「…おい。なんで俺が行かなきゃならねーんだ」

文句を言ってきた。彼の性格からして当たり前前の反応だ。ゆえに建前は完璧に用意してあるのさ。

「なに、少しぐらいは外で勉強してくるのもいいだろうと思つてね。本だけじゃわからないことも多いだろうしね」

「…チツ」

よし、コイツが舌打ちするのは不本意だけど了承したつて意味だ。これではばらくはのんびり出来る。

「それじゃあ、ほれ書簡だよ。あ、それと面白い玩具があるから一つやるよ。さあとつとと行きな」

私はシャルロットに書簡と特殊な魔法人形を渡して二人を部屋から追い出し(ついでに部屋にいたメイドも)、ベットに倒れこみ身体を伸ばす。

「あー、やっと解放されたー。アツシユはいい奴なんだけど…：…容赦がないのよね。すぐくスパルタだし。でも任務についてる間は好き勝手出来るわ。じゃあ早速何しようかしら」

私はとても久しぶりに心が躍るような気分になった。

タバサSide

私はイザベラから渡された書簡と人形を仕舞いながら廊下を外に向かつて進む。後ろには友人に似た赤い髪の青年が無言でついてくる。確かアツシユと呼ばれていたはず、彼は一体何者だろうか？ あのイザベラに平然と文句を言い、尚且つプライドだけが高いイザベラが癩癩を起こさずに話していた。しかも、この人、相当強い。たぶん私が全力を出しても勝てるかどうか…。そんなことを考えていると

庭に出た。

「きゅい〜」

「あー、あゝ!?! ……お、お疲れさん」

庭に待たせておいたシルフィードとキキが声を掛けてきたが、キキの方はアツシユを見た瞬間、驚愕し声が裏返った。その後すぐに何も無かったかのように声を出したが少し震えている。……何？

「どうしたの?」

「いや、なんでもない」

私は気になつて聞いたがキキはそう言つて顔を逸らす。……一体何を隠しているのだろう。後でじっくり話をしよう。

「乗って」

「ああ」

私はアツシユにそう言つてシルフィードに乗らせて、目的地まで移動する。任務先はガリアの首都リュティスにあるロバール街のド・ロナル伯爵家である。任務内容はその家のオリヴァンという十五歳の少年をなんとしても学院に通わせるというものだ。ちなみにこれを聞いたキキとアツシユは

「引きこもりの世話かよ」

「あいつ、こんなくだらねえことをさせようとしやがつて」

普通に呆れていた。まあ、そうだろう。私もこれを読んだときは流石に冗談かと思つたが、サインの所にちゃんと印が押されていた。まったく、とんでもない嫌がらせだ。そして問題の家に到着し、私たちが門の前に立つと、

「当家に何用ですかな」

「ガリア花壇騎士、タバサ」

マンティコアの像が喋り、私は肩書きと名前を述べると門がゆつくりと開いていく。私たちが入っていくとシルフィードもついて来ようとしたので空で待機するよう言つた。シルフィードはとても不満そうにして屋敷の上を飛び始めた。

それから、私たちはまず屋敷の客間に通された。客間はあちこちに宝石や金の像が置いてある、成金を見事に表したような部屋だ。その

部屋の真ん中、巨大なソファに身体をうずめるようにして、肥えた太った女性が座っている。

まさに墮落貴族の典型のようなこの女性が、ド・ロナル伯爵夫人だろう。夫人は客間に入ってきた私たちを無遠慮にジロジロと見ると「そなたたちが王宮が寄越した花壇騎士かえ？」

夫人が古い宮言葉で聞いてきた。背後から舌打ちと嫌そうな声が聞こえてきた。私も同じ気持ちだがそれは表情に出さずに夫人の問に私は頷く。すると夫人が顎をしゃくり、魔法の鈴を鳴らすと先ほど案内してくれた執事が飛んできた。

「お呼びでございますか？ 奥様」

「誰が子供を呼べと申した。それに、そこなみすぼらしい格好の者と頭の悪そうな顔の者。どうせいやしい家の出の者たちだろうて。こんな者たちをあの子の相手をさせるわけにはいかん。わらわは、^{シユヴァリエ}騎士”を呼べと申したのじゃ。臆病者に、勇氣や氣品を与える騎士が欲しいのじゃ。遊び相手や、使いつ走りなどが欲しいわけではない」

夫人が一気にまくし立てる。とんでもなく自分勝手な人だ。しかしそれよりも

「今すぐその顔面をグチャグチャにする勇氣をみせてやろうか…」

「自分の姿も理解できてねえクスが」

後ろから小さな呟きと共に軽い殺気が漂ってくる。近くにいた執事は夫人の剣幕とキキとアツシユの威圧感に顔を青くしながら

「お、恐れながら奥さま、こここの皆さまは、様々な功績を上げシユヴァリエの称号を得た、まごうことなき榮譽あるガリア花壇騎士でござい
ます」

執事がそのように説明するがキキとアツシユに関してはもちろんでまかせだ。本当のことを説明すると面倒になるので、そのようにしてある。

「シユヴァリエ」とな。最近では商家の認可証並みに、濫発しておるといふ話ではないかえ…。まあ、よい。そちに任す。よきに計らえ」

夫人はそう言うが、何をどうしろと？ 私たちが呆れていると夫人はまた鈴を鳴らした。

「お呼びでございませうか？ 奥さま」

すると、赤い髪の召使の少女が現れた。

「オリヴァン付きの召使じゃ。わからぬことがあれば、このものに尋ねよ」

夫人がそう言うと、少女は私たちに近寄り一礼した。

任務2

キキSide

「オリヴァンさまは、御寢室だお休み中でございます」

そう言つてメイドさん（名はアネットというらしい）は俺たちを寢室に案内をしながらオリヴァンのこと説明する。だが俺はそんなことどうでもいい、今俺は帰りたい。とにかく帰りたい。だって、面倒臭いんだもの。どう考えたつて、あの親で引きこもりつてことは口くいな奴じゃない。はあくど心の中で愚痴つていたら寢室の前に着いていた。

「アネットでございますよ。ぼつちやま、扉を開けてくださいませ。もし、ぼつちやま！」

アネットちゃんがいるだろうお坊ちゃんに声を掛けるが、返事も無けりや扉も開かない。タバサはアネットを退けるとアンロツクを唱えるが扉は閉まったままだ。そんな時、俺の隣にいたアツシユが前に出て腰の剣を無言で引き抜き、ザアンツ！ と、扉を叩斬つた。おお、豪快だな。アツシユによって斬られた扉はバラバラになって、部屋の中に倒れていき

「だ、誰だお前ら!!」

中に居たぼつちやりしたガキがあまりのことに驚愕して叫びこんできた。あー、やっぱりこんな奴なんだね。アツシユは無言でガキに近づいていつて、そいつの首筋に刃を突きつけた。

「おいクス。テメエのくだらねえワガママのせいで、俺がこんなくだらねえことするはめになってんだ。殺されなくなかったら、言う事を聞きやがれ」

「あー、無駄な抵抗はしないほうがいいぞ。彼、本気でその首落としかねないからな」

「……………（コクコクコク）」

アツシユが殺気を振り撒きながら脅し、俺がダメ押しで忠告したらオリヴァンは恐怖で表情を歪めながらも何度も頷いた。さて、

「どうするっ？」

「ふん。学院とやらに行かせればこのくだらねえ任務は終了だ」

俺が聞くと、アツシユはそう言い返してオリヴァンの首にさらに剣を近づける。

「えーと？ 正確には通わせるだから、ただ行かせただけじゃ任務完了にはならないと思うぞ？」

「チツ。ならどうすんだ？ こんなクズ、そう簡単にどうこうできねーぞ」

「俺の知ってる修行に決められた装備で森で一週間ほどサバイバルするってのがあるんだが、こいつにナイフ一本持たせて近くの森に放置するすれば、一週間後には確実にまともになってるはずだ。まあ、なってなかったらもう一週間放置ってな感じでどうだ？」

「ほう。なかなかいい案だな。よし、じゃあ早速森に捨てに行くぞ」

そう言つてアツシユは俺の案に頷き、オリヴァンを森へ連れて行くために無理矢理立たせようとしたが、

「ふざけるなっ!? そんなことしたら死んじゃうじゃないか！ 僕はお前たちのような卑しい人間と違って僕はド・ロナル家の嫡男だぞ！ なぜ僕がそんなことをっ…ひっ!?」

「黙れクズが。てめえの意見なんざあ知ったことか」

オリヴァンが駄々をこね始めたが、アツシユが即座に威圧して黙らせた。んじゃ、さっそくシルフィをと思つたら、ゴンツ！ ガンツ！
「痛っ…」

「…ツ！ なにしやがる」

タバサに後頭部を殴られた。俺たちはただ、手っ取り早く、尚且つオリヴァンのためにと思つて行動したのに。

「無茶。彼が死んでしまう。後は私がやるからあなた達は下がって」

タバサがそう言うので、俺は肩をすくめ、アツシユは剣を収めて部屋にある大きなソファに座る。オリヴァンは俺たちが離れてほつとしたのか肩を落として力を抜いたが、

「…ツ!? な、何をする！ 降ろせ！ おいつ！」

タバサは無言で杖を振り、オリヴァンを浮かせると彼を連れて部屋から出て行ってしまった。2人がいなくなり、やることもなく暇に

なっってしまった。しょうがないのでメイドさんに紅茶とお菓子を
持ってきてもらった。

「なっ！ お前等！ 何、僕の部屋でくつろいでるんだ！」

しばらく部屋にあった本で文字の読み書きを勉強していたら、オリ
ヴァンが帰ってきた。出てってから1時間位しか経ってないんだが。

「おい！ 聞いているのか!!」

「あ？？」

「黙れクズ」

無視していたらオリヴァンが怒鳴ってきたので、俺とアツシユが睨
んだら

「うっ……」

と唸り、その後黙ったままベットに行き、一緒に帰ってきたタバサ
相手にあーだこーだと愚痴というか弱音というか。まあ、所謂言い訳
をしていた。……うっさい。そして、なんやかんやで翌日。

「フツ！」

「ハアツ!!」

キイーン！

俺とアツシユは庭にて訓練をしていた。朝起きて、庭を見たら剣
振ってるアツシユを見かけたので、声をかけて、軽くと思っていたら
……訓練を始めてから一時間位やりあってるわけんだけど、そろそ
ろ疲れてきた。

「ふう。そろそろ終わりにしようぜ。疲れた」

「…そうだな。それと手合わせ感謝する」

「別にいいって。俺も暇だし、訓練する時は声かけてくれ。俺も手伝
うからよ」

「そうか。ならこの馬鹿げた任務が終わるまでよろしく頼む」

「おう、よろしく。俺の名はキキだ」

「アツシユだ」

てな具合にアツシユと仲良くなった。

「ところでアツシユ。タバサがどこ行ったか知らないか？」

朝起きたらタバサがいなかったのとおりあえずアツシユに聞いて

みた。

「あ？ いや、知らねえ。例のガキの方はお前が来る前に出て行ったのは見たが」

「そうか。あんがと」

オリヴァンが進んで外に出かけるなんておかしい。えっと、確かタバサが何かしてたはずなんだけど、……ダメだ思い出せない。まあ思い出せないってことはどうでもいい事ってことだな。

「…本でも読むか」

その日、俺は一日中、本を読んで過した。オリヴァンはどうしたって？ どうなったんだろうね？

で、任務三日目。朝起きると、やっぱりタバサはもういなかった。しようがないので庭でアツシユと訓練をした。そして訓練を終えて、暇になったので

「そうだ。遊びにいこう」

で、思い立ったが吉日、街に来た。金は屋敷にあった奴を勝手に借りてきた。返す気はないけどな。

「久しぶりに遊べるな。あっちじゃ、基本任務ばつかで遊びに行けなかったからなく。さて、遊ぶと言ってもこの世界だとカジノぐらいしかないんだが。まあいいか、試したいこともあるし」

で、カジノ到着。ギャンブルじゃー！ なんてな。さて、向こうじゃ出来なかったチャクラと白眼によるイカサマを試しますか。まあ、十中八九成功すると思うけど。で、

「見事に大成功つと」

チャクラ系でダイス系やルーレットを操ったり、白眼で相手の手札を透視したりで、ぼろ儲け。『もう止めてくれ！』と泣かれてしまった。まあいいや。えっと店に返した分を引いて…三千エキユーぐらいか？

「重いし、こんなに持っても邪魔だな。どっかの酒場でパーっと使うか」

ってな感じで日も暮れていたので近くにあったいい感じの酒場に入り、

「お〜い、店主と客！ 今居る客とこれから入ってくる客の代金は俺が全部払うから好きなだけ飲み食いしていいぞ！」

と大声で叫び、三千エキュール入った袋をカウンターに広げた。そして少しの静寂の後、

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』

と、客達が雄叫びを上げて祭り状態になった。店主も超笑顔で

「どんどん食べてってね」

とまだ頼んでもないのに料理やお酒を出してきた。そんなこんなで俺は飯をたらふく食って、酒場で仲良く(?) なった兄ちゃんに連れられて、

「こ、こはっ！」

「へっへっへ。ここはなかなか可愛い娘たちがいるって評判の店でよ。あんただって若いんだ。色々もてあましてるだろ？」

と、娼婦館へと足を運ぶ事になった。木ノ葉の里にはなぜかこの手の店が無く、里から離れた歓楽街へ行かなくてはならないのだが、さきも言ったように俺は任務のせいでなかなか遠出が出来ず、出来たとしても、年齢制限に引つかかっていたために、入ることが出来なかったが…ここでは関係無いみたいだ。

俺は、ウキウキしながら兄ちゃんと入店し……………

「そして、いつの間にか朝か」

昨夜一緒にいた兄ちゃんはいつの間にかいなくなっており、兄ちゃんの分も含めて結構な額を払わされた。まあ金は有るから別にいいけど。

「腹へったし、出店でなんか食べよう」

その後、店を出た俺は出店を回りながら街を徘徊し、夕方になったのでそろそろ屋敷に帰ろうとしたら

「あれ？ タバサ？」

タバサがこそこそと移動しているのを見つけた。なので、俺も後をつけてみた。着いた所はポロポロの建物。そこでオリヴァンが腕の立ちそうな男と決闘しようとしていた。なぜそんな状況に？

まあ俺には関係ないからどうでもいいけど。で、決闘(笑)が始ま

ろうとしたら、アネットがオリヴァンの前に出て相手に決闘を止めてくれるように頼んでいたが、男はキレてアネットに魔法を放った。

「…………ふむ、例の魔法人形だといえ癩にさわる行為だな」

俺は相手の男と雇い主のガキの顔を覚える。オリヴァンがアネットの死に激昂し、泣きながらも男に向かって行っただが、手も足も出ずにボコボコにされて流石にヤバイ状態になり、男が止めをさそうとしたらタバサがそれを阻止した。その後、男とタバサが戦い始め、俺は誰にもバレないようにテキトーに小石を男に幾つか投げつけてタバサを援護した。結果、苦も無くあつという間にタバサが勝った。

「ふむ。で、これってなんだったんだ？」

今更だが一体どういう経緯で決闘っぽいことになったのかわからない。まあいいや。ガキ共が逃げてったあと、タバサはアネットに近づくと縮んで小さな人形になってしまった。

「へえ、結構面白い力の流れだな。今度傀儡人形作る時の参考にしよう」

俺は白眼で魔法人形の力の流を見て領き。そして、本物のアネットがやってきて気絶しているオリヴァンを抱き起こしてタバサに何度も頭を下げた。それから、俺は瞬身の術で逃げたガキ共を追い、なんかムカつくというチンピラのような理由でガキ共をボコボコにして屋敷に帰った。すると先に帰っていたタバサから

「任務終了。帰る」

と告げられた。アツシユは

「俺が任務の報告をしといてやる。お前らはそのまま帰っていいぞ」

と言つて、一人で帰ってしまった。なので俺たちはそのまま学院に直帰する事にした。

「きゅい〜。お兄様、一人で遊びに行くなんてひどいのね。シルフィ、暇で暇で退屈だったのね」

シルフィに乗って帰る途中、シルフィにそう言われた。

「あー、すまんすまん」

「きゅい！ ずるいのね！ 私なんかそのチビ助に扱き使われたのにー」

きゅいきゅいと文句を言ってくるので大人しく聞いてやる。

「まったく、お兄様だったら。私も美味しいもの食べたいのね!」

「ん? 俺、そんなに臭いするか?」

俺は軽く服の臭いを嗅ぐ。

「きゅい。私達の嗅覚は人間より優れてるから、気にしなくてもいいと思うのね。それよりも、今度はシルフィも連れてって欲しいのね。昨日の夜も女の子と一緒にとても楽しそうだったのね。甘い匂いもして、お菓子でも食べてたのね?」

「…ッ!!? お、おう」

「……………」

シルフィよ、なんてことを口走ってるんだ!? めっちゃ気まずい。それとタバサから冷たい視線を感じるのは気の

「帰ったら……話し」

せいじや無いよねー。わかったた。どうにか言い訳しなければ…

「えくと。タバサ、別にたいした事では…」

「O・H A・N A・S H I」

「イエス、マイ・ロード」

怖いよ、タバサ。ああ、また怒られるのか。……怒られるだけで済むか? 済むよな? 済んで欲しいなあ(悲)。俺は悲惨な未来を想像しながら学院に帰った。

買い物しよう

キキSide

「ふう〜」

俺は今、学院の裏庭(?)にある五右衛門風呂に浸かっている。先ほど任務から帰ってきたのだが、夜遅かった上にタバサの説教で、学院の風呂が終わってしまったので、ちとせが作ったというこの風呂に入ることにしたと言う訳だ。

「はあく、いい湯だ。癒されるぜ〜」

しかし、タバサもあんなに怒ることないと思うんだけどなあ。別にいいじゃん。金も自分で稼いだ(笑)もんだし、なにより暇だったんだからしょうがないし。……やっぱりお子様なタバサにはわからない話しか。つてか俺も初めてだったけど…。

「ん?」

しばらくボケ〜つとしていたら背後に人の気配。ここまで近づかれて気づかないなんて…何者!?! なーんてアホなことを思いながら後ろを向いたら、

「…ツ! なっ?」

「私も入る」

タバサがいた。もちろん素っ裸。さすがに不意打ち気味に見たもんだから思いつきし動揺してしまった。タバサは俺が動揺している内に風呂ん中に入ってきた。タバサと混浴…俺、犯罪者じゃないよ。つて違う違う。落ち着け俺。

「…狭いし、俺はもう出るぞ」

俺はそう言つて、湯船から出ようとしたら

「一緒に」

タバサがそう言つて、俺の腕を掴んできた。

「あく? 別にこんな狭い場所に二人で入る必要ないと思うんだが?」

「入る」

俺としては嬉しい限りなんだが、実際結構な時間浸かってたからホ

ントに出たいとも思ってる訳で。いや、言い訳はよくない。単純に恥ずかしいだけだ。でもタバサは腕を離してくれない訳で……。俺は再度風呂に浸かった。狭いので互いに身体が当たり、その度に心臓が痛くなる。

……あれ？　なんで俺こんなに緊張してるんだ!?　別にそこまで初心うぶでもないし、というよりどっちかってーと平気なほうだしー。：あれえ？　俺はチラリとタバサを見る。

「……／／／」

ほんのりと顔を赤くして引っ付いてくる。か、可愛い。とりあえず、理性を総動員して男の本能を全力で抑える。下半身は全力だが我慢する。ダメだよ俺。さすがに襲うのは色々まずい。そんなこんなで夜は更けていった。

タバサSide

朝、私はいつものように起きる。今日は虚無の曜日なので授業は休みだ。なので今日は好きだけ本を読んでいられる。私はベットから降りて服を着替える。そんなおりチラリと部屋の端で布団に包まりまだ寝ているキキを見る。

その瞬間、昨晚の事を思い出して顔を少し赤くしてしまった。なんであんな事したんだろう。自分の行動が理解できない。確かにキキが任務中に遊んでいたことには少し怒りを感じるが、そんなに気にするようなことでないはず。なのに、なぜかモヤモヤする。

「なぜ？」

知らず知らずの内に声に出してしまった。それでもわからないものはわからない。考えても仕方ない、とりあえず本を。着替えたら数冊の本をベットにレビテーションで運ぶ。そして、私もベットに腰掛、本を読み始めた。

しばらく本を読んでいたらドンドンドンッ！　とドアを叩く音が聞こえてきたが、無視した。せっかくの休みの日を邪魔されたくはない。しかし、ドアを叩く音は段々と激しくなってきた。はあ、仕方な

い。私は杖をとって小さく呟き、杖を振り『サイレント』を掛ける。するとドアを叩く音が聞こえなくなつたので私は読書に戻る。が、すぐにドアが勢い良く開き誰かが入ってきた。まあ見なくてもこんな入り方するのはキュルケしかない。キュルケは私の横に来ると身振り手振りで喚いたがサイレントが掛かっていることに気づいたのか私から本を奪い、肩をつかんでキュルケに振り向かされた。しようがない。私はサイレントを解くと

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

「虚無の曜日」

キュルケがいきなり訳の分からないことを言ったのですぐさま却下して、本を取り返そうとしたがキュルケは本を高く掲げて取れなくしてから

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも、今はね、そんなこと言ってもらえないの。恋なのよ！恋ー！」

またか、しかしそれでどうしろと？キュルケは分かつたでしよみたいな感じで私を見てくるが、分からないので首を横に振る。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね！その人が……」

これは長くなるのだろうか？キュルケの声がうるさかつたのか部屋の端で本を読んでいたキキがキュルケをジト目でいた。……彼は昨晚の事どう思っているのだろうか？別に気にする事でもないのについてそんなことを考えてしまう。

「あなたの竜じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

あ、途中聞いていなかった。キキを気にして聞いてなかったなんて言ったらキュルケのことだ面倒事になりかねない。とりあえず頷いておこう。

「ありがとう！じゃ、追いかけてくれるのね！」

私はさらに頷いた。これ以上何を言っても聞かなそうだし。私は窓を開け、口笛を吹く。しばらくしてシルフィードが来たのを確認して、窓から飛び降りる。キュルケも私に続き窓から飛ぶ、さらに最後

に珍しいことにキキも来た。

「あら？ 貴方も来るの？」

「ああ。俺も町に用あるしな」

と、キキは言って座る。

「町って城下町のこと？」

「おう。キュルケの話を聞いてたかぎり、リオンとルイズは買い物しに行ったってところだろ」

「なるほど。貴方、意外と頭回るのね」

「お褒めいただき光栄です」

キキはキュルケのからかいにテキトーな感じで答えて、目を閉じた。

「ふーん、つまないわねえ。まあいいわ。タバサ、向かうは城下町よ」

私は領き、シルフィードに指示を出した。しばらく飛んで、目標の二人を見つけたのちそのまま追跡して城下町に入る。

「じゃあ、俺は用事すませてくるから」

とキキは町に入るなり一人で行ってしまった。

「さあ二人を追うわよ」

キュルケは目的の二人を追うことに頭がいつぱいの様子だ。やれやれ。私はそのままキュルケに連れられルイズ達を尾行することになった。

ジンSide

「うーん、これもいいですがこっちも捨てがたいですねえ」

……………どうも、お久しぶりです。ジンです。やっと出番が回ってきたのに、なんでこいつの服を買いに来なきやいけないんだ。俺の今回の目的は、リオンにデルFRINGERを買わせることなのに！

「あ、これなんかいい感じですよ。どうですかジンさん、似合いますか？」

「おー、似合う似合う」

「ですよねー。ああ、美少女である私に似合わない服なんてありませんよね！」

「はあく。こんな性格じゃなきや、ホントに可愛いんだが。……残念だ。」

「ねえー、チトセ。私にこの服ってちよつとアレじゃない？」

「そんなことありませんって。ルイズさんは確かに少々小柄ですが、素がいいんですから少し大胆するだけでとーとーっても魅力的になりますよ」

「そ、そうかしら？　じゃあ、これも買っちゃおうかしら」

……さて、どうやってこの状況から武器屋に行かせるか。とりあえず、状況の説明。先回りして町に着いた方がいいが、無理矢理ついて来たとせが勝手に服屋に入り、物色。俺は仕方なくちとせを追って店に入っていたら、ルイズ達が入ってきた。こんな感じ。

「ふう、まったく。何故女と言うのはこんなに買い物に時間が掛かるんだ？」

「まあ、そこは男である俺たちには理解できなだろ」

服を買い終えたリオンが横で呟いたので答える。

「そういうもんか。ところで、さっきから気になっていたんだが外にいる二人は何なんだ？」

と、リオンはドアの方を見る。リオン曰く、町に入る前から誰かに見られてる感じがしたらしい。それで町に入ったら、二人組みの気配が背後から明確にあるとのこと。ってか

「それって多分、キュルケとタバサだと思うぞ」

「？　何故、その二人が」

「ほらお前、キュルケに気に入られていただろ？　だから追ってきたんだろうよ。タバサは……多分キュルケに連れられてだと思っ」

正確にはシルフィードを使わせてもらったんだと思うが。そういえばタバサの使い魔はキキとか言う男のはずなのにいつの間にかシルフィードいたな。なんでだ？

「ふんっ。くだらん」

「まあ、いつてやるな。キュルケのはいつものことだから。しばらく

すれば落ち着くだろ。…たぶん」

そんなふうにはグダグタと女子の買い物が終わるまでリオンと話していたらチリンチリンと扉に付いているベルが鳴り、そちらを向くと「いらっしやいませ」

カランツコロントと下駄を鳴らし着物を着て大量の荷物を持った例のタバサの使い魔であるキキが入ってきた。…ツツコミどころが多過ぎるぞ、おい！

伝説の剣を手に入れた？

ジンSide

はい、どうも。前回に引き続きジンです。えつ、キャラが違
うって？ もう、そんなの知ったこっちゃねーです。……………さ
て、着物を着たツツコミどころ満載なキキがやってきました。

「あれ？ キキさん。お買い物ですか？」

「ん？ いんや。前に頼んどいた服を取りに着ただけ」

チトセがキキに気づき声を掛けたらキキはそう返した。服ってお
前…、その持つてる荷物も服だろ？ どんだけの量頼んでんだよ。
と、俺が呆れながら見ていたら

「お前らも大変だな〜」

と、俺たちの方に歩いてきた。

「ああ、長くてかなわん」

「まあ、しょうがないけどな」

リオンと俺はキキに返事をした。

「あははは。しかし、女の買い物ってやつはどこの世界も長いもんな
んだな。俺なんてこれ等を回収するのに一時間もかかってないぞ」

「そうなのか。ところで、その大量の荷物はなんなんだ？」

俺が戸惑い気味に聞くと

「あー、前に買い物に来たときに頼んでおいた服とか履物だな。この
店で回収する服は最後だけど」

キキは説明してくれた後、店主に話かけて店の奥に入って行ってし
まった。

「……………やつの服。アクアヴェイルの物に似ているな」

「ん？ あー、そうなんだ」

リオンがキキの服を見て呟いた。そういえば、あの町って和風だっ
たな。懐かしいなあ、デステイニーとデステイニー2。そんなことよ
り、どうやってリオンを武器屋に連れて行くか考えなければ。うーん

「じゃあ、これとこれ。それにあつちのやつもお願いするわ。チトセ、
他にはもうないわよね？」

「はい、大丈夫です。ルイズさんのおかげで今日はいいい買い物が出来ました。ありがとうございます」

「別にお礼を言われることじゃないわよ。私の方こそ服について色々教えてもらっただけ」

「別にたいした事じゃありませんよ」

俺が悩んでる間にちとせとルイズが買い物を終えたらしく談笑しながら大量の荷物を持ってきた。お前らもどんだけ買ってんだよ。

「さて、この後どうしましょうか？」

「うん。お昼も近いし、ご飯食べに行こうと思うんだけど、チトセもどう？」

「いいんですか？」

「ええ、もちろん」

やっべ、二人がもうこの後の計画立て始めてる。早めに何とかしないと。しかしどうすれば!?

「んじゃあ、俺たちも同伴していいか？」

と、俺が悩んでいたら後ろからキキが声をかけて来た。何を勝手に話を進めてるんだと思いつつ振り向いたら、

「どうした。そんなバカを見るような顔をして？」

Fateのアサシンの格好をしたキキがいた。いや、お前……なんでアサシン？ 山門でも守るのか？

「…ある友人の服をマネたんだけど似合わないか？」

「いや、変ではないけど……ねえ」

俺が言いごもっている

「まあ、気にするな。で、さっきの話いいか？」

キキがそう言ってお昼のことをルイズに聞いた。

「別にかまわないけど、『たち』って？ あなた一人じゃない。他の人たちは？」

「ああ、ちよつと待ってろ」

キキはそう言っ店の外に出て、

「こいつらもだ」

再度入ってきたら、後ろにタバサとキュルケを連れて来た。

「なあっ!? キュルケ! あんたなんでここにいんのよ!」

「べつにルイズには関係ないじゃない。私はただダーリンに会いに来ただけだしね」

キュルケはそう言いながらリオンに近づく。

「ちよつと! リオンに近づくんじやないわよ!」

「うるさいわよルイズ。ねえダーリン? ちゃんとしたもの買ってもらった? ルイズのことだから自分の物ばかり買い物してたんじやない?」

「うゝ…そ、そんな訳無いじゃない。」

キュルケの問いにルイズは目を逸らしながら答えた。おいおい。

「はあ、まったく。くだらない」

リオンは呆れた表情で大きなため息をついた。俺も同じ気持ちだよ。

キキSide

「なあ、この後武器屋行こうと思うんだが、リオンもどうだ?」

服屋でのゴタゴタの後、なんやかんだと言いながらも皆で昼食を取りに近くの店に入った。それからそれぞれ昼食を取り、今はデザートを食べている。なお、ウケ狙いで作ってみたアノ服は実際に着て見たら動きにくかったから直ぐに着替えなおした。そんな中、とりあえずリオンを駄目もとで誘ってみた。

「そうだな。剣の手入れ道具が欲しいと思っていたし。付き合わせてもらおう」

「わかった」

意外と簡単に話しに乗ってくれた。さて、他の皆はどうするのか?

「あ、俺もちよつと見にいきたいから行く」

「私も面白そうなので付いて行っていいですか?」

ジンとちとせは付いて来るらしい。

「ダーリンが行くなら私も行く」

「行く」

「ちよつと、勝手に話を進めないでよ！ 私も行くからね」

はい、キュルケ、タバサ、ルイズも同行と。最終的に皆行くんじゃないか？ ……これ、俺が言わなくても武器屋に行ったんじゃないか？ としてデザートも食べ終え、武器屋に移動。

「えつと、確か……ここらへん……あ、在った。」

剣の形をした看板が下がっているボロい店、いやー、ろくなもんなさそうだなあ。店の中に入って周りを見るとボロい鎧が幾つか有り、槍や剣もあるにはあるんだが少々錆びてたり、雑にまとめてあったりと、もう武器屋として駄目過ぎるだろうって感じた。

そんな店の奥、パイプをくわえた五十ほどの親父が俺たちを胡散臭げに見ていたが貴族だとわかったのかパイプを口から放し、ドスの利いた声で

「旦那。貴族の旦那。うちはまつとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽちもありませんや」

と言ってきた。俺としてはこの店のどこがまつとうなのかまったくわからない。

「客よ」

ルイズが腕を組んで店主に言う

「こりやおつたまげた。貴族様が剣を！ おつたまげた！」

「どうして？」

と店主の戯言をルイズが聞くが、俺はそんなこと無視して店内の武器を物色する。ホント、ろくなもんがない。とりあえず、デルフを見つけようと樽に入っている剣を調べる。反対側ではジンもデルフを探しているのか樽を漁っていた。

ぶっちゃけ俺の住んでた世界に転生者がいたおかげで見分けがついていたが、やつぱりジンもチート転生者だ。アイツとは交友関係を深めておくべきだろうか？ ……まあいいや、そのうち必要になつたら仲良くなるだろう。

さて、他の奴らは…、キュルケとタバサは暇そうにしていた。まあそうだろうな。

ルイズとリオンは、一体どんなやり取りがあつたのか分からんが例

の駄剣を紹介された。ただし、リオンが店主に駄剣の欠点やらなんやらを言い、店主も青い顔をしながら小さくなっていく。そして、「だーっはははははは、おい兄ちゃん！オメエーなかないいい目してんじゃねえか」

そんな声が俺の漁っていた隣の樽から聞こえた。とりあえず、ソレを樽から出す。

「おお、あんちゃんサンキューな。…お、あんちゃんもなかなかの腕だな！」

と、ソイツはけたたましく話し始めた。流石デルフリンガー、俺の事すぐに理解しやがった。自分の事は忘れてるくせに。

「やいデル公ー。オメエは黙っとけ！ すいませんお客様」

「うっせー！ 俺は今すっげー機嫌良いんだ！ 久々にこんな腕の立つ奴らに出会えたんだからよ。少しは話しさせろや」

デルフが喋るが持つてる方としてはガチガチと鏢(?)が動いてとてもウザツたい。

「…インテリジエンスソード」

「え、これがあの？」

タバサがそう呟くとキュルケは物珍しそうにデルフを見る。

「そうでき。意思を持つ魔剣、インテリジエンスソードでき。いったい、どこの魔術師が始めたんでしようかね、剣を喋らすなんて……。とにかく、そいつはやたらと口は悪いわ、客に喧嘩売るわで閉口してまして…」

「はっ！ あんな節穴野郎共なんか客でもなんでもねえよ。そんなことより、兄ちゃん俺を買え。あんちゃんでもいいけどよ。な、いいだろ？」

おお、自分を売り込み始めた。で、リオンは…

「断る。お前みたいならさっさと奴は結構だ」

あ、やっぱりね。しかし、俺も要らないんだよなあ。でも、持ってたほうが役にたつことも有りそうなんだがここはとりあえず

「俺もどっちかって言う必要はないんだよなあ」

と言っておこう。

「そんなこと言うなよ。俺、役に立つぜ。な、な、いいだろ？ 頼むよー」

デルフがぎゃあぎゃああと騒ぐが俺は取り合わない。どうせ、なんやかんやで手に入るんだろ？ だったら俺が一々何かする必要もないよな。

買い物終わり

キキSide

「じゃあ、その剣私がいいます!」

背後から声を掛けられたので振り向くと目をキラキラさせたチトセがいた。お前が買うんかい!?

「いいですよね! 誰も要らないって言うんなら、私買います。いくらですか?」

「あー、百で結構。こつちとしては厄介払い出来て清々できますでさ」

あれ? なんか俺の思ってたのと全然違う方向にいつてる。…まあいいや。どうにでもなるだろう。

「やったー! じゃあこれからよろしくお願いしますね。ジンさんお金払ってください。そうだ、ただの剣さんって言うのは味気ないですから名前をつけましょう。えーっと、鏝助Xってのはどうですか?」

我ながらすばらしい名前だと思うのですか?」
ちとせは俺からデルフを奪い取り、なにやら一人でまた暴走していた。

「また、俺が出すのか」

「ちよつとまで、嬢ちゃんが俺をかうのか!? つつーか俺の名前はデルフリンガーだ! 変な名前をつけんじゃねえ!」

ジンが諦めたように呟き、デルフは戸惑いながら叫ぶ。もう、面倒だな。はあ、騒ぎが収まるまでなんか良い剣無いか見てよつと。リオンは必要な物を買ったのかすぐに店から出て行き、ルイズとキュルケも後を追って出て行った。

「お前は外行かないのか?」

「あなたが何を探してるのか気になる」

俺が聞くとタバサはそう言っつてジつと見てくる。別になんとなくで剣を見るだけなんだけどな。つってもやっぱり大したものはないな。こんだけイレギュラー満載のゼロ魔世界ならツツコミどころが多い武器ぐらいいあると思っただが。と樽をあさりながら移動していたら壁に立掛けてあったボロボロの盾に肩が当たってしまい倒

れてしまった。俺は倒してしまった盾を戻そうと近寄ったら、
「ん？ なんだ？」

盾に隠れるかたちで、後ろの方に何やら妙な人形があった。俺は無性に気になってソレを引きずり出して、

「…ツッコミどころ満載の武器発見」

それは、カラクリ人形と呼ばれるものだった。女性の型をしており、服はボロボロだが俺と同じで和服で手足がそれぞれ4本ずつある。刀は流石に持つてはいなかったが、これは…

ピトウ・カンザシ
「微刀・釵びよりごうこと日和号」

まさかの変態刀の発見。…めっちゃ欲しい！ 昔、傀儡の術を使うため自作で人形を組み立てようとした時に参考にしようとしたけどうる覚えすぎて製作に失敗したことがある。しかし、今、目の前には本物がある。これは手に入れなくては！

「それは、止めたほうがいい。嫌な感じがする」

「へあ？ あー、いや〜」

俺が日和号に気を取られまくっていたら横からタバサが忠告してきた。心配してくれるのはとても嬉しいが、これの毒ぐらいなら普通に耐えられるし、なによりやっぱりとにかくこいつが欲しい。

「はあ、チトセのやつは。ん？ 何か面白いものでも見つけえだあつ!? ちよ、ま、なんでソレがあんだよ！」

デルフの代金を支払ったらしいジンが近づいてきて日和号を見たら面白いぐらいに驚いた。

「まあ、驚くよな」

「驚くよなつて、ソレがなんなのか分つてのかわ!? 相当ヤバイもんだぞー！」

ジンがそう言って叫んでくる。そりゃあ理解してますとも。

「知ってるつて。微刀・釵。通称日和号。うん、素晴らしいカラクリ人形」

「なんでお前がコレ知ってんだよ!？」

「俺、前世とか覚えてる人だから」

ジンの質問にそう答えてやったら、

「やつぱりかー！　なんか薄々そうじやないかって気はしてたんだよ
チクショー！」

ジンは頭を掻き毟りながら叫んだ。忙しい奴だなあ。どうでもいい雑談もそこそこに俺は日和号を店主のオヤジに見せながら、

「コレを売ってくれ。もちろんこいつが持ってた4本の剣も一緒に」
「!?　へい、まいど！」

なんか店主が超笑顔なんだが。まあ、なんとなく理由は分かる。

「なあ、おっさん。もしかしなくてもコレも厄介払い物とかか？」

「な、なんのことでしょうか？」

「……まあ、別にいいけど。で、いくらだ？」

動揺している店主に俺は値段を聞くと、

「へい、それも100でけっこうです」

「……ふうん、こんなボロボロでいわくあり気なものを100で買わせようとするのか」

「そ、それは、あれですよダンナ。4本の剣も含まれておりまして、むしろその気味の悪い人形はタダ同然で剣4本分の値段と考えるべきです」

むう、そう言われると反論仕様も無いな。……あ、そうだ。

「なあ、オヤジ。コレを手に入れたときに一緒に妙な剣を複数手に入れなかったか？」

「ツ!?　あ、あれはダメです！　あんなもんまた売ったとなりやあ、店をたたむ事になっちゃう！」

おお、予想以上の反応。まあ、何があつたかは予想つくけど。アレを持って平気なのって、この世界の人間いないだろ。亜人の方達なら大丈夫……でもないか。さて、いい事聞いたぞ。

「なあ、オヤジ。その剣、俺が引き取ってやってもいいぞ。俺なら処分できるぞ」

「……何が目的で？」

「別にそんな難しいことじゃない。全部タダで譲ってくれればいい。もちろんこの人形とセットで」

「……わかりましたです。タダで譲りましょう。今、奥から持ってくる」

るんでお待ちを」

オヤジはそう言つて店の奥へと引つ込んでいった。よし、武器たくさんゲットだ。使わないと思うけど、持つてて損は無い…はず？

「…大丈夫？」

俺がニコニコしていると、タバサがそう尋ねてきた。おお、心配してくれるのか。とても嬉しいぜ。

「ああ。大丈夫だ、問題ない」

ヤバイな。テンション上がり過ぎて自分のキャラが変だ。少し落ち着け俺。

その後、オヤジが店の奥から木箱に入れた日和号の刀4本と5つの刀持ってきた。持ってきた刀は「絶刀・鉤」ゼットウ・カンナ「斬刀・鈍」ザントウ・ナマクラ「千刀・？」セントウ・ツルギ

「悪刀・鏢」ドクトウ・メツキ「毒刀・鍔」だ。

？の残り999本は届け先を覚えてくれれば後日届けると言つてくれたが、それは断り店の裏で黄金蔵に回収した衣服類と一緒に仕舞った。で、皆それぞれ買い物も終わり、リオン、ルイズ、チトセ、ジンは乗つてきた馬で。俺、タバサ、キュルケはシルフィで学院まで帰った。

帰つた後、タバサは自室でまた本を読み始め、俺は日和号の改造と手に入れた変態刀の毒の封印作業をする。さすがにそのまんま使いたくはないしな。

そして時間が流れて、夕食後。春先の夜風が少々寒い学院の中庭。そこで今、ルイズとキュルケの勝負が始まろうとしていた。原因は不明、もちろん理由を知る気はない。

「しかし、お前も大変だな。何故吊るされるはめになったのか全く理解ができない」

「……………もういいよ。色々諦めたから」

どういう経緯でジンがロープで吊るされたのかなんでどうでもいいが、可哀想なものは可哀想である。

「さて、じゃあ確認だけど、彼を吊るしているロープを切ったほうが勝ちってことでいいわね？」

「ええ。いいわよ」

キュルケとルイズが杖を抜き、頷きあう。……俺、部屋に戻りたいなく。なんて思いながらもタバサと共に本を読む。明かりは部屋からランプを持ってきてるから大丈夫。

ドカンッ!! と学院の壁が爆発。あつはは! とキュルケの笑い声。俺、チートだぞくと悲しみのこもった声。キャー! 何あれ!?! ゴーレム! と悲鳴。パラリと俺が本をめくる音。平和だ。そして周りが静かになり、

「ん、終わったか?」

タバサがジト目で俺を睨んでいたことに気づき、本を閉じて立ち上がる。

「……はあ」

ため息を吐かれた。しようがないだろ、巻き込まれなくなかったんだから。

「戻る」

「おー」

ランプを回収し、タバサの後を追って部屋に帰った。

フーケ捜索隊

ルイズSide

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

「いいのです。わたくしは、貴族の名をなくした者ですから」

キュルケのやつが手綱を握っている彼女にそう訊ねた。またつく、ホントお喋り好きなんだから。

私たちは今、盗賊『土くれのフーケ』から『破壊の杖』及び『竜の心臓』といわれる秘宝を取り返しに馬車でフーケのアジトと思われる森の小屋に向かっている。

「だって、貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

メンバーは私にリオン、キュルケ、タバサにキキ、ジンとチトセ、最後に案内にミス・ロングビルだ。

何故、私たちがこんなことをする事になったかと言うと、昨夜、学院に土くれのフーケが侵入したことが始まりである。

「差しつかえなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」

「うふふふ」

昨夜、フーケが現れ、学院の宝物庫から学院長個人の宝が二つ盗まれたの。そして今朝方、先生方と昨晚現場にいた私たちが学院長室に呼ばれて、色々な話を聞かれた。そして、フーケをどうするかの話になったとき、先生方は自分の身の心配ばかりで誰もフーケを追おうとしなかったのだ。

「いいじゃないの。笑ってないで教えてくださいな」

その時、私はトリステインの貴族としてとても悔しかった。皆、私なんかと違って魔法が使えるのに、たかが盗賊に恐れをなしているのだ。だから私はそんな中、杖を上げた。周りの皆は驚いて止めようとしたけど、『誰も行こうとしないじゃないですか』と言ったら押し黙ってしまった。

もちろん、私も考えがなかったわけじゃない。これで秘宝を取り返し、フーケを捕まえれば、もうこの先誰も私の事を『ゼロ』と呼ばないと思っただからだ。もう私は落ちこぼれなんかじゃないと皆に認めさせてやると思っただのだ。

「キュルケさん。言いたくないこと無理に聞くのはダメですよ」

「別にいいじゃないチトセ」

そしたら、キュルケとタバサ、ジンも杖を上げたのだ。私は驚きキュルケたちを見ると私だけじゃ心配だからとか私が目立つのがイヤだとか言ってきた。もう、心配なんて余計なお世話よ。これがさっきまで学院で話していたこと。そして私たちは、ミス・ロングビルが今朝早く調査して探したフーケのアジトに皆で馬車で向かっている途中なのだ。つてか…

「キュルケ！ 貴族としてみつももないわよ。人の過去を無理矢理聞こうとするなんて」

「なによ、ルイズ。ずっと黙ったままだったクセにいきなり」

「ふん。いいキュルケ、私たちは今からフーケを捕まえに行くのよ。わかってるの？ それなのにあんたはベラベラと」

「あーもう、はいはい。まったくルイズったらそんなくだらないこと考えてたの？ 大丈夫よ、たかが盗賊ぐらい。それに、最悪盗まれたお宝さえ戻ってくればいいわけだしね」

キュルケはため息を吐きながら肩をすくめる。これだからプライドの無いゲルマニアの人間は！

「あんたねえ！ これは大事な任務なのよ。真面目に……」

「ルイズ。あたしとしては、あんたが一番心配なんだけど」

「はあ？ なんで私が？」

人の話を途中で遮っておいてキュルケは訳のわからないことを言う。

「だってルイズ。あなた魔法使えないじゃない」

「うっ」

「それに、タバサやダーリンみたいに騎士じゃない」

「そ、それはそのタバサの使い魔やチトセも同じじゃない！」

「まあ、チトセはともかく彼は大丈夫よ。よく朝ダーリンと訓練して
るの見るけどなかなかやるわよ」

「む……。でもやっぱりチトセは魔法も使えないし、チトセのほうが……」
「あ、私は危なくなったら直ぐ逃げるので気にしないでください」
「……………」

キュルケがことごとく言い返してくる。途中チトセがサラツと逃
亡宣言したけど……まあ、チトセだし。っじゃなくて、

「あーそれならっ……」

「あの、皆さん。ここからは徒歩でお願いします」

私がさらに文句を言おうとしたら、ミス・ロングビルが申し訳なき
そうに言ってきた。馬車に乗っていたみんなはそれに従い、馬車を降
りていく。私はなんといかモヤモヤした感じで皆を見ていたら
「なにをポケットとしている。早く降りていくぞ」

とりオンに言われた。別に呆けてたわけじゃないのに。っていう
かあんた私たちの話聞いてたじゃないの！

「この先にある小屋が例の場所です。なにがあるか分かりませんので
気をつけてください」

ロングビルはそう言って先頭を歩き、私たちを小屋まで案内し始め
た。ふふふ、覚悟してなさいフーケ。絶対捕まえてやるんだから。そ
して私は『無能』^{セロ}じゃないって皆に認めさせてやる。

りオンSide

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

森の中の開けた所にある小屋を彼女は指を差して言った。その小
屋は廃屋同然で、人の気配など全く無いように見える。本当に盗賊が
居るのか？

「で、どうする？ 突っ込むか？」

「危険」

キキがバカなことを言うがタバサがそれを却下する。

「でも、中の様子がわからないと、どうしようもないぞ？」

確かにその通りだ。情報が無いまま行動するなんてただの無謀にすぎない。だが、今のメンバーでどうにかできるヤツがないのも現状だ。

「ふ・ふ・ふ。皆さんお困りですね！」

そんな時、いきなりチトセがアホ丸出しな顔でそんなことを言い出した。

「……何する気だ？」

「ジンさん。そんなゴミを見るような目をしないでください。私にいい考えがあるんです」

チトセは言うのと、背負っていた剣。例の喋るうるさい剣を降ろし、鞘から抜く。

「おーい、譲ちゃん。朝から俺を鞘に仕舞いつぱなしなんてひでえじゃねえか。つてかよ、俺は出来ればそっちの兄ちゃんのどっちなに使って欲しいんだけどよお」

「デルフさん。今から貴方に働いてもらいます。これはとても重要なことなので気を引き締めてください」

「俺の話聞けよ！ ……仕事？ ……なんだよ仕事って」

「いきますー！」

チトセは相手の話も聞かず、デルフリンガーを大きく振りかぶりそして、

「てえええええやあああああ!!!」

剣を小屋に向かってブン投げた。デルフリンガーは悲鳴を上げながら小屋の窓を突き破り中に入ってしまった。そして

「デルフさーん！ ……中はどうですかー！」

チトセがデルフリンガーの様子を聞いた。バカのやることは訳がわからん。

「……ひでえ。こりやあんまりだ。俺は天下のデルフリンガー様だぞ。ううっ」

小屋の中からデルフリンガーのすすり泣く声が聞こえてきた。

「デルフさーん。泣いてないで早く中の様子おしえてくださいよー！」

「ああああ！ だいじょーぶだよ！ 罨もなにもねーよ！ ケツ」

「大丈夫みたいですよ。さあ、行きましよう皆さん」

チトセはデルフリンガーからの報告を聞くとそそくさと小屋に近づいていった。なんとも無茶苦茶な行為だ。ハッキリ言って頭が痛い。

「…俺も行ってくる」

「私も行く」

「俺も行くぞ」

キキとタバサ、そしてジンはそう言い、小屋に向かい

「ならば、僕たちは外で様子を見ておこう」

「ダーリンが残るならあたしも」

「ちよ、またあんたは！」

「では、わたくしは周りを見てきますね」

僕、キュルケにルイズは外で様子を伺い、ロングビルは森の中に入っていた。

「……………」

「ん？ どうしたのダーリン？」

「何でもない」

僕は引っ付いてきたキュルケを追い払い周囲の気配を探る。

「おーい。とりあえず、盗まれたもん1だけだが見つけたぞ」

しばらくして小屋に入っていたキキ達が黒い長方形の箱を持って出てきた。が

「…っ!? お前ら走れ!!」

彼らが出て来たと同時に小屋の背後から巨大なゴーレムが姿を現した。

VSフーケ（のゴーレム）

キキSide

「おお、近くで見ると意外にデカイな」

俺は小屋の背後から現れたゴーレムを見上げながら呟く。

「……はやくっ」

「ん、そんなに急ぐなって」

のんびりとゴーレムを見上げていた俺の服をタバサが引つ張って逃げるのを急かす。ちとせはゴーレムを見た瞬間に例の宝を持って即座にとんずらし、ジンもゴーレムの攻撃範囲から脱出していた。

「あ、ヤベッ」

「!?」

ゴーレムが拳を逃げる俺たちに向かって振り下ろしてきたので

「よっ」と

俺はタバサを脇に抱えて一気にゴーレムの攻撃範囲から離れる。

それと同時にゴーレムの拳が地面にめり込む。

「はあ、危ない危ない。タバサ大丈夫か？」

「…おろして」

「おお」

抱いていたタバサを地面に降ろす。なんかふてくされてるように見えるのは気のせい…じゃないな。なんか不機嫌オーラ出してるし。

「ちよつと！ 何してんのよ！ 早く逃げるわよ」

のほほんとしてたらキュルケが叫んできた。まあ、確かにゴーレムが暴れてるののにのんびりしてるのはマズイよな。俺とタバサは言われたとおり森に向かって逃げていると、前を走っていたリオンが何かに気づきゴーレムの方を振り返り、

「…っ!? おいルイズ！ 何をやってる。早く逃げろ！」

驚いた表情になり立ち止まり叫んだ。俺も背後を向くとそこには魔法でゴーレムを攻撃していたルイズがいた。なにやってんだが。

「うるさい！ あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしをゼロのルイズとは呼ばないでしょー！」

ルイズは状況判断が出来ていないようだ。あのとての巨大な相手に一人で挑むのはただの無謀でしかない。基本は一度撤退して、作戦を練り複数人で潰すのがセオリーである。まあ、そんなこと箱入りの貴族娘が知ってるわけないよね。

「何バカなことを言っている！ お前一人でどうこう出来る相手じゃない！」

「やってみなくちゃ、わかんないじゃない！」

「くっ、このわからず屋が」

そうこうしてる間もルイズが何度も魔法を唱えてはゴーレムの表面に小さな爆発を起こすが、まったくもって効果は見込めず。それどころか相手は気にするでもなく足を振り上げ、ルイズに向かって降ろし始めた。

「えっ？」

「はあッ！」

ルイズが迫ってくるゴーレムの足を呆然と見ている所に、リオンが走って近づき、ほとんどタツクルに近い形でルイズを抱きかかえ、ゴーレムの踏みつけをかわす。

「バカかお前は！ 死んだらどうするつもりだ！」

「……だって、うっぐ……悔しいんだもの。ひっく……、ここで逃げたらゼロのルイズだから……ってまたバカにされる。うっく……わたしにだって、小さいけどプライドがあるの！ …だから、だから……」

「……まったく、くだらない」

「なっ!? くだ……らない、ですって……」

ルイズの弱音にリオンは一言切って捨てる。それを聞いたルイズは泣きながらもリオンを睨みつける。

「ああ、くだらないな。周りの、お前の上っ面しか見てないヤツらの事を気にするなどバカバカしい。お前はそんなバカ共の気を引きたいがために此処にいるのか？」

「べ、別に……気を引きたいとか……そんなんじや……」

「お前は、お前だ。それに、周りのヤツらがお前の事をゼロと言おうと僕はそうは思わん」

「ふえっ?」

「アレに単身挑んだのはただの無謀だが、立ち向かう勇氣があるのは認める」

リオンはルイズにそう言って立ち上がり、ゴーレムに向かって剣と短剣を抜き構える。

「確かメイジの実力は使い魔で測れる様なことを言っていたな。なら、ルイズ。お前はゼロ無能なんかじゃない。なにせこの僕が使い魔であるからな」

リオンはルイズにそう言うと、ゴーレムに向かって走り出した。

「カツコイイなあ。流石リオン・マグナス」

俺もあんなふうになれると信じてた頃があったな……3歳までは。俺は苦い思いでを思い出しながらリオンとゴーレムの戦闘をシルフィの上から見ていた。ちなみに、シルフィに現在乗っているのは俺、タバサはもちろんキュルケとジンもいる。チトセとロングビルさんは絶賛行方不明だ。

「ちよつと、ダーリン無茶よ!」

「無謀」

キュルケとタバサにはリオンの行動はただの無茶にしか見えないようだ。まあ二人じゃなくても無茶にしか見えないだろうけど。……よし、俺も加勢するか。本来ならチトセが持ち去ってしまった物でゴーレムを倒したはずなんだが、…どっかい行っちゃったし、しようがないか。

「タバサ。ルイズの回収を頼んだ」

「なにを……ッ!?!」

タバサが質問し終える前に俺はシルフィからゴーレムに向かって飛び降りる。俺はチャクラを練り、リオンたちを攻撃しようと腕を振り上げていたゴーレムの目の前に来た瞬間に

「八卦空掌!」
はっけくうしょう

ゴーレムの頭部へと掌底を叩き込み、同時にチャクラによる真空の衝撃波を放ち吹き飛ばす。そしてゴーレムが倒れてる隙にタバサがレビテーションでルイズを回収する。

「これで後ろを気にしながら戦わなくて済むだろ？」

「ふん、余計な事を。だが助かる」

俺はリオンの近くに行き、お互い話しかけながら体勢を整える。そうしてるうちにゴーレムは消し飛んだ頭部を再生させながら立ち上がる。

「再生か…。あれじゃあいくら攻撃してもキリがないな」

「ああいう手合いは、どこかにあるコアを破壊するか又は原形が無くなれば倒せたりするもんだけどな」

「なるほど。……おい、アレの足止めは出来るか」

「余裕つす」

「そうか。任せたぞ」

「おう」

リオンは言い終わると、呪文を詠唱し始めた。俺はこちらを向いたゴーレムに突撃する。もちろん囷役なので派手に攻撃を仕掛ける。つつても、リオンに近づかないように単純に殴打して後退させるだけなんだけどな。

「はあっ！」

ズガンツ!!と、ゴーレムの胸辺りに掌底を打ち込みよろめかせる。が直ぐに建て直し攻撃をり返してくる。

「よっ」

しかし、攻撃はゴーレムの見た目通り遅く、単調なので簡単に避けられる。そんな感じで当て逃げ作業をしばらく続けていると

「ソイツから離れるッ！」

リオンの声に俺は瞬身の術でゴーレムから離れる。俺が離れたのを確認したリオンはゴーレムを睨みつけ

「僕の目の前から消えろ！ ブラックホール！」

ゴオ、オオオオオオオツ!!!

リオンが叫んだ瞬間、ゴーレムが漆黒の渦に飲み込まれて消滅した。……おお、カツコイイな。

タバサSide

私のは目の前で起きたことに驚愕し目を見開いた。キキはこの前説明してもらったので強いことは知ってはいたが、まさかあんな巨大なゴーレムとですら戦えるなんて……。それともう一人。ルイズの使い魔であるリオンと言う名の彼だ。彼も相当腕の立つ人物であることは理解していたが、彼が使った魔法は一体なんなのだろうか。

「すごい……」

「すごいわダーリン！ やっぱりメイジだったのね」

ルイズとキュルケはあの光景……ゴーレムが黒い何かに吸い込まれていく光景を見て興奮しているが、あんな魔法今まで見てきた本には一切乗っていなかった。それに、アレは私たちの魔法とは何か違う気がするし、キキに教えてもらっている忍術とも違う。

「ねえタバサ、もう大丈夫みたいだし早く降りましょう」

キュルケが呆けていた私に声を掛けてきた。私はシルフィードに指示を出して降下させる。

「ダーリンすごいわ！ 一人であんなに大きいゴーレムを倒してしまっうなんて！」

彼一人ではなくキキも戦っていたのだけでも、あの状態のキュルケに言っても聞かないだろう。

「ちよつとキュルケ！ リオンに引っ付いてんじやないわよ！」

「なにルイズく。嫉妬なの？」

「ち、違うわよっ！ リオンは私の使い魔なのよ！ だから、そのっ……」

「アレなのよ！」

「はいはい。そうですね」

「な、なななによ、その態度は……」

ルイズとキュルケがいつものやり取りをしていると、ガサガサと森の茂みから音がし、杖を構えてそちらを向くと、

「終わりました？」

黒い箱を抱えたチトセが出てきた。もしかしてずっとそこにいたのだろうか？ さらに、茂みから出てきたチトセの後ろからミス・ロングビルが出てきた。

「あ、ロングビルさん。よかった、無事だったんですね」

ミス・ロングビルはチトセの言葉にニコリと笑いながら、彼女に近づき

「ふえ？ なんですか？」

「全員動くんじゃないよ！」

チトセの首を背後から絞めて、杖を彼女の顔に突きつけた。私が事を理解したときには完全にミス・ロングビルにこの場の主導権を握られてしまっていた。

「えっ！ ちょっと、ミス・ロングビル！ どういうことですか!？」

「ハッ、お気楽なガキ共だねえ。この状況を見て “どうということ” なんて聞くなんてさ、所詮は甘やかされて育った貴族様だね」

ルイズの言葉にミス・ロングビル：いや、土くれのフーケは嘲笑しながら言い返した。

「ロングビルってのは学院に忍び込むための偽りの名さ。私の本当の名はフーケ。土くれのフーケさー！」

「そんなっ！ わ、私たちが騙していたんですか!？」

「ああ、そうだよ。おっと、反撃しようなんて思わないことだね。この子がどうなってもいいなら話は別だけどね。さあ、持つてる杖と剣を地面に置いて離れな！」

私たちは仕方なく杖を、キキたちは剣を置き離れる。

「いい子だね。しかしまったく、学院の教師達ってのはホント無能ばかりだねえ。本来ならあんたらみたいながきじゃなく、アイツらを誘き出して破壊の杖の使い方を見るつもりだったんだけどね」

フーケは私たちが離れると一安心したのか、愚痴り始めた。

「まあ、いいさ。テキトーな物好きにこの『竜の心臓』と一緒に高値で売りさばるか」

そう言つてフーケは懐から拳大の宝石を取り出した。

「…ッ!? あれはっ」

リオンはその宝石を見た瞬間、驚愕の表情になった。

「さて、女子供の殺生は気が進まないんだけど私の事を見られた以上「いいいやあーっ！ 助けてー！ 殺さないでーっ!!」ちよっ、い

きなり叫ぶんじゃないよ！ 暴れるんじゃないってば！」

フーケが私たちに杖を向け魔法を放とうとしたとき、人質になつていたチトセがいきなり叫びだした。

「ジンさーん！ 助けてくださいーい！ 私まだ死にたくありません。早く何とかしてください。あなた私の主人なんですよ！」

「だから、うるさいって言ってんだろ！ 大人しくしないならお前からっ」

「ちよ、ま、なんで私からなんですか!? 私みたいな無害で可憐な美少女なんかより、そこにいる頭のおかしいジンさんからすべきです！」

「……いつその事、チトセごと」

ボソリと、ジンが殺気をみなぎらせなが呟いたが聞かなかつたことにしてあげよう。その後も暴れ叫ぶチトセとそれを抑えるフーケの問答が続き、そして…

「ムキュッ!?!」

妙な声を上げてフーケは意識を無くし倒れ、後ろにはキキがいつのまにか立っていた。

「えっと、助けていただいております。というかいつの間にか？」

「そんなのお前らが暴れてる時にきまつてるだろ。あんだけ隙があれば背後を取るぐらい簡単だつて」

チトセの質問にキキはそう答えながら、フーケを縄で縛っていく。その後、私たちは縛ったフーケと共にシルフードに乗って学院に帰った。

舞踏会

タバサSide

「ふむ。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな…。美人だったもので、何の疑いもせず秘書に採用してしまった」

学院に帰った後、学院長に事の次第を説明したら、そのように返答してきた。

「いったい、どこで採用されたんですか？」

「うむ、街の居酒屋じゃ。気立てが良くてのお。さらに美人じゃしなかなが良い尻しとってな。つつい手を伸ばしてしまったんじやが、それでも怒らず笑顔で接してくれたもんじやから秘書にならんかと」「バカですか？ このエロジジイ」

「……………カアーーーーー！」

ミスタ・コルベールの言葉にオスマン学院長は色々と誤魔化すように無駄な迫力で叫んだ。しかし、この学院長、昔はトリスティン最強の騎士と言われていたらしい。しかも学者としても優秀だったとか。

「…学院長」

「……………今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じやつたに違いない。くつろいでいたワシの前に何度も来て愛想よく酒を勧めたり、魔法学院学院長は男前で痺れます、などとホントのことじゃが媚を売ってきたりと。終いにやお触りしても笑顔のまま。この娘、惚れてる。っと思うじやろ普通。な？」

……………本当は名を騙った偽者なのではないかと思うぐらい、無茶苦茶な発言をした学院長に部屋にいる皆が呆れた目を向けた。

「……………さて、あの土くれのフーケを捕まえたお主たちには『シユヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう」

まるで、先ほどの醜態は無かったとばかりに真面目な態度で話し始めた。しかも、物で話を逸らそうとしている。そんなことで、釣られるわけが

「「本当ですか♪」」

あつた。キュルケとルイズの表情は輝かんばかりの笑顔でいっぱいだった。

「(ニヤリ)うむ。それと、すでにシュヴァリエの爵位を持っている、ミス・タバサとミスタ・アルベルトには精霊勲章の授与を申請しておいたからの」

……まあ、貰っておいて損をするものでもないのです。別に構わない。あ、あの。リオンたちには何かないんですか?」

と、学院長が褒章の話をし終わるとルイズがそう言った。

「…残念じゃが、彼らは貴族ではない」

「で、でも…」

納得できなかったのか、ルイズがさらに言おうとしたら

「別に僕はそんなものいらぬ。ただ、あんたに後で少し話を聞きたいんだが構わないか?」

「あ、私も聞きたい事があります」

と、リオンとチトセは学院長に向かって言った。ルイズはなんだか、まだ納得していないようだったが仕方ないといった具合に黙っていた。

「うむ。構わんよ。さて、話がまとまったところで、今夜は『フリツグの舞踏会』じゃ。このとおり、宝物も戻ってきたことじゃし、予定どおり執り行う。今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

学院長が笑顔で言い、私たちは部屋を出た。

リオンSide

「それで、お主らの聞きたい事というのはなんじゃ?」

ルイズたちが出て行ったのを確認した学院長は僕たちに向かってそう切り出した。

「ああ。僕が聞きたい事と言うのは、その『竜の心臓』とあんたらが言っている宝石のことだ。それは、僕が居た場所では『レンズ』と言われているエネルギーの結晶体だ。あんたは一体何処でソレを手

入れたんだ？」

「うむ。これはワシが若かった頃にとある遺跡で手に入れた物じゃ。と、いってもコレ自体はほんの一部に過ぎんがの」

「一部だと？」

「そうじゃ。遺跡の奥にあった元々のコイツはとてつもなく巨大での、しかも何故か魔法を無効化してしまい、持ち出せんかったので一部を砕いて持ち帰ったのが、この『竜の心臓』なんじゃ。さて、チトセ君の方はなんじゃ？」

学院長は僕にあのレンズのことを説明した後、次にチトセに質問した。

「わたしは、そつちのことです」

「ほう。『破壊の杖』かの」

「はい。それは、私の知り合いの物つばいんですけど、どのように手に入れたんですか？」

チトセは破壊の杖を指差して学院長に聞いた。

「…知り合いのお。しかし、チトセ君。これもワシがまだ君と同じくらしいの時にとある友人から貰った物じゃ。知り合いと言うのは、ちと無理があるのではないのか？」

「そんなことはありせんーだって、ほらここ。『フォルテ・シユトールン』って名前書いてありますもん」

チトセは机の上にあった破壊の杖を持ち上げ、学院長に白色の文字が書いてある部分を見せ付けた。

「むむ。その白い文字は何と書いてあるのか分からんが、確かに破壊の杖を譲ってくれた者の名はチトセ君の言う通りじゃ」

「そうでしょう。で、一体どうやってこれを？ ついでにフォルテ先輩は今は何処にいるかも教えてください」

「そうじゃのう。まず、彼女達の居場所に関して言えばわからないのじゃ。彼女達とは、ワシが若かった頃に森で複数匹のワイバーンに襲われていた時に助けてもらったのが始まりじゃ。」

なんでも、ミルフィーユ殿がマジックアイテムをうっかり使ってしまった故郷から海を越えてこのハルゲギニアに飛ばされてしまったと

のことで。それで、故郷へと帰るためにマジックアイテムの魔力を回復させなければならぬと、そう言うのでワシは命を助けてもらった恩返しにその手伝いをする事にしたんじゃ。

ほんの十日程度しか旅をしておらんかったし、最後はマジックアイテムで故郷に帰ってしまったからの。ノーマッド殿のが確かジカンジクがどうのとか、クウカンソウイがなんちやらなど言っておったが、ワシにはよう分からなかった。そんで彼女達が帰ってしまう際にフォルテ殿が餞別せんべつにと、破壊の杖をくれたのじゃ。

ちなみに、彼女達のマジックアイテムの魔力を回復させたというのが、先ほどりオン君に話した遺跡の宝石なんじゃよ」

と、学院長が破壊の杖と竜の心臓レンズの説明を終えた。巨大なレンズがある遺跡か…。

「その遺跡とはどこにあるんだ？」

「アルビオンと言う名の国にある。のじゃが、ワシはあれ以来その遺跡には行っておらんからのお。今はどうなっておるのか…」

僕の質問に学院長は丁寧に答えてくれたが、あまり有益な情報ではなかった。しかたないか…。

「さて、他に聞きたい事はないか？」

「いや、もう大丈夫だ」

「私もとりあえず大丈夫です」

僕とチトセが言い返すと学院長は微笑み、

「そうか。では君達も舞踏会に行きなさい。本来ならお主たちを主役とするべきなんじゃろうが、貴族ではない故に色々あつてのお。すまない」

学院長との話も終え、僕たちは舞踏会の会場であるアルヴィーズの食堂の2階の大ホールに向かった。ホールには生徒たちや教師がすでに居り、食事をしたり話をしていたりと思いきいに過こしていた。「わああ。文化レベルが低いくせに、なかなかのパーティーじゃないですか。…あ、これ美味しそう」

と、チトセはホールに入るなり、辺りをキョロキョロと見渡しながら料理を取って食べ始めた。僕は騒がしいのがあまり好きではない

ので、適当に料理を皿に取り、バルコニーへ出る。

「ふう」

僕は一息ついた後、月が二つの夜空を見上げ、考えにふける。もちろん頭に浮かぶのは例のレンズのことだ。遺跡で見つけたと言っていたが、あのレンズを学院長だけが持っているなどと言うのは都合が良過ぎる。レンズを所持又は集めている者もいるだろう。

しかし、どうやらレンズの使用法は理解していないみたいだな。この世界の魔法は晶術とは全然違っていたしな。

『おおおおお！』

つらつらと考えていたらホールの中が一層騒がしくなり、気になって目を向けてみると着飾ったルイズ、キュルケ、タバサ、ジンの4人がパーティー会場に入ってきたところだった。キュルケには直ぐに男共が集まり口説きはじめ、タバサは料理がのったテーブルに行き、食べ始めた。その隣にはいつの間にかキキが同じ様に料理を食べている。ジンはチトセの所に素早く近づき何かを叫んでおり、そしてルイズはキヨロキヨロと辺りを見渡し、僕を見るとこちらにやってきた。

「あんた、パーティーなのになんでこんな所いんのよ」

「僕は騒がしいのは好かないんだ」

「なによそれ。…ねえ、リオン。ずっと気になってたんだけど、あなたって本当に自分の世界に帰りたいと思わないの?」

ルイズが不安そうな表情で僕に聞いてきた。

「はあ。前にも言ったと思うが、僕は向こうの世界では死んだことになってる。今更戻ったところで、僕の居場所なんてものは、もう無いんだ。だから帰ろうなんて思わないし、必要も無い」

「……居場所」

ルイズが僕の話の話を聞くと俯いて、ボソツと何かを呟いたみたいだが、声が小さくて聞こえなかった。僕がいぶしかんでいたら、ルイズは急に顔を上げて、

「ね、ねえリオン。わ、私と、その…踊ってくれないかしら?」

と、ルイズは顔を赤くして手を出してきた。…まあ、ダンスぐらい

なら構わないか。僕はルイズの手を取り、

「……1曲だけなら付き合おう」

僕はそう言つて、ルイズと共にホールに入つていった。

新たな任務

キキSide

「へえ、さすがに絵になるな。あの二人」

俺は料理を食べながらホール中央で踊っているリオンとルイズを見た。

「確かにねえ。それよりも、あなたたちは踊らないの？」

と、男子生徒を引き連れて近くにきたキュルケがパーティー開始から料理を食べ続けている俺とタバサに呆れたような表情で話しかけてきた。

「俺はダンス出来ないからな」

「料理」

俺とタバサはそれぞれ理由を言って、食事をし続ける。

「まったく！ 今日の主役はフーケを捕まえたあたたちなのよ。楽しんでどうするの？ 料理なんていつでも食べられるでしょう。あの堅物のルイズだって踊ってるってのに…、ほら二人とも踊ってきないさいよ。少しぐらいぎこちなくても別に恥ずかしいことじゃないんだし」

キュルケは俺とタバサを踊らせたいらしく、一気にまくし立ててきた。が、俺とタバサは黙々と食事を続けた。

「はあく。あなた達って意外と似てるわよねえ。こう、マイペース過ぎるというか、なんとというか…あら？」

キュルケが話していたら窓の方から一羽のフクロウがタバサの足元へやってきた。タバサは表情をわずかに硬くさせ、フクロウから書簡を取り、それを読んだ。

「あら？ もしかして出かけちゃうの？」

「ああ、みたいだな」

キュルケは手紙を読んだタバサを見て顔をしかめた。

「まったく！ せっかくのパーティーなのに水を差すなんて、デリカシーがないわね」

まあ、あのデコ娘にそういうのを期待するのは酷と言うものだと思

うが……。タバサは手紙を懐(?)へ仕舞うと、人気の無いバルコニーへ歩いて行き、俺もその後について行く。タバサはバルコニーに出ると口笛を吹き、手すりを乗り越え飛び降りる。俺も直ぐにタバサの後に続いて飛び降りると、丁度のタイミングでシルフィが通り過ぎ、その背に着地する。そして、俺たちはガリアへ向かった。

「きゅいっ！ いきなり呼んだと思つたら、飛び降りるなんてチビ助はバカなのね！ きゅい！」

上空に上がったシルフィは開口一番にそう文句を言った。が、タバサは言い返さず、相変わらず無言で本を読んでいる。つてかその本は何処に持ってたんだ？

「きゅい〜！ お兄様も！ なにやってるのね！」

「……おお、悪かったな。でも俺はお前を信じてたからな。まあ、驚かせたことは流石に悪いし、向こうに着いたらなんか美味しいもん食わしてやるよ」

「きゅい！ やったのね！ 楽しみなーのねー！ きゅいきゅい」

こう言つちやなんだが、ホントちよろいなあ。その後はいつも通りに、タバサは本を読み、俺はシルフィの話にテキストに相槌を打ちながら城へ移動した。

「外」

と、イザベラの部屋の前まで来ると、タバサが少し怒気を含んだような声で俺に言った。何故タバサがこんなことを言うのかというと、普段だったら俺はシルフィと外で待ってるんだが、今は夜。外はそこそこ寒かったのでタバサの後を黙ってついていたら、不機嫌になりおった。

「外は寒い」

ゴンツ！と杖で頭を殴られた。タバサは嘆息するとしようがないというような雰囲気ですべてのドアを開けた。

「ああ、来たか」

ドアを開けると、何かしらの書類を書いていたアツシユがこちらを向いて言った。部屋の中を見ると、前に来た時と違い、メイドや兵士は居らず。それどころか、部屋の主であるイザベラはベットに倒れこ

み、安らかな寝息を立てていた。：なんか、色々面白くことになってるな。

「…どうしたの」

タバサも気になつたらしく、アツシユに聞く

「あ？　…ああ、ソイツか。朝から政務の仕事や勉強をさせてたからな。少し前に疲れて寝ちまいやがった。つたく、王族のクセにコレくらいで倒れやがって。これだから甘やかされて育ったクズは」

アツシユはタバサの質問に答えながら、机の引き出しから指令書とお金の入った袋を取り出しタバサに渡した。

「指令書と今回の任務のための資金だそうだ。一度しか言わねえからよく聞け。任務はベルコート街って所にある賭博場だ。そこでクズ貴族どもが金を巻き上げられているらしく、軍警による取り潰しは体裁が悪いと言う理由から、こんなくだらねえ依頼がこちらに来た。

ここまで言やあ分かってると思うが、簡単な話、その賭博場を潰せってことだ。はつきり言って馬鹿共がいくら巻き上げられようが知ったことでじゃねーが、あの手の連中が鬱憤を溜めると色々面倒を起こしかねないからな。以上だ」

アツシユは不機嫌なのを隠しもせずに任務をタバサに言った。タバサはそれを聞く驚いたように少しだけ目を大きくし、そして直ぐにいつもの表情に戻りコクリと頷いた。

「他の詳しいことはソレに書いてある。部屋は用意してあるから、今夜はそこで休むといい」

アツシユは最後にそう言うのと、また机に戻ってしまった。聞くことはもう無いと判断したのか、タバサと俺は部屋を出て行った。

タバサ Side

私たちは部屋の外にいた兵士に案内され、用意された部屋に着いた。

「着替える」

「ん？　ああ、そうか。分かった」

私は部屋に用意されていた寝巻きに着替えるため、キキに告げると彼は直ぐに部屋の外に出て行った。私はドレスを脱ぎ、寝巻きに着替える。

「……」

ふと、着替えの途中で私は自分の身体を見た。もう15であるのに、関わらず友人であるキュルケとは違い、膨らみの無い胸、凹凸の少ない身体、おまけに背も低い。実際、実年齢よりも3、4も歳を低く見られるのは当たり前な自分に彼はどう思っているのだろうか？

「……／＼／＼／＼／ツ!!」

な、何を考えているのだろう。私は頭を振り、手早く着替えを済ませる。それから、ドアを開けてキキを入れる。

「そういえば、詳細は指令書に書いてあるって言ってたよな。なんて書いてあるんだ？」

キキが部屋の椅子に座りながら、指令書の中身を聞いてきたので、私は内容を伝えた。

「明日、あなたは私の護衛兼執事、シルフィードは荷物持ちになってもらう」

「おう、わかった。それじゃあ、とっとと寝て明日に備えるか」

キキは詳細と明日の予定を聞き終わると、椅子に座ったまま寝ようとしたので、私は彼に近づき

「ベット」

「あ?」

「それでは疲れが取れない」

ベットで寝させようと、彼を引っ張る。

「…いや、でもタバサはどこで寝るんだ?」

「一緒に寝る」

私がそう言うと、キキは驚いた顔をした。

「あ?えっと…いや、ベットに二人って狭いと思うんだが…」

「問題ない」

キキはベットを見たあと戸惑いながら言ってきたが実際ベットは大きく、二人程度なら全然問題無く寝れる。

「……えーと、まあ、うん」

キキは渋々と言った感じだったが、椅子から立ち上がりベットへと移動した。彼はベットの端っこに寄り寝始め、私もベットに入り寝た。

いざ潜入

キキSide

チユンチユンと小鳥の鳴声で俺は目を開ける。

「あゝ。ねみいゝ」

完全に寝不足だ。原因は分っている。俺の背中に引っ付いて寝ているロリ娘のせいだ。

「あゝ、ギャルゲー主人公つてのはよくこんな状況下で平然と睡眠を取れるもんだな。精神イカレてんじゃねーのか」

昨夜、ベットに入った直後は『うれし、恥ずかし、やつふう』なイベントと思つて寝付けなかったが、落ち着いたら直ぐに眠気に襲われウトウトし始め、いざ寝ると思つたらタバサが背中に引っ付いてきやがった。

ちなみに言つとくが、俺はヘタレな訳じゃない。襲つていいのなら普通にやる。けつして言い訳では無いが、もしだ、本能で行動した結果、色々関係がギクシヤクしたらそれはそれでメチャクチャ気まずいし。なにより、

「お父様、なんで寝言いながら服つかまれたらなあ」

良心の呵責がね…ああ、ちくしょう。世の中ままならないなー！

「……起きよう」

俺はタバサを起こさないようにゆっくりと、手早く素早く慎重にベットから出る。

「あゝ、しかしこの世界で生活し始めて文明の利器がどんどん恋しくなるなあ」

特に冷蔵庫が…。朝起きた時に冷たいアイスコーヒーが飲めん。まあいいや。俺はとりあえず、部屋から出て鍛錬のため中庭へ行く。

「おお、おはようさん。軽く手合わせいいか？」

「ん？ お前か。ちょうどいい、頼めるか」

中庭へ行くと、アツシユが剣を振っていたので、話しかけて鍛錬にと手合わせをした。そして、いい時間になり、お互い庭端にある井戸を使つて汗を拭い部屋へ戻ると、ゴンツという衝撃を頭に受けた。

「くっ、痛い」

俺は杖を持っている人物に恨めしげに顔を向けると

「……………」

とても不機嫌なタバサがいた。表情はいつもと変わらないが、完全にオーラというか雰囲気がいライラという感じで出ている。俺、何かしたか？

「…行く」

「あ、ああ」

俺はタバサに促されて部屋を移動した。移動中、俺はタバサの後姿を見て、なんていうか不貞腐れてる感じが強いなと思った。うーん、まさか勝手にベットから抜け出したのを怒って？ ……だったらいいなあ。んなアホなことを考えてる内に、朝食を終え、兵士から衣服を貰い、シルフィに乗って任務先へ向かった。

「きゅいきゅい。また服なんか着なくちゃいけないなんて面倒だね。しかも荷物持ちまでやらせるなんて。これじゃあ特別美味しいもの食べさせてくれないと割に合わないのね。つとという事で何処か美味しいお肉を食べられる所にいくのね！」

街についた後、宿裏でシルフィを人間に変化させ皆で兵士に貰った服に着替えて、例の賭博場まで移動中にシルフィはグダグタと喋りまくっていた。

「任務が先」

「まあ、帰りにどっかで食べてるから安心しろ」

タバサが端的に言い、俺はシルフィが納得するように補足してやる。ちなみに、タバサの服装は最近貴婦人の間で流行であるらしい男装で、俺は執事服。シルフィはメイド服である。しかし、スーツって動き難いから嫌なんだよなあ。

「やったー！ 楽しみなのね。きゅいきゅい」

「……………着いた」

タバサはシルフィの言葉に嘆息した後、とある宝石店の前で止まった。タバサは振り向き一旦俺と目を合わせてきた。俺は頷き、怪しまれないように服を一旦調べて、そして店のドアを恭しく開けた。

「いらつしやいませ。お嬢様。本日は何を御探しですか？」

ドアを開けると店員らしき男がすぐさまタバサへ挨拶をする。俺はその後ろで不動の姿勢で待ち、シルフィは、

「わああああっ！　綺麗なのねっ！　ああ、これとかとっても欲しいのね」

店内に飾ってる宝石や装飾品類を見て目を輝かせてはしゃいでいた。やっぱ竜だからか？　とりあえず、

「きゅいっ!?!」

ベシリツ！　と他の店員や客が睨んできたので叩いて、静かにさせる。タバサはその間にある大きなショーウィンドウに近づき、店員に「これを」

と、中に入っていたブルーダイヤモンドを指差した。

「お嬢様、失礼とは存じますが、その宝石は売り物ではございません」
「これが欲しい」

店員が売れないと言うがタバサはそれでもダイヤを所望する。その瞬間、店員の目が一瞬だが鋭くなり、また笑顔に戻り

「二千万エキュールはいたしますが…」

「買った」

店員は額を提示すると、タバサはその額を聞いても眉一つ動かすことなく即答した。

「では、手付けをいただきますが……」

タバサは言われると店員に銅貨を三枚渡した。

「確かに頂きました。では、こちらへ」

店員は銅貨を確認するとタバサを店の奥へと招いた。俺とシルフィもその後続き、店の奥へと入っていった。少し歩くと、三方を柵に囲まれた行き止まりに着き、店員は柵の横にある紐を引っ張った。すると紐のついてた柵が動き出し、後ろに扉が現れた。

「どうぞ」

と、店員が扉を開けると地下へ向かう階段が現れる。タバサはなんの躊躇もなく階段を下りていく。下まで着くと、鉄の扉とその横に小さなカウンターがあった。扉の左右とカウンターには黒服の執事が

おり、

「貴族のお客様でいらつしやいますか。では、こちらで杖をお預かりします。後ろの従者のお方がたは刃物の類がお有りでしたらそちらもお願いします。」

カウンターの執事に言われ、タバサは杖を渡し、俺も懐に入れたいクナイを渡す。シルフィは心配そうに俺たちを見てるが、俺は武器持つてなくても普通に戦えるし、と言うより基本武器使わないし。受け取った執事は杖は羅紗布で丁寧に包み、刃物の方は適当に仕舞った。そして、執事が扉の左右に居る執事たちに目配せすると、執事たちは扉を開ける。

「地下の社交場、『天国』へようこそ！」

中に入った瞬間、賭博場独特の喧騒が耳に、きらびやかな衣装や装飾が目届く。

「まあ！ こんなお小さいのに！ お坊ちゃん、誰かの付き添いで来たの？」

俺が周りを見渡していたら、いつの間にかタバサが接客係の女性に絡まれていた。俺はとりあえず自分の役割として、タバサと女性の間に入り込み、

「失礼。お嬢様に何か？」

女性に対して笑顔で威圧感を与える。すると女性は引きつった表情になり、俺たちから離れていった。が、入れ替わるように太った四十前後の男がやってきた。男は先ほどのやり取りを見ていたのか、女性に何かしら叱り付け奥へと下がらせ、

「接客係の失礼を申し上げます。当カジノの支配人である、ギルモアです」

タバサに自己紹介をしてきた。その後は聞いてもいないのに、ギルモアはペラペラと地下カジノの事を話し始めた。俺はそんなどうでもいい話は聞き流しながら店内をもう一度見渡す。結論、いい小遣い稼ぎが出来そうだ。さて、話も終わったらしく、タバサは近くにあったサイコロのゲームに移動した。

イカサマ探し

キキSide

ドンツとタバサの前に大量のチップが置かれる。

「すごいのおおちび！ きゅいきゅい！」

そして、シルフィはその大量のチップを見て、先ほどまでグチグチと文句を言っていた態度を返しておおはしやぎした。

今現在、サイコロゲームをやり始めたタバサは十五回目の勝負で大勝を手にしていた。始めは1チップずつしか賭けず、しかも前の勝負の勝率は十四戦中三勝程度だった。が、実はそこまでは只の様子見だったらしく、先ほどの十五戦目の時は目を光らせていた。で、結果は見ての通りだ。

「ううう、私もするのね！」

シルフィはタバサがあっさりで大勝したのを見て、自分も勝てると思ったのか幾つかチップを掴み他の所へと行ってしまった。俺も見てるだけつてのは飽きてきたな。つーことで、俺もタバサから10エキューのチップを一枚貰い、別のゲーム場へ移動した。

ちなみに、こここのレートは最低額が1エキューと高額な上、青天井だったりする。

「ここだな」

俺はフラフラと店内を歩き、勝てるゲームを探し出した。ゲームの名はルーレット。一番イカサマがし易く、バレ難く、尚且つ切り上げ易いゲームだ。俺は椅子へ座り、ゲームを始める。とりあえず、何回か様子を見るフリをしてチャクラ糸を玉と各数字に引っ付ける。

さらに、すぐさま賭けずに数ゲームほど糸での操作を練習とデイラーに気づかれないか確認。これで準備完了。俺は悩んでるフリをしながらも一番配当の大きいストレートで賭ける(今回は赤21へ)。そして、ちよいちよいつとチャクラ糸を操り、

「赤の21番でございます」

目的の場所へ落とす。はい、楽勝。勝った俺のところへチップが入ってくる。10エキュー賭けて36倍の払い戻し、つまりは360

エキューをゲットだ。後は適当に睨まれないように、2倍払い戻しのレッドorブラックで倍倍ゲーム増やししていけばok。もちろん糸を使って望んだ色の方に落とすけどね。結果……持ちチップ5760エキューになった。ディーラーさん。顔青いよ？ どうしたのかな。

「どうなってるんだ！ このワシをバカにするのも大概にしろ！」

俺が次ぎの賭けをしようとしていたら、別の台から大きな怒鳴り声が聞こえた。そちらを見ると貴族が大負けしたらしく憤慨していた。まったく、引き際をわきまえないから“負けさせられる”んだよ。俺も詳しい訳ではないが、地下の、しかも青天井のカジノでイカサマが無いなんて、まず在りえないだろう。

だって、普通に営業したら胴元が儲からないどころか赤字になって借金になるし。なんて益体やくたいの無いことを考えていたら貴族はいつの間にかイケメンの給仕きゆうじによって追い出されていた。

「ふむ。まあ、ちようどいいか。小遣いも稼げたし。タバサの所に戻るか」

俺は先ほどの騒動を機にルーレットを止め、タバサの所へと戻るとそこには俺の稼いだ約三倍近い量のチップが山の如く積み上げられていた。

「…流石と言うか、何というか」

イカサマ無しでここまで稼ぐタバサに感心しているとギルモアが揉み手をしながらやってきた。

「お嬢様…、これはこれは従者の方共々大変な大勝でございますな。さて、そろそろ夜もふけてまいりましたが…」

と、ギルモアは大勝ちしたタバサに勝ち逃げされたら困るというような雰囲気でもた勝ちに話し始めた。普通だったらここで止めるべきなのだが、俺たちの目的のためにはそうは行かない訳で、

「続ける」

と、タバサはギルモアに向かって言い。周りのギャラリーたちはタバサの言葉にどよめきを起こした。ギルモアはタバサの言葉にニヤリと笑うとディーラーに目配せをし、下がらせた。

「お申しわけありませんが、このテーブルはシューターが体調を崩してしまったので、お開きとさせていただきます。さて、そろそろ小さな賭け額にも飽きた頃ではございませんか？」

ギリモアはタバサにたいし大勝負を進めてきた。これはもちろん、取られた金を取り戻すためのものなのだろうと言う事は安易に予想できる。つまりはギルモア達がどうやって貴族から巻き上げているかを探るチャンスだ。タバサはコクリと頷き、ギルモアに賭けをやるという意思を伝えた。

「きゅー！ 勝負は引き際が肝心なのね！ ここまで勝ったら、とっととおいしいもの食ばえうっ」

シルファイが空気を読まず騒ぎ出したので、俺は後ろから口を押さえ、黙らせる。

「おやおや、お連れさまは乗り気ではないようですが…。どうなされますか？」

「続ける」

シルファイのわめきに対してギルモアはもう一度聞き返すが、当たり前だがタバサは変わらずに続行の意思を伝える。それを聞いたギルモアはニタニタとした笑顔で心にもないお世辞を言いながら一礼してゲームテーブルを用意すると言うと、タバサが首を横に振った。

「おや、お気持ちが変わってしまったかな？」

「少し休みたい」

ギルモアは一瞬驚いた表情をしたがタバサの返答を聞いたら、いつもの表情に戻り店の奥にある部屋へと俺たちを案内した。

タバサSide

通された別室には豪華なベッドや机等、他にも呼び鈴や絵画・彫刻が飾られた立派な部屋だった。たぶん大勝ちした客を泊まるため又は引き止めておく為の施設なのだろう。

「んーっと、何も仕掛けられてはいないな」

中に入るとキキが部屋中を見渡してそう言った。ビヤクガンを

使って調べてくれたのだろう。彼はその後ベットに寝転がり、私は椅子に座りいつものように本を広げた。

「まったく…、勝ってるうちが華だというのに、お兄様もチビ助も何を考えてるのね。ああ、こんなお部屋に釣られて、勝った分をそっくり吐き出すのがせきの山なのね！ きゅい！」

私たちがそれぞれくつろいでいるとシルフィードがグチグチと文句を言ってきた。この仔は今回の任務の事を理解しているのだろうか？ …いや、出来ていたらこんなこと言わないか。

「勝ちにきたわけじゃない」

「負ける勝負なんかしちゃだめなのね！」

私はしかたなく説明しようと言葉を吐いたら間も置かずに叫び返してきた。…まったく、私はシルフィードの耳を引つ張りこちらに無理矢理引きつけて話を続ける。

「この賭博場を潰すのが、今回の任務。ここで行われているイカサマを見つけて、客たちに教える。それで終わり」

「きゅいきゅい！ 痛いよね。耳を引つ張らなくても聞こえるのね。…まったく、でもイカサマなんてホントにしてるのね？ もし、無かったらどうするのね？」

私の説明にシルフィードが疑問を返してきた。確かに、まだイカサマをしていると言う証拠どころかシツポもつかめていない。私が答えあぐねていると、

「確実にイカサマはしてるぞ。まあ、どういう仕掛けかはまだ分からんけどな」

キキがベッドに寝転んだままこつちを向いて言ってきた。

「それはホント？」

「ああ。まあ、殆んど推測になるんだがイカサマしてるのはギルモアアッてやつだけだな。大方、タバサと同じ様に大勝ちした相手にお世辞を言ってイカサマ勝負を仕掛けてるんだろ」

イカサマをしているのはギルモア一人だけ？ それはつまり奴だけに気をつけなければならないということか。問題はどのようなイカサマを行っていると言う事なのだが…。私が色々考えていると、

「むむむ…まったたく！ チビ助はお兄様が居ないと何にも出来ないのね。ふっふっくん。そんなチビ助のためにこのシルフィが証拠を探してきてあげるのね！」

「……シルフィ？」

キキが可哀相な人を見るような目で彼女を見る。

「お兄様、まかせておいてなのね！ わたしが今からイカサマの証拠を見つけてくるのね！ そして、チビ助は証拠を見つけたわたしに感謝するといいのね！」

シルフィードがいきなり立ち上がり叫んで部屋を出て行ってしまった。私もキキもいきなりの彼女の奇行にポカンとして止めることが出来なかった。いったい彼女の中でどんな考えが出来上がっていたのだろうか？ 私はキキに向き返りどうするの？ という視線を向けた。

「まあ、腹が減ったら戻ってくるだろ」

キキの言葉に私もまあ気にするだけ無駄かと思ひ私は読書の続きをする。しかし、それから数分としないうちにトントンと扉がノックされた。シルフィードがもう戻ってきたのだろうか？ いや、あの子はノックなんてしない。

「誰？」

「給仕のトマと申します。お飲み物をお持ちいたしました」

キキ S i d i

「入って」

タバサがそう言ってトマを部屋に招き入れる。流石に真似事とは言え執事の俺がベッドに寝転がってるのは色々と不味いので即座に身を起こし、身嗜みを整える。扉が開き、入ってきたのはフロアで貴族を追い出していたイケメンさんだった。

「どうぞ」

イケメン給仕トマは持ってきたワインをテーブルに置き、一礼した。が、彼は部屋から中々出て行かないところが、妙に俺の事を気に

してるような気配を出している。

俺はタバサをチラリと見るとタバサもこちらを見てきて目か合った。どうやら少し席を外して欲しいようだ。彼とは知り合いなのだろう。推測するに昔のオルレアン家の使用人かな？ まあ、何かあってもタバサなら大丈夫だろう。

「お嬢様、私はシルフィーを探して参ります」

ありがたい
「わかった」

俺は一礼して部屋から出て行く。積もる話もなんとやら。タバサの過去は重いからなあ。

「さて、ついでだしイカサマ探しとシルフィー探してもするか」

っと言う感じで俺は気配を消しながらあちこちを調べ始めた。しかしこの話しはどういう内容だったかなあ？ 思い出せん。まあいっつか。さてと、次はあの部屋だ。俺は静かに扉に近づき気配を探る。お、中から話し声。俺は白眼を発動させて中の様子を視る。

「くくく、まったくバカな小娘よ。所詮は貴族の子、頭の中身はスツカラカンだな少し儲けたからといい気になりよって。が、しかし次の勝負で終わりだ。コイツらで有り金を全てを奪ってやる。あーははははははははっ!!」

はい。テンプレな悪党ありがとうございます。部屋の中にいるのはギルモアであり、奴は手にはカードが握られていた。ふーん、アレがイカサマカードか…。しかし、なんだアレ？ カード束の中に何匹かの生き物のチャクラ反応がある。変化能力のある生き物か？

「ん？ おっと…」

俺が考え込んでいたら、ギルモアが部屋から出てきたのでサツと身を隠す。ギルモアは少し進むと給仕を呼びつけ一言二言指示すると、ニヤニヤと嗤いながら奥へと進んでいった。

「ふむ、そろそろ時間か。イカサマ手段は解ったが、あのカードのこ
「あー！ お兄様なのねー!!」 ナイスタイミング」

生き物カードの事で少々悩んでいるとシルフィーが背後から走ってきた。口の周りが食いカスだらけなのはこの際気にしないでおう。さて、いくらバカでもこの世界の生き物のことならいくらか知っ

てるだろう。俺は、シルフィーの口周りを吹きながら幾つか質問してみた。

「きゅいっ。それは『エコー』って幻獣なのね。けど、エコーは頭の良い幻獣だから人間なんかの言いなりになるなんておかしいのいね」
「ふむ、だとすると何かしら言う事を聞かなきゃならない理由があるってことだな。：餌付け？」

「偉大なる古代の幻獣であるエコーが食べ物如きで言う事なんか聞かないのね」

お前が言うかあ？ んー、こういう場合の常套手段って……まさか、アレか？

「エコーってのは子供も変身できるのか？」

「出来るけどとてもヘタなのね。成長すればどんどん変化が上手になっっていくのね」

確定だなこりゃあ。さて、ならばさらに探索しなければなあ。こいつにも手伝ってもらわんと。シルフィーに俺の推測を話して協力させる。

「きゅいー!!! なんてサイテーな奴なのね！ エコーにそんな酷いことするなんて、大いなる意思への冒瀆も甚だしいのね！ さっそく行くのね、お兄様！」

憤慨したシルフィーは即座に俺の腕を掴むと歩き出し始めた。つて何処行くんだよ。まあ、白眼使ってそれっぽいのを見つければいいだけだしな。俺はん苦笑いしながら白眼を発動し辺りを見渡した。

ギャンブルは程々に

タバサSide

「さて、お嬢さま。どうやらチップがなくなってしまったようですが……、これ以上お続けになるのなら、新たにチップを買っていたただかなくては」

私の元からチップが全て無くなると、ギルモアはニヤニヤとした表情で言ってきた。

部屋でキキが気を利かせて席を外してもらい、小さい頃によく遊び相手になってくれていたトーマと話をした後、別の給仕が準備が出来たと呼びびに来た。キキがギルモアはイカサマをしていると確信を持って言っていたので、私は色々な対策をして勝負に挑んだが、結果はご覧の有様である。

ギルモアが用意した個室ではなく厨房で勝負を始めたり、カードのシャッフルは私が行い、細々とチップを賭けて何度も勝負をし相手の挙動一切に注意を払ったりとしていたが、まったくイカサマを見破れずにいた。

そして、イカサマを暴けないままに大きな賭けの時だけま決っているかの様に私の手の一つ上の役で勝というパターンが続き、ついに私のチップが尽きてしまった。

「お嬢さま。チップへの交換はどういたしますか？」

もう資金は無い。私は首を振るしかなく、

「おやおや、それではゲームは続けられませんな。これにてお引取り、ということになります……、お家のお名前で、掛け金をお借りになることもできますよ？」

ギルモアの問にさらに首を振る。今使っている名は偽名であるし、イカサマのしつぽすらも掴めてないのに掛け金を借りて負けたとなれば目も当てられない。そんなリスクの高い行為は出来ない。が、しかしこのままでは任務達成できないのも事実、私が考え込んでいると、

「……ふーむ。お嬢さま、こういうのはどうです？ お金がないなら、服

を賭けては」

ギルモアが提案してきた。その内容にいつの間にか集まってきた野次馬達がそれを聞いて各々騒ぎ立てる。資金が尽きてしまつて以上この提案を受けるしかない。私はそれに頷いた。互いに勝負続行を承諾し、ゲームを再開するが、

「おお、なかなかの手ですな。ですが、こちらの勝ちです」

4度目の勝負、ハラリツとギルモアの手札が並べられる。やはり私の手の一つ上の役。私は苦い表情をしながらも服を脱ぎ、ミューズ姿にまでなつてしまった。これを取られたら次は下着一枚きり…。

「お嬢さま、お続けになりますかな？」

ギルモアの楽しげな声と表情に私は心の中が悔しさの気持ちでいっぱいになる。せつかくキキがイカサマは在ると教えてくれたのだ、必ず暴いてみせる。私はギルモアに頷き返し、勝負を続ける。

「では、次はそのミューズをお賭けになるということ…。」

ギルモアが笑顔を貼り付けた表情で集めたカードを私に渡してくる。私はカードを受け取り丹念に切る。切っている間もカードや周囲に注意を払いイカサマを見極めようとするが上手くいかぬままにカードを配り終えてしまう。互いにカードを取ろうとした時、ギルモアの隣にいたトマが駆け寄ってきた。

「お嬢さま、お止めくださいませ。勝負事に熱くなつても、いいことなど何一つありません！ このままでは、お嬢さまはいい物笑いのタネです！ 私の知っているシャルロットお嬢さまなら…」

彼がとても焦つた表情でこれ以上は止めるようにと説得してきたが、それは出来ない。私は彼の言葉を無視して手元のカードを取ろうとする

「そうだな、そいつの言う通りだ。勝負つてのは心は熱く思考は冷たくつてな。どんなに意地張つても勝てないもんは勝てないんだぞ？」

言葉と共にパサツと私の肩に布が掛つた。それは執事服の上着であり、後ろを振り向くと其処にはキキが居た。いったいいつの間に。そう思っているのは私だけではなくギルモアや野次馬達もざわざわと騒ぎ立てる。が、キキは気にした様子も見せずにマイペースに話し

始めた。

「皆さんお静かに、そんな細かいことはどうでもいいじゃないですか。そんなことより支配人さん、選手交代だ。ここからは俺が勝負させてもうらうぞ。もちろんちゃんど賭け金もある」

キキはギルモアを睨みつけながら懐から大量のチップを取り出し台の上に置いた。

「な？ いいだろ」

キキの問にギルモアは多少悩む素振りをしたが、チラリとチップを見ると僅かに口角を上げた後すぐさ微笑を浮かべて

「まあ、いいでしょう。交代を認めましょう。ただし、賭けるチップを2倍にしてもらいますよ」

「ああ、構わない」

一種のペナルティの様な物です、とギルモアはニヤニヤとしながら言ってきた。キキはいつものヘラヘラした表情で頷くと早速席に着きカードを切り始める。

そして、カードを切り終えゲーム開始。キキがここまで自信満々と言う事はイカサマを見破ったにちがいない。私は期待してゲームの行方を見ていたのだが、1戦目、2戦目、そして3戦目とキキが勝つことは無かった。どころかキキは手札の役がなんだろうが知ったこつちや無いと言うように兎に角勝負をかけて行った。いったい何をしているの？ 私は不安を抱きながらもキキなら何とかできると信頼し、見守る。しかし……

「はっはっは。この勝負も私の勝ちですな。さてと…大口を叩いた割りにあっけなかつたですな。チップも底をついてしまいましたけど、どうなさいます？」

ギルモアのニヤニヤとした表情に私はどうするべきか考える。キキが失敗してしまった今、この任務をどうやってなしとげるか。私は恨みがましくキキを睨んだ。が、

「うーん。やっぱり勝てないよなあ。まあ当たり前か、毎回俺の役の一つ上の役を手札を変身させてるんだからな」

と、まるで天気の話でもするかのように言い切った。手札を変身させ

てる？ 入れ替えてるではなく？ どういう意味なのだろう。私が疑問に思っていると、

「!? ……な、何のことだね？ 負けたからといって言いがかりはよしてくれ」

一瞬だがギルモアが目を見開いた。が、すぐに表情を戻し何でも無かったかのように反論する。

「言いがかり？ 俺は本当の事を言ってただけだぞ」

「はっはっは、面白いご冗談を。いくらチップが無くなったとはいえそう言うのは感心しませんなあ。それともこのカードを調べて見ますか？ デイテクトマジックでも自由にかけてくださって結構ですがいかがなさいます？ まあ、何も出てこないとは思いますがね」

キキの言葉にギリモアは自信満々の表情で挑発するようにカードを差し出してくる。ギルモアの言う通り、私はあのカードから魔法の気配は感じなかった。でもキキは表情を変えずに

「ふーん、なら、見せてあげましょうかと……。シルフィー！」

「はいなのねー！」

キキは声を上げてシルフィードの名前を呼んだ。すると野次馬の後ろの方から声が上がリ、野次馬達が割れていくとそこには大きな檻籠を持った彼女が居た。そして、シルフィードがこちらに向かって歩いてきてテーブルの上に檻籠を乗せた。すると、

「な!? それはー！」

ギルモアの表情が先ほどのニヤニヤ顔から一変、汗を流し驚愕と焦燥に彩られた。

「ほら、お前ら。子供は無事だから逃げていいぞ」

キキはそんなギルモアの事など無視をして何かに言葉をかけた。私は頭に『?』を浮かべているとシルフィードが檻籠開けて、中から動物を出した。すると今まで何でもなかったカードの束が突如として光出し、複数の動物になってしまった。それはシルフィードが檻籠から出した動物よりも一回り大きかった。

「さて、これの説明は……出来そうにない顔してるねえ。じゃあ変わりにシルフィ説明してやってくれ」

「了解なのね！ この幻獣はエコーって言うのね！ これは……」
シルフィードがエコーについて説明し始め、それにキキがギルモアのやってきたイカサマの説明を入れる。それを聞いた野次馬達の表情は驚愕に彩られ、次第に怒りの形相に変わっていく。

私もエコーの説明を聞き納得した。先住魔法は私たちの四系統の魔法とは別物であり、ディテクトマジックをいくら掛けたところで見破れるはずがないのだから。

キキSide

「くそー！ 舐めやがって！」「俺たちを騙しやがったな！」「つるしあげろー!!」「捕まえろー！」

「ひっ、く、くそー！」

「ギルモア様こっちです！ 早く！」

イカサマを知った野次馬達はギルモアを捕まるべく、鬼のような相で一気に襲い掛かる。しかしトマがナイフを手に客達の前に出て足止めをした。客達もトマの実力を知っているのでその場でたたらを踏み止ってしまふ。その瞬間トマは袖から袋を取り出しそれを破る。すると中に燐が仕込んで在ったらしく厨房は煙で満たされしまい客達はパニックに陥ってしまった。やれやれ。俺は近くに居るシルフィとタバサを抱きかかえ瞬身の術を使い外へと出る。

「きゅ、きゅいっ？」

「……!？」

いきなり厨房から外の景色になったことに2人は少し驚いたていたが状況を理解するとタバサは

「杖」

と、短く告げる。俺は厨房に行く前に回収しておいた杖を巻物から出しタバサに渡す。と、タイミングよく裏口から出てきたギルモア&トマと鉢合わせした。

「なっ！ 貴様らいつの間……どうやって!？」

「シレ銀行の鍵」

タバサはギルモアの言葉を無視して銀行の鍵を差し出せと暗に言った。ギルモアは俺たちが政府の役人だと知った瞬間、自分は貧しい人々に施しを……つと言った言い訳をしたが、シルフィがエコーから聞いた本当の事を言うと、真つ赤な顔になり懐から拳銃を取り出し、

「トマー……いつらをどうにかしろ！」

と、叫びながら走り出した。トマーはせつなげな表情をした後、通路を塞ぐように前に出る。おいおい、唯一の味方置いて逃げるなよ。俺は嘆息し、

「タバサ、捕まえてくる」

タバサにそう言い、壁を走りトマーを抜く。トマーはあまりの事に驚愕するも咄嗟に俺めがけてナイフを投擲するが、タバサが魔法でナイフを落とす。

「あなたの相手は私」

「くっ、お嬢さま」

2人の言い合いを背に俺はギルモアを追う。つつつても角を曲がった先で直ぐに追いついてしまった。ギルモアは追ってきた俺に対し何の躊躇もなく銃を撃つが弾が当たる事は無く。さらにやけくそになって銃を俺に投げつけてナイフを取り出し構えてタックルして来たが、軽く避けて首筋に一撃。ギルモアは糸の切れた人形の如く地面に倒れ付した。

……戻るのは少し待ったほうがいいかな？ 俺は曲がり角から顔を出しタバサとトマーの様子をうかがったら丁度終わったらしく、トマーが倒れていた。

「話しは出来たか？」

俺はギルモアを持ち上げてタバサの所に戻り聞くと、タバサはコクリと頷いた。少し寂しそうな表情をしているのは気のせいではないだろう。詳しいことは分らんが、まあ気にしても仕方ない。

その後はタバサが意識を失ったギルモアから鍵を見つけ出し、俺たちは小宮殿に出頭し報告を済ませて任務終了。出頭した際はアシユが対応してきたが、その後ろの扉からイザベラが顔を真つ赤にし

てジツと睨んできていた。何あれ、ちよつと可愛い。

ギルモア達に関してはタバサの願いで、近くの宿にポイしてきた。暴徒と化した客に見つかったら大変だからと。

「しっかし、あいつら許せないのね！」

と、学院へとシルフィに乗って帰っていると、まあいつもの如くブーブーと文句を喋り始め俺も同じ様に相槌を適当に打ちながらも、ふとタバサを見た。タバサは何やらジツとカードを見ながら色々弄っていた。色々考えることでもあるんだろうか。まあいいや。

「あ、そういえば預かったお金はどうしたのね？」

「返した」

「きゅい!? なんてことしてるのね! それじゃあ美味しいお肉が食べられないのね! 約束を破るなんて最低なのね!」

シルフィがタバサの間に答えるとギャーギャーと騒ぎ出した。タバサは無言で懐から1枚の金貨を取り出し

「1エキュールならある」

「なっ! それを早く言うのね! まったく意地が悪いチビ助だこと。だったら早くご飯食べに行くのね!」

シルフィの態度にタバサは嘆息し、俺は苦笑いで遠くを見る。ちなみに、エコー探索中にある面白い物を見つけたので少量の金品と共に拝借してきたことは秘密である。

夢

ルイズSide

夢を見ていた。そこは真っ暗な闇の中で私はその中を歩いている。

「何なのよ」

まったく先が見えず、何処までも続く闇。ただ不思議なことに足元の道の様な物だけははっきり見えている。

「まったく何なのよ」

私は何回目かの愚痴をこぼす。まったく夢なんだからもつと楽しい夢にしなさいよね！　なんでこんな変な夢なのよ！　文句を言っても仕方なく私は歩く。何故歩いてるのは私は私も分らないけど、何故かずっと真っ直ぐ歩き続けている。別に疲れるわけでも苦になる訳でもなく歩く。

「あれ……は？」

どれくらい歩いたのだろうか？　まあ夢なんだから距離とか考えなくても意味無いけど。そんなことより闇の中にポツンと白い何かが見える。私の足は早足になりソレに近づいて行くと白い木のドアだった。私はそれを数秒見つめてから直ぐにドアノブを回し開けた。

「まぶしっ……」

私がドアを開けると光で視界いっぱいになり目をつぶる。そして、光が無くなりつぶっていた目を開けるとそこは

「……何処？」

私は見たことの無い屋敷の玄関に立っていた。後ろを向いてみたら其処には白いドアは無く、なかなか立派な扉になっていた。私は屋敷を見渡す。

「なかなかの屋敷ね」

私の家には全然かなわないけど。そう思いながらも屋敷内を色々見て回る。応接室だろうと思われる部屋、寝室に執務室など。屋敷内には見たこと無いような物も沢山あったけどそれ以外は普通の屋敷だった。

「で、ホントいったいこの屋敷って何なのかしら？」

私はフラフラと屋敷を回っていると話し声が聞こえてきた。さっきまで静かだったのに……。私は声のする方へと足早に移動する。

「ここは、確か広間だったはず」

広間の扉の前に立つと中からの声がよく聞こえてくる。つてこの声……リオン？ それと、女の人の声。

「なんか、楽しそうな話し声ね……」

ムカツク。私に話しかける時はいつもムツツリした感じのクセに！ もう、何よ！ 私はゆっくりと扉を開けて中の様子を覗くと

『あらあらエミリオ、そんなに急いで食べなくても無くならないわよ』

『マリアン。子ども扱いはよしてくれ』

そこには食事をしているリオンと見たこと無いメイドが居た。

「む、何あの笑顔。私にだって見せたこと無いのに。あのメイドも誰なのよ！ それに何でリオンのことエミリオって呼んでるのよ？」

意味わかんない！ その後もメイドとリオンは楽しく会話をし続けており、まるで…のような……

「……ッ!!」

胸の辺りに痛みが走り、私は胸を押さえる。何よこれ、もう何なのよ！ ふとポタリと床に水滴が落ちた。

「え？ あれ？ 何で……」

ふと気づくと私は涙を流していた。ウソ、なんで泣いてるのよ。私はビククリして2、3歩後ろに退りながらも広間の様子をもう一度見る。楽しそうなりオンとメイド。

「……やだ」

嫌だ。なんだろう…見てたくない。ここに居ちやダメだ。私は踵を返し一目散に走り出す。いったい何処へ走り出したのかは分からない。気づくとまた暗闇の中を移動しておりそして……

「ふえっ」

強い風が吹き、思わず足を止めると其処は大きな池があった。

「此処は……私の家？」

見渡せば見覚えのある風景が広がっている。そしてこの池も知っている。小さい頃から魔法が使えず、家庭教師やエネオノール姉さま

に折檻されたりした時に小船に乗って隠れたものだ。私は涙を拭きながら小船の止めてある棧橋に向かう。

棧橋には毛布が積んである小船が一艘、私は懐かしさも在り何の疑問も持たずに乗り込み船を出す。船は漕いでも居ないのに池の真ん中へと移動しピタリと止まる。

「うつく……、うつく」

私は小さかった頃のように毛布を引っ張り丸くなる。何故か分らないが心の中は悲しみが占めており、涙は止まることがない。何で私がかような気持ちに!!

「何よおく、なんでこんな気持ちになるのよおく」

言葉にしても分らないものは分らない。だあああつもー！ 心の中で叫ぶもすつきりしない。私が悶々としている内にどれくらい経ったのか、変化は突然起きた。小船がグラリと大きく揺れたのだ。

「な、何？ うん!？」

「おい、何時まで寝ている気だ」

バサリと毛布が剥ぎ取られると其処には

「り、リオン！ なななななんで!!」

其処にはいつもの仮面を被ったリオンが居た。リオンは小船の外に居り、腰まで池の水に浸かったまま私の毛布を取り上げていた。……ムカツク。ムカツクムカツクムカツク！ 誰のせいでこんな気持ちになったと思うのよ！ 私はリオンから毛布を取り戻し再度包まり船に横たわる。

「うるさい！ あっち行け！」

「は？ 何言ってるんだ。ほら、さっさと起きろ」

リオンは呆れたような声を出しながら、また私から毛布取ろうとする。何よ！ 一人にしといてよ！ 私は取られそうになる毛布をガツチリと掴み、取られないようにするがさすがに剣士であるリオンの腕力の前には歯が立たずに毛布を引っ張られていく。むく!!

「もう、放っておいてよー！ 使い魔のクセに生意気よ!!」

あまりにもリオンがしつこいから私はリオンが毛布を引っ張る瞬間に合わせて毛布に引っ付いたままリオンへと体当たりを掛けて

やった。

「のわっ！」

「うりゃっ！」

私はリオンに見事体当たりを決めて池の中へとダイブして……

「うぐっ!?!」

ゴンツと言う音と痛みと共に意識が覚醒した。私は頭を押さえながら涙目で辺りを見回す。そこはいつも見慣れた学院の私の部屋。

「あ〜う〜？ あ〜？」

少々混乱中。ゆっくりと立ち上がり体を伸ばすして深呼吸。えつと……なんだっけ？

「くっ」

私が思い出そうとしていると足元から声がする。視線を向けて見ればリオンが毛布を掴んで倒れていた。人の毛布を掴んで何やってのよ。

「ちよつとリオン。何してるのよ」

「……お前がいきなり飛び掛ってきたんだろ」

リオンは起き上がりながら低い声で言い返してきた。なんで私かそんなことするのよ？

「あた……、あー、えつと……大丈夫？」

私が文句を言おうとした瞬間、さつきまで見ていた夢を思い出した。夢の中で泣いていたことも思い出し顔をリオンから背け目元を確認。よし、大丈夫。立ち上がったリオンにもう一度顔を向けるってあれ？

「リオン、いつもの仮面は？」

「ん、さつき倒れた時に外れたか」

私とリオンは仮面が取れていったらどう方へと眼を向けると、

「あ」

綺麗に真つ二つに割れた仮面が落ちていた。

やあ、こんにちは。皆のアイドルジン様だ。……ごめんなさい、調子乗りました。さて、今俺は夢を見ている。なんで分るかって？
だって、

「宇宙空間に生身でいるんだもん」

この状況、夢以外なんでもない。前後上下左右星・星・星、つていうかデブリ？ そんな感じだ。まあ、そんなことはどうでもいい。問題なのはこれが俺の夢じゃないってことだ。今俺が見てるこの夢の本来の主とは、俺の目の前でゴミ掃除をしている女の子、俺の使い魔であるチトセの夢なのだ。

「確かに使い魔の記憶が夢として見るみたいなことあるって聞いたことはあったけどさあ、何故にこんな夢？ つてか宇宙でゴミ拾いって意味あるの？」

目の前で行われているシュールな光景。SF的ピッチリスーツを着たチトセと二人の男の子がこの辺に浮かんでいる冷蔵庫や扇風機、挙句にテレビなど様々な電化製品を3人は背中のあるランドセルぐらいの大きさの長方形をした箱から伸びているホースで掃除機のように吸い込んでいく。

「物理法則も何もあったもんじゃないな」

ホースがゴミに近づくとどんな大きさのゴミもグンニヤリと歪みながら穴に吸い込まれていく。ちよつと楽しそう。俺はそんなことを思いながら見ていたが、チトセはそうでもないらしくブーブー文句をたれ、メガネを掛けたほうの男の子から色々としたしなめられていた。

『もう飽きました！　なんで私がこんな雑務をやらなきゃいけないんですか！』

とはチトセ。

『しょうがないよー。不法投棄が酷過ぎてここらを通る船からどうにかしてくれって苦情が来たんだから』

とはメガネの少年。不法投棄ってwww

『ああもう！　マリブ、いつそのこと爆弾とかレーザーで焼いちまったほうが手っ取り早いって！』

とはもう一人の少年。俺もそう思う。

『それも行かないんだよココモ。なんでもこのデブリの中にロストテクノロジーが有るみたいなんだ。しかも厄介なことに兵器タイプの。へ々に刺激を与えたら何が起こるかわかったもんじやないよ。最悪銀河系の一つが滅びるなんてことだつて考えられるんだから注意してよ』

マリブと呼ばれた少年はゴミ掃除をしながらサラリとんでもないことを言う。がしかし、もっとトンデモナイ発言をする奴がいた。

『でもそれつて最悪の場合じやないですか。銀河なんてそう簡単に滅びませんつて、ロストテクノロジーの発動が怖いならブラックホールボムでここ一帯の星系ごと綺麗にしちやいましょうよ』

チトセだ。こいつ何言つてんの？ え？ 星系ごと？ 俺は正気を疑う発言に頭を押さえる。そんなこと許されるわけないだろ！

チトセの言葉に少年二人は無言でチトセを見る。そりゃあ呆れ……

『それナイスアイディアじゃね？』

え？

『うーん……、確かに星数個の犠牲で手っ取り早く終わらせるならいいかもねー。ちようどここら辺つて荒廃した無人惑星ばかりだし。でもバレたら説教ものだけど？』

『大丈夫ですつて。ロストテクノロジーが暴走したつて言えばOKですつて』

……ナニイツテンデスカ？ 彼らはうんうんと頷きながらチトセの提案を吟味し始めた。無いから！ 掃除が嫌だからつて星系消し飛ばすなんて在り得ないから！

「何考えてんの!？」

と俺は叫ぶか声はもちろん届かない。これは夢でチトセの記憶、つまりは……

「実際に起こったこと……だよな？」

俺は顔を青ざめさせる。チトセがアレなのは解つていたつもりだったが甘かった。俺がオタオタしてうちにチトセ達は何かしらの準備を終えていた。え？ マジで。

「いや落ち着け、これは夢なんだ。死ぬことなんて有る訳無いって」

俺は深呼吸をして落ち着く。そうだ、何慌ててんだって。俺ってバカだなー。とか笑いながら前を見る。そして視界を埋め尽くしたものは全てを飲み込む黒、音も無く、唯々吸い込む黒だった。

「……………って、怖過ぎだあ!!!」

そして俺は叫びと共にソレに吸い込まれて……

「……………ガッ!?」

眼を覚まし飛び起きた。もう寝ぼけるとか出来ない程の目覚めの悪さ、寝汗で服はぐつしよりで心臓なんて早鐘の如くバクバクと言っている。俺はベットに顔を向け寝ているチトセを見る。

「……………うくん、うみゆく…スー…スー」

夢心地というやつだろう。幸せそうに寝ている。くそつ、外見が無駄に良いだけに寝顔が可愛いじゃねーか。チトセの寝顔を見ていたらこの胸糞悪さが無くなっていくような気がした。

「あへへへえ〜。ジンさくん、早く地面に額を擦り付けてくださいよ〜」

……………気がしただけだった。俺はそつと机の上に置いてあつた花瓶を手に取り、寝ているチトセの顔面に思い切り叩きつけて起こしてやった。

姫さま来日

キキSide

「はっ！」

「せいっ！」

早朝、今日も今日とてリオンと共に鍛錬を行い、学院の庭にて何度目かの金属音が鳴り響く。ちなみに今日はタバサもおり、端っこの方でチャクラコントロールの修行をさせている。内容は簡単で足裏にチャクラを集中させタライに張った水の上に立つものである。

と言っても最近やっと自力でチャクラを練れるようになったばかりのタバサには裸足で立つてる事ぐらいしか出来ず、途中ふらついては何度も沈んだりしている。原作だと誰しも当たり前をやっているが、水上歩行ってそこその上級技術なんだよな。まあタバサなにげに才能あったし、すぐに靴履いたままでも立てる様にはなるだろう。

「あ、リオンさん。キキさん。食事の用意できましたよー」

「……ふう。もうそんな時間か」

「そうだな。おーいタバサ、飯食べるぞー」

シエスタの声に俺とリオンは武器を仕舞う。プルプルと振るえながらも何とか浮いていたタバサは声が掛るとバチャリと水の中に足が沈む。タバサには俺の事を説明した夜からちよいちよい忍術を教えている。まあ、アカデミーで習う程度だけど。

エルザは給仕の仕事があるので夜だけだが一緒になって習っている、シルフィは印が覚えられず直ぐに飽きてしまったのもう来ていなかったりする。閑話休題。

「どうだ？ 歩けそうか？」

「……無理」

厨房裏へと向かう途中、進捗しんちよくをタバサに聞いてみるといつもの無表情だが声は気落ちした感じだった。俺はヘラヘラと笑いながらタバサの頭をポンポンと撫でたら杖で叩かれた。痛い。

「皆さん、おはようございます」

「お兄ちゃん達おはよー。ごはんの準備できてるよ」

厨房裏へと入るとチトセとエルザが朝食の準備を終わらせていたところだった。……一瞬、チトセが働いていると言う事に違和感を覚えてしまった。

「そういえば、仮面はどうしたんだ？」

「ルイズに割られた」

皆で朝食を取っている時にリオンがいつもの仮面をしていなかったのになんとなく聞いてみたら、なんか朝から災難に遭っていたようだった。

食事を終わるとリオンとチトセは食堂へ行き、タバサと俺は教室へと向かう。教室に着くと、いつも通りの席に座り授業が始まるまでタバサと共に本を読む。

「ん？」

しばらくして生徒らがまばらに入ってきて騒がしくなりはじめた頃、教室内が一際騒がしくなり気になって教室の入り口付近を見るとルイズとリオン、ジンとチトセが入ってきた所だった。騒がしくなった理由としては仮面をしていないリオンに女子生徒達がキヤーカー言っているのと、ボロ雑巾のようになっているジンに憐れみの声をかけている生徒達だった。またチトセの何かに巻き添え食らったのか…、可哀想に。

「何をしているのかね君たち。もう授業の時間だ、席に着きたまえ」

リオン達が入ってきた直ぐ後、教師が入って来るなり言った。確か、ギトーって言ったか？ 生徒達は彼の姿を見るとそそくさとそれぞれ席へと着席をする。ギトー先生は一つ頷くと教壇へと移動し授業を開始した。……したんだが、いきなり自慢話を始めるは生徒煽って魔法の打ち合い始めるはと、まったく何考えてんだか。

さらに調子に乗ってきたのか大振りなしぐさで自らの系統である風を最強だの何だのと言い始めてまたも何かしらの魔法を使おうとした時、ガラリと教室の扉が開き金髪ロールのカツラを頭に乗つけたコルベール先生が焦った表情で入ってきた。

「ミスタ？」

「あややや、ミスタ・ギトー！ 失礼しますぞ！」

入ってきたコルベール先生にギトー先生は睨むがそんなことお構い無しにコルベール先生は教室を見渡して言葉を続ける。

「おっほん。今日の授業はすべて中止であります！　さらに、皆さんにお知らせですぞ」

コルベール先生が大げさに胸を張りのけぞるとカツラがツルリとスベって落ちた。ソレを見た生徒たちはくすくす笑いをし出し、ついでとばかりにタバサが

「滑りやすい」

と指を指して言った。こころなしかドヤ顔してるし。結果、教室中は爆笑に包まれて笑われている当人は顔を真っ赤にして怒鳴り始めた。

「黙りなさい！　ええい！　黙りなさいこわっばども！　大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！　貴族は……………」

うんぬんかんぬんと、マジ切れしたコルベール先生の気迫に教室内は静かになりそのままありがたい説教になり、そしてやつと本題へと入った。

なんかメツチャ長い前置きだったので簡潔に言う『お姫様が来るから身嗜み整えて表に出ろや』の事らしい。生徒たちはコルベール先生の話の聞き終わると、ざわざわと騒ぎながらもさつさと教室から退室していく。……これは俺も行かなきゃなんのか？　と言う視線をタバサに向けたら当たり前と言う表情をされた。

ジンSide

よし！　ついにアルビオンへの手紙イベント来たでー！！

「しかし、どうやって絡んだものか……」

候補としてはギーシユと一緒に盗み聞きに行くか、それかタバサちゃん達と一緒に追うかのどっちかがベストか。俺が廊下を歩きながら考えていると、

「はあ、お姫様ですか。きっと可憐で可愛いんでしょうねえ」

数歩後ろにいるチトセが頬に手を当てて、ほんわかした表情で言った。………しまった!? こいつを如何にかしなければ確実にイベントフラグがへし折れる! 俺はワクワクしていた気持ちが一瞬にして凍り付いた。

「クソツ。どうする? どうする?」

俺は小声でブツクサ言いながら歩を進める。このイベントで出来ればウエールズ殿下を生き残らせたいっと言うかそれが俺の目的だ。

「アンリエッタ姫とのフラグはどうでもいいから問題ないとしても……」

ぶっちゃけなかなか良い胸ではあるか性格が好きくないんだよなあ。ウエールズ殿下に関しては良い人だし、何より折角チート転生してるんだから助けられる人は助けたい。

「うふふふ。楽しみですね〜」

しかし、助けるための一番の障害であるこいつを如何にかしなければならぬ。が、如何にかできる自信がない、それどころか今までの経験上、余計な事をすればするほど自分に物理的ダメージとして返ってくる。もはや呪いの域である。

「くっ、考えれば考えるほど自分のボロ雑巾姿しか思い浮かべられない。何でこうなるんだよ……。いや、躊躇するな。俺は全フラグメント持ってるんだ。大丈夫大丈夫頑張れ俺」

「ジンさん、何さっきからブツブツ言ってるんですか? 気持ち悪いですよ?」

チトセが後ろから喋りかけてくる。気持ち悪いって言うな! 誰のせいであんななってると思ってるんだよ! 人目がなかったら殴ってる所だった。……自分が女性に暴力を振るうのに躊躇が無くなってる事に気づいてちよつと傷ついた。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーりーッ!」

生徒達が杖を掲げた学院の庭にて呼び出しの衛士が声高々に告げると馬車の扉が開かれる。周りの皆が息を呑むが出てきたのはマザ

リーニ枢機卿だった。周りは一気になんだよという雰囲気になり鼻を鳴らす奴もいるが枢機卿は意に介した風もなく馬車の横に移動すると続いて降りてくる王女の手を取った。

王女が可愛らしい笑顔で手を振ると先ほどまでとは打って変わって生徒たちはわつと歓声が上がった。しかし、そんな中

「あら？ 存外普通ですね。まだ私の方が綺麗で可愛いんじゃないやありません？」

チトセはケツと唾を吐いた。殴りたい。本来ならギーシュとの決闘イベントの時に仕掛けた黒の^{ブラック・アトラクション}引力のESPウィルスで言う事を聞かせるはずが無効化されてしまっている。何故無効化されたかと言おうと『え、だってウィルスなんですよね？ だったら私、直ぐに抗体出来ますから♡』らしい。

こいつ、本当に人間なのだろうか？ 他にも黙らせる方法はあるのだが、ほぼ物理的になってしうのでこの場で使うには問題しかない。

「チトセ。頼むから少し黙ってくれよ」

「私、この前街で見たネックレスが欲しいですね」

「買えと？ ってか会話がおかしい。しかし、この場で騒ぐのは得策じゃないし……。くうツ！ 悔しいがしようがない、イベントフラグを建てるには我慢するしかないんだ！

「わかった。好きなもの買ってやるから静かにしてくれ」

「わかりました♡」

一瞬だがニヤリと目元が歪んだ笑顔をしやがった。この状況で俺が騒げないの分かってて約束させやがった！ ちくしょう！

その後、学院長と共に王女様と枢機卿は学院内へと移動し、他の生徒及び教師たちも王女らが完全に見えなくなっただけから各自解散となった。そして夜となり、俺はチトセを^{フレグランス}香で眠り状態&麻痺状態にし、さらに^{カンダタストリング}鋼鉄斬糸で全身をグルグル巻きにしてやる。よし、準備は済んだ。行動開始だ。

姫さま訪問

リオンSide

「……ルイズ、昼間からフラフラとして煩わしいぞ。少しは落ち着いていられないのか」

僕は読んでいる本を閉じてルイズに声をかける。が、当のルイズには声が届いておらずベットに座ってボーっとしては立ち上がり部屋を歩き回ったと思えばまたベットへの繰り返しである。はあ、まったく意味が分らん。

「おい、ルイズ。落ち着けと言っているんだ」

僕は先ほどよりも少し大きな声を出して注意をするがやはりルイズの耳には届かない。流石に鬱陶しくなってきたので僕は椅子から立ち上がりルイズをたしなめようとした時、部屋のドアがノックされた。ただしそれは普通のノックではなく何かの合図のように長めに2回、その後短く3回というものだった。

「……ッ！」

するとそのノックを聞いたルイズは先ほどまでの夢遊病者のようなフラフラしていた意識を戻し、急いでドアへ近づきドアを開いた。そこに立っていたのは真っ黒な頭巾を被った娘だった。娘は辺りを見ながらいながら部屋へと入ってきた。

始めは賊とも思ったが娘の動きはどう考えても一般人の物であったためとりあえずは様子を見ておくことにする。

「……あなたは？」

ルイズが頭巾の娘に驚くが、娘は口元に指を立てて静かにと言うジェスチャーをし、懐から杖を取り出し呪文を唱えようとしたので

「そこまでだ」

「……ッ！」

喉元に剣を立てて詠唱を止めた。いくら賊では無いとしても魔法までは使わせる気は無い。娘はビクリと一瞬体を震わせ硬直した、と同時に娘の頭巾が外れる。すると

「なっ!？」

ルイズが娘の顔を見て驚く。その娘は昼間、学院にやってきた王女であった。

「……………」

「ひ、姫殿下!? あッ! リオン何やってるのよ! 早く剣をどけなさい!」

僕は剣を王女の喉元から剣をひき仕舞う。

「も、申しわけありません姫殿下! このバカ使い魔がご無礼を、この罪は「いいのですよ」ですが!」

「私は大丈夫です。ですが、まず先に行なっておいてしまいたいことがあるので」

ルイズのまくし立てに王女は再度杖を上げて呪文を唱えた。

「探知魔法ディテイクトマジック?」

「どこに耳が、目が光ってるかわかりませんからね。…これで大丈夫。お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

王女が魔法を使い終わったのか、ルイズに向き直り笑顔で言った。交友があるのか? まあ公爵家の人間なのだからあつても不思議でもないか。

しかし、なぜ王女が護衛も付けずに一人でこんな所に? 僕が考えている間にルイズと王女は互いに抱き合いながら懐かしあつたり、昔の思い出を語らつたりと積もる話をしている。ハッキリ言つて姦しいことこの上ない。女共はどうしてこうも無駄話が好きなんだ?

「あら? そういえばこの殿方は? あ、もしかして! あらあらわたくしつたらお邪魔だったかしら」

王女が僕の事をルイズに訊ねるが一人で勝手に盛り上がり始める。はあ、まったく。

「な、ちちち違います姫さま! 彼はただの使い魔です! 決してそういう関係では!!」

王女の言葉にルイズは顔を真っ赤にしてブンブンと首を振り必死に否定をする。

「使い魔? 人にしか見えませんが……」

「人です。姫さま」

「……そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「そ、そんなことは……その……」

ルイズの奴は王女の言葉に気まずそうに顔をそらしながら言い返そうとしたが言葉が出ないようだった。王女はそんなルイズの様子を見て微笑んだ後、タメ息をついた。

「姫さま、どうなさったんですか？　先ほどからタメ息ばかり何度も……」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね……、いやだわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるようなことじゃないのに……、わたくしつてば……」

「おつしやってください。あんなに明るかった姫さまが、そんな風にタメ息をつくってことは、なにかとんでもないお悩みがおありなのでしょう？」

「いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れてちょうだい。ルイズ」

ルイズと王女のやり取りに僕は静かにタメ息をついた。話しの内容に頭が痛くなったからだ。ルイズもルイズだが、この王女も相当なものだ。よくこれで政務が勤まるものだな。

その後の展開も酷いものだった。この王女、国の機密だろう話をただ友人だという理由だけでルイズに話し始めたのだった。やれ、ゲルマニア皇帝と政略結婚をするのだ、自国の政治情勢が危ないだの、あまつさえ、

「もしかして、姫さまの婚姻をさまたげるような材料が？」

「おお、始祖ブリミルよ……、この不幸な姫をお救いください……」

「言つて！　姫さま！　いつたい、姫さまの婚姻をさまたげる材料ってなんなのですか？」

「……わたくしが以前にしたためた一通の手紙なのです」

と、こんな何も盗聴の対策もしていない部屋で、それこそ一国の未来を左右するようなことを平然と喋りだす始末。考えられん。

内容は簡潔に言えば、幼い頃にアルビオンの王子に宛てた恋文があ

り、それが反乱軍に見つかり公表されると婚姻が破綻する、と言う事らしい。ハッキリ言えばそんなもの捏造と言ひ張れば何とでもなるし、政略結婚である以上、互いの気持ちなど関係ないのだが。

二人の様子を見る限り理解していないことが分る。そして、

「では、姫さま、わたしに頼みたいことというのは……」

「無理よ！ 無理よルイズ！ わたくしつたら、なんてことでしよう！ 混乱しているんだわ！ 考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険なこと頼めるはずがありませんわ！」

「何をおっしゃいます！ たとえ地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫さまの御為とあらば、何処なりとも向かいますわ！」

姫さまとトリスティンの聞きを、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには「おい。バカなことを言ってるんじゃない！」…ツ、いきなり何よ

流石にルイズと王女の言動を傍観する訳にはいなくなり、僕は口を挟んだ。

「お前はバカか。戦場での知識も経験もない、ましてや軍兵としての訓練もしていないお前が行ったところでその手紙の回収などできるはずないだろ」

「なっ！ バカにしなで！ わたしは由緒あるヴァリエール家の……」

「だから何だ？ 戦場で名を出せば相手が跪くとでも思っているのか？ それどころか公爵家の人間と分れば最悪、人質として利用するために攫われて用済みになれば慰みものか殺されるだけだ」

「……ッ」

僕が戦争で起こりうることを簡単に説明してやるとルイズは表情を固くする。

「キサマもそうだ。一国の王女とあろうものがこんな所でペラペラと国家機密であろうことを喋るなど、何を考えている。大体、ルイズのことを友人と言ひながら、その友人を死と隣り合わせの戦場へと向かわせようなどと。いくら公爵家だからと一学生程度がそんな所に向かえばどうなるかぐらい分るだろう？」

王女は僕の言葉に対しグツと口をつぐんで俯いてしまう。僕は夕メ息をつき、そんな王女に呆れていると

「リオン！ 姫さまに失礼じゃない！ 姫さまはこの国のことを思い、こうやってわたしの所まで相談に来たんじゃない！ それに姫さまは部屋に来てから話す前にディテイクトマジックを使ったじゃない！ 話しが洩れることなんて……」

「ほう、そうか。ならこれはどう弁明するんだ」

そう言っつて僕は扉へ足音を立てずに近づき、一気に開け放つ。すると、

「のわっ！」

「おおっとー！」

と二人の男、ギーシュとジンがそこには居た。

ルイズSide

リオンの冷たい視線が私と姫さまに向く。確かにディテイクトマジックは魔法による盗聴を探すけどそれ以外には反応しない。つまり立ち聞きなんてされたら意味が無いのだ。

「あ、あんた達！ 立ち聞きしてたの？ 今話を！」

わたしはリオンの冷たい視線をうけながらも、とりあえず扉の前で倒れているギーシュと突っ立て居るジンに怒鳴りつけた。しかしギーシュはわたしの言葉など聞いていないのか姫さまのそばへと素早く移動し、頭を下げる。

「姫殿下！ その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」

「ちよつと、ギーシュ！」

ギーシュの行動に驚き、わたしは動揺した。リオンもギーシュの言動に頭を押さえて夕メ息をついている。

「グラモン？ あのグラモン元帥の？」

「息子でございませす。姫殿下」

姫さまの言葉にギーシュは顔を上げすぐさま返答をする。わたし

の話の聞かないギーシュにどうしようかと思っていると、ジンがわたしの肩を叩いた。そうだ、ジンなら……。

「姫殿下。お久しぶりでございます。ジン・アルベルトです」

「……………ええ、ええ。ジン・アルベルト、お久しぶりです」

姫さまがジンを見て呆然とした後、直ぐに我に返り言葉を返す。まあ当たり前だと思う。だって

「ジン。えっと……………その……………何故そんなにボロボロな姿なのですか？」

「すみません。自分の少々使い魔の教育をしております。気にしないでください」

ジンの姿はまさにボロ雑巾の如くだった。服はあちこち破れ焦げ目もあり、素肌のところは切り傷火傷に打撲痕。最後に頭部から出血していたのか血を拭いた後があった。本当に何があったの？

「それより姫さま。その任務、俺も仰せつかいたいのです」

「えー！」

「まあ！ 本当ですか」

とわたしは驚き、逆に姫さまは表情を明るくした。

「ちよつと！ 何を言ってるのよ！ この任務はわたしが頼まれたのよ！」

「おい！」

リオンが叫ぶがそんなのは無視する。

「しかし、これはとても危険な任務。その、学生であるあなた達に任せてしまうのはその……………」

姫さまはチラリとリオンを見て顔を伏せる。わたしもリオンを見ると彼はこちらを呆れ混じりの目で睨んできていた。そ、そんな怖い顔しなくてもいいじゃないのよ。しかし、ギーシュとジンは気づいてないのか、二人とも姫さまの為なら危険な任務ぐらいなんでもないと、声高々にアピールしはじめたのだった。

出立

ルイズSide

早朝、日も上がらぬ頃にわたしたちは学院の門の前で馬に鞍をつけて出発の準備をしている。昨晚のわたしの部屋での一悶着。姫さまからの任務を頑として領かなかったリオンをジンとギーシュがなんとか説得をして、苦虫を噛んだような表情だったが了承させた。

「別にあそこまで嫌な顔することないじゃない」

わたしは鞍をつけながら小さくつぶやきリオンを見る。リオンはもう既に鞍をつけ終えていて、腕を組んでたたずんでいた。ぱつと見た感じはいつものムツツリ顔だけど、不機嫌オーラが微妙に出てる。

「……」

「……ッ！」

ふと、リオンと目が合いわたしはすぐに目を逸らす。ってなんでわたしが目を逸らさないといけないのよ！ かといつてもう一度見るのもなんだかあれだし……

「なあルイズ、ちょっとお願いがあるんだが……」

「……なによ」

わたしが悶々としながら最後の留め具を付け終えたところにギーシュが困り顔でたずねてきた。

「その、ぼくの使い魔を連れて行きたいんだ」

「使い魔を？ 別に構わないと思うけど何処にいるの？」

「ああ、ここに居るよ」

わたしが辺りを見回してたずねると、ギーシュは足で地面をトントンと叩いた。すると、地面の土が盛り上がり茶色い生き物が顔を出した。

「ヴェルダンデ！ ああ！ ぼくの可愛いヴェルダンデ！」

「それってジャイアントモール？ それがあんたの使い魔なの？」

「それって言うな。この可愛い可愛いぼくの使い魔ヴェルダンデだ！」

「ああ、うん。そうね」

わたしがギーシュの奇行に少々引きながら使い魔に聞くと、ギーシュはクワツつと目を見開き言い返してきた。わたしは適当に返事を返してヴェルダンデを見る。モグラよね。つまりは地面の中を進むってことじゃない？ わたしたちの行き先はアルビオンな訳だしモグラなんて連れて行けるわけが無い。

「ねえギーシュ。その子は連れて行けないわよ」

「へ？」

ヴェルダンデとよく分らない語らいを始めて自分の世界へと入ってしまったていたギーシュにわたしは声をかけ直す。

「だって行き先はアルビオンなのよ？ それにラ・ロシエールまで馬で行し無理よ」

「そ、そんなあ。お別れなんて、つらい、つらすぎるよ……、ヴェルダンデ……」

ギーシュがヴェルダンデに再度抱擁をしようとしたときヴェルダンデの鼻がヒクヒクと動き、そしていきなりわたしの方を向き、突進してきた。

「えっ！」

わたしはいきなりのことに反応できずにヴェルダンデによって押し倒されてしまった。

「ちよ、なっ！ 止めなっさい！ ギーシュ！ このモグラどうにかしなさいよ！ って指輪はダメ！」

わたしはモグラを何とかしようとするがわたしの力ではヴェルダンデの巨体を退かす事などでできず、どんどんわたしの上に覆いかぶさってくる。正確にはわたしの指に嵌めてある姫さまから預かった指輪へと向かってきていた。ちよっ、待って！ 重い、苦しい！

「何をやっている」

「大丈夫か？」

わたしが苦しんでいるとリオンの冷やかな声とジンの笑いを堪えたような声が聞こえた。近くに来てるんだったら助けなさいよ！

バカッ！

「どうやらヴェルダンデが指輪に興味を持ってしまったらしくて。

ヴェルダンデは宝石や鉱石が好きで、特に希少なものや高価なものには目が無いのさ」

「そういえばジャイアントモールは鉱石集めが得意だったな。なるほどだからか」

ギーシユとジンがうんうんと頷きあつて一向に助ける気配が無いし、リオンに関してはもう完全に呆れてしまっている。というより更に不機嫌度が増してるように見える。

わたしは姫さまから預かった大切な指輪を守るためとにかくヴェルダンデから手を遠ざけように暴れていると、突風が吹きヴェルダンデをわたしの上から吹き飛ばした。

「誰だッー」

ヴェルダンデを吹き飛ばされたことにギーシユが激昂して喚くと朝もやの中から、長身の帽子を被った貴族が現れた。わたしはその姿を見てすぐさま立ち上がり身嗜みを整える。だってそこに居たのは……

リオンSide

僕は突風が吹いてきた方に目をやると一人の人間が歩いてきていた。羽の飾りのついた帽子を深く被っており、その手にはレイピアを持っていた。いや、レイピア型の杖か？

確か昨日、鷲の頭と獅子の体の獣に乗っていた騎士のはずだ。何故こんな時間に此処へ？ 僕は腰の剣に手を置きルイズの近くへと移動をして、いつでも行動できるようにしておく。

「貴様、ぼくのヴェルダンデになにをするんだ！」

ギーシユが胸ポケットから薔薇の形をした杖を引き抜き男に突きつける。が、男は杖を素早く振るい、ギーシユの杖を跳ね飛ばした。「僕は敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね。きみたちだけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ一部隊をつけるわけにはいかぬ。そこで僕が指名されたってワケだ。だから、そちらのきみもそう警戒しなでくれ」

男はレイピアを仕舞いながら、僕の方を見て言ってきた。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

男は帽子を取り一礼をしながら自己紹介を行なう。しかし、と僕はタメ息と共に頭を押さえる。

昨夜の王女の話では自分に味方はいないと言ってこの任務を押し付けてきたはずなのだが。まさか頼りないからと、いきなり極秘の任務を直属の衛士だからと言って簡単にバラしてしまうとは。あまつさえ同行させるなど、何を考えているんだあの女は。

ならば始めからこの男に頼めば良かっただろう。僕は再度嘆息した後、ワルドと名乗った男を見る。動きを見る限りそれ相応の実力者と言う事が分る。ワルドは僕の視線にフッと笑みを浮かべる。

「ああ、さっきのモグラの事はすまない。なにせ婚約者が襲われているのを見てみぬ振りはできなくてね」

「ワルドさま……」

ワルドがそう言うと、ルイズは頬を赤く染めて名を呼ぶ。なるほど、まあ珍しい事でもないか。

「久しぶりだな！ ルイズ！ 僕のルイズ！」

「お久しぶりでございます」

ワルドがルイズに笑顔で言うとルイズもワルドに近づき返事をする。

「相変わらず軽いなきみは！ まるで羽のようだね！」

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ルイズを抱きかかえたワルドはルイズと一通りじゃれあつた後、ルイズを下ろし僕らの紹介を頼んだ。

「あ、はい……、ギーシュ・ド・グラモンと使い魔のリオンです。それとジンです」

ルイズが僕らを紹介するとワルドがジンの名に反応した。

「何、ミスタ・アルベルト？」

「お久しぶりです、ワルド子爵」

「おお、アルベルトくん！ 久しぶりだね！ ルイズに気を取られて

全然気づかなかったよ」

と、ルイズに向けていた人懐っこい笑みを浮かべてジンへと話しかけた。どうやら二人は知り合いらしく、軽く昔話をした後、次に僕のところへとやってきた。

「やあ、きみがルイズの使い魔かい？ 人とは思わなかったな。僕の婚約者がお世話になっているよ」

「……………」

ワルドが気さくに話しかけて来たが僕は一瞥して喋ることは無いと態度で示した。

「ちよつ、リオン！ 失礼じゃないの」

「まあまあ、きつとアルビオンに行くことに緊張しているのだろう。なあに！ 何も心配なんてないさ。君はあの『土くれ』のフーケを捕まえたんだろ？ その実力があれば、なんだってできるさ！」

僕の態度をそのように解釈したワルドはわっはっはと大口を開けて笑い僕の背を軽く叩いてくる。まったくもって鬱陶しい。

ワルドは一通り話し終わると、少し離れた所へ移動し口笛を吹いた。すると、空から一匹の獣、グリフォンが現れた。ワルドは身軽に飛び乗ると手の差し伸べて

「おいで、ルイズ」

と、ルイズを誘った。ルイズはそれにちよつと躊躇ちゆうちよした様子で俯き、少しモジモジとした後にワルドに抱え上げられてグリフォンへと跨った。

「では諸君！ 出撃だ！」

ワルドは手綱を握り杖を掲げながら叫び、グリフォンを走らせ始めた。僕たちもグリフォンを追うように馬に跨り走らせる。

まず、アルビオンに行くためには一旦ラ・ロシエールという港町を経由しなければならぬらしい。そして港町までは本来馬で2日程かかるそうだ。が、しかし、ワルドはそんなことをお構い無しにグリフォンの能力に任せての速度を上げていき、どんどん先へと進んでいき、昼を過ぎた頃にはもう見えなくなってしまった。

「つて、リオン！ 君がゆっくり走り走っているからぼくたち置いていか

れちゃったじゃないか！」

「……はあ、別にかまわないだろ。実際、ラ・ロシエールまでは2日かけていく予定なんだ。無駄に体力を使うことも、馬を潰す意味も無い」

「まあ、確かにな。それに早くついたところで多分船は出てないだろうし」

ギーシュの悲鳴にも似た抗議の叫びに僕とジンはいり返す。

「む、それはそうなんだが。ところでジン。船が出ないってどう言う事なんだ？」

と、ギーシュも納得すると同時に船のことを質問する。それは僕も気になったところだ。

「ああ、それはな。ちょうど明後日が月が重なる『スヴェル』の夜なんだ。そしてその翌日の朝にアルビオンがラ・ロシエールに一番近づく日になる。だから風石を節約するためにアルビオン行きの船は4日後の早朝まで出ないんだ」

なるほど。文字の勉強のついでにこの世界の事を知るために色々調べていた時に呼んだ事がある。浮遊大陸アルビオン。名の通り遙上空に浮かび移動している大陸である。

そして、その空高く浮いている大陸にいくために風石と言う風の力が固まった鉱石を使い船を飛ばすことで行き来をしているのだそうだ。そういえば例の遺跡が有る場所だったな。

「ならば、尚更急ぐ必要もないな。先に行った二人には待ってもらえばいいだけだ」

「ん、しかし君はそれで良いのかい？」

僕がそう結論を言うと、何故かギーシュが妙な事を言ってきた。

「何を言っている？ 良いも悪いもないだろう。急いだ所で意味など無いと……」

「ああ、いや、そういう事ではなくでだね。君のご主人様、つまりルイズのことだよ」

「？」

僕はギーシュの言っている意味が理解できず首を傾げる。ルイズ

がなんだというのだ？

「あー、えつとだね。だつてルイズは今、あの魔法衛士隊の隊長であるワルド子爵と一緒になのだよ。しかも婚約者らしいじゃないか。心配ではないのかいってことなんだが」

「別に何の心配もないだろう。例えば賊に襲われたとしても奴の実力なら簡単に蹴散らすだろうし、男女としての仲なら当人達の問題だ。まあ、任務中に浮かれるような事は流石にしないだろう」

「そ、そうだね。あははは。……………本当に気にしてないんだね」

僕の言葉にギーシュはゴニョゴニョと言いながら微妙な表情で笑い返してくる。まあいい。さて、日も傾いてきたことだし、そろそろ野営の場所を探したほうがいいだろう。僕がそう提案しようと二人に声を掛けようとした時、ゴウツと何かしらの巨大なものが風を切る音がした。僕は咄嗟に振り仰ぐとそこには青い竜が僕たちを見下ろしていた。

盗賊の強襲

ルイズSide

「ねえ、ワルド。やっぱり戻りましょう。みんな全然ついてきてないわ」

私はワルドに抱えられるような格好でグリフオンの背から後方を見て言った。

「別にかまわないだろ。それにこの程度で遅れるようじゃ足手まといにしかないし、置いていった方がいい」

でもワルドはチラリと後ろを見ては直ぐに前を向いてリオン達を置いていくと言いつ返してきた。

「足手まといって……。そんな言い方ないと思うわ。彼らは仲間よ。それに使い魔を置いていくなんて、メイジのすることじゃないし。なにより姫さまから預かった手紙はリオンが持っているのよ?」

私はワルドの言葉に少し困惑しながらも言い返す。するとワルドは目を見開いて驚いた。

「なんだって? それはマズいな。しかし、今から引き返すのも……。仕方ない、ラ・ロシエールで待つしかないか」

「ごめんさい。先に言っておくべきだったわ」
「なにルイズが謝ることじゃないさ。しかし何故手紙を彼に?」

私は手紙のことをワルドに謝るとワルドは笑顔で気にする必要は無いと言ってくれた。そしてその後にはワルドは手紙のことが気になったのか、そのことを聞いてきたので私は

「今朝、馬の準備をしている時に言われたの。私に指輪と手紙、両方持たせておくのは心配だからどちらか自分が預かるって。だから手紙の方を……」

そんなふうに答えた。姫さまから預かった指輪と手紙。指輪は王家に伝わるものだからこれを見せれば姫さまの使いだと判ると渡され、手紙はアルビオンの王子であるウェールズさまに宛てて姫さまがしたためたもの。内容はわからないけど、昨日の夜の姫さまの顔からどういう気持ちで書いたのかはなんとなくだけ察しがつく。実際

はりオンに言われた時に沢山文句を言ったのだが……

「言いくるめられてしまったと」

ワルドはその際のことを詳しく聞いたら苦笑していた。

「言いくるめられたというか…何というか…」

「ははは、彼とは仲がいいみたいだね。もしかして恋人なのかい？」

「こ、恋人なんかじゃないわ！」

ワルドがいきなりとんでもないことを言ってきた。私は一瞬、ホントに一瞬だけ動揺したけど……いやいや、動揺なんてしてないけど！
りオンと恋人とかありえないから!! つてそうじゃなくて! つてか誰に言い訳してるのよ私。とちよつとしたパニックを起こしたが、頑張つて顔に出さずになるべく普通に淑女らしく済まし顔でワルドに言い返す。

「そうか。ならよかった。婚約者に恋人がいるなんて聞いたら、ショックで死んでしまうからね」

「お、親が決めたことじゃない」

ワルドは笑いながら冗談めかしの言葉を返してきて、私もなんとか心を落ち着けて会話を続けた。話していた内容は何のことは無い昔話だ。幼い頃によく怒られて泣いていた私を慰めてくれていたことや、一緒に遊んでくれていたことなど、色々とだ。

「ランスの戦で父が戦死した後、爵位と領地を相続して街を出てからは軍務で忙しく戻ってくる事が出来なかった。君に会えない日々は寂しかったよ」

「もう、ワルドったら」

私は頬を赤くして、拗ねたように口を尖らせる。そして談笑しているうちに私たちはラ・ロシエールが見える程までの距離に着いており、街の手前の谷間を進んでいた時、ボウウ! と言う音と共にファイヤーボールが飛んで来た。

「キャッ!!」

「賊か!？」

最初に飛んで来たファイヤーボールを皮切りに崖の上から大量の矢と魔法が飛んで来た。ワルドは攻撃の降り注ぐ中グリフォンを巧

みに操りながら腰の杖を引き抜き、飛んでくる攻撃を躲し、叩き落とし、時に魔法を唱えて反撃をするが、攻撃の手が休まる気配が無い。「くっ、見えない相手に攻撃を当てるのは中々難しいものだね」

ワルド笑みを浮かべながら軽口を叩いて私を安心させようとしているみたいだけど、私でもこの状況はマズイってことは分る。そして原因も分る。私だ。私が一緒にグリフォンに乗っているからワルドは自由に動けないでいるに違いない。それなら……

「ワルド！ 私を降ろして！ そうすれば自由に動けるでしょ？」

「何？ そんなこと出来るわけないだろ。そんなこしたら君はいい的になってしまう」

「でもッ！」

「大丈夫だ。このぐらい何とかできなくて何が魔法騎士隊だ」

ワルドは笑顔のまま杖を振るい崖の上に魔法を放つが一旦攻撃が止むだけで賊たちを退けるには至らない。このままじゃ……。私は不安になって目を瞑ってしまう。

そして思い浮かぶのはいつも無愛想な顔をしたリオンのこと。なんで近くに居ないのよ！ ご主人様がこんな危機に瀕してるのに！……助けて、助けなさいよりオン！

「うわあー!!」「助けてくれー!!」「なんだこれは!!」「食べないでくれッ

!!」「アッー！」

「え？」

「む、何が？」

突如として崖の上から叫び声が上がると同時に攻撃が止んだ。私は瞑っていた目を開けて怪訝な表情をしたワルドと共に崖の上を仰ぎ見る。すると、崖の上から幾人かの賊と思われる人間が落ちてきたかと思うと直ぐ後に青い竜が現れた。

「えっ、あれって……」

リオンSide

「がりゆうせん臥竜閃！」

僕はシルフィードから飛び降り、そのまま空中で技を放って下に居る賊たちを斬り倒して着地をし、

「フツ、はあッ！ 空襲剣！」くうしゅうけん

さらにそのまま回りの賊たちに攻撃を仕掛けていく。賊たちはいきなり現れた僕たちに混乱するも敵だと分るや否や、すぐさま剣や弓矢を構えてくるが

「フレイム・ボール！」

「ファイヤーボール！」

上空からジンとキュルケが魔法を放ち、賊たちを吹き飛ばしていく。

「うーん、反応がいまいちな。もうちょい調整しないとなあ」

また他の場所ではどういう仕組みなのかは分らないがキキが操っている人形と鎧が賊たちを斬り刻んでいた。

結果、賊たちはあつと言う間に駆逐され、動ける奴等は自分だけと逃げていつてしまった。

「まったく、迷惑をかけてくれる」

僕は剣を仕舞い、崖を滑り降りてルイズ達の下へと移動し、他の奴等もシルフィードと共に崖下へと降りてきた。

「助かったよ。賊を倒してくれてお礼を言うよ」

下に降りるとワルドはグリフォンから降りて笑顔で僕たちにお礼を言いながら近づいてきた。

「その…ありがとう。でもどうやって、と言うより何でキュルケたちと？」

ルイズもワルドの後に続いてグリフォンから降りて小走りに近づいてきて、シルフィードの背に乗っているタバサ達やワルドに言い寄っているキュルケを見ながら聞いてきた。

「お前たちが僕らを置いて先に行行ってしばらくした後に会ったんだ。何でも朝がたに僕たちが出かけるのを見て追いかけてきたらしい。それでそのままシルフィードに乗せて貰い、運んでもらった」

「追いかけて来たって…。これはお忍びの任務なのに。何考えてるのかしらあいつ！」

ルイズは僕がキュルケ達が居る理由を話すと、不満げな表情をした後、キュルの所へと行き彼女に文句を言い始めた。僕はそんな様子を見て小さく嘆息する。こうも簡単に同行者が増えたり、他者に感づかれる様な物をお忍びとは呼ばん。

「ああん、ダーリンどうしたの？ そんな暗い顔して。あ、もしかしてあたしが彼に構って嫉妬でもしてくれてたのかしら。もう、ダーリンたら！ うれしいこと言ってくれちゃって！」

この任務の雑さに頭を痛めていると、キュルケが近づいてきて喋りかけてきた。相変わらずの姦しきでキュルケは勝手に自分で盛り上がりつつ引っ付いてくる。まったく、鬱陶しい。

「そういえば、礼を言っただけだったな。ここまで運んでくれたこと、感謝する」

「あらやだ。別にいいわよ。あたしたちだつてあの子を追いかけたんだし。それに運んでくれたのはあたしじゃなくてタバサだし」

僕がキュルケを引き離してから運んでくれたことに礼を言おうと、キュルケは何でもないと返してきた。

「ちよつとキュルケ！ 何リオンに引っ付いてるのよ!! リオンは私の使い魔よ離れなさい！」

僕とキュルケが話していると、ルイズが怒鳴りながらワルドたちのところから戻ってきた。

「別にいいじゃない。それとも何？ 婚約者がいるくせに嫉妬してるの？ これだからヴァリエールの人間は」

「きいっつい!! うっさいわね！ いつも発情してるあんたに言われたくないわよ！ さっきまでワルドに言い寄ってたくせに。まあ、相手にされてなかったみたいだけどね」

「何よ、人を盛り^{さか}りのついた犬みたいに言わないでよ。発情じゃなくて恋に燃えているのよ！ それに彼に相手にされなかったからダーリンの所に来たわけじゃないわよ。彼、なんだか目が冷めててつまんないのよ」

「あら、言い訳？ ま、しょうがないわよねー。ワルドは野蛮なゲルマニア人と違って品行方正なトリストインの貴族なわけだし」

「そう意味じゃなくて……。んー、まあ、もうそれでいいわよ」

この二人は顔を合わせたら言い合いをしないと気がすまないのか？ 僕は小さなタメ息を付き、二人を引き離す。

「そこまでにしろ。まったく、お前らはもう少し静かにできないのか？」

「な、何よ！ キュルケの味方するつもりなの!？」

「そうじゃない。まったく。ところで、あいつらと何を話してたんだ？」

僕はワルドたちの方に視線をやり、ルイズに尋ねた。

「むー。なんか賊の目的を聞き出してみたい。タバサの使い魔が言うにはただの物取りだって」

「物取りか」

本当にそうなのか？ 行商人や複数人の旅行者を狙うならまだしも、たった二人で目に見えて軽装であり、しかもグリフォンに乗っている相手を狙うだろうか。確かにあれだけの大人数で掛ればルイズという荷物を抱えたワルドを殺すことはそう難しくなかっただろう。

だが、二人を殺したところで取れるものなどが知れている。少数であればまだしも、あれだけの大人数で襲うなど、どう考えても割に合わない。

なにより、キキがそんなことに気づかない訳が無い。何を考えている？ 僕が賊の事を考えていたら

「さあ、君たち。そろそろ行くよ。どうやら賊たちはただの物取りだったようだし。もう襲ってくることは無いだろうが、なるべく早めに街に入っておこう」

ワルドがグリフォンを引いて僕たちに声を掛けてきた。賊達の事は後でキキに聞くとして、確かにいつまでも此処にいるのも時間の無駄だ。僕は一言そうだなと返答し、キュルケと共にシルフィードへと乗り、ルイズはワルドに手を引かれグリフォンへと二人で跨った。そして、ワルドの先導のもとラ・ロシエールへと向かった。

宿屋で一泊

ジン Side

「アルビオンに渡る船はジンの言ったとおり、出せないと言われてしまったよ」

ワルドは困ったという表情をしながら席に着き俺らに話した。

ラ・ロシエールに俺たち一行が着いてから女神の杵というこの街で一番の宿をとり、一階にある酒場で夕食を摂ることになった。それぞれが料理を注文をした後、ワルドは料理がくる間にアルビオンへと行く船を手配する為に棧橋へと交渉をしに行き、ルイズもその後について行っていたのだが、案の定だったようだ。

「本来は4日後の出航予定なわけだからね。アルビオンまでの距離もあるし、風石の積載量の関係もあるからな」

「ああ、船員にも同じようなことを言われたよ。でも何とか交渉して明後日の早朝には出してもらえるようにしてもらった」

ワルドがそう言いながらグラスにワインを注いで、それを一口含む。

「急ぎの任務だったのに……」

「文句を言ったところで無理だというのだからしょうがないだろ」

ルイズはそのことに不満がるらしく口を尖らせており、リオンに窘められていた。たしな

「じゃあ、明後日までは一休みだな」

俺がそう言って話をまとめて、各自食事を再開する。まあ、話している間も自分は関係ないとはかりに飯を食い続けてる人は居たけど、タバサちゃんとかキキとか。……チトセとか。

ってかなんでチトセが居るのさ!? ホント勘弁してくれよ! 今朝方、ガンダダで繭みたいにして、さらに氷のフラグメント使った氷の中に閉じ込めて、トドメとばかりに香のリリステンプレートションを氷内に充満させたのに……。

「な、なあ、チトセ? お前さ、どうやってあの状態から外に出たんだ?」

俺は横で料理をパクついているチトセに恐る恐る問いかける。チトセはキョトンとした表情で一旦食事を止めて

「ん。ああ、まったくアレから抜け出すの苦労しましたよ。何てことしてくれるんですか。こんな楽しそうな催しのに可憐な美少女である私を置いていくなんて、男性としてダメダメじゃないですか」「うん黙れ。そんなこといいから抜け出した方法を言えや」

俺は笑顔でチトセの戯言を切って捨て、本題を促す。チトセはそんな俺の態度にふくつれ面になり、むーとか唸りながら右手を頭部へと伸ばし、一本の髪留めを引き抜いた。見た目はシンプルな簪かんざしであり、丸いピンクの珠が3つほど装飾品としてついていた。

「これであの変な糸と氷を切り裂いたんです」

「は？ それでどうやって？ 実は隠し刃が仕込んであつてそれどこ言うなよ。そんなもんじゃ傷すら付けられないはずなんだか」

俺が不審げな眼差しで見っていたら、チトセは人を小馬鹿にした様な表情と気持ち見下したような態度で鼻を鳴らしてきやがった。ウゼエ……。

「まったく、これだから辺境の田舎惑星の時代遅れ魔法使い(笑)貴族はwww。説明の途中なんですから最後まで聞いてくださいよ。これはですね、ロストテクノロジーと言われる物で、名前を超次元空間割断刃と言います」

……なにそれカッケェンだけど！ 超次元空間割断刃つて。なにその必殺武器みたいな奴!! 俺は表情はナニソレーみたいな冷めた表情を作っているが、内心はめっちゃドキワクもんである。形が簪なのが残念だなあ。ナイフとか小太刀とかだつたらもつと良かったのに。

チトセは簪に付いてるピンクの珠の一つを弄ると簪の先端3〜4 سانتほどが黄緑色に光り始めた。なるほど、実際に刃が出るんじゃないんだ。俺はへえと興味があるような無いような曖昧な返事を意識してしてみる。はよはよ説明の続きを！

「この光っている所が刃となっていて、ここで任意の物を切断する事が出来るんです」

「ふーん。……ん？ んんん？ まあ刃なんだから物を切るのは当たり前だし、それ以前にアレは物理的に切るのは無理だと何回も……」
「いえ、物を切っているというより空間や次元そのものを切っているんです。それで結果、そこに有った物も切れてしまうって感じですね。ですから物の強度とか大きさとか、まあそういう色々な事に関係なく切ることが出来るんです。なのでいくらあの糸や氷がいくら硬かろうがなんだろうが関係ないんです」

それ何てチート武器？ それすんごくヤバイ物じゃね？ 確かにカツコイイけど、それって絶対にこいつが持つてちやイカンもんだろ！

「それって……、あ、安全、なのか？ つまり何でも切れちまうワケだろ？」

「ああ、これは一番小型なので出力も小さく、刃先も短いので切れても大体2〜30メートル程度の範囲ですし、スイッチ入れて振り回さない限り大変な事にはなりませんよ。確かに昔ミルフィーユ先輩が大型のやつを誤って最大出力で振り回して周辺の惑星をバラバラにした時はそりやあ怒られて減給にされましたけど、私はそんなミスしませんって」

「……ああ、そうか。ホント気をつけてくれな」

可愛い表情でコロコロと笑いながらトンデモねえことを言いやがるチトセに俺は笑顔を引きつらせてワインを煽る。ウチュウコワイ。

さて、どうしたものか？ きつとここでチトセを再度行動不能にしても直ぐに復活するんだろうなあ。ならもう放つとくしかない訳だし、こうなると俺の完璧な計画は破綻確定。最悪だ。

こうなったらキキに協力してもらおうしかないか。俺はそう考えをまとめるとキキの所へと移動をした。

キキSide

「ん、嫌だよ」

「なんで!？」

ジンからウエールズ王子を助けたいと言う話を聞かされて、その協力を頼まれたが俺は即座に断った。だって、

「むぐむぐ…面倒だし、モツチャモツチャ…：ダルいし、ングング…面倒臭いし」

「せめて食べるの止めてっ!! なあなあ、頼むよ。お前だって、知識持ちならわかるだろ?」

分けどきあ、もと居た世界で世界補正とか歪みによる皺寄せ現象とか色々バイの知ってる分、こういう分岐っぽい所で余計な事するの怖いんだよなあ。しかも最悪なのがそれらを力技でねじ伏せてさらなる厄介事へと変貌させていきやがったバカ転生者共が…：つと話しがズレた。

まあ、既にリオンとかアツシユとかチトセとかが居る時点で今更心配してもって感じだな。そう考えると別にいいかな? でもなあ、

「タダ働きってモチベ上がらなくない?」

「金なら言い値を払う」

「よし、とりあえず今夜あたりにワールドを殺^ヤつておこう」

俺は頭の中で暗殺の手順を組み立てる。アレでアレのコレがソレで……………

「ちよつ、それはダメだろ」

「え?」

なんでダメなんだろ? 意味がわからない。ここで殺つちまえば何の問題も無くなるのになあ。

「とにかく、色々計画があるんだからそれに従ってくれ」

「ふーん。分った」

よく分らんやつだなあ。まあいつか。俺もちよつとテンション上がり過ぎだし、落ち着かなきゃな。ジンは話しが終わると自分の席に戻っていき、酔って暴れ始めたチトセを取り押さえようと戦闘しはじめた。

「何の話?」

「ああ、ちよつとした頼みごととされただけ。気にする事ないって」

タバサがモキユモキユ食べながらジンとの会話のことを聞いてき

たので適当に答えて内容をはぐらかした。流石に未来起こるであろうことを喋るわけにはいかないしな。しかし、不審に思っているタバサはじーっと俺の事を見続けてくる。可愛かったのでポンポンと頭をなでてやったら叩かれた。

「それじゃあ、今日はもう休もうか。部屋はもう取つてある。タバサとキュルケ、チトセの部屋がこれ。ギーシュとリオンにキキの部屋がこっち。そして僕とルイズは同室だ」

食事も摂りおわり、ワルドが懐から3本の鍵をテーブルに置きながらそれぞれの部屋割りを言つて鍵を渡してきた。俺らは男女に分けて、自分だけルイズと同室になるといううちよつと頭の悪い部屋割りだ。

「そんな、ダメよ！ まだ、わたしたち結婚してるわけじゃないじゃない！」

「大事な話があるんだ。二人きりで話が見たい」

その部屋割りを聞くと、ルイズはハツとした表情になりワルドを見ながら抗議をした。が、ワルドは真剣な表情で話が見たいからとルイズに言い聞かせた。二人きりで話が見たいだけなら別に部屋一緒にする事無くな？ と思うのは俺だけじゃないはずだ。まあいいや。

「それじゃあ、行こうか」

ワルドはルイズの手を引いて一足先に階段を上つて行つてしまう。その際、ルイズが戸惑い気味にリオンの方をチラチラと見ていたが、リオンはまったく言つていいほど気にしていなかった。

まあ、こういうのは本人達の心の問題だし、余計な茶々は入れないのが吉。なのだが、可哀相な事にリオンは酔っ払っているギーシュと通常運行のキュルケにルイズの事はナンダカンダーと絡まれていたりする。すごく鬱陶しそうだ。

「んじゃ、俺らも部屋行くか」

すごく嫌な顔をしてるりオンからギーシュを引き離し渡されたカギの部屋へと移動を始める。ジンも酔いつぶれて寝てしまったチトセを背負い席を立ち、キュルケ、タバサも部屋へと移動した。

部屋に着き、ギーシュをベッドに放り投げて俺もベッドに入ろうと

したら、

「おい、お前に聞いておきたいことがある」

リオンに話しかけられた。なんだ？ リオンが話しかけてくるような事って……あ。

「もしかして例の賊達のことか？」

すっかり忘れてた。俺的に物凄くどうでもよかったからテキストな事をワルド達に言ってたんだけど……リオンはそれに疑問を持ったのか。

「ああ。奴らの本当の目的は一体なんだ？」

「……なんで俺が知ってると言う呈で話をするんだよ」

俺はゲンナリしながら言い返すとリオンは知ってるのだろうか？

と言い切つてきやがった。……はい、知ってます。リオンからは話すまで解放しないオーラが出てしまっているの、話すしかなのだから。

まあ秘密にする必要も無いし、なにより眠たかったので怪しまれない程度で尚且つリオンが納得できる内容を推測も入ってるぞーと言いながら色々と話した。

「なるほど。……まったく、たいした『お忍び』だな」

話し終わるとリオンはそれはそれは疲れた表情で呟いた。

「んじや、もういいか？ さすがに眠くてな」

「ああ。すまなかつたな」

リオンは礼を言うと言分のベッドへと行き仮面を取って横になった。ああ、ちゃんと取るんだそれ。

そういえば、明日はワルドがリオンに決闘を言い出すんだっただよな？ と、俺も布団を被りながら色々思い出してみる。えっと、それから夜当りにフーケと傭兵崩れが襲撃してきて……ルイズ達だけでアルビオン行って……なんだっけ？ ……そうそう……なんやかんやでワルドにウェールズが殺されて……まあいいや……。

なんて考えてたら、いつの間にか寝ていおり、ふと目が覚めると朝になつていた。

決闘

リオンSide

早朝、僕は軽く身体を動かす為に宿の中庭にある練兵所で剣を振るっていた。常ならばキキと剣を交えての模擬戦をするのだが、今はあくまでも任務中。いつトラブルが起ってもいいように疲れは極力残さないようにしなければならぬ。

「はっ、ほっ、せいっ」と

キキも同じ考えなのか中庭に現れたとき、僕に軽く声をかけた後は自分と同じように一人で身体を動かしている。その後、一通り軽めの鍛錬をし終えた僕は用意していたタオルで汗を拭いていると

「やあ、探したよ。ここに居たのか」

宿の扉が開き、そこからワルドが現れ声を掛けてきた。 どうやら僕を探していたようだが、何の用だろうか？

「何か僕に用か？」

「ああ、少し話がしたくてね。伝説の使い魔『ガンダールヴ』の君とね」
ワルドはニッコリと笑いながら言い返してくる。ガンダールヴ。確かこのルーンの事だったな。あのギーシュとのくだらない決闘後に、ルーンの事を調べていたらコルベールが嬉々として教えてくれた。

ありとあらゆる武器を使いこなすことが出来るというらしい。コルベール曰く、身体強化もガンダールヴの効果の一環ではないか、との事だ。しかし、このルーンの事は秘密であったはずなのだが……。
「ほう、一介の使い魔風情のことを良く調べているみたいだな」
「それは……、そう、フーケの一件で君に興味を持ったんだ。昨日、グリフォンの上でルイズから聞いてね。君は異世界からやってきたメイジらしいじゃないか」

僕が陰の含んだ口調で返答すると、ワルドは慌てた様子で言葉を紡いでいく。が、どうにも胡散臭い。あのバカが浮かれて僕の事を話したとしても不思議ではないが、ガンダールヴの事はルイズには教えてはいないので知りようが無いはずなのだが。

僕が訝（いぶか）しんでいる間にもワルドは自分は歴史や兵（つわもの）に興味がある、フーケを尋問した際に聞きだした等々、一方的に喋り続けていき、「つまり、何が言いたいかというのだな。あの『土くれ』を捕まえた腕を知りたいんだ。ちよつと手合わせを願いたい」

と、言い出してきた。こいつもか。僕は小さくタメ息をつく。この世界の貴族とやらはどうして自分の力を誇示したがるのだろうか。もちろんそんなの僕は受ける気はない。僕は断ろうと言葉を発しようとした時、

「いいんじゃないか？ どうせ今日一日暇なんだし相手してやれば」と、キキが口を挟んできた。僕はキキのその言葉に少々驚きを感じた。基本キキはこういう事に関しては必要以上の事はしない性格であり、こういう無駄な事は積極的に避ける奴である。どう言う事だ？ 僕がその意図を考えている間も、

「うむ。日がな一日無為に過ごすよりはマシだろ？ それに互いの腕を知っておけばアルビオンに渡った後での行動を考え易いだろう？」

ワルドは僕と戦う口実をペラペラと喋りだす。さて、どうしたものか。はつきり言ってコイツとの手合わせなどする必要など全く無い。が、キキがワルドとの手合わせを勧めてくると言うのが気になるのも事実。

僕は改めてワルドを見た。ニコニコと人の良さそうな笑みをたたえている……が、昨日キュルケが言っていたようにワルドの眼を見ると、その表情とは裏腹にまるで別の感情を湛（た）えていた。それは何処かで見えた様な眼をしており、僕は僅かに眉をひそめた。

「…なるほど。そういうことか」

「……？ どうかしたのかい？」

「いや、なんでもない。いいだろう、相手になってやる」

「おお、そうか！ ありがとう」

僕が手合わせを許諾するとワルドは声を弾ませて、礼を言い返してきた。そして、僕とワルドは庭の中心へと移動をする。その際ワルドは、この練兵所は歴史ある場所で貴族が誇りをかけて等々と、聞いてもい無（な）いことを語り聞かせてきた。まったくもって煩わしい。

お互いある程度の距離をあけた立ち位置に移動した後、僕が得物を構える。と、

「ああ、少し待ってくれ」

「なんだ？」

ワルドが左手を出して制してきた。

「いやなに。立ち会いには、それなりの作法というものがある。介添え人がいなくてはね。君にも分かるだろ？」

「別にそんなのは必要ないだろ。それに必要だとしてもキキが居る」

ワルドの話は僕はそう言い返すも、ワルドはまるで出来の悪い生徒を諭すような声音で

「そうではないよ。先も言っただろ？　ここは貴族達が様々なものを賭けて決闘をしていたと。そう、例えば愛しの女性とかね。先ほど此処に来る前に声を掛けておいたから、そろそろ来るはずさ」

と、ワルドが宿の扉へと視線を向けるとほぼ同時に

「ちよつとッ！　二人とも何してるのよ！　ワルドが来いって言ったから来たけど、どう言う事なの？」

ルイズが宿から慌てて飛び出してきた。さらにその後をついて来たのかキュルケ、タバサ、ジンにギーシュとぞろぞろと中庭へと現れた。

「何、彼の実力をきちんと確かめたくてね」

「もう、そんなバカなことはやめて。今は、そんなことしてる時じゃないでしょ？」

「そうだね。でも、貴族というヤツはやっかいだね。強いか弱いかわれが気になるともう、どうにもならなくなるのさ」

ワルドはルイズの言うことに腰の杖を引き抜き構えながら答え返した。僕はそんな二人のやり取りを見て嘆息する。まるで三文芝居を見ているようだ。ワルドが何を企んでいるのかは解らないが、この決闘ごっこ自体はルイズの気を引く行為なのだろう。

「リオン！　こんなことやめなさい。これは命令よ」

ルイズはワルドに言っても聞き入れてもらえないと解ると、僕に対して止めろと怒鳴ってきた。が、僕はそれに肩をすくめる。どうせ、

断ろうにもワールドはもう杖を構えているし、それを収める気も無いだろう。

「なんなのよー！ もうー！」

ルイズはそう叫ぶと、諦めたのか不貞腐れた表情をして庭の端へと移動した。さて、と僕は下ろしていた腕を上げて再び剣を構える。

「では、始めようか」

ワールドが薄く笑いながら一言発する。それを合図に互いに一瞬の睨みの後、同時に相手へと駆け出す。

相手の間合いへと踏み込むと僕は剣を振り上げ、ワールドは杖を振り下げて互いの初撃を打消し合うようにはじき返す。そこから何合と攻撃をいなし、防ぎ、鏢迫り合う。

「ほうー！ 中々の腕だ！」

ワールドはそう言いながら素早い突きを二、三繰り出して僕の攻撃を牽制して、マントを翻しひるがえ後退する。僕は追撃を敢てせず一旦その場で一呼吸入れて、構えを整える。ふむ、さすが衛士隊長と言う事はある。この世界の貴族とやらは魔法ばかり頼っていると思ったが、考えを改めたほうが良いようだな。

僕はそう思いなおして、ワールドを視る。多少息が上がっているように見えるが、構えはブレておらず、こちらを冷静に観察している。

「いやはや、まさかこの僕がここまで攻めあぐねる事になるとは。これは少々本気になる必要があるようだ」

ワールドがそう言うのと、構えを今までの剣を振るうようなものからレイピアを使うような突きを主軸に置いた構えに変えてきた。

「さて、君も異世界の者といえど、メイジなら分かると思うが衛士隊はただ魔法を唱えるだけじゃない。詠唱さえ戦闘に特化させ、杖を構える仕草に突き出す動作など……杖を剣のように扱いつつ詠唱を完成させる。君に僕の本気の剣と魔法を見せてあげよう！」

「口上はそれで終わりか？ ならば行かせてもらおうぞ」

ワールドの口上に僕はそう言い返して、剣を片手に一気に接近する。ワールドもそれに合わせて先ほどよりも速い突きを繰り出してくる。僕はそれを剣で受け流した後、勢いをそのままに追撃の動作へと変え

てワルドへと繰り出す。

対してワルドは僕の2撃目をバックステップで避ける。と、同時にワルドの口から小さく詠唱を呟くのが聞こえてきた。来るか……。僕はすぐさま体勢を整え、ワルドの魔法に備える。

瞬間、横合いから強い圧迫感を感じた。回避は間に合わない。迎撃……範囲と威力が判りかねる。と、刹那に判断した僕は剣を盾にし、当たるだろう瞬間に攻撃が来た方とは逆の方向へと飛ぶ。

ボンツと巨大なハンマーで押されるように透明な何かに僕は数メートル弾き飛ばされるが、防御を崩されることも無く、難無く姿勢を整えて着地をする。

「……………ッ!? なんのっ!」

ワルドは自分の魔法を受けて大したダメージを負っていない僕に驚いたように目を開くが、すぐさま追撃をする為に素早く僕へと接近し、幾撃もの突きを放ってきた。

僕はそれを剣を使い全てを防ぎ、そして再度ワルドが魔法を放とうと詠唱を唱え始めた瞬間、僕は一気にワルドの懐へと潜り込み、剣の柄でワルドの鳩尾を痛打する。

「ガアッ! ぐっ……………!」

痛みと衝撃に詠唱をキャンセルさせ、後退させたワルドに僕は更に追い撃ちをかける。

「…っ!、はあっ! せっ! 月閃光! はあ! はっ! ふっ!
空襲剣! 虎牙破斬! 爪竜連牙斬! 魔神剣!」

3撃をあたえ月閃光を繰り出し完全に防御を崩した後、再度の3連撃から空襲剣、虎牙破斬、爪竜連牙斬、最後に魔神剣を放ち直撃を受けたワルドは吹き飛ばされ、詰みあがった樽へと突っ込んで行き、ぶつかった衝撃で樽山が崩れて下敷きになってしまった。

む、少しやり過ぎたか? 途中からいつものキキと模擬戦をしている感覚で戦ってしまった。

「……………え?」

「あらー!」

「……………ウソだろ!」

とルイズ、キュルケ、ギーシュがそれぞれ驚愕に表情を変えて僕と樽に埋もれて動かなくなったワルドを交互に視線を向けていた。

「……………あゝ、完全に気失ってるな。最後の打ち所も悪かったっぽいし、しようがないか。んじゃ勝者はリオンってことで。タバサ、これ運んでやって」

キキが動かなくなったワルドに近づき様子を見て、気を失っていることを確認するとタバサに運ぶように頼んでいた。タバサは一つ頷くとレビテーションの魔法でワルドを浮かせて宿へと入っていった。

僕も剣を納めて一息つく。

「ダーリンすごいわっ！ さすがね!!」

「ああ、まったくだよ！ あの衛士隊の隊長に勝ってしまうなんて!!」
僕も宿へと戻ろうと歩き出すと、呆然としていたキュルケとギーシュが寄ってきて表情を輝かせながら騒ぎ立てる。鬱陶しい。

「えっと、リオン。その、大丈夫?」

「何がだ?」

宿へと運ばれていくワルドを見てオロオロしていたルイズも近づいてきて声を掛けてくる。

「さっき決闘でワルドのエアハンマーの直撃を受けてたじゃない」

「別にあの程度、何でもない。それよりも奴のことはいいのか? 婚約者なのだろ」

「なッ!? ……折角人が心配してあげてるのに何よそれ!! 大体、何勝手にまた決闘なんてしてるのよ! あなたは私の使い魔なんだからちゃんと言う事聞きなさいっていつも言ってるでしょ! 今は大切な任務中なんだからこんなバカなこと止めなさいって言ったのに無視して! たまたまワルドに勝てたからっていい気になるんじゃないわよ!」

僕が言った言葉の中にルイズの琴線に触れるものがあつたのか、一気に不機嫌になり、ギャーギャーと捲くし立ててくる。まったく、いつも騒がしい奴だ。

「はあ、わかつたわかつた。うるさい奴だな。昨日みたいに大人しくしてられないのか? お前は」

「なななな、何よ何よ何よっ！ 使い魔のくせに生意氣!!」

「もう、リオンが勝ったのがそんなに不満なの？ ああ、そりやそうよね。なんせ婚約者が負けちゃったんだからね。ふふふ」

「うるさいわよキュルケ！ 別にそんなんじゃないわ！ あんたこそ朝から発情してんじゃないわよ」

と、気づけばルイズの標的は僕からキュルケへと移り、いつもの口喧嘩を始めていた。毎度毎度よくもまあ、言葉が出てくるものだ。

僕はふうと小さく息を吐き、宿へと戻るために移動する。さすがに時間も時間なので腹が減る。

「お疲れ。ほれ」

宿に入る際にキキが濡れタオルを渡してきた。助かる。僕はそれで汚れや汗を拭^{ぬぐ}う。

「まったく、お前があんなこと言わなければ、こんな面倒な事しなくてよかったものの」

「別にいいじゃん。アレがどんな人物かわかったろ？」

「ふん。奴が何かロクでもないことを隠していることが分かったとして、僕にどうしろと？」

「どうしろとは言わないけど、ルイズを守るには有用な情報だと思うけどな。そういえ何でルーンの力もダガーも使わずに、剣1本で戦ったんだ？」

「ふん。奴が危害を加えてくるのであれば、迎え撃つだけだ。それとコレを使わなかったのは必要ないと判断した。ただそれだけだ」

僕は汚れを拭いながらにキキに色々と言文句を言い募るもキキはヘラヘラと笑いながら言い返してくる。キキのこういう態度の時は人の話をマトモに聞かない時の物だ。

はあ、と態^{わざ}と大きく嘆息するが、キキは相変わらずの何考えてるか分からない笑顔である。

まったく、やれやれだ。

戦略的撤退

キキSide

「いやー。参った参った。完敗だよ」

夜、酒場で夕食を食べている時、2階から降りてきたワルドは席に座りながら笑顔でリオンに向かってそう言った。多分今朝の手合わせのことを言ってるのだろう。話しかけられたリオンは笑顔のワルドを一瞥しただけで何も言わずに食事を続けている。

「ちよつとりオンー！」

「あはは、別に構わないよ」

ルイズがりオンの態度にいつも通りに騒ぐが、ワルドは気にした風も無く爽やかに笑っていた。俺はそんな何とか爽やかを装うとしているワルドをとても残念な目で見ていた。

だってあちこち包帯だらけなんだから。服とかマントで大体は隠れているものの、首元や手首あたりからチラチラと見え隠れするし、さつき階段から降りてくる時もめっちゃギクシヤクした動きをした。た。

身体痛いんだなあ、と思いつつも俺はワルドから視線をテーブルに戻し食事を続けた。肉が美味しい。

「ん？」

食事もそこそこ食べ終わり、各自談話したりとゆっくりしていたら外が妙に騒がしくなり始め、店の扉へと意識を向けた瞬間……ドゴオン!!!と扉……というか入り口が全体がバラバラに吹き飛んだ。

「なっなんだあつ!」「きゃー!!」「うわあつ!!」「なんだよっ! 何がっ」

入り口の爆散に酒場に居た客達が騒ぎ喚いて逃げ惑う中、俺は目の前のテーブルを蹴り起こして壊れた入り口に対して壁のようにして身を隠す。俺の行動とほぼ同時に他の皆もすぐさま起こしたテーブルの後ろへと身を隠して臨戦態勢をとった。ちなみに察しの悪いルイズ、ギーシュ、チトセの3人はそれぞれリオン、キュルケ、ジンによってテーブル後ろへ引つ張り込まれた。

まあそんなことより、俺たちが隠れた直後、壊れた入り口から大量の矢と魔法が撃ち込まれ始めた。

「これはまさか昨日の賊の仲間なのか？」

「にしても連中の格好は賊にはみえないわ。どうやらただの物取りじゃなかったみたいね」

ワルドの言葉にキュルケが参ったわねえと、顔をしかめて言い返す。

「ちよつと！ 何がどうなってるのよっ!？」

「ひゅわっ!?! なんですかっ!」

「ひいっ!?! いきなり何なんだっ!」

ルイズ、チトセ、ギーシュの三人は賊の奇襲に錯乱して叫んでいた。ちよつとうるさい。

「……で、どうする?」

騒いでる連中は置いていてリオンがどう対処するかを聞いてくる。まあ、ぶつちやけ予想してた通りなので俺は考えておいた案を提示する。

「此処は俺が何とかするから、リオン達はあそこの厨房にある裏口から退却。後は棧橋まで向かってアルビオンまで一気に行くか、騒ぎが収まるまでどこかに隠れるか。まあ対処は任せるってことで」

「しかしこれだけの敵の数、メイジでない君の一人だけでどうにかできるとは思えない。他にも何人か残していくべきだと僕は思う」

俺が考えておいた内容を説明し終わるとワルドは俺一人じゃどうにもならないからと苦言を呈してくる。

うんうん分かっている。こんなに大勢で船まで移動されたらリオンを奇襲出来ないもんなく。しかし、知ったこっちゃない!

「じゃあ、タバサも一緒に残ってもらおう。タバサはトライアングルだし機を見て退却した際に使い魔のシルフィードで逃げられる。いいか?」

「大丈夫」

と、俺はタバサに聞くとタバサはコクリと頷いて了承してくれた。「しかしだね……分かった。^{しんがり}殿を任せるぞ……っ!」

ワールドが更に言い募ろうとしたのをリオンが遮り、未だにオロオロしているルイズの手を引き、厨房へと一気に走っていった。

「じゃあ、任せたっ！ チトセ早くっ！」

「えっと、よく分かりませんが任せました！」

そして次にジンとチトセが厨房へ、

「タバサ、気をつけてね」

「ええっと…君達も無理をしないでくれよ！」

とキュルケはタバサに一言声をかけ、そのキュルケを追う様にギーシユも厨房へと駆けて行つた。

「……っ」

そんな中ワールドは一瞬だが俺を忌々しそうに見るとすぐさま先に行つた6人を追いかけた。分かり易いよワールドさん。俺の記憶ではもうちよつと有能なイメージだったんだけどなあ。まあいいや。

「さてと」

俺は皆が居なくなつたのを確認してから起爆札を付けたクナイを酒場内に入つて来た賊達の足元へと投げ込んだ。先頭にいた賊は飛んで来たクナイに驚いたものの難なく避け、尚且つしよぼい反撃だなどとも言ふ様な嘲あざけるような顔をした。が、次の瞬間、起爆札に火が付き…ドゴオンツ!!と、賊達を巻き込んで大爆発を起こす。

もう、目も当てられないような惨状の出来上がりである。

「さてっつと。口寄せ」

俺は敵が先ほどの爆発で混乱錯乱してる中、懐から巻物を取り出して傀儡人形くわいじんぎょうを取り出す。

数は2体。一つは前に手に入れた微刀びとう・カンザシ・釵かんざしを改造した日和号びよりごう・あらため・改。まあ、改造と言つても中の機構抜いて、強度上げて手に入れた変態刀を仕込んだだけなんだけどね。

そしてもう一つ。それは賊刀ソクトウ・ヨロイ・鎧だ。これは少し前のカジノ潰しの任務の時、エコーの子共を見つけた時、偶々たまたま同じ部屋に在つたのを貰つた。しかも他にも無いか探したら炎刀エントウ・ジユウ・銃と薄刀ハクトウ・ハリ・針も見つけて歓喜しました。壊れてたけどな！

銃の方はチャクラ弾を撃てるように改修するから問題ないとして

も針の方は完全にアウトだった。これじゃあ残りの鋸ノコギリ、銼ハカリ、鎚カナヅチも壊れてるか捨てられてるかの2択だろうな。ぶっちゃけ知らなきや木の棒、ゴミ、鉄の塊にしか見えんし。閑話休題。

なお、鎧に関しては傀儡の術を使って動かす為の最低限の処理しかしてないってかする必要が無かった。

「さて、再調整は完璧。さあ、暴れて来い！」

なんて言ってみたりしながら日和号・改と賊刀・鎧を操り外の賊達に突っ込ませた。ちなみに、タバサはワールドが見えなくなった時点で本を読み始めた。信用してくれてるのはいいんだけど少しは手伝ってくれてもよかったんじゃないかな？

リオンSide

「よし、此処らへんにはまだ敵は居ないみたいだ。今の内に船まで駆けろぞ」

キキとタバサの二人と別れた後、僕たちは敵の目を掻い潜りながら船が泊まっている棧橋へと移動する事にした。そして棧橋の出入り口付近の建物の陰からワールドが辺りを見渡して僕達にそう声をかけ、走り出した。

「まったく！ 何なんですかあの人たちはっ!？」

「大方、例の貴族派とか言う連中の差し金だろ」

船を止めてある大樹の中、その内側に作られている階段を上っていると後方にいたチトセが迷惑だとも言うような表情で叫んできたので、僕は宿屋でキキに聞いたこと簡単に話した。

「ちよつとどう言う事よ！ 私達の任務はお忍びのはずよ!？ 何であいつらにバレてるの!？」

驚いたルイズが顔を蒼白にしながら声を上げて聞いてくる。

「そんなの情報が漏れていたからに決まっているだろ」

「そんなっ！ ありえないわ。だってこの任務はあの夜に姫さまから直々に承うけたまわったものなのよ！ なのにどうして……」

ルイズは僕が言い返した言葉に今度は顔を青くして俯いた。が、む

しろ何故バレていないと思っていたのか、僕としては不思議でならない。ここまでの大所帯で、しかも内乱中のアルビオンへと行くことを隠そうともしていない。密偵などいれば直ぐに怪しまれ調べられるだろう。

何より、こちらに間者が入り込んでいるなら情報など筒抜け、バレるのも当然だ。

「さあ、あと少しで僕たちが乗る船に着く。急ごう」

ある程度上り先頭にいるワルドが僕らに声をかけた時、階下からタツタツと小さな足音が階段を上って来るのが聞こえ始めた。

「……………」

「ちよつとダーリン。いきなり剣を抜いてどうしたの？」

「僕たち以外に階段を上ってくる奴らがいる」

「タバサたちじゃ……………無いのよね」

剣を構えた僕にキュルケも杖を取り出し階段下を警戒しながら聞いてきた。

「ああ、違う。……………ッ」

ガキンツと僕は螺旋階段上の方から飛び掛ってきた仮面にフードを被った奴の斬撃を防ぎ、距離を取る。そして下から来た足音の奴らが3人。こちらにも全員同じ格好をしており剣を構えていた。

「……………4人か」

僕は斬りかかってきた奴を警戒しつつ、上がってきた敵を視認する。……………一人で対処するにはさすがに多いな。

「くつ、こんな所で。リオンくん、奴等の足止めをお願いできるか？」

それにジン、君にもお願いする。さすがに4人相手にリオンくん一人じゃ危険だ」

ワルドは現れた敵を見ると僕とジンに足止めの指示してきた。

「ワルド、リオン達を囷にするの!？」

「僕たちは今一刻も早くここから逃げてアルビオンへと行かなければならない。それにルイズ、彼らほどの力が在れば負けるなんてことは無いだろうし心配はいらないよ。さ、リオンくんが持つてる手紙を返してもらって、僕たちは先を急ぐんだ」

ワルドの指示にルイズが驚いたように声を上げるが、ワルドは仕方が無いと言うようにルイズを説得した。……分断させる気か。しかしどうする。流石にこの状況下で4人を相手にするには分が悪いか……仕方が無い。

「おいキュルケ。これを持ってルイズ達と先に行け」

「え？ ってこれって例の手紙じゃないの。なんで私に？」

「ルイズよりかはまともな判断ができるだろ」

「……わかったわ」

僕は懐から出した手紙をキュルケへと渡した。キュルケは手紙を渡されたことに一瞬驚い

たが、直ぐに笑顔になり手紙を仕舞った。

「キュルケなんであんたが手紙預かってんの！ それ私に渡しなさいよっ！」

「そんなことより先急ぐんでしょ？」

「ちよつと何よ。待ちなさいって！」

キュルケはルイズの手を掴んで上へ走って行き、

「すまない。任せたよ」

「ジンさん頑張ってください！ 私、信じてます！」

ワルドとチトセも2人の後を追って行った。

「え？ ちよつと……ええいっ！ 僕だってグラモン家の人間だ！

刺客の1人や2人倒してみせる！」

「さっすがギーシュ、だけど無茶はするなよ」

「お前たち、無駄口もいいがコイツらを何とかしなければ置いてきぼりにされるぞ」

ギーシュは震えながら、ジンは悠々と杖を構えて追ってきた敵に對峙する。そして僕も腰からダガーを引き抜き構え直して敵へと攻撃を仕掛けた。

ワルドSide

よし、上手くいった。僕はあの2人を引き離したことに心の中で笑

みを浮かべる。

しかし想像していた以上だった。ジンはともかくあのリオンとか言う使い魔、なんて実力だ。かのガンダールヴの力を持っているとは言え、今朝の決闘で僕に後れを取らずとは。

僕は今朝の決闘を思い出しながら後方に意識を、……正確には偏在の魔法で作りだした僕の分身4体に向けた。

さすがジンだ。僕の偏在2体相手にまったく引けをとっていない。この任務で一番の障害と思って警戒して正解だった。彼を倒せるとは思っていないが足止めならいくらでもできる。グラモンの子息くんはいい感じに足手まといになってるな。

問題は使い魔くんの方だ。今朝の戦い方とは違いダガーを使っての二刀での戦いをしている。まさか今朝は手加減されていたのか？

もしそうなら舐められたものだな。僕は表には出さないが苦虫を噛み潰した気持ちを持った。

まあいい、アルビオンへ出航してしまえばいくら力があるろうとも追っては来れない。あの風竜を使うにしてもまだ幼竜、船には追いつけやしまいしアルビオンへと辿り着くにも相当の時間がかかる。その頃にはこちらの計画は既に完遂されている。僕はこれから先の計画を思い浮かべほくそ笑んだ。

「な、なんでえ？ おめえら！」

走って上がって来た僕らに気づいて起きた寝ぼけ眼の船員が声を掛けてきた。

「船長は居るか？」

「船長なら寝てるぜ。用があるなら明日の朝、改めてくるんだな」

船員は寝酒をしていたのだろうか、寝起きだというのに手に持っていた酒瓶から酒を煽り追い払おうとしてきた。平民風情が。

「貴族に二度同じ事を言わせる気か。僕は船長を呼べと言ったんだ」「き、貴族っ！」

僕は杖を引き抜き睨みつけると、船員は顔を引きつらせて、慌てて船長室だろう部屋へと走りこんでいった。しばらくすると、扉が開きこちらを胡散臭そうにジロジロと見ながら初老の男が歩いてきた。

彼がこの船の船長か。

「こんな真夜中に何の御用ですか？」

「女王陛下の魔法衛士隊隊長、ワルド子爵だ」

「……ッ、これこれは。して、当船へはどういったご用向きで？」

船長に僕の肩書きを言うと、驚き態度を改めて丁寧な口調で聞き返してくる。

「アルビオンへ、今すぐ出航してもらいたい」

「無茶を！」

「勅命だ！ 王室に逆らうつもりか？」

「あなた様方が何をしにアルビオンへと行くのかこっちは知ったこっちゃありませんが、アルビオンが最もここら・ローシエルに近づくまで、まだ1日もあります。大体、今船に積載している風石の量じゃアルビオンまで行くなんぞ到底無理です。出航した所で途中で墜落してしまいますよ！」

「風石の足りない分は僕が補う。僕は風のスクウエアだ」

「……ならば結構で。料金ははずんでもらいますよ」

「僕の名で請求しても構わない。言い値を払おう」

僕がそう言うと、船長は笑顔を浮かべた後、大声叫び船員たちをたたき起こし始めた。船員たちは叩き起こされた事に不満を言いながらもテキパキと出航の準備を整えた。

「さあ、行くよルイズ」

「……ええ」

ルイズに声を掛けるとルイズはタラップの入り口辺りを心配そうに見つめていた。

「彼らが心配なのかい？」

「……ねえワルド。お願いがあるのだけど、少しだけでいいからルイズ達を待たない？」

ルイズは僕にそう提案をして来るが冗談ではない。せっかく引き離したんだ。合流されては困る。

それに既にジンと使い魔くんによって分身達は苦戦を強いられている。早くここを出なければ。

「ルイズ、せっかく彼らが僕らのために足止めをしているんだ。僕たちは一刻も早くアルビオンへと行くことが彼らへの誠意だ。それにさっきも言ったように彼らの実力なら心配いらぬ。さ、行こう」

僕はルイズの手を取り、船へと乗り込む。そして残りの着いてきた娘達も乗り込むのを船長は確認すると船の帆を下ろし、出航した。

これで邪魔者は居なくなった。後は僕の任務をアルビオンでこなすだけだ。

追跡&合流

キキSide

……少しやり過ぎた。びよりじょう、あらため日和号・改と賊刀・ヨロイ鎧を操ってたら楽しくなつてきちやつて、不必要な殺戮をしてしまった。これじゃあ俺の苦手な節度の無い『俺TEEE系』の人たちと同じじゃん。俺は結構本気で落ちみながらタバサと一緒に宿の裏手から移動していた。ちなみに表は……もう宿を経営し続けるには困難な状況になっている。ホントごめんさい。そういえばあの襲ってきた連中ってか宿壊したゴレムってフーケのなんだっけ。…生きてるかな？

「つと。棧橋ってここでもいいんだよね？」

「そう」

俺は目の前の大樹を見て確認すると、タバサはコクリと頷きいて返答した。むく、しかし近くで見ると本当にデカイな。こんだけ巨大な樹を見てるとアツチの世界の事思ひ出すなあ。うちは一族(笑)とか千手一族(笑)とか………やべ、嫌な事思ひ出しすぎて吐き気が。……少々気分が悪くなったがまあいい。俺は白眼を発動して樹の上を視る。

「ふむ、あの端っこから出て行った船って、もしかしなくてもリオン達が乗った船だろーなあ」

俺は白眼を解いて近くの丁度いい段差に腰を下ろす。

「どうするの？」

「シルフィードで追いつけられる……か？」

「……難しい。この距離だと追いつく前に船が風に乗って加速してしまう。成体であれば船が加速しても追いつくことが出来る。でもシルフィードはまだ幼体。船が加速してしまつたらもう無理」

タバサの説明に大きいため息を吐く。うーん、どうしょ。ジンから依頼された王子救命を手伝わないと報酬はさすがに貰えないからなあ。

「あの船が加速する前に追いつければ、か。とりあえず、ダメ元で追つてみるか。追いつけたら儲けつてことで」

「あなたに任せる」

俺のテキトーな提案にタバサもそこはかたなくやる気の無い返答をしてくる。つてことで笛を吹いてシルフィーを呼ぶ。

「きゅー!!」

笛の音を聞いたシルフィーはすぐさま俺たちの前へと降り立つ。さすがに喋ることはせずに鳴声だけで返事をしてくる。

「シルフィー。あそこの船を追ってくれ。出来れば追いついてくれると嬉しい」

「きゅいきゅいつー!」

俺とタバサはシルフィーの背に乗って、船を追いかけるように頼んだ。シルフィーは頭を上げ俺が指差した方向、見ると船を視認したのが大きく鳴くと一気に飛び立った。のだが、

「で、なんであんたら船に乗ってないのさ?」

「足止めをされた」

俺はシルフィーから降りながら聞くとリオンはすまそうに言い返してきた。シルフィーに乗って勢いよく船を追ったのもつかの間、あの船が停泊していたと思われる場所を通りすぎた時、何故か船に乗っていなきやいけない人物達が空を、正確には出航した船を見上げていたのを目撃した。

何故居るし? とおもりオン達を置いていく訳にも行かず、急旋回してリオン達が居る栈橋へと降り立った次第。

結果、船は加速してしまい一気に空へと進んで行き、追跡不可能となった。まあ、あの感じじゃどっちにしろ追いつけなかつたっぽいけど。

「えっと、そうなると船に乗ってるのって……」

「ルイズ、ワルドにキュルケ。それにチトセの4人だ」

ジンが俺の言葉を切って船に乗っていった人等を言った。つてかいろんな意味で不安しかないメンツだなあ。

「君たち。何のん気に話してるんだね! 早く船を追わないと僕たち置いていかれてしまうよ」

「まあまあギーシユ落ち着けて。焦らなくなつて目の前に船を追え

る手段があるんだ。みんなでシルフィードに乗って行けば直ぐに船に追いつけるって。な？ そうだろ」

「いや、無理だし。船には追いつけんよ」

「……………え」

ギーシユの慌てようにジンがシルフィーで直ぐに追いつけると夢物語を言い出したのできっぱりと否定してやったらアホ面になった。

「え？ いや、ちよつといいか」

さらにジンは俺の目の前で百面相とは言わないものの、表情豊かな顔芸をした後、腕を掴んできてリオン達と離れた場所へと連れてこられた。俺はノンケだ。そんな趣味はないから手を離せ。

「おいっ、どういうことだよー！」

「何が？」

「何が？」じゃない！ なんで追いつけないんだよ」

「いや、普通に考えて無理だって。人間5人も乗せてスピードが落ちる上に、この大空の中見失ってるんだぞ？ さらにタバサ曰く幼体のシルフィーの速度じゃ風に乗った船の速さには追いつけんらしい」

「いやいやいや。お前忍だろ？ あのNARUTOワールドの転生チート忍者なんだろ？ だったら瞬身の術とか飛雷神の術とかその上位版的な何かでッ…」

と、ジンがまくし立ててくるが無理なものは無理。瞬身の術は術つて言いながらただのチャクラ強化による高速移動だし、飛雷神の術はマーキングしてないと飛べないし。第一俺スペック系のチートだからと、そこらへんも含めて俺の持つてる能力及び術の中に即興で追いつくための物が無いと説明してやると、

「終わった…………。ウエールズ死んだわ、これ」

orz状態になった。リオン達が不審な目で見てきてるので止めて欲しい。

「ってか、ジンは何か無いのか？ お前だってどうせ変な能力貰って『俺TEEE』なんだろ？」

「俺の持つてる能力だったって、空飛べるの無いし。……………いや待て。サイコキネシスが…………でもアレだと速度的に…………、ん？ ……シル

フィードに……重さを……してやれば……これだ!! おいちよつと耳貸せ、完璧な作戦を思いついた」

なんでこういう人達ってこうもテンションの上がり下がりが大きいんだろ。もうちよつと静かにゆるくなれないもんかねえ。俺は心の中では最高に嫌がるも表面には出さず、ジンの提案を聞く。そしてジンの作戦とはこう言う事らしい。

ジンの能力である重力作成グラビトンという重力操作能力でシルフィーごと俺たちに掛ってる重さを無くすとのこと。そうする事によりシルフィーの速度を底上げして船に追いつくという。ただしジンは能力のことを隠したいらしいので、この能力は俺の術って事して欲しいということだ。

なんと言うか……、雑過ぎないか? まあいいや、俺は別に構わな
いし。ってかコイツの能力NEEDLESニードルスのフラグメントかい。

「いいんじゃないか?」

「よし、なら早速行くぞー」

俺の返事にジンはやる気満々でリオン達の所へと戻り、船を追いかける旨を色々と誤魔化しながら伝えていく。俺もシルフィーにこれから行なう事を説明して上手く飛んでもらえるようお願いをする。

タバサにもちよいちよい誤魔化しながら説明したらジト目で睨まれた。なんか罪悪感。

さて、ジンからの説明も終わったのかりオン達もシルフィーの背へと乗り、ジンは俺へとアイコンタクト的なことをしてきた。俺がそれっぽいことするタイミングに合わせるといふこのなのだろう。はあ、しようがない。

「じゃあシルフィー行くぞー。土遁どとん・軽重岩けいじゅうがんの術」

と、俺は術を発動したフリをする。それと同時にジンが例の能力を発動してシルフィー及び俺たちの重さを無くした。ちなみに俺は軽重岩の術の印を知らないので使えないのである。だってアレ岩隠れの秘伝の上に禁術レベルの術だから、土影本人か関係者しか使える人居ないっぽいし。どうやって印を知れというのか。おつと話しがズレた。

まあそう言う訳で、無駄思考してる間に重さの無くなったシルフィーはどんどん加速し、結構な速度で大空を舞い飛んでいた。

リオンSide

「お、見つけた。シルフィーあそこだ」

キキがそう言ってシルフィードの移動方向を修正した。棧橋から飛び立ってからしばらく経ち、水平線の彼方から日が昇り始めて空が白み始めた頃、目的の船に追いついたようだった。

「や、や、やっと、お、おい、ついた、のかい!？」

キキの見つけたと言う言葉に顔を真っ青にしたギーシュが震えながら眩いた。今、ここにいるメンバーで平気な顔をしているのはキキとキキに抱きかかえられているタバサだけだ。

船に追いつくためにシルフィードの移動速度を上げたためにその背に乗っている僕達への風圧が強くなり、尚且つ雲が眼下に見えるほどの高度での飛行。結果、寒風を長時間当たり続けると言う少々拷問じみた状況に陥っていた。

マントで身体を包み風を防いでいたが、それでも体力はどんどん削られていき僕やジンはなんとか耐えていたがギーシュはそろそろ限界に来ていた。

「おい、ギーシュの奴がそろそろマズイ。早く追いついてやれないか」「ん? ……この距離なギリギリ届くか? ……まあ大丈夫だろ。3人ともどこでもいいから俺の身体に触れててくれ」

僕の言葉にキキは少し考える素振りを見ると、袖から何かを放り投げて僕達にそう言ってきた。僕は風圧と寒さでまともに動けないギーシュを引っ張って共にキキの背に手を置く。ジンも同じ様に肩へと手を置いた。

「…ツ、…た、む、ちよい右。 ……よし、当たった。んじゃ送るから向こうの人たちへの説明は任せるな。シルフィー、重さ戻ると思うからバランスに気をつけとけよ」

キキは何かしらの準備が整ったのかそう言うのと、

「な、なんだお前ら!?」「うおっ!」「いきなり現れたぞ」「魔法か?」「マントつけてるってことは貴族だよな?」

僕たちは船の甲板上に居た。遺跡なんかにあるテレポーターと同じようなことをしたのか? キキの使う力にはまったくもって驚かされる。

「どうした、一体何の騒ぎだ? ……ッ! 君たち、なんでっ!」

船員達が僕たちのことで騒いでると奥の方からワールドが姿を現し、僕達の姿を見ると驚愕し、目を見開いた。

「ワールド子爵よかった。追いつけたようですね」

「……あ、ああ。 そうだね。 君たちが無事でなによりだ。 しかしよく追いつけたね。 驚いたよ」

驚き固まっているワールドにジンは近づき笑顔で話しかけるとワールドもぎこちないが笑みを作り返していた。僕もいつまでも座り込んでいるわけにも行かないな。 なによりギーシュを休ませてやらなければ。

僕は隣でガタガタと震えているギーシュに肩を貸し立たせてやる。

「おい、こいつを休ませてやりたい。 部屋を用意して欲しいんだが」

「分かった、案内する。 着いてきてくれ」

僕は近くに居た船員に声をかけて部屋へと案内してもらおう。 途中、甲板がまた騒がしくなったがシルフィードの鳴声が聞こえたのでキ達乗り込んできたのだろう。

「ちよつとうるさいわねえ。 何なの……って、え、ダーリン? ダーリンじゃない!!」

「リオン!!」

「よかったわ、無事だったのね。 でもどうやって……あつ、シルフィードに乗ってきたのね。 ってことはタバサも一緒なのよね。 甲板にいるのかしら」

「ちよつとキュルケ! リオンに引っ付きすぎよ! リオン、大丈夫……って冷たっ!? あなた身体すごく冷えてるじゃない。 早く温めないと」

ギーシュを部屋へと送り届け、今後のことを話すために甲板へと戻

る途中、通路を歩いていると部屋から出てきたキュルケとルイズにくわした。2人は僕を見ると驚き、近づいてきてそれぞれまくし立ててきた。

「まったく。お前たちはもう少し静かにできないのか？」

「なあっ！　せつかくご主人様が心配してあげてるのになよその態度。大体リオンは使い魔としての自覚がね…」

「まったくルイズってば。ダーリンが居なくて寂しくてしよぼくれたクセにダーリンに会った瞬間これだものねえ。うふふふ」

「／／／／／ツ!!?　ななななんあないを言ってるのよっ！　リオンが居なくてわわわた私が寂しいなんてにやいんだから！」

「はいはい。あ、そうだね。ダーリンにコレ返さなくちゃね」

キュルケは一通りルイズをからかうと思いついたようラ・ローシエルで預けた手紙を渡してきた。

「預かってもらっててすまなかったな」

「どういたしました。でも追いつけるんだったら預かってる意味無かったわね」

「そうだな。でも元々追いつけるとは思っていなかったからな。この船にいること事態僥倖ぎょうこうというものだ」

僕は手紙を受け取り懐へと仕舞った。

「ちよつと待ちなさい。それ本当は私が持っているべきものでしょ。っていうかなんでキュルケなんかに預けたのよ！」

「別に近くに居たのがキュルケだったからに決まってるだろ」

「む。……そ、それじゃあ、なんでキュルケは私に手紙を渡さなかったのよ」

「だってあれはあたしがダーリンから預かったんだし、責任持たなきゃね」

「きいいいっ！　なにが責任を持たなくちゃよ！　とにかくリオン！　その手紙は私が持つわ、よこしなさいっ！　って勝手に何処行くのよ、待ちなさいってば」

はあ、まったくうるさい奴らだな。僕はバカ騒ぎをしている2人を置いて甲板への移動を再開する。後ろからはルイズとキュルケが一

且止まったと思った言い合いをまたしながら追いかけてきた。しかし、本当にこいつらは言葉が尽きないものだな、そこにだけは感心する。

ジンの憂鬱

キキSide

俺たちがワールド達に追いついてから半日ほど経ち、日が暮れ始めた頃。その大陸を視界に納めた。

暮れ日の光に染まったオレンジ色の雲。そしてその雲に包まれて日を背に浮かぶ大陸。

「ラピユタは本当にあつたんだあ」

「? あれはアルビオン」

「いや知ってるけど。ただ慣例として言っておかなきゃと…」
「??」

ラピユタ発言にタバサが怪訝な表情で見てる。まあ、そうだろうな。俺も同じことを近くで言われたら…

「ラピユタは本当にあつたんだッ!」
「……………」

別の場所で笑顔で同じことを言っていたジンに『何言ってるのこイツ?』的な視線を向ける。やっぱあれだな。テンション上がって自分で言う満足感あるけど、他人が言ってるのを見ると果てし無くバカっぽく見えるな。まあいいや。

さらに別の場所へと顔を向けるとリオンを間にルイズとキュルケが一緒に話していた。リオンのには浮いている大地ってどう思うんだろう? ぶつちやけ俺としては少し前に聞いたガリア王の事を考えると……あれがラスダンにしか見えなくなってくる。……さすがに悲観的過ぎるか。

「右舷上方うげんじょうほうの雲中より、船が接近しています!」

鐘楼にいる見張りの船員が大声叫ぶ。俺とタバサはその内容を聞き、船の方へと向く。他の甲板にいる連中も気になったのか皆近くに集まってきて近づいてきている船に視線を向けていた。

「いやだわ。反乱勢力……、貴族派の軍艦かしら」

「さあな。内乱中だ。哨戒の船が見張っていてもおかしくはあるまい」

不安そうなルイズが呟きにリオンが答える。そう言ってる間にも軍艦は大砲をこちらに向けたままどんどん近づいてきた。鐘楼にいる船員は指示を受け取ったのか手旗を振って軍艦に何かしらの意思を示すが、軍艦の方は何の反応もかえさなかった。

そしてすぐ後に見張りの船員は慌てたように鐘楼から降りて行き、船内が慌しくなった。

「アレ、空賊だな」

「見分け方は？」

「あの軍艦、旗を掲げてないだろ」

「旗の有る無しだけで判断していいのか。……ゆるいなあ」

ジンの説明に俺はボケツとした声で言い返す。

「どうするんだ。あれが空賊と言う事はつまりこの船が奴らのターゲットにされたのだろうか？」

「えッ!? そんな…。あと少しでアルビオンだって言うのに」

ルイズがりオンの言った言葉に動揺し、不安そうな声を出しながら指輪を見る。

「ま、相手の出方しだいじゃないか？ 場合によっては積荷だけ渡して俺らはアルビオンへ行けばいい。幸い、今船は風石を使い切ってワルドが浮かせてるから、それを教えてやれば下手に長居はしないだろう」

と、俺はあの軍艦が王子一派が乗っていることを知りつつも、すつとぼけて言う。そして軍艦が横付けされ、

「ピヤッハー！ てめえら全員死にヤガレエ!!!」

「……」

軍艦から現れたメタボの典型的船長と世紀末的乗組員。俺は無言無表情で空賊船長を殴り船から落した。あれ王子違う。それを皮切りにジン、リオンの計3人で空賊達を全滅させた。

「君たちさ、相手の出方を窺^{うかが}うって……」

「ギーシュ。世の中臨機応変に生きなきゃ」

ギーシュの引き気味の言葉にジンが遠い目をしながら返答する。俺も臨機応変に空賊の船から色々な荷物を物色し貰った。もちろん

積んである風石も船員たちで軍艦から半分程運び出す。船員曰くこの位置からアルビオンまでならこれくらいで十分なのだそうだな。なお軍艦の方も商品として港に着いたら売るらしい。そして…

「空賊だ！ 抵抗するな！」

とアルビオンへ近づき雲の中で運航中、船の真上から大きな声が聞こえてきた。本日2度目の空賊襲来である。どうしよう。最初に襲ってきた空賊のこともありリオンは既に臨戦態勢であり、ギーシュ、キュルケ、タバサも戦う気満々である。

「すまない。疲労で戦闘に参加できなくて」

幸い、甲板に出てきたワルドは疲労で動けず、ジンは原作を知っている。チトセは………あれ？ あいつ何処行った？ まあいいや。

「俺が言うのもなんだがどうしよう」

「ホント、どうするん…」

ドゴオンツ！とジンの言葉を切るように大きな砲音が響き、空賊船の船底が爆発した。

「おーほほほっ！ 悪逆非道な空賊め！ この正義のスーパー美少女であるこの私、烏丸ちとてくツルオツ！」

「てめえはいきなり現れて、何さっそく問題行動してんだよっ!!!」

さつきまで隣にいたジンはチトセの声が聞こえた瞬間、目にも写らぬほどの速度で牽引している軍艦の上で大砲に片足を乗せて啗っていたチトセへと接近し、見事な飛び膝蹴りを顔面へと見舞った。

が、その反射的ツッコミ暴行がいけなかったのだろうか、それとも運命か、ジンに不幸が襲う。

膝蹴りによって吹き飛ばされたチトセは無意識だろうか、偶々たまたま近くにあったロープを握りついていた。

握られたロープはチトセの動きに合わせて引っ張られ、マストの足場に何故か置いてあった数本の材木に引っかかり落下してくる。落下した木材は、これまた何故か甲板に纏められていた積荷に当たり、その積荷の中に有った大樽が転がり、それはジンへと向かう。

もちろんジンはそれを難無く躲すが、避けたことにより大樽は大砲に当たり、どうい構造をしているのだろうか、大砲は固定されてい

る台座を軸に物凄い勢いで回転し、砲身がジンへと叩き込まれた。

砲身に側頭部を強打したジンはふらつき倒れそうになった所に先ほど蹴り飛ばしたチトセが振り子の要領でぶつかり、それと同時にチトセが掴んでいたロープが切れてジンと共に絡まり身動きが取れなくなつたまま転がり甲板の端、これもやはり何故か手すりが壊れている場所へと速度を上げて進んでいった。

しかし、流石はジンである。落ちる直前、咄嗟に片腕で甲板淵を鷲掴み落下を阻止する。そして、空賊船の：チトセが大砲で破壊し開いた船底から落ちてきた大きな木箱が直撃し、ドオオオオンツ！と大爆発。

煙が晴れるとそこには爆発の規模に対してそこまで被害を受けていない軍艦だけが見えた。

「ピタッゴラッスイツチ」

俺は無意識に呟く。もう笑うしかない。笑えないけど。今の一連の流れを見てしまっていた他の皆も啞然としてしまっていた。

「殿下！ 大変です！ さっき撃たれた場所から一番大きい火薬箱が落下しました！」 「なに!? どう言う事だ。破壊された場所と荷が置いてある場所は違うはずだろ！」 「それが何故かあの火薬箱だけが砲撃された時転がったようでっ」 「そんな馬鹿なことがっ、それに何故落ちただけで爆発した!？」 「原因不明です!」

ふと、空賊船から慌てた声が聞こえてくる。なんだろうな、これ……。

チトセSide

「いった~~~~いっ!」

ゴシヤッ! という音と共に全身に痛みが走り私は飛び起きました。一体何が起きたんでしょう……。確か空賊を倒して皆さんの命の恩人として感謝されようとして、大砲を撃ったらジンさんの膝蹴りを顔に受けて……。そこから記憶がありませんね。う~~~~ん。

「とりあえず、ここから出ませんと何がなんだか分かりませんね。

……よいしょつと」

私は立ち上がり、嵌っていた穴からピョコリと顔を出します。

「あら？　ここは地上ですか？　うーんと……」

私はキョロキョロと辺りを見て、それから上を向きました。これはもしかしなくても船から落っこつちちやいましたか？　原因は間違はなくジンさんからの蹴りでしょう。酷過ぎます！

「まったく何なんですか！　私はただ皆さんの為に空賊を追っ払おうとしただけなのに。ちよつと大砲を撃っただけで船から蹴り落すとかジンさんは乱暴過ぎです」

ムー！　つと私は頬を膨らませながら私が落ちて出来た穴から這い出ます。あーあ、服が土まみれになっちゃいました。

「……………はああ、どうしましょう。また私一人ハブられたんですね。それに此処は一体どこなんですか？　私、どうやって帰ればいいんですかー!？」

うっぐ。涙が出ていました。何で私ばかりいつもいつものけ者にされるんですか。こんなのあんまりです。はあく。

「……………へえ、生きてんだ」

私が俯いてこの世の不幸に嘆いていた背後からこの世全てを呪い殺すようなとてつもなく低く、ドスの効いた声が聞こえてきました。

「え、ジンさん…？　ジンさんじゃないですか！　もうっ居るなら居るで早く声かけてくださいよ。私心細くて泣きそうになっちゃいましたよ」

私は一人のけ者にされたと思っていたのでジンさんに会えてとても幸せです。でも船の上で蹴られたことには文句を言わなくては。そのせいで私は船から落ちてしまったんですから。

「まったくジンさん。いきなり蹴り飛ばすとか酷いじゃないですか！

そのせいで船から落ちるわ、地面に激突して痛いですし、服も土だらけ。それに…」

と、私はジンさんへと不満を言い募ります。そうだ、いつそのこと今までの不満も言ってしまうでしょう。私はずいどばかりにこの星に来てからの事にも文句を言います。

「ちよつとジンさん、聞いてますか？ さつきから俯いたままで時た
まブツブツと。まったくジンさんには困りものです。もう人として
とても残念な方なのはどうしようもないとしてですね…」

そんな中、突然。プツツンとゴムが切れた様な音が聞こえました。

「……はて？ 何のおどおでよッ!？」

お腹の痛みと共に身体が空中でグルグルと回ります。そしてドサ
リツと身体が地面に叩きつけられてました。どうやらまたジンさん
に殴られたみたいです。

「いきなり何するんですか!?! ってあれ?」

私はお腹を押さえながら抗議をしますがジンさんの姿は何処にも
見当たりません。あれ? 何処行つたんですか?!

「へつくちゅー!」

寒っ! いきなり周囲が寒くなってきました。何が起きているん
です? 私は立ち上がろうとして…ってあれ? あれれ?!

「えっ、ちよつと凍ってます!?!」

余りの寒さのせいか地面が凍り、足やらお尻やら地面に触れている
所が張り付いてしまっていました。こ、これじゃあ動けません!

「ひええ〜、助けて〜!」

必死に氷を取ろうとしていたら背後に人の気配を感じて振り向く
とジンさんがいました。

「ちよつとジンさん! 近くに居たなら助けてくださいよ。凍っ
ちやつて動けないんです!」

「………第五…」

「もうジンさん! 変な事してないで助けてくださいって言ってるん
です! 何を…」

「…波動!!」

目の前が真っ白になりました。私は何が起きたか分からないまま
に白い光の中でクルクルと翻弄され、そして光が収まると同時にド
サツと地面へと放り出されました。

「うつげホツゲホツ! なんですすか〜! …ゴホツ!」

体中あちこちが焦げて煤すすだらけになってしまいました。もう厄日

達が列を成して大移動していました。ああ、コレに轢かれたんですね。そしてブタさん達が去った後、通った場所には足跡だらけの手足が曲がっちゃいけない方向へと向いて痙攣しているジンさんが居ました。

「えつと……大丈夫ですか？」

「……大丈夫に見えるか？」

「え、はい」

「よし、今すぐその首落としてやるっ!!」

「キヤー……!」

ジンさんはそう言うや否や、どういう構造なのでしょう。腕がチエーンソーになり私を真っ二つにしようとする振りかぶり

「ゴボオツ!!」

ドゴンツッ!と言う衝撃と共に私は衝撃で吹き飛ばされました。

「痛いです。もう、ホントさつきから何なんですか？ 意味がわかりません」

私は巻き上げられた土を頭から被り、泥だらけになりながら目の前にある小さなクレーターに眼を向けます。クレーターの中心には身体に穴が開き、と言うよりほとんど千切れてると言っても過言ではない状態のジンさんが有りました。うっわあ、グロいです。

「ジンさん。貴方の勇姿は忘れません。私は貴方の使い魔として立派にジンさんの持つ財産全てを貰ってあげます」

私はジンさんの遺体の前で手を合わせて涙をながす……

「がて……な、ごごどぼ……いつで……じゃ、べえ……」

「きゃっ!!」

死体が喋りました! 何ですかコレ! 気持ちワルっ! 私はジンさんから離れてよく観察してみます。

……あ、千切れた身体が再生していつてます。もはや化け物ですね。それからジンさんの身体は少しづつ元に戻って行き、完全に元通り(服までも元通り)になりますとその場で座り込み、すすり泣き始めました。

「……もうイヤだあ。……なんだよこれ。……うっ、ぐうっ。痛かつ

たあ…」

「あー、ジンさん？ えっと、…大丈夫ですか？」

「大丈夫な訳あるかよ…。落下死しかけるし、圧死しかけるし、んで今の何だよ…。身体千切れかけたぞ…」

どうやら心が完全に折れてしまっているようです。こんな弱ったジンさん始めてみます。ま、どうでもいいことですね。私はジンさんを放って先ほどの衝撃の原因を探してみます。

「あ、コレですね。うーん…：隕石ですかね？ もう粉々になってしまってますが、間違いないと思います。これがジンさんに当たったんですね」

「…：…：…：そうか、隕石なら…：仕方が…：無い…：…：わかるかよ。なんでこのタイミングで隕石…」

私が笑顔で説明しましたらジンさんの目から光が消え、真っ白になってしまいました。

「まあ、人間生きていれば色々ありますよ。」

「こんな人生はいやだあ!!」

私がポンと肩に手を置いて言ったらジンさんは泣き崩れてしまいました。

アルビオンの最後

キキSide

「いやー、ホントすまなかった。我々だけでは帰還できなかつた」「いえいえ。こちらと同じことです。それに積荷とあの軍船をこんな高値で買い取ってくれるなんてこっちこそ頭があたりません」と、船から下りた船長と王子が談笑しながら話している。

俺たちは今、ニユーカツスル城の地下に在る隠し港つて言うのか？ まあ、そんな感じの場所にいる。何故そんなことに俺たちがいるのか？ それは例のジン&チトセ爆死事故まで遡さかのぼるのだけでも、細かく説明するのは面倒なので端的に。

爆発後、ルイズ達と王子達は互いに色々と慌てふためいていたが、王子達の方はとりあえず俺らの船を引き続き襲うためか、さらに降下してきて船の真上へと付けて部下たちをこっちの船へと降ろしてきました。が、そこでさらに無茶苦茶な事が起こった。

始めに上空から妙な音が聞こえてきたので、今度は何が来たんだよ…と、もう顔を動かすのも億劫だった俺は白眼使つて確認したら…：上空から隕石が落ちてきていた。…：うん、アレにはビックリした。そしてその隕石は見事に王子とこっちの船2隻を貫通していったのだった。そりゃあもう王子一派も俺達も大パニック。さすがにこんな事になったら王子達も空賊のマネなんてしてられずルイズ達に正体をバラし墜落の危機を互いに乗り切ろうみたいになつた。

で、全員で2隻の船の緊急補修を行い、何とか墜落しない程度まで直した後、無事だった軍船を使いこの港まで牽引しながら航行した。「ほほ、これはまた、たいした戦果ですな。陛下」

「ああ。まあ少々トラブルがあつたが、大量の硫黄と軍船だ！」
「おお！ 硫黄どころかこんな立派な船まで。これで我々の名誉も守られるいうものですね！」

背の高い初老の男が王子と共に手に入れた物に対して歓喜しており、周りにいるこの城の兵たちも同様に喜び勇んでいた。しかし、その際の会話内容が『これで名誉ある敗北だ』系ばっか。確かに戦力差

はあるかもしれんが…

「負けること前提で戦うなよ。まあ、かと言って勝つことは出来ないだけだな」

「戦力差は歴然」

ここに来る途中に見えた革命軍一派の拠点には軍船は数十隻ほどあった。その中に一際大きな軍艦があり、元々は王子達の艦隊旗艦だったらしいのだが拿捕され改修されてレキシトン号と言う名で使われているらしい。他の船舶も殆んどが戦いの中拿捕されたそうで、王子達のほうにはもう軍船が無いとのことだ。完全に詰んでるじゃん。まあ、そういう事情もあつて今回の軍船取得は幸運だったらしい。

「まあいいや。そういえばルイズ達は？」

「あれ？　そういえば何処にいったんだろ？」

「ルイズ達ならさつき皇太子様と一緒に歩いていったわよ」

俺がボケツと考えている間にルイズ&リオン、ついでにワルドが居なくなつてたので近くにいたギーシュに聞いたがギーシュは首を傾げてしまった。ただその代わりにキュルケがルイズ達の行動を見ていたのか教えてくれた。王子と移動したつてことは手紙の回収しにいったんかな？

そういえばこの後どうなったけ？　…ダメだ、細かいことが思いだせねえ。ワルドとルイズが結婚式挙げて、なんやかんやあつて王子がワルドに殺されて…うん、まあいいや。

「とりあえず、ジンの依頼は果たさなきゃなあ」

「…彼はあの爆発で死んだんじゃ？」

「いや、2人とも落ちていったのを視たから多分生きている…は？　？」

生きてて欲しいなあと言う希望を持たせてタバサに言い返す。まあいいや。とりあえず不審気なタバサを適当に説得して俺は下見をするために城内を散策する。城の間取りはもちろんのこと、結婚式とかしそうな礼拝堂。つてか城内に礼拝堂つて必要か？　まあ必要だから作ったのか。まあいいや。

「…ムグムグ、…何処行つてたの？」

「散歩つてかいつの間パーティーやってんだよ。それ美味しそうだな。どこにあるん？」

「アナタがどっかに行つた後、案内された。それとこれはあつちのテールにある」

城内の下見をしていたらタバサ達が美味そうな物を食べていたのを発見した。俺もとりあえず、とる物とつてからタバサに話を聞いた。

聞いた話を要約すると、なんでも明日、王子達は敵軍に向かつて特攻を仕掛けるらしく、このパーティーは最後の晩餐みたいだ。その際に、王様さんが兵たちに暇を与えて逃げるなら今が最後だぞ。と言つたらしいが兵たちは皆、特攻万歳状態だったそうだ。

「モグモグ…、しつかしなんでこの手の方々つてそんなに特攻大好きなんだ？ もう少し生きること執着を持とうよ」

「…彼らは騎士。国の為に最後まで戦つてこそ彼らの名誉が守られる」

「…まあ、本人たちの意思だし…ンツグ。名誉のためとかも解らんことでもないしな」

隣にいるタバサがアルビオンの人々を見ながら俺の独り言に答える。まあ、だからと言つてあの人達に共感はまだたくないけどな。名誉より命だ。コレ大事。命あつてこそ大切なものを守り続けることが出来るし、大切な人達と一緒にいられる。うん、今のセリフは俺のキャラじゃない。まあいいや。

そんなこんなでパーティーは楽しく飲み食いさせてもらいました。

リオン S i s e

「ん？ ルイズか？」

僕はパーティーから抜け出し、与えられた部屋へと行く為廊下を歩いていると、窓を開き月を見ているルイズを見つけた。

「…リオン」

「どうした？」

僕が近づくとルイズも気づき僕に振り向くがその眼は涙ぐんでおり、表情も暗いものだった。僕はルイズに声を掛けるとルイズはいきなり僕にもたれかかってきた。

「いやだわ……、あの人たち……、なんで、どうして死を選ぶの？ わけわかんない。 姫さまが逃げてって言うてるのに……、恋人が死んで欲しくないって言うてるのに……、ウエールズ皇太子は死を選ぶの？」

ルイズは僕の胸に顔を当てて泣きじやくりながらそう言った。僕は震えてしやくりをあげるルイズをなでて落ち着かせる。

「あいつは自分の大事なものを守る為に戦うと言っていた」

僕はパーティー中に話しかけてきたウエールズとの会話を思い出しながらルイズに言う。自分が亡命などしようものなら確実にトリストインに攻め入る口実になってしまう。そして、そのせいで自分の愛する者を危機に合わせってしまうことを分かっている。だから逃げる事をせずにここで戦い、王族として散ることを覚悟していた。

「なによそれ。愛する人より大事なものがこの世にあるっていうの？」

「そうじゃない。愛する者が居るからこそ逃げる事を良しとしないんだ」

僕はあの海低洞窟での戦いを思い出す。大切な人を守る為に友と戦い、そして敗れた。もちろん悔いはあった。しかし、それでも僕はきつと同じ場面にあつたら彼女を守る為に同じ事をしただろう。

「……わたし、もう一度説得してみるわ」

「やるだけ無駄だ。あいつは覚悟を決めている」

「でもやってみなきゃ！」

「やめておけ。それにお前には他にやるべきことがあるだろう」
「……………」

ルイズは僕の言葉に口を噤む。きつとルイズも解っているのだろう。ウエールズへの説得が無意味な事に。

「…ねえ、リオン。貴方も彼らと同じなの？ 大切な人の為に死を選

ぶの？」

「…ああ」

僕はルイズの問に答える。

「…ホント自分勝手」

ルイズは僕の答えに顔を伏せて小さくそう呟いた。

「…ルイズ、そろそろ」

「ごめんリオン。わたしもう少し一人で考え事してたいの」

僕はこれ以上話を止めようと、多少強引だがルイズに促そうとしたら、ルイズは急に僕から離れて顔を伏せたまま歩いて行ってしまった。

まったく、あまり思い詰めなければいいのだがな。

キキSide

朝が来た。素晴しくない朝だ。

昨夜、散策中にばら撒いていた影分身で一晩、城中を監視そして先ほど分身を解いて情報を回収したんだが、リオンとルイズに王子、後ついでにワルドの重苦しいというか暗いというか、まあそんな内容が入って来た。止めるよ。朝からテンション下がるわ。まあいいや。「さーと、とりあえずはジンの依頼どうり王子を助けるかな」

まあ、王子自身は特攻したがってるみたいだけど、俺には関係ない。だってお金が欲しいから。

「アホなこと考えてないで準備してこよう」

下準備の廊下に呪印を刻むのは新たに出した影分身でやっている。ので俺はメインの準備だ。この呪印は俗に言う人払いと認識阻害の効果を持つ結界を作り出すものであり、対象以外の人間を遠ざけ、尚且つ結界内に入った人物の思考や認識能力を鈍化させるものである。準備に時間が掛るが超便利。

さらに城内は既に特攻組と脱出組とでそれぞれの船に荷を積み入れをしていて人が少ない上に、タバサ達の方には影分身をつけてるの。で裏でコソコソやっていることを疑われる心配も無用。好き勝手に

きる。

では、ルイズとワルドの結婚式の開始と共に行動開始だ。

つてなワケで、手始めに変化の術でワルドになり、城内を前もって決めていたルートを歩いて王室へ行き中に居る王様の腹に風穴開けて殺した。そして死体を隠して、変化の術で血まみれ瀕死状態の王様に化けて倒れておく。すると…

「陛下ー！」

「グア……、ガ、ガイ……ウスか……」

このように誘導しておいた近衛隊の隊長が入って来る。

「陛下ー！一体何が！今、傷を治しますゆえ少しの辛抱をツ……！」

俺は騎士の眼を見て、腕を掴み相手に幻術を掛けながら言葉をかける。まあ、内容は『自分は助からない。王子を亡命させろ、自分の死体と共に特攻してくれ』的なことを言った。幻術にかけて思考を鈍化させているので騎士は疑うことも無く何度も返事をしながら頷いてきた。

「あの……手紙を、ウエールズに……。頑固者じゃ。言葉だけでは、納得せんじやろう。だから……手紙を認め^{した}た。あれを……渡しておくれ」

「……わかりました。必ずや陛下のお言葉と共に殿下に届けます。では……また後ほどお迎えに上がります」

騎士は動かなくなつた俺に涙を流しながらゆつくりと横たえると、机の上に置いておいた手紙を取り、部屋から出て行った。

まあ、分かっていると思うがあの手紙は昨夜の内にこの王様の筆跡を真似て作った偽造書である。めっちゃ作るの面倒臭かった。こういう時、写輪眼だったら楽だろうなと思うた。

とりあえず、隠していた本当の王様の死体を出して、俺が倒れていた場所へと横たえる。

「しかし、これやってること完全に悪人だよな」

自分の益の為に人殺しして、謀って。バレたら絶対にタバサに嫌われる。……うん、深く考えるのはよそう。良心が痛くなる。いや、むしろ良心うんぬんよりタバサに嫌われるのが怖いです。

まあ、そんな感じに1人勝手にテンションをただ下げしながらも聖

堂へと移動した。

ルイズSide

「リオンツ！」

ガキンツ！と私の目の前で殿下の胸に突き出さたワルドの杖をリオンの剣が弾いた。

「くツ!? あと少しのところをツ！」

ワルドの表情は私が今まで見たことの無い形相をして後ろへと飛んで私たちから離れていった。

「ワルド！ 一体どう言う事なの!？」

結婚式の最後、私はワルドと結婚できないと自分の意思を伝えた。ワルドは始めはもちろん驚いていたし、優しい表情で考え直すよう言ってきた。でも私の意志が変わらないと分かると今までの表情から一変してとても怖い表情となって私に掴みかかってきた。

その際、リオンが私とワルドの間へと入って来てワルドはこれ以上手が出ないと分かると、殿下に向かつて杖を突き刺そうとしたけど、それもリオンに止められた。

「あははは。まったく中々上手くいかないものだね。君の気持ちをつかむ為色々と策を弄していたし、君を手に入れられなかったとしても、手紙さえ手に入ればウエルズ諸共もろともと思っていたが、使い魔：いや、リオンくん、君のせいで全てご破算だ」

「ワルド子爵ツ！ あなたはまさかツ」

殿下も腰の杖を引き抜き、構えながらワルドへと叫べんだ。殿下の言葉にワルドは獰猛な笑みを浮かべた。

「ああ、その通り。いかにも僕はレコン・キスタの一員だ」

「貴族派!?! なんて、どうしてツ！」

「我々はハルケギニアの将来を憂うれい、国境を越えて繋つながった貴族の連盟さ。我々に国境は無い！ ハルケギニアは我々の手で一つとなり、始祖ブリミルの降臨せし『聖地』を取り戻すのだ！」

ワルドは私の間に変わらぬ獰猛な笑みを浮かべたまま大仰なしぐさでそう叫んできた。その姿は幼い頃に見た彼とはまったくの別人

だった。一体何があなたをそこまで変えたの？ 私はそんなワルドに恐怖を感じて震えて後退る。あとすき

「…で、言いたいことはそれだけか？」

そんなワルドの姿にリオンはいつも通りの態度で彼を冷笑した。ワルドはリオンの態度に一瞬だけど表情を歪めたけど、すぐに先ほどの表情に戻り、逆にリオンを見下したように喋り始める。

「ふん、いくら腕が立つと言っても所詮は余所者。そんな君に我々貴族の崇高なる考えは理解できないようだね」

「そうだな。そんなバカバカしい考えなど理解する気にもなれん」

「…あまり図ずに乗るなよ。小僧」

ワルドはリオンの言葉が癪に障ったのか表情が険しくなり、杖を構えた。リオンもこれ以上話すことは無いと思ったのか、剣を構えてワルドと対峙する。

「私も加勢しよう。先ほど命を助けてもらった恩もある」

殿下もそう言うのと一歩前に出て、杖を構えた。聖堂の中はピリピリとした空気に包まれ、そして……

「エアハンマー！」

殿下とワルドが同時に魔法を撃ち、それが合図のように戦いが始まった。

キキSide

ガンツ！キンツ！と俺が聖堂へと飛雷神の術を使って移動すると、そこではリオンと王子、と何故かいるキュルケ&タバサと俺の影分身がワルド（×6）と戦っていた。多分偏在で数を増やしているんだろう。

リオンは3人、王子は1人、そしてキュルケとタバサ&俺（影分身）はルイズを守りながら2人のワルドと戦っており、ぶっちゃけワルドの勝ち目は皆無だ。

しかしリオンと王子が戦っているのは解るが何故にタバサ達がいるんだ？ 現状の把握が出来るので影分身に合図を出し、タイミング

を見て入れ替わることにする。

皆にバレないように影分身に合図を送り、影分身にはわざとワルドの攻撃に当たってもらおう。

「キキツ!」

「まずはーりうがツ!」

「なわけない」

と、影分身がワルドの刺突で貫かれボンツと消えると同時に横合いから蹴り飛ばす。吹っ飛ばしたワルドは偏在だったようで空気に溶けるように消えていった。

「…怪我は?」

「あの程度で怪我はしないって」

タバサは心配してくれているのか声をかけてきてくれた。俺は心配ないとタバサの頭をポンポンと撫でたら案の定叩かれた。最近わかったことだがタバサはどうも子供の様に頭を撫でられるのが嫌らしい。

さて、そんなことより影分身から得た情報によると、タバサ達がここに居る理由と言うのがキュルケがルイズとリオンが居ない事を不審がって探していたらしい。なんでも嫌な予感がするとか。女の感って恐ろしいな、おい。

まあ、そんな感じで聖堂まで来たらいきなり戦闘になっていて、なんやかんやとルイズを保護しつつも戦っていたようだ。

「ぐっ!」

「あッ!? 殿下が!」

ワルドの攻撃を食らい、うずくま蹲ってしまった王子にルイズが咄嗟に駆け寄ってしまう。何やってのさ。

「ククク! 丁度良い! まとめて死ねえツ!」

めっちゃ悪人セリフを吐いて、王子とルイズに向かって魔法を纏わせた杖を振り下ろす。が、残念ながらそれが二人に届くことはなかった。

キインツと、甲高い音と共にワルドの杖は弾き飛ばされ、そしてザクリとワルドの左肩へと短剣が突き立てられ、血飛沫が舞った。

「ぐがあああッ！ き、貴様あ！」

「まったく、お前は少しは後先の事を考えて動けんのか？」

「リ、リオン……」

偏在だった3人のワルドを倒したりオンが油断していたワルドへとカウンターを食らわせた。すごいカッコイイな。俺は残った偏在の首をへし折り消しつつそう思った。

「さて、観念したらどうだ？ もうお前に勝ち目はない」

「……ふふふ」

「？ ……何を笑ってッ!？」

肩の傷を押さえながら不気味に笑いだしたワルドにリオンが警戒した瞬間、城全体が爆音と共に大きく振動した。あく、これって攻撃されてる？

「始まったか」

「まさか…奴等が侵攻してきたのか!? 聞いていた情報より早すぎる！」

「ハッ、当たり前だ。その情報はわざと流した物だからな。本当の間は今、正確には僕が指定した時刻内に連絡しなかったら攻撃を始めるようになっていたのさ」

ワルドは痛みのせいかわらフラフラしながら立ち上がり、王子の戸惑いの言葉に答える。

「ちっ、心中するつもりか！」

「はははッ！ すまないが僕には為すべき事があるのでね。死ぬのはお前たちだけだ！」

ワルドは叫ぶと腰辺りから予備の物だろう。小型の杖を出し飛行の魔法を使って先ほどから来ている攻撃で割れた窓から飛び去って行った。

ああ言う、逃げ時を見極められる所は好感もてるなあ。と、とてつもなくどうでもいい事を思いながら上から落ちてくる石を避けながらリオン達へと近づいていく。

「リオン、大丈夫？ 怪我は無」ダーリン怪我は無い？ 大丈夫だった？」ってキュルケ！ いきなりリオンに抱きついてるんじゃないわよ

！」

「はあ：お前ら、バカ騒ぎするのもいいが生き埋めになりたくなかったら早く脱出するぞ」

「しかし、どうするんだい？ もう船は出港してしまったのではないか？」

リオンは嘆息しながら脱出を促し、キュルケとルイズを鬱陶しそうに引き剥がしていると王子が船の事を心配してくる。

「確かに。城が攻撃されているのに悠長ゆうちやうに待ってるはずも無いか」

リオンは王子の言葉に表情を曇らせていると

「あッ！ みんなッ！ こんなところに居たのかい！」

「殿下！ ご無事で!」

聖堂の扉からギーシュと騎士隊長が勢いよく入って来た。

「ギーシュ！ あなたどうしてここに？」

「何言ってるんだい！ いざ出航となった時に君たちが居ないことに気づいて探しに来たんじゃないか！」

「おいギーシュ。それはまだ船は出港していないということか!」

「そうだよ。無理矢理待ってもらってるんだけど、でも早く戻らないと置いていかれてしまうよ！」

ギーシュの言葉にリオン達の表情は明るくなり、港へと急ぐぞとリオンは言って走り出す。

で、もう片方、王子と騎士の方は……

「ガイウス殿！ どうしてこんなところに？」

「はッ！ 実は殿下に至急お伝えしたい事と、お渡ししたいものがあります」

と騎士の人は俺が王様に化けて騙った内容を話していく、最初は渋っていた王子も騎士の必死の説得というか懇願？ 的なものと手紙を読み、生き恥をさらす悔しさや国を再建する為の願いを託された事への思いやらで色々悩んでいたが、最終的には生きることに決めたみたいだ。

ちなみに、あの手紙にはチャクラが仕込んであり、読むと文字を通して軽い幻術による催眠を相手に掛けるもので、つまりは……アレを

読めばなんやかんや悩んだ所で手紙の内容通りに思考が行くことになるのである。いやあ最低な事してるなあ俺。

「ん？」

「早く」

俺が横目で王子と騎士の事を見ていたらタバサが服を引っ張り移動を急かしてきた。

その後は皆で待たせてある船まで走り、乗船。崩れていく城から、そしてアルビオンから脱出する。騎士の方は王様の亡骸を回収して特攻するための軍艦に乗り込む為分かれた。どうやら軍艦の方は別の場所から出るらしい。

「父上、そして共に逝く騎士達よ。私は必ずアルビオンを取り戻し、嘗ての平和で美しい国を再建してみせます」

王子は去り行くアルビオンに向かい杖を掲げ、涙を流す。そしてその様子を見つめるルイズは隣にいるリオンに寄り添うようにくっ付き、ギーシュは涙を滂沱の如く流し、キュルケとタバサは感慨深そうに、そして俺はジンからの報酬をどんぐらい貰おうかと考えながら、ポケットとしていた。

任務からの帰還

キキSide

さて、一部の人たちにとってははハッピーエンド(?)な終わり方をしたアルビオンの旅。そこで今現在い、俺たちはラ・ロシエールへと帰港した。

「で、これからどうするんだ?」

「そうだな。とにかく先ずはウエールズをどうにかしなければな」

「…? 殿下をってどう言う事よ」

俺とリオンで王子のどこを話していたらルイズが聞いてきた。

「…はあ、まったく。いいか? レコン・キスタの奴等が何処に潜んでいるかわからない現状、ウエールズがトリステインで目撃されてみる。それこそトリステインの姫はウエールズを好いていて亡命させた。と、ゲルマニアに公表し、婚姻の阻害をしてくる」

「そうね。手紙だけなら言い訳出来ないこともないけど、本人が実際に居たんじや言い分けも出来ないから破綻は確実ね。まったくルイズだったらそんな事もわからないの?」

「むう…なるほど。…ってキュルケ! またあんたはリオンにくつついてツ! 離れろツ!」

ルイズはルオンとキュルケの説明を受けて納得したと同時にリオンに引っ付くキュルケへと攻撃を開始した。いやあ女三人集まって姦しいと言うが、この手の人種は1人でもうるさい。まあいいや。

「とりあえず、王子さんはコレ着てれば大丈夫でしょ」

「…これは、空賊の服。いつのまに」

「必要になると思って用意しておいただけですよ」

何故か敬語になってしまった。いや、まあ相手の方が年上だし王子だし普通のことだな。まあそんなことより俺は王子に空賊の服を渡し着替えさせる。

「じゃあ、一旦適当な宿に行つて王子の迎えを待つか」

「…迎えだと? 何か当てがあるのか」

「ああ。多分この街に居ると思うんだけど。…居てくれるよな

「？」

「なにそれ？」

俺の要領の得ない言葉にリオンとキュルケが怪訝な表情をする。いやあ、俺だつて確証ないし。実際ジンの奴、生きてるとは思うけど落ちた後どう行動するかなんて予想できないし。主にチトセが。まあいいや。

「とにかく王子と行く当てのない人たちは近くの宿に一旦向おう」

「……お金」

俺が無理矢理話しをまとめて宿へと促そうとしたらタバサが服を引つ張り言ってきた。宿代はどうするのか？　と言う事だろう。

「大丈夫。全部ジンに払わせる」

『……………』

俺の言葉にタバサはもちろんのこと他の皆も冷めた目で見てくる。

「当てと言うのはジンのことだったんだね。と言うか、彼は生きているのかい!？」

「きつと生きてるんじゃないか？」

「ええ〜」

ギーシュの問に対し俺なりの答えを返したら呆れた顔をされた。まあそんな事より、と適当に話しをはぐらかし、宿へと行く為に大樹を下りて広場へと出る。ここで一部の人たちとは分かれる。

王子…と言うかアルビオン王家に仕えていた人たちは最後に王子へとお礼や感謝の気持ちを込めて別れを言つて去つていった。

そして別れも終わり、俺たちが移動しようとした時、

「あー！　みなさー！　ん!!　　ご無事でしたかッ！」

チトセが現れた。おおラツキーだ。つてかチトセを見てラツキーと思える日が来るとは思わなかった。まあいいや。チトセが居るってことはイコールでジンも居るってことだ。

「おう。チトセも元気でなにより。ところでジンはどこだ？　ちよつと話したいことが有るんだけど」

「ジンさんでしたらこの先にある宿で飲んだくれます。案内します？」

チトセが指を指しながらジンの居場所を教えてくれる。つてか何故に飲んだくれてるんだ？ そんなに辛い事があったのか？ あつたんだろいなあ。俺はのほほんとしているチトセを見る。普通にすれば可愛いんだけどなく。まさに天使の皮を被った死神。

「頼む。 んじゃ行こう」

俺はリオン達に声をかけてチトセの案内の元、宿屋へと向かった。宿の扉を開けるとそこは他の宿と同じように一階は酒場となっており、様々な人が食事をしたり話しをしたりしていた。が、その酒場のとある隅つこの席。そこを中心に一定の範囲だけぼつかりと穴が開いているように人が寄り付いていなかった。

いや、正確には寄り付けないが正しい。その席の周りには散乱した酒瓶や料理が乗っていたであろう皿にこぼれた料理の残骸。さらには血痕らしき赤黒い染みまである。ハッキリ言つてドン引きである。他の皆もジンの有様に引いていた。

「酷い」

「船から落つこちてから私を殺そうとしたり、死にかけたり、急に泣き出したり、拳句の果てにここに戻ってきてからずつとお酒を飲んでは暴れてと、もう情緒不安定で…。一体なにがジンさんをああしてしまったのでしょうか？」

タバサの一言にチトセは可愛らしく首を傾げた。きつとあの船からの落下後に色々あつて何か色んなものがプツンしちやつたんだろうなく。俺のいた世界でも何人かの転生者があの世界に耐えられなくてああなつた。まあ、あそこまで酷くは無かったが。まあいや。俺は空き瓶やら皿やらを避けながら近づき声をかける。

「おーいジン」

「ヴあツ？」

色々アカン眼をしていた。こう言つてはなんだがクスリをやつてるんじゃないかと思わせる眼だ。

「びゃんだヴえるね！…ぎぎふあヴおつるうツ!？」

「……………」

最早人語すらままならなくなっているジンに対し俺は静かに、尚且なおか

つ後ろに居る皆にバレ無いように意識を刈り取る。そして同時にジンの体中にチャクラ糸を巻きつけて操る。

「おう。そうなんだ。アレが……そう、それ」

と、俺はジンと会話しているように喋り、それに合わせてジンを動かす。なんて面倒臭いことをさせるんだ。最初に考えていた報酬の量をさらに上げて請求しようかと心に決めて俺は演技を終わらせる。最後にジンを背負い皆のところまで戻る。

「……そいつは大丈夫なのか？」

あまりにもジンの醜態にリオンでさえ心配してきた。俺だって本当はこんな状態の生き物とは関わりたくないが、金の為だ。我慢すればなんともなる。忍びとは耐え忍ぶものなのだから。

「ああ、少し泥酔していたけど話しは通じた」

「それってホントに通じてるの？」

うっさい。余計な事言うな。ピンクチビ

「まあ、とにかく。今日はここで一泊してから明日、改めて話し合うって言って寝ちまったんだ。とりあえずリオン達は皆の部屋をとつてくれ。俺はジンを運ぶからさ。チトセ、部屋の場所教えてくれ」

「あ、はい」

とチトセに案内を頼み、俺はジンを部屋へポイするためにチトセの後を追った。

リオンSide

「あ、リオン。おはよう」

「ああ」

昨日、僕たちはとりあえず部屋を取った後、各自休憩なり街へと出かけるなりして一日を過ごした。

「……………おはよう」

「おはようございます。ルイズさん、リオンさん」

2階から1階の酒場まで降りるとぐったりとしたジンと食事をしているチトセが居た。

「おはよう2人ともっ……てジン、大丈夫なの？ 顔色すつごく酷いけど…」

ルイズがジンを心配して話しかけるとジンは死んだ魚のような眼と表情でコクリと小さく頷いた。…それは大丈夫ということだろうか？ ハッキリ言つてその表情と行動を見ると到底大丈夫だとは思えないのだが。

「……だあ…やす………ヴあく。 ………ダム………ら………いゝ」

「…え？」

「あー、えつとですね。ルイズさん、ジンさんは『大丈夫。皆が起きて集まってくるまでには喋れるようになってるから』つておっしゃっているんです」

「そ、そうなんだ」

ルイズが戸惑い気味にチトセの言葉を聞いて頷く。しかし、よく今の言葉を翻訳できたな。何を言ってるのかまったく理解できなかったぞ。

「ダーリンおはよう」

「…おはよう」

「おは」

そうこうしている内にキュルケ、タバサ、キキが2階から下りてきた。その後直ぐにウエールズや他に泊まった者達も集まり、それぞれ朝食を取り始めた。

「えく。とりあえず、ウエールズ殿下と他の皆さんには行方不明となった、と言う事にして自分の領地へときていただき、身を隠してもらおうと思います」

「ふむ、なるほど。しかし良いのかい？ 私たちを匿う事を君1人で決めて？」

「大丈夫です。体面上、領主は父となっていますが実質領内の事を取り仕切っているのは自分ですのでちよつとした無茶ぐらいは平気で出来ます」

と、朝食もそこそこに、ジンも回復した様で今後について話し始めた。ウエールズはジンの提案に一つ一つ質問や確認をして行き、そし

て彼等の今後の動向とそれに伴った情報操作、つまりは噂を流していく事が滞り無く決まった。

「ではミスタ・アルベルト。しばらくの間私達一同お世話になるよ」「いえ、こちらこそ。たいしたもてなしもできませんが」

話し合いが終わり、ウエールズとジンは互いに笑顔で握手をした。「では僕達の方は今回の事を報告するためにトリステインの城へと向かう。すまないがまたシルフィードで運んでもらって構わないか?」「かまわない」

僕は席から立ち、タバサへと頼みを言うと小さく頷き了承してくれた。

「あ、ミス・ヴァリエール。実は頼みごとがあるんだがいいかい?」

「何でしょう殿下」

「これを…、仕方ないとは言え彼女を謀ることになってしまう。せめてこの風のルビーをアンリエッタに渡して欲しい」

僕達が宿から出て行くこうとしたらウエールズがルイズを呼び止め、指にはめていた指輪を引き抜きルイズへと手渡した。

「殿下。…分かりました。必ず姫様にお渡しします」

ルイズは手渡された指輪をしっかりと握りしめウエールズへ返事をした。

そして数時間後……

「杖を捨てろ!」

僕たちを乗せたシルフィードをトリステインの王宮の中庭へと着地させ、その背から地面へと僕達が降りると警備をしていた兵士たちが僕たちを包囲し、その中の隊長と思わしき人物がそう叫んできた。まあ、当たり前だろう。レコン・キスタによって戦争が起きようとしている中、いきなり城の上空から侵入してきたんだからな。

「…ッ」

「ルイズ、僕達は無断で王宮に入ったんだ。おとなしく従え」

高圧的な相手の態度にむっとした表情をしたルイズを窘めて僕は腰の剣とダガーを外し足元へと落とす。ルイズや他の皆も同じように持っている杖を地面へと置いた。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。ふれを知らんのか？」

隊長の男が杖を向けながら僕らを不審げな眼で見ながらそう言った。なるほど、厳戒令が出ていたのか。どおりで王宮に近づいた時、騎士達が殺気立って叫んできたわけだ。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しいものじゃありません。姫殿下に取り次ぎ願いたいわ」

「ラ・ヴァリエール公爵様の三女とな？」

僕が騎士達にどう説明しようか思索していたらルイズは隊長の前へ出て自身の身分を言った。しかしだ。例え公爵家の人間だと言われても普通すぐには信じないものだ。

実際、隊長の男も杖は下したものの口髭をいじりながらルイズの顔を不審げな眼で見続けた。

「ふむ。確かに目元が母君に似ておる。とりあえず謁見の要件を伺おう」

どうやら隊長の男はこちらの話しを聞いてどう対処するかを決めようと考えたようでルイズへと謁見の概要を質問してきた。

「それは言えません。密命なのです」

「では殿下に取り次ぐわけにはいかぬ。要件もわからぬままに通したのであればこちらの首が飛んでしまうからな」

「密命だもの。言えないのはしかたないでしょう」

「では他に何か証を…、例えば殿下が認めた書状などはお持ちで？でなければ先も言ったように殿下への取り次ぎは出来ぬ」

これはどちらの言い分も正しい。密命として任務を任せられている以上その内容を言うわけにも行かず、かと言って相手の方も王宮の警護を任せられている以上、そうですかと身の潔白を証明しきれぬ輩を王宮内へと入れる訳にもいかない。

しかし証か……。

「……ルイズ。指輪を見せてはどうだ？」

「え？ あッ！ 指輪！」

証というのであればアンリエッタが所持していた指輪である水のルビーは十分な証として機能するはずだ。しかもこの指輪はウェー

ルズ曰くトリステイン王家の秘宝でもあるそうだ。

そうなるとあの指輪が国の秘宝だとあの女は知らなかったのだろうか？ いや、知っていたらルイズへと渡した時に困ったら売って旅費にしろなどと言うまい。たぶんアレの中では親から送られた数ある装飾品の一つとしてしか認識していなかったのだろうな。まったく、ほとほと呆れる。

「むう。確かに姫殿下がいつも付けておられた指輪に似ておる。……暫し預かってよろしいか？」

「ええ。それを姫殿下へと見せればわたしたちの事をわかってもらえるはずよ」

ルイズが隊長の男へと指輪を渡すと男はそれを持って王宮内へと入っていった。おそらくアンリエッタへと指輪を見せに行ったのだろう。

そしてしばらく待っていると……

「ルイズー！」

「姫さまー！」

アンリエッタがルイズの名を呼びながら駆け寄り、ルイズもアンリエッタの姿を見ると先ほどまでのむすつとした表情から笑顔になった。

「ああ、無事に帰ってきたのね。うれしいわ。ルイズ、ルイズ・フランソワーズ……」

「姫さま……」

二人はお互い感極まったと言うように目を潤ませ強く抱擁を交わした。

しかし、予想はしていたがこの二人は会う度にいちいちこんな三文芝居のような事をしないと気がすまないのだろうか？

そして二人は満足したのか抱擁を解くと、ルイズは懐から例の手紙を取り出しアンリエッタへと手渡した。

「やはり、あなたはわたくしが一番のおともだちですわ」

「もったいないお言葉です。姫さま」

またそれか。僕は小さくため息をついて二人の様子を見る。アン

リエツタは手紙を大事に抱くと僕たちの方を見て顔を曇らせた。

「……ウエールズさまは、やはり父王に殉じたのですね」

「……姫さま。それは……」

ルイズは一瞬何か言おうとするがすぐに口をつぐみ俯く。それをアンリエツタは肯定と受け取ったようでさらにその表情を曇らせた。

「……いいのです。わかっていたことですから。そういえばワルド子爵の姿が見えないようですが？」

「その事でも含めて詳しい報告をしたい。内容が内容故にできれば人目の無い場所が好ましいのだが？」

ワルドの不在に疑問をもったアンリエツタへ僕は言う。さすがに衛士隊の隊長という地位の人間が裏切り者だったなど、こんなに人が多いところで言うわけにもいくまい。

「そうですね。わたくしの部屋へと行きましょう。他の方々には別室を用意しますのでここでお休みになってください」

アンリエツタはそう言うのと王宮へと歩きだし、僕とルイズはその後について行った。

レコン・キスタ

キキSide

『あの伯爵が裏切りものだったなんて……。まさか、魔法衛士隊に裏切り者がいるなんて……。』

『姫さま……。』

『わたくしが、ウエールズさまのお命を奪ったようなものだわ。裏切り者を、使者に選ぶなんて、わたくしはなんていうことを……。』

『姫さまのせいではありません！ それにウエールズ様が死んだと決まったわけでは……。』

『ルイズ……。わたくしだって信じていたのです。しかしワールドによつて傷ついた身でアルビオンへ残ったのでしょうか？』

『それは…そうですが』

と、姫さまとルイズが悲壮感ただよわせて話し合っているのを俺は案内された部屋から百眼と読唇術を使い覗き観ていた。なぜ俺がそんな事をしているか？ それは暇だからだ。案内された部屋には何も無く、暇つぶしすることが出来ないため、暇つぶしの覗きである。なんか日本語おかしいな。まあいいや。

「あー、しかし思い出せねーなー」

この先どういう感じで進むんだっけ？ 全然思い出せない。零戦っていつ頃手に入るんだっけ？ あ、いや、召喚されてるのリオンだし手に入れるの零戦じゃなくて飛行竜…はデカすぎるよな。じゃあD2の飛行艇（名前が思い出せない）かな？ んーアレもデカいから無いなー。

小型で1〜2人乗れる物…：やっぱリアバードが妥当だよなあ。でもTODってレアバード出てこないし。

あッ！ そういえばアッシュもこの世界にいるんだっけ。つてことは他のテイルズオブ世界の色々な物があってもおかしくないか。…いや、待て自分。ここには烏丸チトセが居るんだぞ。しかも原作版の淑女ではなくアニメ版の方が。あの世界観を考えると……

〈略〉

……でもやつぱりチェーンバインドってかつこいいと思うんだ
よな〜……

〈略〉

……斬撃って飛ばした方がいいの……

〈略〉

……だし、そうなるよ、

「キキ」

「ホフアツ？」

色々と思考に耽^{ふけ}っていたせいでタバサに声をかけられたら驚いて
変な声を出してしまった。俺は皆の反応が気になり周りを見て
……ってあれ？

「帰る」

「え？ あ、ああ。そういう事ね」

周りを見たらタバサ以外部屋に居なかった。いつの間にか相当時
間がたっていたらしい。途中から覗きそっちのけで色々と考えてし
まっていた。……あれ？ 何考えてたんだっけ？ まあいいや。
思い出せないってことはどうでもいいことなんだろう。ってなわけ
で、俺たちはシルフィードに乗って学院に帰るのであった。

フーケSide

レコン・キスタの連中がニューカッスル城へと攻め込んでから二日
後、私は怪我をして片腕を吊っているワールドと共に戦跡の検分に来て
いた。

「つたく。こんな死体と瓦礫しかない場所に来たがるなんて物好きだ
ね」

「付き合わせてしまったてすまないね。でも確かめたい事があるんだ」
「あのガキ共の生死の確認かい？ さすがにこの状態で生きてはいな
いんじゃないか？」

私はニューカッスル城だった場所を見渡しレビテーションで大き
な瓦礫をどかして居るワールドへと言う。少しは原型を保っている場

所も見当たるがそれでも元々の形など見る影も無く、私たちがいる聖堂だったこの場所など教えられなければ分からないほどだ。

「奴らがそう簡単に死んでくれれば私としてはこれ以上ない朗報なのだがな。が、しかしそうもいかないみたいだ」

「その言い方だと逃げられたみたいだね」

「ああ。死体どころか服の切れ端一つ見つけれない」

と、ワルドは悔しそうに言うが、その表情は少しの笑みがこぼれていた。まったく、男つてのはなんでこう言うバカが多いのかねえ。私は呆れてふとある場所を見る。元々は立派な宝物庫の塔があったものの、今や半ばあたりから壊れ崩れてしまっている場所だ。

いくらいい思い出が無いとはいえあの娘と遊んでた場所が無くなったのは少し哀しいねえ。

と、我ながら珍しく感傷に浸っているも塔の下でレコン・キスタの兵士たちが我先にと宝石を漁^{あさ}っている姿を見て別の意味で気落ちしてしまった。

「どうした？ 貴様も宝石を漁^{あさ}らんのか？ 貴族から財宝を奪い取るのは貴様の仕事じゃなかったのか」

そんなふうに冷めた目で兵士たちを見ていたら一通り探し終わったのかワルドが話しかけてきた。

「私とあんな連中を一緒にしないで欲しいわね。火事場泥棒なんて趣味じゃないの」

「ほう。盗賊には盗賊の美学があると言うやつか」

「そうね。据え膳には興味ないわ。私は、大切なお宝を盗まれて、あたふたする貴族の顔を見るのが好きなのよ。だから：もう慌てることのできない奴らから奪うなんてつまらないわ」

私は兵士たちによって身ぐるみを剥がされた王党派の死体を横目で眺めて言った。そんな私の言葉にワルドは不思議そうな顔をしてきた。

「アルビオンの王党派は貴様の仇^{かたき}だろうが。王家の名の下に、貴様の家名は辱められたのではなかったのか？」

「まあ、そうなんだけどね。：そういうあんたこそ魔法衛士隊隊長な

んていう名誉と誇りある立場を捨ててまでコツチで何しようってんだい？」

私はワルドの言葉に曖昧に答え、強引に話題を変えた。確かに恨みが無いとは言えない。実際、貴族専門の盗賊をやっているのも稼ぎがいいと言うこと以外にもちよつとした嫌がらせという面も持っているからだ。

まあだからと言ってあれから何年も経っていて、あの娘も平穩無事に暮らしているんだ。今更『王党派がッ！』などアホらしいと思うしね。

「聖地へ行く。そこで私は確かめなければならないことがあるのだ」

「聖地ねえ。……あんたは本当に聖地奪還なんて出来ると思っているのかい？」

「それはこれからの働き次第だろう。それに……」

「おお！ ワルド君！ 件の手紙は見つかったのかね？ アンリエツタがウエールズに認めた恋文は」

私とワルドが話していると、遠く方から快活な声と共に二人の間人が歩いてきた。先を歩いて来た丸い球帽をかぶり、ローブとマントを身に着けた三〇代半ばの男だ。見た感じ聖職者のようだけど何者だ
い？

「閣下、申し訳ありません。手紙は発見できず、ウエールズの死体も見つかりませんでした。私が不甲斐ないばかりに何も成果を上げられず、それどころか手負いで逃げ帰る始末。何なりと罰をお与えください」

私が男の事を訝しんでいると、ワルドが男を閣下と呼び地面に膝をついて頭を垂れた。閣下ってことはこの男がもしかしてレコン・キस्ताの指揮官なのか。

「ふむ、確かに双方とも結果を得られなかった事は残念だが…なに気にすることではない。手紙に関してはいわゆる保険のような物であったし、ウエールズに関しては先の戦いで目撃されている。彼とて手負いのまま戦場へと出て無事では済まないだろう。死体の発見も時間の問題だ。」

いや、もしかしたら砲撃の直撃に遭い、形が残っていないのかもしれない。ふむ、それは少し困りものだな。そう思うだろワルド君」

と、閣下と呼ばれた男はカラカラと笑いながらワルドの肩を叩いた。男の言葉は慰めているとか皮肉を言っているとかではなく、本気で気にしていないと言う感じであった。

「ですが……」

「いいではないか。気にしていないと言っているのだ、お前も必要以上で気負うことはないわい」

「………はい」

ワルドがさらに何かを言おうとすると、閣下と呼ばれた男の後ろにいるフードを被った男が諭すように言葉を重ねてきた。

フードを被っているから詳しい容貌はわからないけど、フードから除く髪は紫色で赤く色の付いた眼鏡を掛けている。声から察するにそれなりに歳をとっているようだが、こいつもレコン・キスタの重鎮か何かなのかね？

「彼の言う通り、気にするな。それに例の船の残骸から良い者も発掘出来たのだからな。さて、他にも見回らなければならない場所があるのでね。行かせてもらおうよ」

男は最後にそう言ってフードの人物と一緒に去って行った。

「あいつらって何者？」

私は二人が見えなくなったのを確認してからワルドに二人の男について聞く。

「ん？ ああ。マントを付けていたお方はオリヴァー・クロムウエル閣下だ。そしてフードを被っていた者は参謀にして閣下のご友人であるロディール様だ」

ロディールSide

「ああッ！ どうしましょうミスタ・ロディール！」

外の様子を散策し終わり、拠点の執務室へと戻ると目の前でオリヴァーの奴が取り乱し始めた。

「何を慌てているのじゃ」

「何をもって、手紙が見つからないのですぞ！ それにウエールズの亡骸も未だに発見できずにいる。これを慌てないでいつ慌てるのですか！」

「そんなくだらしないことで取り乱しているのか。手紙やウエールズなど別にどうでもよいわい。有れば多少は役に立つ程度だと言ったであらう」

「そうですが…しかし…」

まったく劣悪種が。余計なことなど考えずにこちらの指示に従ってればよいものを。が、勝手なことをされてもわしが困る。

「何を悲観しておる。レキシントン号へ突撃して来て撃墜した軍船。それに乗っておったアルビオンの国王と將軍の死体を手に入れたではないか。使い方では手紙やウエールズよりも役に立つわい。」

それに貴様に渡したソレと湖で手に入れた指輪さえあれば何も問題はな。貴様は何も気にせずいつも通りにすればよいのじゃ」

「う、うむ。そうですね」

わしがオリヴァアの胸と右手を指して言うと、奴は先ほどまでのオロオロした様子から一度咳払いをして気を取り直した。

「さて、わしはもう一度出てくる。」

「また例の遺跡ですか？ 『場違いな工芸品』が多々発見されているようですが、私には何がなんだが。そんなにも価値があるもので？」

「フォッフオッフオ。貴様が気にすることではない」

わしはそう言つて部屋を後にする。価値があるものだと？ あれほど素晴らしい「施設」を理解できないとは所詮は劣等種。まあよいわ。あれを完全に掌握できれば研究も今よりもっとスムーズにできるようになる。そうなればアレの…：エクスファイアの製造も容易に。そしてゆくゆくはクルシスの輝石を…つと、これはタヌキの皮算用じゃな。今はやるべきことを確実にじゃ。

「マスター。準備はできています」

「うむ」

わしは外へと出ると、用意させておいた馬車へと乗り込み遺跡へと

出発した。

デルフの運命

ジンSide

トリステイン城から帰還後、俺は色々な疲労で重くなった体を引きずるように自室のドアへと手を掛けた。

「はあ。すっげえ疲れた」

俺は大きなため息を吐いて今回の事を思い返す。……あ、ダメだ。身体がちぎれかけて死にそうになったことしか思い出せない。これ完全にトラウマになってんじゃんツ！ もうホント最悪だ。

「はあ。とにかく寝よう。三日三晩ぐらい寝込む勢いで寝よう」

先生らには休むことを既に伝えて有り、承諾済みだ。チトセは適当に五日ぐらい豪遊できる程の金品を渡して野に放った。これで俺の休息を邪魔する奴は居ない。あー、そういえば寝る前にチトセを閉じ込めていた氷とガンダダの糸を片付けないとな。

俺はやれやれと思いつながらドアを開けて、閉めた。いわゆるそつ閉じである。

「あゝゝゝゝ」

ortである。……どこまであの女は俺の心を殺しに来るんだッ！ 俺は周りの奴らの『ああ、またか』と言う生温かい同情の視線も気にせず、しばらくの間放心していた。

が、いつまでも現実逃避をしている訳にはいかない。俺は意を決して、再度ドアを開ける。

「……………」

中は酷かった。チトセが切り裂いた氷と糸はともかく、それを乗せていたベットも細切れになっていた。…いや、それはまだ予想できた範囲だ。だが、まさか部屋全体が切り裂かれているなんて予想できなかった。

壁、天井、床に無数の切り裂き跡はもちろんのこと、俺が生家から持ってきたお気に入りのアンティークテーブルにイス。棚に調度品。グラスにランプに本にと、まるで狙って斬ったとしか思えないほど全てがバラバラになって散乱していた。もう笑いすら出ねーよ。

「…せめて原型が分からなくなる程度までバラバラになってれば諦めもつくんだけどさあ」

なんか中途半端に形が残ってて未練を引き立てる。錬金で直せないこともないんだけど、それをやると妙な違和感が出るというか、今まで使ってきた味が無くなつてると言うか。ぶっちゃけ直した個所周辺に繊細さが無くなってしまう。

「はあ、しょうがない。捨てるか」

ため息の連続。ホントは捨てたくないがこれだけはしょうがない。俺は泣く泣く部屋の片づけを始めた。

「しかし、これホントにわざとじゃ無いんだよな？」

片付け始めて分かったことだけど、家具はともかく壁の斬りこみ深さが絶妙だった。丁度隣の部屋まで残り1サントの所で止まっているのだ。しかも全ての斬りこみが、だ。

「……チトセだしな」

俺は考えるのを放棄して片づけを続ける。念力でベットの破片を持ち上げ窓から外へと移動させると、ガチャンツと鈍い金属音がした。

「あー？ なんだ…っでツ!? デ、デルフーツツツ!!?!」

俺は浮かべていたベットを窓から放り投げデルフを拾い上げる。

「あ。よう。坊ず」

デルフはものすごく弱弱しい口調で話しかけてきた。よかった！
まだ息(?)はある。

「どうして! どうしてこんな姿に!」

俺が拾い上げているデルフの姿は無残にも刀身が半分になっており、鏢つばや柄頭つかがしらも所々削れて無くなっていた。

「なあ、ぼう主。オレは、楽しくったぜ。最後に剣として、使ってもらえなくった、のは、ざん念だくどよお。それでも、おまえらみたいのと、会えたのはよかった、ぜ」

おいおいおいッ。なんか遺言っぽいこと言い始めたぞ!? これマジだろッ。今デルフにいなくなられたらこの先、虚無の事に関してヒント得られなくなっちゃうじゃん! ど、どうにかしなければッ!

「じつはよ。オレ、思い出した、ことがあるんだ。オレを作ってくれた、奴のことなんだ」どよ。じつはエルフの娘だよ」

「いやいや！ 俺にそんなこと喋られても困るからッ！」

「デルフツ!! 落ち着け！ 絶対に何とかして見せる！ だからもう少し耐えてろ!!」

俺はデルフと置くと、急いでキキの下へと走り出した。俺も記憶が正しければデルフは他の刀剣に意識を移せたはず。なら性能の良い、もとい異常な刀である変体刀をキキに譲ってもらってそっちにデルフを移して延命処理だ！

キキSide

何やかんやで学院まで無事帰還し、一息ついてジンに今回の報酬について集りに行くこうとしていたらジンが突然ドア開けて入ってきた。ってか女子寮って男子生徒は入っちゃいけないとか言う設定なかったっけ？ まあいいや。

「キキ！ 余ってる変体刀を譲ってくれ！」

入って来たジンはそのまま体を90度曲げて頭を下げてそう言うてきた。いきなりどうしたん？

「あゝ、何あった？」

「実は……」

と、ジン曰く。チトセが持っているロストテクノロジーのせいでデルフリンガーがバラバラになり死にかけるらしい。で、俺の持つ変体刀に意識を移したいとのこと。相変わらず変な騒ぎ起こし続けるなこいつら。

……デルフの新しい刀身からだか。そういえば、アレがあつたな。手に入れたのはいいけど使うのが怖くて封印術ほうじゆ施してしまえばなしのあの刀が。

「とりあえず、例の報酬に刀代追加な」

「わかった」

「まいどあり〜」

と、俺はホクホク気分で武器を収納している巻物から口寄せで刀を取り出してジンに渡そうとした。

「……？ ほれ、受け取れよ」

「…え、いや、だつて…」

が、ジンは俺が持つている刀…禍々しい色の鞘に収められた鍔の無い大きく反った黒刀『毒刀・鍔』どくとう めつきを見るなり戸惑い、一步俺から言うよりも鍔から離れた。まあ、刀語知ってれば鞘に収まってるとは言えこれを持ちたいとは思わないよな。俺も封印するまで乗っ取られるんじゃないかと戦々恐々したもの。

「大丈夫だつて。ちゃんと封印掛けてあるから」

「そう、なのか？ ならいいけど。だけど、これ以外の無いのか？ できれば鉋かんぱとか鈍なまくらとか…」

「それ以外は傀儡人形の兵装に使ってるから無理」

俺はそれ以外渡す気は全くないと示すとジンは渋々引き下がった。「むう…。そういえば、これって封印したままでデルフの移植(?)できるのか?」

「あくどうなんだろ。……じゃあ俺もお前の部屋に行くわ。てなわけ
でタバサ、ちよつと行つてくる」

「…わかった」

俺はタバサに一言断りを入れてジンと共にジンの部屋へと向かった。

「そういうべき。キキつてNARUTOの日向一族なんだよな?」

「ん? ああ、そうだけど」

男子寮塔へと向かう途中、ジンが俺に話しかけてきた。

「じゃあよ。ヒナタちゃんやハナビちゃんつてやっぱり美人なのか?」

「そりゃあ美人だよ。ハナビ様の方は可愛い系」

「あ、『様』つて付けるんだ」

ほつとけ。分家に生まれた以上、宗家の人達を様付けで呼ぶように躰けられてるんだよ。今や完全に無意識で呼ぶレベルだ。

「NARUTOの世界か。忍術カッコいいよな! 俺もその世界に転

生してればなあ」

「ああ、そうだな。『俺、最強！ ハーレム作るぜ。げっへへ』と幻想してるバカ共があの世界の混沌具合に気づいて絶望した姿とか……あれを見るとホントざまあど爽やかな気分になるな」

「……………え」

「…いや。なんでもない。聞かなかったことにして」

俺があの世界の事で少々トラウマが蘇って普通は言うことは無い内心を零してしまった。

「あつと……。そ、そうだ！ ナルトとかサスケとはどうなんだ？ やっぱり友達に…」

「中身がちゃんと本人で、尚且つ周りに脳に蛆が湧いてるような……ごめん。特に原作キャラ関連の話は無理。もう、トラウマってるからホントマジ無理」

「いやいやいや!! 何ッ！ え？ 何があつた!? ってかどうなってるのその世界!?!」

ジンが目を見開いて聞いてくる。そりゃあ、もう混沌カオスの一言だよ。俺が遠い目をしてあのクソ共全員戦争で死んでくれねーかな、とか思いながら俺の世界の事とかを話してやるとジンもドン引きしていた。

「なんと言う酷さwww。草生えるわ」

「昔、似たようなこと言つてて木遁でガチに草生やされた奴いたなあ」
「怖ッ!! そいつどうなった!?!」

「あ、どうなったんだろ？ 白眼で遠くから盗み見してただけだからなあ」

白眼の修行で里全体を視てる際に見つけた、あちこちで転生者アホ共の起こしているバカ騒ぎの一つだったので詳細まで意識して視てなかった。ホントあの後、彼は助かったのかね？ まあいいや。

「そういえばキキって転生眼使えるのか?」

「…? 転生眼って何? 俺はチースペであって他作の能力は使えないぞ」

「ん? あれ? 転生眼知らんの? 写輪眼から万華鏡写輪眼みたいに白眼から転生眼になるの? ってなんでそんな苦虫を噛み潰した

ような表情になってるんだよ」

俺は転生眼の話聞いてすごく嫌そうな顔をした。まだ変な設定を盛るのかあの世界は…

あ、…いや。そういうえば妙な事を言ってた奴がいた気がする。…よくよく思い出すとそれっぽい事言ってた奴らが沢山居たような。

また他作の能力で俺TUEEかよって心底ウゼエと思っていたのだがまさかの原作設定だったとは。まあ最早チート能力が安売りされてるようなあの世界で今更感があるよな。しかし転生眼か。そんなもんが白眼に有るとは知らなかったな。

「なあ、お前ってNARUTO詳しいのか？」

「まあ新装版の方だけど全巻もってる」

「新装版なんか出てたっけ？ NARUTOってまだ全然完結してなくねーか？」

「ん？ 何言ってるの。原作はもうとっくに終わってアニメもカグヤとの最終決戦。転生眼設定が出てきた映画だって終戦後の話だっただろ」

「え？ 転生眼って原作じゃなくて映画設定なの？ ってかカグヤって誰？ ラスボスってマダラだろ？」

「あれ？」

「……おう？」

沈黙5秒。頭の中で会話を整理。そして行き着く簡単な答え。

「あーあれか。お互い死んだ時期が違うせいかな。まあ、当たり前だよなあ。普通に認識が合うから年代的には近いんだろうけど。大体2〜3年ぐらいか？」

「おお、なるほど。ならキキはまだ映画の話すら出て無い頃にお亡くなりになったのか。じゃあ、第4次忍界大戦の辺りから説明するな」

うんうん、とジンが納得がいったと頷いて、NARUTOの説明を話し始めた。しかし、お亡くなりになったって…。まあそのとおりなんだけど。そーいやあ、俺ってなんで死んだんだっけ？ まあいいや。と、適当にジンの説明を聞いていく。

オビトとかマダラとかの事、十尾とかカグヤとかその他諸々。そしてナルトとサスケエの事とか。ぶっちゃけ聞いてて、正史の方もグダグダ具合は俺の方と大して変わんねーじゃんとしか思えなかった。ってか

「ヒナタ様……。ナルトと結婚できたんだなあ。それだけはホントよかった」

「まあ、それは俺も思った」

ホントそう。俺の方の世界のヒナタ様も……。あ、ダメだ。俺の方のヒナタ様、めっちゃアホの子だったわ。『サブミッションこそ王者の技よッ!』とか言っちゃってハナビ様の肩の関節外してたなく。そしてヒアシ様にすんごい怒られてた。ホント何やってんだか。まあいいや。

とか、雑談してるうちにジンの部屋へと到着した。

「部屋、汚ねえなく。ここだけ廃墟かよ。…とりあえずデルフはこんな感じで鍍と重ねておけばいいか?」

「しかたないだろ。デルフ見つけて慌ててキキの所に行ったんだからよ。たぶんそれで大丈夫だろ。後はデルフが乗り移るはずだ」

俺は部屋の様子に苦笑しながらバラバラになったデルフを部屋の端にジンが作った土台に置いてその上に鍍を乗せた。

「解ッ!」

そして鍍に施していた封印を解いた。

「後は待つだけだな」

「そうなんだが…、いつまで待てばいいのだろうか? 下手に手に取って乗っ取られたら嫌だし」

「そんなのチトセに持たせればいいんじゃないやね? アレならそれこそ銀河が滅びても復活するだろ」

「ナイスアイディア!」

俺の提案を笑顔で受け入れるジンを見てこいつもこいつで下種いよなあ。まあ平然とチトセを生贄にすることを提案する俺が言えた義理じゃないけど。

さてつと……

「では、ウエールズの救出、ラ・ローシエルでの雑事、それで鍍の代金。合わせて五千エキューほど寄せよ」

「そんな大金出せるかッ!!」

「ええ？ 貴族ならそんなぐらい出せよ。少し前に床に頭を擦り付けて泣きながら『三千エキューで勘弁してください！』って言ったカジノのオーナーがいたんだけどさ。カジノでそれだけ出せるんだから、正規の貴族であるジンに出せない訳無いよな？ な？ ぐだぐだ言わずに払うもん払えよ」

「怖いよッ!?! 金に関してなんでそこまでガチなの!?! いつもはヘラヘラボケエツとしてるくせに。ってか忍の三禁はどうした!?!」

「そうやってぐだぐだ言うの止めて欲しいって言っただけだよ。お金に関して本気にならない人なんているの？ お金大事。持つて安心、使つて爽快。忍の三禁？ そんなもん生ゴミと一緒に捨てておけよ。まあいいや。」

「その後もぎやあぎやあと文句を言ってくるジン相手にあの手この手で言い負かして五千エキュー払わせる誓約書を書かせ俺はホクホクと心も懐も温かくしてジンの部屋を出て、タバサの部屋へと帰った。」

外伝 鮮血の使い魔 1

イザベラSide

「はああッ？ アルトーワ伯の主催する園遊会に出席しろですって！？」

私はその知らせを持ってきた騎士に中身の入ったワイングラスを投げつけて怒鳴った。部屋に待機させているメイド達は私の剣幕に脅えて体を震えさせ縮こませ、知らせを持ってきた騎士は投げつけられたグラスを避けずに当たり、ワインまみれでになった。

「はい。そのようにと、ジョセフ陛下からの御達しです」

しかし騎士の男はそんな無様な姿になったにも関わらず顔色どころか表情一つ変えずに淡々と私の言葉に返答した。

「生憎だけど私は行く気はないよ。お父様にはそう伝えな」

そんな部屋に入ってきてから一切表情を変えない騎士に対し私は少し恐怖を感じながらも私は行かないと睨み、言い返した。アルトーワ伯と言えばシャルル派で有名な貴族であり、お父様が王位についてからは税の滞納から始まり降臨祭にも宮殿に顔を出さない。

他にも王宮での催しにも態わざと遅刻をしてきたりとあからさまな挑発行為を繰り返してくる貴族であり、謀反を企んでいるとの噂は誰の耳にも届くほどの人物だ。

そんな人物の遊宴会に行くなど自ら断頭台に首を入れるような行為と同じ。絶対に行つてやるもんか。

「それは出来かねます。これはイザベラ姫殿下へジョセフ陛下からの命令です」

しかし騎士はやはり平坦で淡々とした声で私の言葉を否定する。お父様からの命令…その言葉に私は表情を強張らせ、スカートをぎゅつとつかんで俯いた。命令。そう言われてしまえば私には拒否ができない。

何故？ と問われればお父様が怖いからだ。あの日から……シャルル叔父様が亡くなったあの時からお父様は別人のようになり、逆らう者は例え身内でも平然と処断していくようになってしまった。

実際、私の目の前でお父様と懇意だったはずのモリエール夫人が口答えしたら首をはねられた。しかも人を…それも仲の良かった夫人を殺したというのに、その時のお父様は

『ふむ、床が汚れてしまった。おい、掃除をしておけ』

と、ただゴミを散らかしてしまっただけと言おうような反応をした。怖かった。それ以来、私はお父様の命令には逆らえない。

お父様からの命令と言われる度にあの時の事を思い出し、私も逆らえば夫人と同じになると早鐘のように心臓が鳴り体が震える。だから…

「…分かったわ。準備を、しておく」

だから私はそう答えるしか出来なかった。騎士は私の返答を聞くと言いで一礼し、踵かかとを返して部屋から出て行った。

私は部屋の扉が閉まるとテーブルの縁ふちを掴み思い切り押し倒した。上に乗っていた食器類やワインが大きな音を立てて床に散らばり、私の行動と音にメイド達はさらに身を縮こませてお互いに身を守るように寄り集まっていた。

「…支度をしな」

「…え？」

「明日の出掛け支度をしろって言っただよッ!!」

「ひいッ!? も、申し訳ございませんッ!」

私は椅子に座りこみながらメイド達を怒鳴り散らした。メイド達は私の剣幕に慄き、急いで部屋から出て行く。

「…ッはああ…」

そして誰もいなくなった部屋で大きいため息を吐いた。八つ当たりであることは分かっている。それでも自分の中にあるこの感情を晴らさないといけない。遊宴会、行きたくないなあ。

だけど時間と言うものは戻る事も無ければ止まる事も無い訳で…。私が部屋で憂鬱うげんになってベットで蹲うずくまっている間には一日が経ち、昼前には庭に用意された竜籠でお父様と共にアルトワ伯の屋敷へと向かうことになった。

「おお、陛下。ようこそグルノーブルへ。我々一同、陛下の行幸を首を長くして待つておりました」

リュテイスから4時間ほどのアルトローワ伯の屋敷へと到着し、竜籠から降りると人良さそうな笑みを浮かべながらアルトローワ伯が頭を下げて私たちを出迎えた。

「ああ、出迎えご苦労。愉快的催しを楽しみにしているぞ」

「ええ。ではこちらへ。当家の料理人が用意した最高の食事も用意しておりますので」

お父様はアルトローワ伯と軽く言葉を交わしながら会場へと歩いてゆく。私もお父様の後ろを付いて歩いて行きながら二人の会話に気味の悪さを覚えた。二人の言葉にはお互い相手と同じ人間と思っっているのが疑わしく思うほど無感動的だった。人間、あそこまで相手をお互いに会話できるものなのだろうか。いつのまに私の周りの貴族ってこんな気味の悪い奴らばっかになったのかしら……。

「…はあ、帰りたい」

ため息と共に小声でそんな事を言うも帰れるわけも無く。会場に用意された席へと案内された。

会場である屋敷の中庭では集まった貴族たちが思い思いに会話に花を咲かせていたり、遊宴会を盛り上げるために雇われた楽団や芸人達による催しもよほ。さらにはお父様に自分の事を売り込もうと魔法の實力を見せたりと、傍から見れば華やかで楽しげな遊宴会だろう。

だけど私はまったく楽しくも何もなかった。むしろこの遊宴会は苦痛以外何でもない。

あいつらは態わざとなのかそれとも気づいてないと思っっているのか、とにかく所々から悪意ある視線や言葉、嘲笑などが小さく聞こえてくる。

昔からあの娘シャルロットと比べられてきたから嫌でも直ぐにそう言う雰囲気シヤルロットを分かってしまい、そして気づいてしまうと、どうしてもその手の侮蔑を含んだ視線や言葉が入ってきてしまう。

慣れているとは言えやっぱり気分が滅入る。はあく、っと私は心
中で大きいため息を吐いた。

「そういえばイザベラ姫殿下はまだ使い魔をお持ちでないようすな
？」

と、私がげんなりと遊宴会を過ごしていると、お父様と何かを話し
ていたアルトローワ伯が微笑を浮かべながら訪ねてきた。

「…ええ。で？ それがどうかしたのかい」

私はいつもの様に高圧的な態度を作りながらアルトローワ伯を威圧
するように答える。一種の威嚇行動。こうする事で少しでも私に対
して畏怖を抱いき、近づかせないようにさせようと言う私なりの処世
術だ。しかし…

「いえいえ、大したことではないのですがね。姫殿下もそろそろ使い
魔を持つてもよろしいお歳かと思ひましてね。姫殿下の使い魔なら
きつと強力で素晴らしい生き物が召喚されるはずです。そう、例えば
ドラゴンとか。…どうです？ これを機に使い魔の召喚のどをし
てみては」

アルトローワ伯は私の威嚇に一切動じずにニコニコと人の良さそう
な…、私にとつては人を陥れ様とする悪意に満ちた笑顔をしたまま言
い返してきた。

私はアルトローワ伯の言葉から大体何を企んでいるのかを察した。

「ふざけるんじゃないよッ。この私に見世物みたいなことさせようつ
て言うのかい？ いい度胸だね」

ホントふざけたことを言う。何が私が召喚したならよ。ドラゴン
？ ふざけんじやないわッ！ 私に魔法の才能が無いことは知って
いるくせに。召喚される使い魔はメイジの資質に大きく左右される
なんて貴族であるならば誰でも知っている事だ。

才能の無い私がいくら頑張ったってドラゴンなんて召喚されるわ
けがないのだ。私の系統は水だから召喚してもカエルとかカニとか。
下手して虫なんて出て来た日には完全に笑いの。

つまりは、このクソジジイは私を笑いのものにしたくて使い魔召喚を
提言してきたのだ。

「めっそもないありません。別にそのような心算つせりは毛ほどもありません。ただ、やはり使い魔と言う物はメイジの良きパートナーであり理解者でもあるのです。ですから姫殿下も…」

「うるさいねッ!! 私にはそんなものは必要ないのよッ。それ以上無駄口を叩くようならこの場でお前を…」「おもしろい」…つて、え?」私が食い下がってきたアルト・ワ伯を怒鳴り、これ以上喋らせないように脅し文句を言おうとしたらお父様がニヤリと口角を上げながら私の言葉を遮やぶった。

「先ほどから同じような出し物で飽きていたところだ。ちようどいい。イザベラ、一つ楽しませてもらおうか」

「え、あ…で、ですがお父様。それは…」

「私の言うことが聞けないのか?」

「…ッ!?! い、いえ。今から準備をします」

お父様の冷えた声と視線を受けゾクリと背筋に悪寒を感じた私はすぐさま席から庭の中央へと移動し、杖を出して召喚の準備をする。

ああ、なんでこんなことに。もう最悪。でも文句を言ったところでどうにもならないのは知っている。もしお父様にあれ以上口答えしようなものなら…ぞわつと私はその時の事を思い体に震えが走る。

あーもう、余計な事は考えるのは止めだ。私は小さく息を吐き、召喚の呪文を唱え始める。

「我が名はイザベラ・ド・ガリア五つの力を司るペンタゴン我の運命に従い使い魔を召喚せよ!」

私は心ここに在らずと言う感じで事務的に召喚の儀式を行った。詠唱後、振った杖の先に姿見程度の大きさのゲートが開く。後はゲートの向こうから使い魔が出てくるのを待つだけだ。

さあ、何が出てくる? できれば何か小動物出てきて。私は心の中でそう祈りながらゲートを見つめているとゲートに薄っすらと影が出てきた。あ、意外に大きい。影の大きさは人間ぐら…

「ふっえッ!?!」

バタリッとゲートから現れた、いや、倒れて出てきたのは鮮やかな赤い長髪で血まみれの男だった。

「って!?! え? ちよつと!!」

私はつい素になつて出てきた男に近づいてゆすつた。よく見ると赤髪の男の刃物のような物で体中切り裂かれており、顔色も真っ青、呼吸も浅く弱いものだった。つまりは死にかけてである。

ど、どうしようッ?! ええ? どうすればいいのこれ!?! 召喚の儀をしたら人間が出てきて、しかも死にかけてッ。

「うふふ、なにあれ?」「ダメよ。笑っちゃ」「くくく、さすがは姫さまだ」「ホントに。まさか死にかけの傭兵を呼び出すとは」「しかもあの赤い髪って」「ああ、野蛮なゲルマニア人だな」「ああ、姫さまにはぴつたりだ」

周りの貴族たちは召喚された男を見ると私を嘲笑し始める。まったくッ! 笑ってないで誰か助けようって奴はいないのッ!

「あーはっはっはっはッ! なるほどなるほど。これは面白い!」

「へ、陛下?」

私がどうすればいいかオロオロとしていたお父様が突然大声で笑い始めた。お父様まで……。アルトール伯もいまままで感情をまったく表さなかったお父様が大笑いした事に驚いていた。

「いや、素晴らしいぞイザベラ。まったく良いものを見せてもらった。暇つぶしにと、こんなつまらない催しにきまぐ気紛れで来てみたら、まさかこのような面白いものを見れるとは思わなかったぞ」

くつくつく。と、お父様はニヤニヤと私と言うよりは出てきた男を視ながら本当に面白いそうに笑い続けた。

「つ、つまッ……。こ、これは陛下。それは誠にすみま…って陛下? どちらへ!?!」

「帰るのだが?」

「へッ!?!」

お父様の言葉に頬を引きつらせてながらアルトール伯が何か言おうとしていたら、お父様は突然立ち上がり帰ると言い出した。って帰るッ! え?!

「お、お父様ッ?! 私ッと、その、この男は?」

「お前の好きにしろ」

「え、好きにしろって…ええツ?」

好きにしろって、どうしろと? お父様の言葉に私が困惑しているのも気にせずにお父様は会場を出て行こうとした。が、

「へ、陛下ツ! お、お待ちください。そ、その、宴はまだまだ始まったばかりですし、そんなに直ぐにお帰りにならなくても…」

と、アルトローワ伯が帰ろうとするお父様を引き留めようとお父様の腕に触れた。

「貴様。誰が私に触れていいといった?」

次の瞬間、ボトリツとアルトローワ伯の両腕が肘先から地面に落ちた。

「あゝ あッ?!?! うゝぎやあああああッ!! 腕ツ! 腕があッ!!」

「ひいいッ!?!」腕を斬り落したツ!?!「は、早く治療を!!」「とにかく止血をツ」

「地を這う虫けら風情が王に触れるなど。身を慎め」

お父様は腕を斬り落され蹲うずくまったアルトローワ伯や周りで騒ぎ始めた貴族たちの事など一切気にする事も無く、あの奇妙な形の剣についた血を払いスタスタと竜籠を止めた庭へと歩いて行き、そしてお父様を乗せたであろう竜籠がリュテイスへと、私を残して飛び去ってしまった。

外伝 鮮血の使い魔 2

イザベラSide

それからお父様が去ってしまった後、私はあまりにもな状況に混乱するも、とにかく召喚してしまつた赤髪の男の治療をするために、屋敷へと運ばれて行くアルトワード伯に便乗して部屋と治療のための秘薬、あとリユテイスへ帰るための馬車の用意させた。まあ、その時に貴族たちに白い目で見られたが、いつものように威嚇して蹴散らした。

「ふう。これで多分大丈夫よね」

こんな私だけでも治療ぐらいはできる。とは言えドツドメイジなので傷口を塞いでの止血と傷の治りを早くする程度しかできないけどね。とにかく、応急処置ではあるけれども赤髪の彼を治療し、ベットへと寝かせている。

「はあ。一体どういう事なんだろうね、これ」

召喚の儀で現れたこの男。ゲートがら現れたつてことはこいつが私の使い魔つてことでもいいのよね？ だけど人間の使い魔なんて聞いたことが無いよ。しかもこの赤い髪。やっぱりゲルマニアの人間よね。うーん、持ち物を見た感じ杖は持つてなかったから貴族ではないけど……でも、ボロボロたけどあの着ていた黒い服はどうもただの傭兵つて言うには上等過ぎる気がするし……。もしかして平民上がりの王宮騎士なのかしら？ ゲルマニアじゃ例え平民でも武功を上げれば領地すら与えられるつて聞くし。

「もしそうなら私ヤバイことしちゃった？」

もし本当に王宮関係の騎士であるなら外交問題になってしまう。あれ？ でもじゃあなんであんなにズタボロな姿だったのだろう？ もしかして何かしらの、例えば魔獣の討伐かなんかの任務中だったとか……。

それはそれでマズいわね。うーんと、私がゲルマニアから何かしらの抗議が来たらどうしようと、頭を抱えていたら部屋の扉がノックされ

「イザベラ様。馬車のご準備が整いました」

部屋の外から使用人がそう伝えてきた。私は分かったと伝えると寝ている彼を浮遊^{レビテーション}で浮かべて連れ出し、他の荷物は使用人達に命じて馬車まで運ばせた。

馬車は長旅できる大型の物であり、内部で前後に別れていて、後部には簡素で小さいけどベットが備え付けてある。彼と荷物を後部へと乗せて私は前部の方へと乗り込む。

「出発して」

私は御者に鋭く言い、馬車を出発させた。

リュティスまで馬車では普通に進めば約二日ほど掛かる。が、私はアルトール伯の屋敷を出てから何か嫌な予感がしたので、それこそ一日でも早くリュティスに着くように日が沈んでも馬車を途中にある街には止めずに馬と御者だけを交換し、夜通し走らせてリュティスへ向かえと命じた。

「暗くて良くわかんないけど、半分は来たかね。……大丈夫、護衛の騎士も居るんだ。何も心配はない」

そして真夜中。私は胸騒ぎがして眠れずに窓の外を見て小さく大丈夫大丈夫と小さく呟くも、気休めどころかどんどん不安が強くなっていく。ふと、私が覗いていた方の反対側で小さく何かが光ったと思ったら

「えっ？」

ドゴンツ！と強い衝撃と音、そして熱が襲ってきた。攻撃された、そう認識した頃にはもう私が乗っている馬車は横倒しになっていて、外では怒号と刃物が打ち合う音が聞こえてきていた。

「野盗ッ!? なんでこんな時にッ！」

私はとにもかくにも逃げようとドレスが破けようか泥まみれになろうが構わずに馬車から這い出た。この時、命の危険と言う事もあり、例の彼の事をすっかり失念していたのはしようがないと思う。私は悪くないッ！

「もうッ、護衛は何をやっているんだいッ！ いくら夜襲を掛けられたからって野盗^ゴとき……に……っ！」

私は態わざといつもの悪態をついて自分を鼓舞して、恐怖心を振り払い周りの様子を見た。見たが、野盗など何処にも居らず、代わりにどう見ても騎士団と思われる一団が私の護衛の騎士達を攻撃していた。「ちよ…、どう、なってるん…だい？」

いや、分かっている。あいつだ。あいつの騎士団だ。だってその証あかしに

「おやおや姫さま。ずいぶんみすばらしいお召し物で。いやはや、無能姫にはびったりなお姿ですね」

そう言つて両腕に包帯を巻いたアルトローワがニタニタと憎悪を込めた表情で現れた。

「ふんツ。これはこれはアルトローワ伯じゃないの。お父様に斬られた手は大丈夫なのかい？」

「ええ、この通り。どういう訳か如何いかな秘薬を用いても全くくつきませんでな。ええ、ええ。全く。これではもう二度と杖を握ることはできませんで。本当にどうしてくれましようねえ」

「あらあら、それは大変だねえ。ま、もういい歳なんだし介護されるには丁度いいじゃないかい」

「ふっふっふ。中々面白い事を言いなさる。さて、姫様。そろそろ虚勢を張るのは疲れるでしょう。先ほどから足が震えておいでですよ」

「ツッ!？」

虚勢を張りながらなんとか逃げ道を探そうとしていたけどアルトローワにバレてしまっていた。私はすぐさま踵を返し、その場から逃げようとしたけど、

「フンツ!!」

「キヤアツ!!」

いつの間にか護衛の騎士達を倒し終えたアルトローワの騎士が逃げ道を塞いでいており、私は腕を取られ地面に投げられてしまった。

「まったく、手間を掛けさせる。本当ならあの無能王共々今夜中に屋敷で討ち取ってやろうと思っていたのだが、あの無能の暴君がッ!

私の計画を無駄にした上によくも私の両腕をツ!! ふんツ、まあ今回はお前だけでも殺せれば良しとしよう。おい」

アルトールワが隣にいた騎士に視線を向けて私に対しあごをしゃくると、騎士は私に近づいてき、その手に握った剣を大きく振り上げた。「あ…、ああ…」

ああ、私、ついに死んじやうんだ。私はそう考えていながらも生きたいと言う本能に体は勝手に後ずさりをしていった。なんて生き恥の汚い事だろう。もう助からないと分かっているのに生きていたい、死にたくないと思っていた。

そして背中に木が当たりもう後ろへは移動できなくなり私は恐怖に顔を俯かせ目を瞑る。ごめんなさいシャルロット。あなたに今まで酷い事をしてしまって。ごめんなさい。私は最後にシャルロットに今までの事を心の中で謝り続けて、

そして……

「がああッ!?!」

「…あ?」

ザシュツという音と共に悲鳴が上がり、騎士が背中から血を噴き出させながら倒れてきた。

いきなり倒れてきた騎士に驚き、私は勢いよく頭を上げた。するとそこには…、

月明かりによって照らされた真っ赤な、まるで鮮血のような色の長髪をなびかせて立つ彼の姿があった。

アツシユSide

「ぐッ」

俺は体の痛みを感じて目を覚ました。…いや、おかしい。なんで俺は痛みを感じてるんだ。これじゃあまるで生きてるみてーじゃねえか。俺はあの時、ヴァンの私兵によって体を貫かれ、そして力尽きる直前にレプリカ野郎に俺の因子が渡っていくのを感じて確かに死んだはずだ。

しかし、じゃあこの体の感覚はなんだ？

「クソが。一体どうなってやがる」

俺はとにかく体の痛みを堪えて立ち上がり状況を確認する。

体中には包帯が巻かれており、傷の治療をした事がうかがえた。次に周りを見る。どうやら相当大きな馬車の中のようなだが横転しており、荷物は散乱し、俺が寝ていただろうベットもひっくり返っていた。「事故か、それとも襲われたのか…。それにしちやあ外が妙に静かだな」

俺は散乱した荷物の中にあつた一本の剣を拾い上げ鞘から刃を引き抜く。そしてゆくりと馬車の出入口から外の様子を窺う。

確認できる範囲には人の姿は見当たらないが、人の、しかも複数の気配を感じる。俺はゆっくりと気配と足音を消しながら馬車から降り、気配のある方へと向かった。

「なんだ？」

物陰から気配を感じた方へと視線をやるとそこには数人の鎧をきた奴らと初老の両腕を包帯で巻かれた人物がボロボロのドレスでへたり込んだ青髪の女を取り囲んでいた。

どう考えても賊の類じゃねえな。鎧を着た奴らは訓練された兵士だ。…するとあの包帯を巻いている奴が兵共の主か。

…：じゃああの倒れてる女はなんだ？ 俺はさらに物陰から顔を出して周囲を確認する。

よく見てみると離れた場所に、服装が違う兵士3人と女を取り囲んでいる奴らと同じ鎧を着た兵士の死体が転がっていた。

「なるほど、そう言う事か」

俺は状況を簡単にだか把握した。つまりは貴族同士のゴタゴタなのだろう。死体や兵共の状況から考えてへたり込んでる女が殺害対象つてところか。

さて、どうするか。はつきり言やあ俺がなんで生きているのか、そして此処はいったいどこなのかと、分からねーことだらけだ。ただ、推測ではあるが、この馬車や俺が意識を取り戻した時の状況を思えば、多分だが今まさに殺されそうになっているあの女が俺を治療して

馬車で運んでいたんだろう。

ならばどうする？ 俺がどう対処するかを考えていると奴らに動きがあった。包帯の男がニタリ醜く顔を歪め首を動かすと隣にいた兵士が持っていた剣を構えて女へと近づいていき、女は顔を恐怖に歪めて後ずさり始めた。

「チツ。考えてる余裕はねーか」

俺は一つ深呼吸をし、痛む体を見捨てて一気に剣を振り上げた兵士へと走り込み、一閃。背中を袈裟懸けに切り裂いた。

「がああッ!?!」

「…あ?」

どさりと、切り裂いた兵士が倒れ、俺はそれを目端で確認すると女を守るような位置へと立ち、包帯の男と残りの兵士共へと剣を向けた。

「なんツ!?! 貴様はツ!?!」

「え…あんだ…は…」

俺の姿を見ると包帯男と兵士は驚愕し、後ろの女は信じられないものを見たように呆けた声をだした。

「悪いが、この女を殺させるわけにはいかねえ。今すぐ兵を引いてもらいたいんだが?」

「いきなり出てきて何を言い出すかと思えば。なるほど、主人のピンチに現れたか。たかが死にかけの傭兵のくせに使い魔としては優秀なようだな。しかし、残念ながらそうはいかぬのだよ。その姫様には死んでいただなければ、こちらとしては困るのでね」

「つまり、この女を見逃す気は…」

「無論、無い。が、そうだな。その女の前から素直にどければ貴様は見逃してやる。どうやら意識が戻ったばかりで状況を理解できていないと見える。さ、そこを退くんだ」

ニタニタと女の前に出た俺に包帯男がそう言う。チツ、屑が。

「何が見逃してやるだ。テメエのきたねえ面みりゃあ分かるんだよ。本当は見逃す気なんてねーってことがな。どうせ俺が退いて隙を見せた瞬間に斬りかかってくる腹積もりだろ」

「汚いとは言ってくれるなこの平民風情が。もういい、まとめて殺せ」
包帯男が指示を出して兵士共の後ろへと下がる。兵士共はそれぞれ獲物を構えて間合いを取り始め、俺も剣を構えてどこから攻撃をされても対応できるように警戒する。

「フレイムボール！」

俺の右側にいた兵士が一人分程の大きさの炎の弾を飛ばしてきた。二人まとめて始末しようってか？ いい考えだが、この程度ツ！

「はあッ！」

「なんだとツ!?」「フレイムボールを斬つただと!?!」

俺が横に剣を振り抜き、飛んできた炎の弾を斬り消した。

しかし、今のは譜術なのか？ それにしちやあ妙な感じだ。が、考えるのは後だ。炎の弾が聞かないと分かつたら兵士共は剣を構えて俺へと斬りかかって来た。：流石に囲まれると厄介だな。女の方も守らねーといけねえし。

「おいッ、女ッ！ 邪魔だからどっかに逃げてろツ!!」

「……………えッ？ あ、わ、えつと、足が、私…………」

「チツ、なら這つてでも移動しやがれツ!!」

「ひっ!? は、はいいいーッ!」

オロオロしていた女に一喝して無理やり移動させる。女は俺の言つたとおりにズリズリと奥の茂みへと這つて移動した。これで邪魔者は居なくなつたな。

俺は1対3にならないように細かく移動して常に相手と1対1になうように剣を交える。

「エア・ハンマー！」

「ジャベリン！」

前衛の3人の相手をしてしていると後ろにいた2人は譜術を使い、俺の動きの障害。あわよくば仕留めようとしてくる。チツ、体が上手く動かねえ。しかも傷が開いてきやがった。やはり長期戦は不利か。

ならば一気に片付ける。

「魔王絶炎煌ツ!!」
まおうぜつえんていこう

「ぐあッ!」「うゝッ!!」「ああッ!?!」

俺は近づいて来た兵士共を払うように横薙ぎした後、剣を地面に叩きつけて灼熱波を起こし、敵を吹き飛ばし倒す。

そして次に俺は後衛の片方へと駆けて近づき、

「双牙斬^{そうがざん}」

「ぎやあああああッ」

斬り下しの後、跳び上がりながら相手を斬り上げ仕留め、そしてすぐさまもう一人の後衛へと駆け寄り、三連撃を叩き込み絶命させた。

「な、な、なッ!?!」

俺は一息、深呼吸して離れた場所で^{おのの}慄いている包帯男へと近づいて行く。

「ひっ!? く、くるなッ! ……そ、そうだ!! 見逃してやる。い、いや見逃してくれ! もう命を狙わないと誓う。ほれ、私の腕はこの通り、な、無くなつてしまつていて、何もすることが……」

「屑が。言いたいことはそれで終わりか」

「た、た、助けッ…がふあッ!!」

グサリと俺は包帯男の胸へと剣を突き立て貫通させる。

「ふんッ。おい女。もういいぞ」

確実に息の根が止まったことを確認すると俺は茂みの方へと向き避難させた女へと声を掛けた。

外伝 鮮血の使い魔 3

イザベラSide

「お、終わった…の?」

体を縮こませていた私は赤髪の彼の言葉に恐る恐る茂みから顔を出し、

「うっ…そ」

その光景に絶句した。そこにはアルトワと、その騎士達の死体が転がっていたのだ。腕の無くなってているアルトワはともかく、騎士たちは全員トライアングルメイジ5人も相手にしたら、それこそ腕の立つ

普通トライアングルメイジ5人も相手にしたら、それこそ腕の立つスクウエアメイジですら苦戦はするはず。

なのに彼はいくら治療して怪我を塞いだと言っても応急処置程度の、そんな体であつという間に騎士たちを倒してしまっていた。

「おい。いつまで呆けている」

私が目の中の惨状に対し呆気にとられていると、彼はしびれを切らしたのか多少強めの語気で呼びかけてきた。

「あ、ごめんなさい。ってあんたその傷ッ」

「ん? ああ、戦ってる途中で開いた。別に大したことは無い」

「大したこと無い訳ないでしょうッ! そんなに血を流してッ。包帯も真ッ赤だし。ちよつと待ってなさい。今、ヒーリング掛けるから」

私は呪文を唱え癒^{ヒーリング}しの魔法をかける。秘薬が無いから本当に止血程度しかできないけど、掛けないよりはマシよね。

私が魔法をかけてる間、彼は奇妙な物を見る目で私の魔法を見ていた。魔法を見るのが初めて…なんて訳ないわよね。じゃあなんぞそんな目で魔法をみているのかしら?」

「はい。止血はでたはずよ」

「…ふんッ。余計な事だ」

余計な事って! 私がなけなしの精神力をつかって傷を塞いでやったのに、何て言いぐさなのこいつッ。

「ところでお前にいくつか聞きたいことがある」

「イザベラ。私の名はイザベラよ。お前なんて呼ぶんじゃないよ。それに私はあんたの名前も聞いちゃいけないんだけど」

「一々うるせえ奴だな。……アツシユだ。で、イザベラ。ここは一体どこだ？ 俺を一体どうやってあそこから連れて出してきたんだ？」

「うるさッ…!? 無礼な奴だね！ 私はこのガリア王国の王女なんだよ？！ いくらアツシユがゲルマニアの騎士だからって」

「チッ、うるせえッ。大体、俺はゲルマニアなんて所の騎士じゃねえ。それにガリアなんて国聞いたことねーぞ。マルクト帝国かキムラスカ王国じゃねえのか？」

「マルクト？ キムラスカ？ 初めて聞く名前だね。どこの田舎の小国だい？」

「……どういふことだ？」

私の言葉にアツシユは腕を組んで何かしら考え始めた。マルクトにキムラスカ。……やっぱ聞いたことのない国名ね。

そしてアツシユはしばらく考え込んだ後、落ち着いて休める場所が無いか聞いてきた。

「ここからだ馬を走らせてリユティスまで行った方が早いね。城まで行ければ部屋なんていくらでも用意できる。アツシユ、あんたの治療もね」

「そうか。ならそのリユティスとやらまで行くぞ」

アツシユは私の言葉に短く答えると、馬車につながれて逃げられなかった馬からハーネスを外して自由に動けるようにした。

「馬具は無いが、仕方ねえ」

「え？ ちょっと、何も付けない気なのッ!？」

「しようがねえだろ。なんだ？ 鞍が無いと走れないとか言う気か？」

アツシユはそう言いながら鞍も何も付けていない馬の背に飛び乗った。というか当たり前じゃないの。鞍どころか馬具の一つもついてない馬どうやって走らせるって言うのよ。

「大体、^{あぶみ} 鐙も無いのに馬の背に乗れる訳がないじゃないのさー！」

「チツ、めんどくせえな。手を出せ」

アツシユ馬の上から私に手を出してきた。これってつまり相乗り!?

「早くしろ」

「あ、うん」

さすがにこの歳になって誰かと相乗りするとは思ひもしなかった。私はアツシユに引き上げられて落ちないようにと前の方へと座らさせる。

「走らせるぞ。しつかりつかまってる」

「わ、わかったよ」

アツシユにそう言われて私は馬の鬣たてがみを両手で握り体を伏せる。そしてアツシユも私に覆いかぶさるように体を伏せて鬣をつかみ、馬を走らせた。

う、うわあ、アツシユの体温で背中が熱い。歳の近い男とこんなに密着するなんて初めてだ。うう、顔も熱くなってきた。きっと私の顔は真っ赤になっているだろう。

そしてリュティスを目指して走り出してからしばらく経ち、空が白しろみ始めた頃に私たちは城へと戻って来た。

それからは私の恰好を見た騎士たちが大騒ぎをするし、アツシユはアツシユでやっぱり出血が酷かったのか城に着いて直ぐに意識を失って馬から落ちてしまうなど色々大変だった。

そして数日が経ち、アツシユをきちんと治療して色々話をしているうちにアツシユが実は異世界から来たとか突拍子もない事が分かったり、こちらの事を教えてるうちに不機嫌になったり。

さらに私の使い魔にならないかと言ったらキレられたり、私のあの傍若無人な行動を見られてすんごくキレられたり。

最終的に親のコネや家名で幅を利かせている貴族やその子弟にケンを力売り、1対多数の決闘で圧勝したりと。短い期間でアツシユの名は王宮中に知れ渡った。

そして、私の使い魔（と言う建前）で、さらにその血のように赤く鮮やかな髪の色から彼は王宮でこう呼ばれるようになった。

『鮮血の使い魔』と……

冒険(っつこ)

キキSide

ジンから5000エキューを搾り取ってから数日が経った。
懐ふところが幸お金せいいっぱいになったので、次の休みの日になったら城下町に遊びに行こうと俺は思いながら民家の屋根から飛び降りる。

「…ブヒャ？」

そして、チャクラ刀で眼下にいるオークの首を一瞬で刎はね、悲鳴一つ上げる事も無く命を取る

さて、俺がいきなり忍者っぽい事をしているかというところ、その理由は数日前に話は戻る。

あの子の数日間、色々なイベントが発生した。

まずはルイズとリオンの喧嘩。内容はリオンとシエスタがイチャコラしていたのをルイズに目撃されて、と言うリオンにしては珍しくラブコメらしい展開を見せてきたのだが…。

それと同時に毒刀どくとう・鍍めつきに意思魂を移し終えたデルフが、本来の『意識の無くなった使い手を少しだけ操る』から『自身を手にした奴の意識と身体を乗っ取る』へと能力を昇華させた上に刀の毒にやられたのかそれともフラストレーションが溜まっていたのか、とにかく狂化して妖刀の様になって烏丸チトセの体を奪い辻斬り事件を起こした。

結果、目が虚ろのチトセが『斬ル斬ル斬ル斬ル』と永遠リピートしながら動くものを見境なしに斬り裂いて学院中を練り歩くと言うB級ホラー全開の事件が発生し、その対処のせいでリオン、ルイズ、シエスタによるラブコメは1時間としない内に有耶無耶のまま終わりを迎えてしまった。

ホント、余計なことしかしないなああの美少女(笑)は…。まあいいや。

で、基本使い魔の起こした騒ぎの責任は主が負うと言うのは当たり前前こと。ってな訳で辻斬り事件の一番の被害者(早朝、寝ている所を

ズタズタに斬り裂かれた)で、そんで一番の功労者(学院の生徒を逃がすために囿になりズタズタに斬り裂かれた)であったジンは見事に停学をくらった。あまりにも不憫過ぎて超笑えてくる。

ちなみに、チトセはしばらくしたら自力でデルフから身体と意識を取り戻した上でズタズタになったジンを見て『ジンさん。なにやってるんです? そんなボロ雑巾みたいになって。新しい遊びですか?』と、可愛らしく首を傾げていた。閑話休題。

事件収束後、デルフはきちんと理性を取り戻し、尚且つ前の剣身からだより幾分も軽くなった新しい刀身からだのおかげでチトセに帯刀してもらえようになり、一緒に行動するようになった。

まあそのせいでまた辻斬り行動に出るのではと、学院中の人間が密かに戦々恐々としてたりする。また話がズレた。

で、先の事件で停学になったジンはアル中モードに突入。そしてちょうどモンモランシーと喧嘩したと思われるギーシュと何故か意気投合。そのまま二人は宴会を始め、そこにチトセが混ざり、ギーシュを探しに来たモンモランシーが巻き込まれ、徘徊していたフレイルムが運悪く4人に拉致られ、それを探していたキュルケが：と言う感じタバサ、シエスタ、ルイズとさらに3人も魔空間へと吸い込まれていった。

さすがに巻き込まれ方が酷すぎるので俺は魔境と化しているジンの部屋へと隠密に潜入&調査をおこなった結果、ギーシュとモンモランシーの持参した酒の中に変な秘薬入りの物が数本あった。常識人であるはずのキュルケやタバサ、シエスタが酒盛りから帰還しないのはそれらを飲んでしまっていて、尚且つ人様に見せられないような醜態を同時に晒してしまっていた。

でだ、その宴会中にチトセとキュルケが城下町に遊びに行つてた時に見つけたと言う宝の地図の話が盛り上がり、それじゃあちよつと探しに行つてみよう。と言うことになり今に至る。

もちろん実際に行く時になったらチトセ以外の宴会メンバーは『覚えてない』『ここ三日間の記憶があやふやなんだけど』『言ったような言わなかったような?』『送ってもらったお金がもう1/4になって

る……』など色々ないざごぎはあったものの、最終的にまあ、暇だしいか、で財宝探しの冒険ごっこが始まった。

ちなみに、メンバーはルイズ、リオン、キュルケ、タバサ、俺、ジン、チトセ、ギーシュ、モンモランシー、シエスタの11人。……多いなあ。

ってなわけで、キュルケとチトセが手に入れた胡散臭い宝の地図を頼りに、山へ森へ廃村へ廃坑へと東奔西走……って程ではないけど、まああつちつこつちへと宝探しを始めた。

それで何件目かになる今回の地図。ちよつと人里から離れた小さな廃村の寺院に宝がくつてな感じでその廃村に来てみればオークが住み着いていたので、サクつと駆除しようってことになった。

それで長い長い説明を終えてやつとこき冒頭へ戻るのであった。

「あ、キキさん。お疲れ様です。こちらも終わりました」

と、刀を仕舞っている所に向かい側の家の脇から鍔を鞘に収めながらチトセが話しかけてきた。

「おう、そつちも怪我不いか?」

「へっ、あんな奴らごときにかすり傷一つ付けられるもんかよ。ケケケッ!」

と、チトセの腰に差してあるデルフがカタカタと笑いながら言い返してくる。この2人、デルフが鍔の中に有ったという大量の剣術知識と技能をチトセの体で行使していると言う形で戦闘を行っており、なんと純粋な剣術だけならリオンと同等となっている。

「…終わった?」

「終わったけど少しは手伝ってくれてもよかったんじゃ?」

「必要ない」

廃屋の中で本を読みながら待機していたタバサが窓から顔を覗かせてそう呟いた。まあその通りなのだけれどもね。

「さて、ここら辺の怪物さんたちは倒しましたし寺院の方へ行きましょう」

「だなく。リオン達ももう終わってるだろうしな」

チトセに同意し、集会所兼お宝が隠してあると言うこの村唯一の

寺院へと俺たち3人は移動した。

リオンSide

「で、そのガラクタが伝説の秘宝なのか？」

夜、寺院の中庭にて火を起こし夕食の調理をシエスタとキキと共にしながら僕は呆れ気味に呟いた。

「あははは……。今回は残念な結果になっちゃたわね」

「そうですね。中々上手くは行かないですね」

「今回〃は〃じゃなくて〃も〃でしょ！ もうツ、今回で何件目よツ
！」

キュルケとチトセは寺院内で見つけた秘宝^{ガラクタ}。真鍮で出来たと思われる薄汚れ所々ひび割れたり欠けたりしてりる装飾品を見ながらケラケラと笑い、それにルイズが怒鳴ると言ういつもの光景に僕は内心ため息を吐いた。

「でもさキュルケ、実際どうなのよ。あっちこっち行ってるけどお宝なんて全然無いし。有ったとしてもこんなのばっか。まあ、私としては珍しい薬草とか希少な秘薬を採取出来てラツキーだったんだけどね」

「モンモランシーの言う通りだよ。君たちが買ったっていう地図は信用できるのかい？」

「知らないわよ。それに言ったはずよ。〃中〃には本物があるかもしれないって」

「そんな雑な！ 猛獣や化け物が住処になってる廃墟や洞窟、果ては魔獣がいる森にも行って苦労してやつつけても手に入れたのがこんなじゃ割に合わなすぎじゃないか！」

「苦労って……。ギーシュ、あんたそんなに役に立ってないじゃない。猛獣も化け物も魔獣も大体ダーリンやキキが倒してるじゃない。昼間だってダーリンがほとんど倒してあんた足引っ張ってただけじゃないの」

「そ、そんなことないツ。あれは僕の作戦でね。その：別に助けて

もらわなくてもツ!!」

「はいはい。じゃあ次からはギーシユ1人で戦ってもらおうかしらね」

「えツ!？」

ギーシユがキュルケに昼間の事を指摘されて狼狽うろたえながら言い返すも、キュルケは意に介さず、逆に次はギーシユ1人に化け物モンスターと戦ってもらおうとからかっていた。

「みなさーん。お食事ができましたよ」

しばらくして夕飯が完成し、シエスタと僕で皆のところまで料理を運ぶ。

「こりゃあ美味そうだ!」 と思ったら本当に美味しいじゃないか! 見たこと無い料理だけどなんて言う料理なんだい?」

「はい、ミソオデンと言います」

「へえ。何か独特の風味ね。でも私好きかも」

と、ルイズが卵を頬張りながら絶賛する。しかしみそおでんか…この世界にも有ったんだな。僕はそう思いながら箸を進める。

「みそおでんか…。おかわりいいか?」

「みそおでんだな。食うの早いな」

ふと、隣でキキとジンが感慨深そうに呟いた。みそおでんに何か思い入れでもあるのだろうか?

「ねえ、明日はどうするの? そろそろ休みも終わるし行けても1〜2ヶ所だけよ」

そして食事も終えて食器と調理器具を近くの井戸場にキキとジンの2人が洗いに行き、ルイズ達は次の宝探し場所を話し合い始めた。「分かってるわよ。…うーん、そうねえ。…じゃあ最後というなら秘蔵のこれよ!」

「あ、それ一番高かった奴ですね」

キュルケとチトセが大量の地図の中から比較的古ぼけた地図を取り出して広げた。

『『天空の虹翼』。なんでも空を竜以上の速さで自由自在に飛べるようになるマジックアイテムなんだって』

「えッ！ それって…」

「あら、あなた知ってるの？ 場所はタルブって村の近くにあるみたいけど。タルブってどこら辺なのかわかる？」

「ここからですとラ・ローシエルを越えた向こう側に…広い草原があつて、その…私の故郷なんです」

キュルケの質問にシエスタは少し困ったような表情で答えた。

翌日、僕たちはシエスタの案内でタルブの村へと移動していた。昨夜、シエスタに秘宝の説明をもらったが本人もその天空の虹翼に関して詳しくは解らないようだった。元は彼女の曾祖父の持ち物だったらしく、今は村の外れの寺院にて飾られているとか。

「おじいちゃんが子供の頃にはもう飛ぶと言うより浮く程度しか出来なくなっていて、お母さんが生まれた時にはもう動かなくなってしまうたそうです」

「ええ。それじゃあ意味ないじゃないか！ キュルケ、どうするんだい！」

「別にいいじゃない。今までみたいに真鍮のガラクタや錆びた銅貨じゃなくてちゃんとした物みたいだし、見ていくぐらいして行きましょうよ」

ギーシュの不満の声にキュルケがいつものように適当に言い返す。確かにここまでの全ての地図がハズレで最後にやっと当たりを引いたんだ。動かなくなっていると言っても物はきちんと残っているのだし、拝見して行くぐらいはと思うのも当然だろう。

「シエスタ。そのひいおじいさんってどんな人なんだ？」

「え？ そうですね。私が生まれる前に亡くなってしまったので母から聞いた話になってしまふのですが…」

とジンの質問にシエスタはその曾祖父の事を話し始めた。

「ひいおじいちゃんはある日ふらつと現れたそう、最初村に現れた時は珍しくも上等な衣服とマントを纏まとっていたので貴族方が来たつて大騒ぎになったそうなんです。

でも実際は貴族様ではなくて東の地から来た国の研究者様なんだそうです。それですね、村に来たひいおじいちゃんは壊れてしまっ

た天空の虹翼を直す場所を貸してくれる代わりに村の仕事の手伝いをすると言う約束で住むことになったそうです。

村でひいおじいちゃんとは色々と有名でした。当時ちょうど不作続きで食べ物も少なくなつて大変だったらしいんですが、ひいおじいちゃんが作った肥料や新しい農作の仕方豊作にしてくれた事や新しい作物や食材、調味料に料理の作り方を教えてくれたり。他にも収穫に役立つ道具や作物を効率良く加工するための小屋を作つたりと、村を豊かにしてくれたとおじいちゃん達なんかはいつも話してたりします。

あとは……よく旅なんかをしていたらしいですよ。たぶん天空の虹翼を直すための物を探しに行つてたんじやないかと私は聞いています。でも結局は直すこと叶わずタルブに住まうことに決めたようです。

私の聞いた……というよりも村の人達なら体大知つてることなんです。私がこんなところですよ」

シエスタはそう締めくくつた。僕はシエスタの話聞いて感心をした。普通国抱えの研究者であればそれなりの地位を持つていたりして、全員が全員とは言わないが平民に対して横柄な態度を取りそうなものだが、シエスタの曾祖父とやらは人ができた人物だったようだ。

とシエスタの話がちやうど終わった頃、森の木々が開け始め前方に森の終わりが見えた。

「ようこそ皆さん。ここがタルブの村ですよ」

森を抜けるとそこは広い草原と家々があり、遠くを見ると田畑が広がる場所、果樹園らしき木々が集まっている所、そして話に聞いた収穫物を加工するための小屋が密集している場所と思つていた以上に大きな村があった。

くおまけチャットく

『値段』

ジン「なあ、この地図っていくらぐらいしたんだ？」

キュルケ「え？　そうね殆どが1枚50ドエニから100スウ程度よ」

ジン「ふーん。そうなんだ」

キュルケ「でもチトセが買ってきたのはすつごく高かったわね」

ジン「!？」

チトセ「別にそんなこと無いと思いますよ？　たしか金貨数十枚ぐらいでしたし？」

ジン「ちよつとまで！　十分高いから！」

チトセ「え？　でもジンさんの財布の中身見せて値段聞いたらそのぐらいが相場だってお店の人が」

ジン「ぼつたくらわれてるじゃねーかッ!!　ってかなんで俺の財布使ってるんだよ!!」

チトセ「だってえ、こんな無駄なものに私のお金使いたくないですし」

ジン「……………orz」

天空の虹翼

キキSide

森を抜け広い草原を移動しながらシエスタが嬉しそうに村のことをあれこれ説明している中、俺は思った。タルブの村、発展しすぎじゃね？

まず民家。家そのものはどこの村でも見る一般的な物ではあるし広原と言う土地柄のおかげなのかある程度家々の間隔が開いているから密集しているとは感じないのだが、その家の数がどうしても「村」としての範囲を超えているのだ。

次に田畑及び遠くにある果樹園。普通の目視で認識する分にはまだ普通なのだが、白眼でさらに広範囲を視るとその広さが数倍に広がっていたりする。

そして最後にあの川に沿う様に建っている風車や色々な建物。あれが一番ヤバイ。白眼で視ただけでこの世界的にみても高水準過ぎる技術が使われた工場施設だった。

ここまで発展してる時点で村じゃねーよ！ と俺は心の中で思い、なんでこんな事になってるんだよと考え、そしてまあいいやと思考放棄した。だって考えるだけ意味無いし。

「着きました。ここがその教会です」

思考放棄して普通にタルブの風景をボケっと見ていたらシエスタの着いたという言葉に意識を戻した。案内された教会は風がいい感じに吹いている小高い丘の上にこじんまりと建っており、特徴としては小さな風車が鐘楼と一体となっている事ぐらいでそれ以外はまさに田舎のって感じだ

シエスタはこちらですと言って教会の扉を開き中へ入って行き、俺達も教会へと入った。

「……あら？ ねえ、どこに天空の虹翼があるの？」

教会内に入るやキュルケが中を見渡し首を傾げた。キュルケの疑問はもつともて教会の中は至って普通でありシエスタが話していたような秘宝があるように見えないのだ。

「うふふ。少し待っていてください。…えつと、ここを、こうつと…」
皆も秘宝は何処？と眉をひそめているとシエスタは含み笑いをし
て祭壇の奥に鎮座しているブリミル象（だと思う）に対して何か弄る
とブリミル象が横にスライドして地下へと続く階段が現れた。

「あはッ！ なにこれ！」

「隠し階段ですかッ！ 秘密の地下室ですかッ！」

「へえ、すごいな」

キュルケ、チトセ、ジンが現れた隠し階段を見ると目を輝かせて祭
壇へと駆け寄り、ルイズやギーシュにモンモランシーも3人の後に続
いて興味深そうにブリミル象の仕掛けを見始めた。

「これもひいおじいちゃんが作ったものなんですよ。天空の虹翼があ
るのはこの下です。足元が暗いので気をつけてください」

シエスタは悪戯が成功した子供のように笑顔になり、そして階段横
に吊るしてあったランタンに赤い光を灯して階段を下りていき俺た
ちも後に続いていく。入口は一人分程度の幅しかなかったが少し進
むと3人分ぐらいの幅となっており、狭苦しさを感じる事も無く地下
室へと向かうことが出来た。

中に入るとシエスタは壁にあるランプへと火を付けて部屋を明る
くさせる。すると…

「これが…天空の虹翼」

「おおッ。これはすごいッ！」

「確かに今までのガラクタとは訳が違うな。…それにこの部屋にあ
る物も普通じゃない」

ルイズとギーシュは現れたソレに驚き、リオンは天空の虹翼だけで
はなく室内にある様々な道具にも興味深そうに観察していた。俺も
室内にある様々な整備道具や結晶石を使った何かしらの装置や秘薬
などを見て回る。

「つてかなんとかなく察しはついてたけどやっぱりレアバードなのな。
しかもファンタジア仕様」

俺は部屋の中央に鎮座している天空の虹翼ことレアバードをみん
なが見たり触ったりとしているのを眺めながら俺はボソリと呟い

た。つてーかここまで来るとゼロ魔世界と言うよりテイルズオブ世界に来たつて言われても違和感ないな。まあいいか。どっちも好きだから個人的には全然問題無いし。

「……なあ、シエスタのひいおじいさんの名前つてなんて言うんだ?」「えつと、アーノルドと言います。アーノルド・D・モリスン。それがひいおじいちゃんの名前です」

「そっかー。……モリスンか」
「?」

レアバードを嬉々として見ていたジンが曾爺さんの事をシエスタに聞き、そして返ってきた名前に勝手に遠い目になっていた。しかしモリスンさん一族かあ。聞き覚えのない名前だから未来モリスンさんの子孫とかその辺りの人なんだろうな。

「でも残念ね。これってもう飛ばないんでしょ?」

「はい。ひいおじいさんが亡くなった今となってはもう動かし方すら分かりませんから」

と、モンモランシーの言葉にシエスタは申し訳なさそうな表情になり、それから一通りレアバードを見て満足したのかキュルケ達もそろそろ上へ戻ろうかとしていたら、

「あ、これ直せますね」

と、チトセがレアバードの横の装甲を外して何でもないように言っただ。つてかどうやって外したんだ? …まあチトセだし気にしてもしょうがないか。で、そんなチトセの言葉にキュルケ達は驚きに表情を変え、そしてチトセへと駆け寄った。

「ちよつとチトセツ! それ本当なの!?!」

「はい。中を覗いてみたんですけど、多分これが動かないのつて動力系のトラブルなんだと思うんです」

「ドウリヨクケイ? えつと…?」

「はい。まずこの乗り物は空気中にある何かしらのエネルギーを変換して推進力をしているんだと思うんですね。それでですね、その際の

………《未知の言語》………で、つてあれ? どうしたんですか皆さん?」

キュルケの疑問にチトセは超科学的な専門用語やら論理やらをそりやあ細かく語り始め、そして1時間ほどたった頃にやつとこさ俺も含めて内容をほぼ理解できていないことに気づいてくれた。さすが腐ってもトランスバール軍の特殊部隊の隊員だ。

「チトセ、もう説明はいいからさ。とにかくこいつはまた動かせるように出来るんだな?」

「もう、さつきからそう言ってるじゃないですか。ジンさんは蘭花先輩やミルフィーユ先輩と同じで頭空っぽ系の人なんですか?」

「頭の中が沸いてるお前に言われたくねえッ!」

チトセの自然に流れ出る罵倒にジンがいつも通りに怒鳴り返す。まあそんなことはどうでもよくて、とにかくチトセ曰く、動力部の所をなんとかすればレアバードは飛ぶようになるそうだ。

「シエスタさん。もう少しコレを調べさせてもらってもいいでしょうか?」

「別にかまいませんよ。それにまたこれが動いたらおじいちゃん達も喜ぶかもしれませんし」

「ありがとうございます。では…」

シエスタの許可を得るとチトセはスカートの中から工具セット(どうやって収納していたかは不明)を取り出し、レアバードをいじり始めた。

「それじゃあここはチトセに任せて私たちは上に戻りましょ」

キュルケは言うど出口へと向かい階段を上って行き、そしてルイズにリオン、ギーシュ、モンモランシーも上へと戻って行き、

「お前は どうする?」

「俺はこいつが何かやらささないか見張っておく」

俺はジンの返答に分かったと言ってタバサの後に続いて上へと戻った。教会から出ると日が傾いており、この場所と相まって夕日がまさにイベントCGの様な光景が広がっていた。

「ねえ、この後どうするの? この村に宿ってある?」

「はい。小さいですが行商の方々が泊まるための宿があります。この時期であればお部屋の方は大丈夫だと思いますので、今日はそちらの

方へお泊りになってください。お夕食に関しては宿の近くにお店がありますので準備が出来たら呼びに行きます」

ルイズの問いにシエスタは笑顔で言葉を返した。

リオンSide

教会の地下で天空の虹翼を見た後、僕たちはシエスタに案内されて宿へと向かった。宿に入り、シエスタが事情を説明すると、宿の主人らしき柄の悪い男は部屋割りは自由にしていとやる気のなさそうな表情でカギを幾つか渡してきた。

「む、ちよつと何そのよ態度ツ。客に対して失礼じゃないの？」

「あ？ うっせーガキだな」

「なあッ!? ガキですつて！ 貴族に対してなんて口の利き方するのよッ！ 無礼にも程があるわッ」

「わわわッ、すいませんルイズさん。この人誰に対してもこんなんで…。アシキさんもッ！ 少しはお客さんに対する態度をちゃんとしてくださいって言ってるじゃないですか」

「あーはいはい」

アシキと呼ばれた男はルイズとシエスタの言葉なんぞ一切聞く耳持たずに欠伸あくびをして眠り始めてしまった。さすがに宿の人間としてその態度はどうかと思うのだが…。

「もお。すいません皆さん。この人の事は無視しちゃって構いませるのでお部屋でお寛ぎください。もし何かご入り用になりましたら向かいの店でお夕食の準備をしますのでお手数ですが呼んでください」

シエスタは本当に申し訳ないという表情で頭を下げ向かいにある飲食店へと歩いて行った。

「じゃあ部屋割りは私とダーリンは決まってるとして…「ちよつとッ！」ってなによルイズ？」

「何よじゃないでしょキュルケッ！ 何あんた勝手にリオンと同じ部屋になろうとしてんのよ！」

「別にいいじゃない。自由にして良いって言ったんだから」

「だからってなんであんたとリオンでの2人部屋なのよッ！　そうやってまた発情して、この節操無しの乳女ッ」

「なによッ！　悔しかったら大きくなってみなさいよこのぺったんルイズ」

ぐぬぬ、とバカの二つ覚えの様にまたルイズとキュルケが騒ぎ始める。毎度の事ながらうるさい奴らだ。

「はあ。そんなもの男女で適当に割り当てればいいだろ。こちらは3人しかないから1部屋で十分だ」

このままではいつまでも言い合いを続けるだろう二人に僕は嘆息しながら言い含め、僕は3人部屋のカギを手に取り2階へと向かった。

「え、僕はモンモランシーと…」

「はあ？　何ってんによギーシュ。別々にきまつてるでしょ」

「そんなあッ。僕たちは恋人同士じゃ…」

「あら？　いつ私が貴方とよりを戻すなんて言ったの？」

「ええッ!？」

上へと向かう途中、ロビーでギーシュがモンモランシー相手にわたたと騒いでいたが直ぐに肩を落としてトボトボと歩いて階段を上ってきた。何かあったのかは大体察しが付く。こいつもこいつで懲りない奴だ。

結局、部屋割りは僕とギーシュとキキ、キュルケとタバサ、モンモランシーとルイズの3・2・2と言う形に落ち着いた。部屋に荷物を置いた後ギーシュはベットへと潜り込み、キキは軽く散歩してくると出掛けて行った。

「…………ふむ。僕も少し出るか」

誰に言うでもなく一人眩き部屋を出る。と、同時にに隣の部屋の扉が開き祈祷書を抱いたルイズが出てきた。

「あ、リオン。どこか出掛けるの？」

「する事も無いから少し散策に出ようかとな」

「そうなんだ。私も一緒に言っいいい？」

「僕は別にかまわないが、お前は何か用事があつたんじやないのか？」
「用事と言うより詔みことりの言葉を考えようと思つて」

僕の疑問にルイズは抱きかかえていた始祖の祈祷書と呼ばれる本を見せて答えた。詔は結婚式で選ばれた巫女が言葉を考え祈祷書を手詠み上げるもので、ルイズは来月おこなわれるアンリアツタとゲルマニア皇帝の式でその役目をアンリエツタから指名され祈祷書をオールド・オスマンから預けられた。

それ以降、ルイズは度々たびたび祈祷書を前にしてはうーんと唸っていたのだが、どうやら未だに内容が出来ていないようであった。

「そうか。と言うかまだ出来ていないのか」

「…む。しょうがないじゃないのよ。私こういうの初めてなんだもん。それに色々考えてたら何が良いのか分かんなくなつてきちゃつて…。なにより王族の結婚式だし無様な詩を詠むわけにはいかないもの」

「まあ気持ちは分からないでも無いが考え過ぎて間に合わなかった、なんて事にはならないよう気を付けるんだな」

「むう、分かつてるわよ。だから気分転換にちよつと散歩に行こうとしてたのよッ」

僕は軽く冗談を言つてやるとルイズは口を尖らせてそっぽを向いてしまった。

「ふっ、冗談だ。本気にするな」

「リオンが冗談言うなんて珍しいわね。ま、いいわ。それじゃあ行きましょう」

僕の言葉にルイズはジト目で睨んできたがすぐに機嫌を直し、階段を下りて行つた。まったく、相変わらずコロコロと表情が変わる奴だな。僕は小さく苦笑し、ルイズ後を追つて共に散歩へと出かけたのだった。

『タルブの村』

キキ「しつかし、広い村だな」

タバサ「……とてもよい村」

キキ「だなく。子供共も元気いっぱい……」

活発な少女「今度はあっちに行こうよッ！」

ひ弱な少年「ええッ!? もう日が沈むし今日は帰ろうよお」

活発な少女「まだ大丈夫だって! イケる、イケる!」

褐色の少女「バイバツ! そうだよ。まだまだダイジョブだよッ」

能天気な少年「でも前にも同じようなこと言つて森で迷子になつて

怒られたじゃんかよ。俺もう拳骨くらうのヤダぞ」

キキ「……あれは他人の空似。俺は何にも見なかった」

タバサ「?」

飲み会

ルイズSide

リオンと一緒に宿から出てタブルの村を二人で散歩した。といっても時間も時間だからあんまり遠くまで行かずに近くをゆつたりと歩く程度のものだったけど、中々楽しむことが出来た。べ、別にリオンと二人つきりだからって訳じゃないからねツ！ って誰に言い訳してるのよ私は…。

それで日が暮れて辺りが暗くなり始めた頃に私たちはそのままシエスタの言っていたお店へと向かった。ピンクキャットと言う名前らしい。私たちはお店に入ると

「なんだテメエ？ 男ならもつと根性見せてみろよ。おらおらツ」

「ぶぶツ。す、すびばツ、せんツ。ちょツ、と、ちようしツに、乗でツ、しまツ…」

「亜式、もう止めてあげてくださいって！」

「いいえ。いつその事とことんやつちやつてちようだい。ギーシユにはそろそろ本気で反省してもらわなくちゃいけないと思っっていたし」

ギーシユが宿の主、アシキと呼ばれている大柄の男の人に片足を持ち上げられて逆さ吊りのような状態で何度もお腹を殴られているところだった。何これ？ そう思っただのはリオンも同じみたいで呆れたような表情をしていた。

モンモランシーはそんなギーシユを冷めた目で見ながらワインを飲んでいて、そして…：…なんだろう？ 布きれ？ いや、ちゃんとフリルが付いているし…。いくなればネグリジェの様な服(?)を着た前がほぼ丸出し(パンツらしき物は履いている)の褐色の半裸少女はアシキと言う人とモンモランシーの間をワタワタとしていた。つて、何あの服?! 破廉恥極まりないじゃないツ！ あの子はあんな服で人前に出て恥ずかしくないの!?

「あ、ルイズさんも今来たんですか？」

「え？ あ、チトセにジン」

私がキュルケ以上の露出少女に慄いていたら後ろからチトセに声

を掛けられた。

「お二人ともどうしたんですかこんな入口で？ 座らないんですか？」

「……そうだな。こんな場所に突っ立っていたら邪魔だな」

「あ。そ、そうね。ここは邪魔だし席に着きましょう」

チトセの言葉にリオンと私は移動してチトセとジンと一緒に空いている席にすわった。あ、もちろんギーシュ達から一番遠い席ね。だって怖いし。

「あ、皆さん。お夕食の方はあと少しで出来ますのでもう少しお待ちください。今お飲物お持ちしますね」

席に座ったあたりで厨房からシエスタが声を掛けてきた。それでしばらくすると頭に白黒模様の生き物のぬいぐるみを付けた子供が飲み物を運んできて、

「一杯10スウ」

「ちよ、お金取る気ッ！ ってか高ッ!？」

飲み物の支払いを言ってきた。しかもぼつたくりなんて言う生易しいもんじゃない過剰な値段で。

「えっと…、4人なので40スウですね」

「いやいやいやチトセッ、なに払おうとしてるのッ!？」

「ってかそれ俺のサイフ!」

女の子の言い値をチトセがそのまま払おうとしていたので私とジンがすぐさま止めに入った。相変わらず人の言うことをなんでも真に受ける子よねチトセって…。

「ちよつとあなたねッ、そんなの払うわけ無いでしょ！ 大体それはシエスタが出してくれた物じゃない？ それをッ…」

「あーうっさいな。冗談に決まってるじゃん。まったくこれだから貴族（笑） っつのは」

「なああッ!？」

…こんのッ！ ホント何なのこいつッ！ 人様貴族に対してこんな無礼を働いておいて謝罪どころか逆に馬鹿にしてからにッ！ 私がギリギリと怒りに打ち震えている間にもこいつは何でもなかったよう

に淡々とカッパをテーブルに並べて、全部置き終えるところとつとと厨房へと戻って行った。

「あ、あ、あの、なツ、なんなのよあの子供はツ!!」

「まあまあルイズ。落ち着いて」

「あんだだけバカにされて落ち着いてなんかいられないわよ！ ジンはなんでそんな落ち着いて……あ、ごめんなさい」

「なんで謝った？ どうして俺の隣を見て残念そうにするんだ？ 憐みの目で見えるなツ!!!」

「あ、うん。ごめんなさい」

昔は優しくてかつこよく学院に入ったばかりの頃は学年関係なくモテていたのに、今じゃそんな面影すら無くなって酷い事になっているジンに私はつい憐みの視線を向けてしまった。テーブルに突っ伏して泣き始めるジンから視線を外して座り直しお茶を飲む。あ、これすごく美味しい。

「あら、みんな早いよね」

それからややあつてのんびりといるとキュルケ達も店に入ってきた。来たのはいいんだけどツ！

「だからなんで一タリオンの隣に座ろうとするのよ！ 狭っ苦しいじゃない。別の場所に座りなさいよツ！」

「別に何処に座ろうが私の勝手じゃない。狭いって言うのなら貴女が移動すればいいじゃないの」

「あんたがあつち行きなさいツって！」

「い・や・よ」

私はキュルケをリオンの隣から追い出そうと掴みかかってやるがキュルケは意地でも退かないつもりか私の手を何度も払いのける。

「ええいッ、鬱陶しい！」

私がキュルケを追い出そうとしているとリオンがいきなり怒鳴って席を立ってしまった。

「え、リオン？」

「ダーリン？」

「人を挟んでギャアギャアと喧しい。お前たちが移動しないと云うな

「僕は向こうに座らせてもらう」

リオンは私たちにそう言うのと一人移動してタバサ達がいるカウンター席にいつてしまった。

キキSide

「ちよつと！ リオン怒っちゃったじゃないのよ！」

「わたしのせいなの？ むしろルイズの方がうるさかったじゃない」

ムキヤーつとリオンが居なくなつたにもかかわらずルイズとキユルケの2人はまだ言い争いを続けていた。

「はあ」

俺の隣に座つたりオンは横目でその様子を見ると小さく嘆息した。

まあ、あの二人相手は疲れるわなあ。はたから見てる方は微笑ましいとか羨ましいみたいだな事思えるけど、実際に当事者とかになつたらあの姦しさは鬱陶しい。二次のオリ主とか原作知識あると言ってもよくあんなのに耐えられるなあ。

今更ながらにタバサに召喚されたと言う超幸運に感謝しないとな。なんて、ポケツとどうでもいい事を考えていたらキツチンから沢山の料理が運ばれて来て、夕食…というより宴会が始まつた。

運ばれて来た料理の数々は普通に街で見かける物からこの村の特製と言うHPとかTPとか異常状態とかを回復してくれそうな料理まで色々あつた。

そんで……

「はいッ、マーボーカレー追加お待ち！」のんのん「呑呑、あちらのカッコイイ黒髪お兄さんにクツクベリーパイお願い」あんあん「杏杏、あつちの薔薇が笑えるカッコイイつもりのお兄ちゃんにワイン運んで」「ちよつと待てッ！カッコイイつもりってなんだねッ!?」「カニ玉おかわり」「あたしバナナパイおねがい」「もう二人とも食べ過ぎじゃない？ あ、焼き鳥おねがいます」「シエスタちゃん。おっさんサバ味噌おねがいますわ」「ヘイツガール。ミーにはフルーツタルトをプリーズ」

とな具合に宴会は進み、そして何故か時間が経つにつれて店内の人口が増えていくと言う。しかもどこが見たことのある人達が居たりする。いや、まあテイルズオブシリーズ大好きな俺としては全然OKなんだけどね。

そんな店内の様子を内心楽しく眺めながら俺はあまにんどうふを美味しくいただく。これ美味^{うま}。

「……すまないがフルーツサンドを頼む。あとソレも。」

クックベリーパイを食べて終えたりオンがあまにんどうふを指さして新たに注文を取る。そう言えばリオンって甘党と同時に偏食のきらいがあるんだっけか？ さつきからそれ系統しか食ってない。まあいいか。

「そう言えばチトセ。虹翼は直ったの？」

と、後ろの4人テーブルからルイズの声が聞こえた。

「それが大体の改修は出来たんですが、やはり新たな動力源を手に入れる必要があります……」

「じゃあ、やつぱり無理なの？」

「そうですねえ。何か強力なエネルギーを生み出す物が無い事には……」

チトセの言葉に一緒に席に居るキュルケとルイズが残念そうにため息をついた。それにしても強力なエネルギーを生み出す何かねえ。

「……アレが使えるんじゃないか？ しかしそれを教えるべきか否か……。まあいいか。別に迷惑掛かる訳でも無いし、俺もレアバード飛んでるの見たいしな。」

「なあチトセ。それってエネルギーの結晶みたいな物でも大丈夫か？」

俺はあまにんどうふを食べきりチトセに声を掛けた。

「あ、はい。大丈夫です。そこらへんは少しいじるだけでどうにでもなりますから」

「あなた何か心当たりでもあるの？」

「心当たりも何も『竜の心臓』。あれの事なんだが」

キュルケの質問に俺は竜の心臓の事を言った。

「そうなの？ でもあれって学院長の私物じゃないの」

「まあ、だから……ジンが何とかしてくれる」

ルイズの疑問に対して俺は酔いつぶれているジンの背を叩き、面倒事を丸投げした。ルイズとキュルケはそんな俺に呆れの視線を向けてきたが気にしない。そしてチトセはなんて名案何でしょうと言うように目を見開いてキラキラさせていた。

まあ、そんなこんなで夜も更け、宴会は終わりとなった。タバサ達女子陣は料理が美味しかった、お酒が色々あって良かったなどお喋りしながら部屋へと戻り、俺とリオンは酔いつぶれたギーシュとジンを担いで部屋へと戻った。

ちなみに、店から出た後なんとなしに振り向いたら入り口に「今日はお食事代無料！ 皆さん食べて行ってください」と言う張り紙が貼ってあった。どうやらこれのせいでお客さんが増えて行ったようだ。

そして後日、ジン宛に今日の宴会代の請求書が届くのだが、まあいつも通りの事なのでジン以外誰も気にしない。

【おまけ：ピンクキャットの異世界漂流】

※このニードレス世界はアニメの設定を使っています。

時系列とかは気にしてはいけません。

細かい事も気にしてはいけません。

アークライト『参加できぬ者は全て、有害なニードレスと見なし駆除する！ ……一人でも多くの参加を願っている…』

空中に映された映像がアダム・アークライトのキメ顔を最後に消え、それを見ていた者達の間には沈黙が流れた。

亜式「けっ、人を見下しやがって。気に食わねえ」

イケメンの男「亜式さん。これって…」

大柄な男「こりゃあ、どうなる事やら」

亜式「この程度で何狼狽えてんだ。俺に言わせりゃあなんでもねえ」

イケメンの男「じゃ、じゃあー!」

亜式「ああ。……合コンは予定通り開催だツツ!!」

イケメン&大柄&その他「「シャツーーーーー!」」

そして合コン当日。ピンクキャットで合コンが始まった。

妙華「亜式さん♡ これ美味しいですよ♡」

ナラカ「ムツ。亜式! こっちの方が美味しいですよ。ほら、あーん」

イケメンの男「呑呑ちゃん。これ君にプレゼント」

呑呑「わあ! ありがとう」

男の子「あ、あの、華夏ちゃん。今度僕と遊びに行かないかな?」

華夏「んーどうしよっかな?」

亜式とその友人&知人の野郎共とピンクキャットの店員達及びその知り合いの美少女たちが楽しく飲み食いしている中、シメオンビルではブレイドが未央ちゃんのヒップアタックを受けて天国を見ていた。

杏杏&呑呑「それツ飲んで飲んで飲んでツそれぞれツ!」

大柄の男「おごぼおどふいおd j s k k s d」

亜式「パンツだツパンツを見せろツ!」

ナラカ「亜式が壊れたツー!」

お酒が大量に入り、暴走し始める野郎&美少女たち。

そして活性化した細胞を吸収し、神へと進化を遂げたアークライト。ブレイド達はついに最後の戦いを迎える。

妙華「ひやれ? 外が光ってる」

ナラカ「むきゅ〜」

亜式「いげえツ悪霊共!」

悪霊達（いやいや、無理っす）

酒盛りと化した合コンもそろそろ終わりに近づいた頃、シメオンビルを中心に謎の光が膨らみそしてその光にピンクキャットが包まれた。

合コンに参加していた人々「うぎやつ!」「ウゴツ!」「きやんツ」「ふあっ!!」「フガツ!」「ゴッ!!!」

光に包まれたピンクキャットは突如現れた空間の割れ目に引きずり込まれ、異空間でシェイクされながら流されて行った。

タルブの村人たち「なんじゃなんじゃ!?」「雷でも落ちたのか?」「晴れてるのに雷が落ちるわけないだろ」「おい見ろ。変な建物があるぞ!」「なんじゃこりゃ?」「中には誰かいるのか?」「!!? 人がいる!しかも全員頭から」血を流してる」「そりや大変だ!」「運び出して治療院に連れて行くぞ!」

タルブの村、そこに落ちた亜式達。村人たちの手厚い治療のおかげで事なきを得るも頭を強打していたせいかピンクキャットに居た全員が一部の記憶を喪失してしまった。

村長「では、帰る場所や行く当てなども?」

亜式「ああ。まったく思い出せねえ」

妙華「わたしもお店ですべて忘れていたって事以外は全然」

村長「ふむ。ではこの村に住むのはどうですか? 小さな子供も居ますし、そちらの方々もいい身体をしておるゆえ畑や荷運び等の仕事を任せられそうですしな」

ブラックスポットの事やニードレスの事など全く覚えておらず、行く当てのない亜式達は村長の好意により村に住むことになったのであった。

戦争の始まり

キキSide

朝。と言っても昼近いが、例の教会からレアバードを引き上げて俺たちは学院へと帰途についた。

ちなみにレアバードを地下から出す時、教会内の床が開き地下からレアバードがせり上がってくる様子は心が躍った。

帰りはシルフィードにレアバードを運んでもらう為、シルフィードに乗って学院に色々と説明したり誤魔化したりするための人数は4人までが限度らしく、話し合った結果はタバサ、ルイズ、キュルケ、そしてチトセで決まった。

「それじゃあ、学院で」

と、ルイズ達はシルフィードの羽ばたきと共にあつという間に空の彼方へと消えて行った。

そして、ルイズ達を見送った俺、リオン、ギーシュ、モンモランシー、シエスタ、ジンの6人は馬を連れながらゆったりと学院へと向かうのであった。

帰り道はこれと言った寄り道をしないため、1日と半日で学院へと帰ってこれた。

「おー。飛んでるなあ」

「ほう」

「わあッ！ 本当に飛んでます！」

「おお！」

学院の敷地内に入ると右手の広場に上を見上げているタバサ達の姿があったので疑問に思い同じように見上げてみるとレアバードが空を舞っていた。それを見て俺、リオン、シエスタ、ジンとそれぞれ感嘆の声を上げた。マジ感動！ めっちゃ乗りたい！

俺は内心ワクワクしながらとりあえず馬を急いで厩舎きゆうしやへと片付けに行った。

「おや？」

馬から鞍やら荷物やらをちやっちゃやと外して管理人さんに返却し、

タバサ達の所へと戻ると学院長さんが増えていた。

「ん？ おお、お主たちも帰ってきたか。怪我も無いようだなによりじゃ」

学院長は俺達が駆け寄ってくるのに気づくと微笑みながら話しかけてきた。

「オールド・オスマン。ただ今帰りました」

学院長にジンが言葉を返すとそれに倣いギーシュとモンモランシーもそれぞれ挨拶を返し、俺とリオンはこの生徒では無い事もあり、軽く頭を下げる程度の返しをした。

「うむうむ。しかしあの娘らがあのマジックアイテムを持って帰って来た時には驚いたぞい」

「オールド・オスマンは天空の虹翼をご存知で？」

「噂話程度にの。実物を見るのは初めてじゃ。昔わしがマンティコア隊を率いていた頃に竜と同等かそれ以上の速さで空を駆けるマジックアイテムが有ると噂好きの部下が話していたのを覚えとるよ」

ギーシュの問いに学院長は昔を懐かしむように答える。その答えに上を向いていたタバサ、ルイズ、キュルケ、ギーシュ、モンモランシー、ジンの6人が一斉に学院長を驚愕の表情で見た。

「え、うそッ!? マンティコア隊を率いていたってつまり隊長ってことですか!!」

「ホントですかオールド・オスマン!」

とルイズとキュルケが学院長に詰め寄った。他の4人も詰め寄りはしなかったけれども顔には信じられないと出ていた。まあ、確かに俺が知ってる範囲でも学院長の行動はアレだしな。

学院長はそんなルイズ達を見て得意げな表情になり自身が如何にすごいメイジであったかを嬉々を自慢し始めた。

俺は関心が全くなかったので同じように学院長の話に興味を示さずにいるチトセとリオンと共にレアバードの観察を再開した。

「……………ん？ あ？ なあ今あれに乗ってるのって誰だ？」

俺は庭にいるメンバーを再度確認して疑問を口にした。だって旅行に行ったメンバー全員庭にいるしわけだし。リオンもそう言われ

ればと顔に疑問を浮かべチトセを見た。

「あ、今乗っているのはジャンさんですよ」

「……………誰？」

「ジャンさんですよ。ほら頭髮の無い眼鏡の先生の」

「ああ、コルベール先生か」

チトセの説明に俺はなるほどなあと納得し空を見上げ直す。

ってかチトセの奴コルベール先生の事名前呼びなのか。説明してくれなかったらホントに分からなかった。

しばらくするとレアバードが空中で留まり、ゆっくりと地上へと降下して来た。

「チトセくんッ!! これはなんてすごいんだッ」

レアバードを着陸させると同時に乗っていたコルベール先生が顔を輝かせてチトセへと駆け寄り口早に喋り出した。

それはそれはもう途中から何言ってるのか分からないぐらいの勢いで喋るわ喋るわ…。まあ途中から訳わからなくなった理由としてチトセも喋り出したってのもあるけどな。

そんな感じで2人が白熱した会話をしていると学院長の自慢話が終わったのか、それともレアバードが着陸したのに気づいたのかルイズたちもこちらに戻ってきた。

「ほっほっほ。なかなか楽しそうだのお。で、ミスタ・コールタール。そのマジックアイテムはどうじゃった？」

「私の名前はコルベールです。…そうですね。これは私の理想とする物の一つと言っても過言ではありません。この天空の虹翼の技術を解析し使えるようになれば飛行船は今よりもより大きく、そして大量の積荷を迅速に運べるように……。それどこころか、」

「これこれ、落ち着きたまえミスタ、…コ、コルベール……ザ？」

「あ、これは失礼。つい白熱してしまいました…。あと失礼ついでに私はコルベールです。いい加減覚えてくださいクソジジイ」

「…………ちよつと名前を間違えたくらいで年寄りに対してなんという暴言を。まったく最近の若者は…」

やれやれ嘆かわしい、と学院長は自身の非を柵に上げコルベール先

生対して酷い人だと肩をすくめた。これが世に言う老害といわれる生き物なのだろう。まあきつと冗談半分なんだろうけど。

さて、ではでは俺も、と思いきやレアバードのそばで屈んでいるチトセに乗せてもらおうと声を掛けると

「あ、すいません。これから再調整するので今回のテスト飛行は終わりです」

と言われた。楽しみにしてた分俺の心にそこそこのダメージが入った。正確には前世のちよつとした嫌な記憶が蘇った。

しつかなんで嫌な事つてのは記憶に残り続けるんだろうな？

ちよつとした切っ掛けの度に思い出すの何とかならないだろうか…。まあいいや。

「……明日、また乗れる」

俺とチトセのやりとりを見ていたのか横からタバサが慰めの言葉を掛けてきてくれた。態度や表情には出さないようにしていたはずなのだが…。俺が暗に別に気にしてない似的な返答したら悲しそうな雰囲気を出していたと言うような事をさらに言い返された。く、少し恥ずかしい。

リオンSide

僕らが学院に帰った翌日。ゲルマニアでおこなわれるアンリエツタの結婚式参列のためルイズと僕は朝靄の掛かる中、学院の玄関先にて王宮からの馬車を待っていた。

「しかしまさか、帰ってきた次の日がゲルマニアへと向かう予定になつていたとは驚きだ。何かしらのトラブルで帰ってこれなかったらどうするつもりだったんだ？」

「うう。しよ、しようがないじゃない。忘れてたんだから…」

式は1週間後なのだがここからの移動に3日。さらに向こうに着いてから式前に行われる簡易な社交会の催しや他の細かい準備などをするため王宮から今日の朝に馬車を寄こしてくる予定らしい。

昨夜、僕が祈禱書を前にうんうん唸つて詔みことりの言葉が全くできてい

ないルイズに呆れながら式の日まで間に合うのか?と聞いたら、ルイズは少し思案した後に顔を青くして目を泳がせながら明日の早朝に迎えが来ると恐々と呟いた。

「はあ、まったく。お前はいつもいつも後先を考えず感情だけで動くからこんなことになるんだ。大体、詔が1節も出来ていないと言うのはどういうことなんだ? あの旅行中に完成させると言ったのはどこ…」

「あーッ! うるさいうるさいうるさーい! 分かってるわよッ。私が悪いって!! でも考えても考えても良い言葉が浮かばないんだもん! しょうがないじゃないのよッ!!」

「ええい、喧やかましい。それにしょうがないなど…言い訳にしても酷いぞ」

「ぐぬぬ…」

ルイズが悔しそうに僕を睨みつけるが実際悪いのはルイズであり、本人も分かっているらしいのでこれ以上噛みついては来ず、祈祷書を開き顔を隠すように埋めた。

そして同時にブツブツと祈祷書越しに僕に対する文句が漏れてきた。どうやら本人は聞こえてないと思っっているようなのだがバツチリと聞こえている。はあ、まったく。

「ん?」

「…? どうかしたのリオン」

「いや、妙だ」

僕は静かな早朝の空気の中、馬車馬ばしやうまのとは明らかに違う蹄ひづめの駆ける音に異変を感じた。

靄で見え難くなっている学院の門を目を凝らして視ていると大きな影が現れ、すぐに馬で駆けてくる1人の兵士であることが分かった。

兵士は馬を厩舎へ預けるどころかどこかに手綱をつなげることもせずその場に放置して僕たちの横を一切見向きもせず走り抜けて学院へと入って行った。

「何かあったのかしら?」

「さあな。ただ厄介事なのは確かだろう」

「厄介……」

「ルイズ？ ……っておい!？」

駆けて行った兵士の様子と僕の言葉にルイズは不安そうな表情になり何事か考えるようなそぶりをした後、突如として駆けだした。何なんだいきなり？

「ごめんリオン。なんだか嫌な予感がするのッ」

「いきなり何を…？ おい待て」

制止を聞かずに遠ざかっていくルイズの背中に小さく悪態をつき、僕はルイズを追った。

やはりというかルイズは先ほど兵士を追っているつもりのようなのだが、兵士の姿はすでに見当たらない。

しかし、ルイズは迷いなくどんどん進んでいった。

「おいルイズ。さっきの兵士が何処に行ったのか分かるのか？」

「知らない！ でもあの兵士すごく慌ててたし、そんな火急の用だとすればオールド・オスマンの所に行くはず。だから行先は学院長室だと思う」

「…ほお」

僕の質問に淀み無く答えたルイズに目を見張った。いつもの感情的で突発的な行動ではあるものの、稀に見せるルイズの中の何かが発揮されている様だった。

そして僕らが学園長室の前まで到着すると中から小さく会話が聞こえ、ルイズは扉に張り付き聞き耳を立て始めた。僕も扉に近づき耳を澄ませる。

『我が軍の艦隊主力はすでに全滅、かき集めた兵力はわずか2千。未だ国内は戦の準備が整わず緊急に配備できる兵はそれが精一杯のようです。しかしそれらよりも完全に制空権を奪われたのが致命的です。敵軍は空から砲撃をくわえ我が軍を難なく蹴散らすでしょう』

『現在の戦況は？』

『敵の竜騎兵によって、タルブの村は炎で焼かれているそうす……。一部の村人達とわずかに残っている騎士達が反抗している様なので

すが……。同盟に基づき、ゲルマニアへ軍の派遣を要請しましたが、先陣が到着するのは3週間後とか……』

「そんな、シエスタの故郷が……」

「なるほど、見捨てたか」

「…えッ!？」

「ゲルマニアはトリステインを切り捨てたと言う事だ。

元々ゲルマニア側としてはトリステインを取り込んだ所で土地も財も微々たるもの。唯一の収穫としてはトリステイン王家の血、正確に言えば始祖の血統を取り定めることだ。が、それに対してレコンキスタとの明確な対立と言うデメリットを背負うにはメリットが小さいと判断されたんだらう。

奴らの戦力がどの程度が分からないが、こちらの艦隊が全滅した以上タルブの村は占領され、そこを拠点に一気に首都へと進軍されることになるだらう。そしてゲルマニアはこの国が落ちるのに…いや、首都が戦場になるのに3週間程度と踏んだってとこか」

「……ッ!」

僕が室内の会話の内容からこの先起こるであろう戦争の動向を簡単に話す。推察も粗く、実際の戦場や軍行では様々な事が起こるのだし、更に言えば政治を行っている貴族の者達の気紛れによつてはちよつとした小競り合いが大きな争いに、逆に長期にわたるだらう争いがたった数日でなんてこともある。

僕の話した事なんてまさに一番単純なものだ。しかしルイズはそんな内容でも胸に抱いている祈禱書を強く握りしめ顔を俯かせて震えていた。

さすがにこればかりはどうにもならない。フーケを捕まえに行ったりウエールズに手紙を渡しに行ったのとは全くの別物だ。個人でどうこう出来る物ではない。ルイズもそれを分かっている震えているのだらう。

僕はそう思い声を掛けようとしたら……

「ッ!? ルイズ!」

またもルイズは突如として走り出した。僕はすぐさまルイズを追

いかける。はつきり言つて嫌な予感しかしない。

ルイズは一旦庭へと出るとそのまま別の建物へと向かつて行く。あそこは確か……やはりそう言う事か。

僕はルイズが何をしようとしているのかを確信し、ルイズの腕を掴み止まらせる。

「ちよ、リオン離して！」

「ルイズ、タルブの村に行くつもりかッ」

「そうよッ！ 決まってるでしょ！ 天空の虹翼ならあつという間に行けるわッ」

「行つてどうするつもりだ。それ以前にあんな目立つ物で向かつたら瞬く間に撃墜されるだけだぞ」

「どうするもなにも助けに行くのよ！ それにアレは竜よりも速く飛べるんでしょ!?!」

「そんなのは噂だろ。それに本当だとしてもそれを自在に操れるのか？ 大体敵の艦隊はどうする！」

「そんなの……どうにかするわよ！」

ルイズの言葉に僕は大きいため息をついた。言つてることが無茶苦茶だ。

「ルイズお前は……」

「なんですか朝から〜？ うるさいですよ〜」

「チトセ？」

僕がさらに言いつのろうとしたら昨日レアバードを格納した古ぼけた建物からチトセがあくびをしながら出てきた。

「で、どうかしたんですか？」

「チトセお願いがあるの！」

ルイズはこれ幸いにとチトセの奴にタルブの村のことや先ほど学院長室で聞いた事を説明し始めた。まずいな、こいつのことだから確実にルイズに協力するだろう。チトセは話を聞き終えてうんうんと頷くと

「ルイズさん素晴らしいです！ 平和のため人々の為に命を散らそうと言うんですね！」

「えっ？ い、命を!？」

「分かりました。任せてください。本来はきちんと安全を確認した上でリミッターを解除し色々取り付けようと思いましたがルイズさんの為です。安全なんて二の次で取り付けます。例え空中で分解爆散するようなことになろうとも！」

「爆ッ!? ええッ!!」

「待っていてください! 今すぐパパッとシユバッとやっちゃいますね!」

「ちよ、待ってチトセ! 待ってー!」

一方的に話し終えたチトセが反転建物内に入って行き、そしてルイズの叫びはむなしく響くだけだった。

「……ど、どうしようリオン」

「自業自得だ」

先ほどまでの威勢のよさは何処へやら。ギギギと言う音が聞こえそうなほどの動きで僕を見るが一言で切って捨ててやった。

虚無の魔法

ルイズSide

「ちよつとリオン。これ大丈夫？」

「知らん。チトセを信じて行くしかないだろ」

晴れ渡った空の中、リオンは天空の虹翼の操縦を誤らないように注意し飛ばしながら私の恐々こわこわと呟いた言葉にぶつきらぼうに言い返してくる。

あの後、本当にパツと天空の虹翼の発進準備を済ませたチトセによって、私とリオンは戦火に見舞われているタルブの村へと向かう事になったわけだけど……

「……リオン、やっぱり怒ってる？」

「いつもの事だ。今更文句を言うつもりはない」

と、妙にリオンがピリピリしてはつきり言ってる居心地が悪い。いや、原因は私だっつのは分かっている。

そりゃあ、友人のシエスタの故郷が焼かれて、しかもこのままだとトリステインが侵略されちゃうって聞いたら居ても立っても居られなくなり無茶なことしようとしたし。

しかもそのせいで今現在、命の危機と言っても過言じゃない状態で移動してる訳だし………。

「……ごめん、リオン」

「謝るぐらいなら感情で行動する癖を直せ」

「……ぐう」

ぐうの音も出なかった。そりゃあ昔から感情的になると突拍子もない事をする、よく説教され続けたにも関わらず今でもこの有様である。

って言うか母様と姉様だつて私と似たり寄ったりじゃないッ！

大体そのせいで姉様つてば何度も何度もお見合いを………

「……ッ!？」

「どうした？」

「えッ、な、なんでもないわ」

急に大きく震えた私をリオンが怪訝な目で見てきたけど私は愛想笑いをして大丈夫と伝えた。：うん大丈夫なはず。突然背筋に冷たいものを入れられたかのような、何か得体のしれないうすら寒さを感じたけど…まさかね？

「……ルイズ、振り落とされないようにしっかり掴まっておけ」

「え？」

「敵だ」

リオンがそう言った瞬間、私たちの真横を巨大な炎の塊が通り過ぎた。

「あひゃッ！ わッ!? にぎやーッ!!」

私は突然の熱さと驚きで反射的にリオンに抱き着くように掴まるやいなや、リオンは天空の虹翼をおもいつきり上昇させた。と、同時に先ほど飛んできた炎と同じものが何発も私たちの真後ろを通り過ぎる。

こ、怖いッ!!! あんなのに当たったら死んじゃうって!!

「リ、リオンッ！ 来てる来てる!! 早く何とかしなさいよッ!」

「うるさいッ！ 耳元で騒ぐなッ」

リオンは後ろから迫ってくる2人の竜騎士を振り向き横目で見るや、急激に天空の虹翼を加速させて竜騎士達から距離を取ったと思ったら反転して竜騎士達へと突撃するように向かっていく。

「ちよつとリオン！ 何してんのッ!」

「……………」

リオンは私の言葉を無視したまま今にもブレスを放とうとしている竜騎士達へとなんの躊躇ためらいも無く突き進み、そして……

「…ッウインドスラツツシュ!」

リオンが叫ぶと今まさにブレスを吐こうとしていた竜の口が裂けて爆発を起こし墜落していった。

今のって、リオンの世界の魔法なの？

「すごい……」

「ルイズ、呆けてないでチトセから預かったコレの操作マニュアルを取ってくれ。今みたいな方法はそう何度も成功するもんじゃない。

「コレの武装も使う必要がある」

「ま、まにゆあ？ …あ、あの本ね。 ちよつと待って」

私は出発直前に渡された奇妙な形の本を取り出しリオンに渡した。そして一息と言うほどではないけれども、少し落ち着いた私は初めて周辺の様子に目を向ける。綺麗だった丘や小川は竜のブレスや敵の魔法のせいで荒れ果てており、畑や果樹園の作物は無茶苦茶。民家など建物も燃えていたり壊れていたり酷い有様だった。

村人達は何処にも居らず、代わりに敵兵やオークにオーガと言った亜人たちが我が物顔で闊歩していた。

あいつら、なんて酷い事をツ！ 私が下の様子に憤っていると、
「……チツ」

と、突然リオンからこれまでないぐらいの不機嫌さがこもった舌打ちが聞こえてきた。 リオンも怒ってる。そうよね、こんな良い村を無茶苦茶にされたんだもの。怒って同然よね。

私はそう思っただけでリオンを見つめると彼の視線が下の村ではなく手元の本に向いて、しかもそれを忌々しそうに睨んでいるのに気づいた。 ……ん？

「り、リオン？ ……どうしたの？」

私は恐る恐る尋ねるとリオンは手元の本…チトセから預かった本を彼にしては乱暴な手つきで返してきた。

さすがの私もそんなリオンの態度を不審に思い返された本を開いてみた。

「………え？」

本を開いて私は目が点になった。だってなんて書いてあるのか全く読めないんだもの。

こんな文字今まで見たこと無いし、じゃありオンの世界の文字？とも思っただけで、ならリオンがあんな表情で突き返してくるはずも無い訳だから……。

「あのバカの居た世界の文字なんだろう。まったく、こんな状況でやらかしてくれたものだな」

私は何も言えなかった。確かにこんな状況でも無ければちよつと

した失敗で許されるが、残念ながら今は冗談では済まない状態なのだ。チ〜ト〜セ〜ツ!?

「あの娘つてばなんてうっかりをツ!!」

「言つててもしょうがない。幸い絵による説明も付いていた。そこから推測して使う」

「大丈夫なのツ?」

「迷つてる暇はないツ。また来る。振り落とされるな、助けられる余裕はないからな」

リオンは言うや、天空の虹翼の速さを上げた。

ワルドSide

「ワルド様、奇妙な怪鳥がこちらに向かつて来ているとのこと報告がツ! すでに何騎もの竜騎士達が落とされているようです」

僕は部下の持つてきた急報に眉を寄せた。ほぼ占領を完了したと言つても過言ではない状況の中、しかもこちらの竜騎士達は一部とはいえ空戦に慣れている元アルビオン軍の騎士達だ。そう簡単に如何こう出来るようなものでもない。

大体、たかが怪鳥如きに竜騎士が後れを取るなどあり得ない。……トリストイン軍の新兵器か? いや、そんな話は聞いたことが無い。

「敵の数とその怪鳥の特徴は?」

「報告によると怪鳥は1匹で虹のような羽が生えており、大きさは小柄。そしてその背には人が2人乗っていると……」

人が2人で怪鳥は1匹だけだ?! それこそあり得ない。竜よりも速く飛とぶ怪鳥など聞いたことが無いし、しかもその背には人間が2人乗っていると言うのなら尚更だ。………ん? 2人?

と、僕は部下の報告を聞きながら、ふとニューカッスル城で不覚を取らされたあの2人の事が頭をよぎった。

「……まさか、」

「どうなされました?」

「怪鳥の乗つていると言う2人組の特徴は分かるか?」

「はッ。黒とピンクの髪色をした男女であるということしか…」

「…ッ。なるほど、それで十分だ！」

ニイと口端が歪む。

本来ならそんな表情を戦いの最中に、しかも部下に見せるような愚行は控えるべきなのだがその報告を聞いた僕はそんな事はお構いなしに感情を表に出してしまった。

「…た、隊長？」

「周辺に出した巡回の竜騎士達を呼び戻して各艦の護衛に集中させろ。怪鳥の方には私が行くッ！」

「へ？ お1人でですかッ!？」

「隊の指揮は任せる」

僕は部下の騎士に言い放つと同時に竜を手繰り、怪鳥が来たと言う方角へと向かう。

待っているリオンくん！ あの時の礼、きっちり返してくれる！

ルイズSide

「デルタレイッ！」

「ぎゃあッ!!」

リオンが天空の虹翼を巧みに操って敵の真上から降下し、魔法を竜騎士に撃ち込んだ。リオンが放った3つの光の弾の内2つは竜の翼に当たり、残りの1つは乗っている騎士の足に当たって貫いた。

そして竜と敵騎士は貫かれた衝撃と痛みによって大きくバランスを崩し、騎士は悲鳴を上げ竜から振り落とされて竜はふらつき下降しながら逃げて行った。

「…………ふう」

リオンは厳しい目つきで周囲を見渡して新しい敵が近づいてきていないか確認した後、小さく一息ついた。

「や、やるじゃないリオンッ。すごいわ!! 元とは言えアルビオンの竜騎士達を何騎も倒すなんて！ この調子であの戦艦も…」

「そんなこと出来るわけないだろ。敵の対処が出来ていたのも一度に

襲って来ていたのが2く3騎だったからだ。あんなところに突っ込
んだら袋叩きに合うだけだ」

「そ、それならチトセの武器使えばいいじゃない。ほら、『びーむ』つ
てやつツ。光がまつすぐ飛んで一瞬で敵を焼き払ったの」

私は2度目の襲撃の時にリオンが試しにと使った武器の威力を思
い出しながら言った。

向かってきた3騎の敵を一瞬にして燃え尽きた薪まきみたいにし
ちやつた光はすごかった。まあただその光の飛ぶ距離が以外に長く
て地上にまで光が届き、届いた場所の地面がドロドロに溶けて真っ赤
になってたけど…。

でもそれだけ遠く、尚且つあんな威力なら戦艦ぐらい楽々落とせる
わよ。と私はリオンに言ってみたが、

「確かに上手くすれば数隻は落とせるだろうがその後はどうする。そ
れ以前にそこまで近づけることが出来るかどうか…ツ!!?」

「え? ツひやわー!」

と、話していると突然リオンが天空の虹翼を大きく傾けた。いきな
りの事で振り落とされそうになってしまいそうになるもリオンに抱
き付き何とかなった。

いきなり何してるのよツ! 落ちるとこだったでしょツ!! と、私
が文句を言おうとしたら

「ほう、今のを避けるか! さすがだよりオンくん!」

後方から風竜に乗ったワルドが笑顔で叫んできた。ただ、笑顔と
言っても朗らかにとか微笑むようなとかではなく、口角を吊り上げ目
を見開いた、獰猛な獣が狩りを楽しむような怖い笑顔だった。

「なツ!? ワ、ワルド!」

「チツ。面倒な奴が」

リオンはワルドの姿を確認すると忌々しそうにつぶやき、ワルドか
ら距離を取ろうと加速した。

「おやおや、折角の再開だと言うのにつれないじゃないか。まあそ
の程度で私から逃げられるとは思っては無いだろ?」

しかしワルドは今までの竜騎士たちとは違いあつと言う間に距離

を詰めて私たちの真横に並びそして…、

「エア・スピアー！」

「くッ！」

魔法を放ってくる。ワルドの放った空気の槍は真っ直ぐにリオンの頭へと向かってきたけど、リオンはそれを体を反らしてギリギリで避けた。

「ウインドスラッシュユ！」

「はっ！」

リオンは攻撃を避けた後、今度はワルドの死角に回るように天空の虹翼を移動させて魔法を放った。が、ワルドはまるで攻撃が見えてくるかのようにリオンの魔法を避けた。

「私の風竜は優秀でね、わずかな空気の変化にとっても敏感なんだ。残念だがその攻撃は効かんよ」

「チッ。ならば…：デルタレイツ」

「おいおい、その程度の魔法が当たるとでも思っているのかい？」

リオンはさらに別の魔法を撃つけどワルドは軽口を言いながら華麗に3つの光弾を避けてこちらに突っ込んで来た。

リオンはワルドの突撃を回避するも

「ライトニング！」

「ぐあッ！」

「きやあああッ!!」

ワルドはすれ違いざまの一瞬を狙い攻撃を仕掛けてきた。

「ちよ、ちよつとリオン！ 大丈夫なの!？」

「大丈夫なわけが無いだろうッ。ああも動かれてはビーム砲も当てることはできない」

「そんなッ!? どうするのよッ。あッ！ そういえばもう一つチトセの付けた武器あったじゃない。あれは…」

「残念だがダメだ。すでに試してみたが動かなかった」

私のもう一つの先端が丸い円筒の形をした棒がいくつも入っていた箱の事を言うと、リオンは苦虫を潰したような表情で答えた。

う、動かなかったって…：そんなあ。

私が顔を青くしている間にもワールドは近づいては魔法を放ち離れて、と言う戦法を使い攻撃をしてきた。

それに対してリオンも巧く攻撃を防ぎ避け、反撃にと魔法を放つもワールドには全然当たらなかった。

「さて、そろそろ終わりにさせてもらおう」

何度目かになろうかとう攻防の中、ワールドは私たちの背後を取り止めを刺そうと今までとは違い長いスペルを唱え始めた。

「……ルイズ、少し考えがある。協力してもらおうぞ」

と、リオンが私に向かって唐突に話しかけてきた。私が何か言い返す前にリオンはこれからしようとするのを早口で説明してきた。

「えッ!? む、無茶よそんなの! 失敗したら死んじゃうじゃない!!」
「このまま何もせず奴の攻撃を受けても同じだ。無茶でも無理でもやるしかない」

その内容はと言うと普段のリオンからは考えられないほどの無茶なものだった。でもだからと言って他にいい考えが浮かぶ訳でも無い。

私は上手くいくのかすごく不安だったけど、やらなければワールドによって殺されてしまうわけだし……

「う、うう……。もうッ! やればいいんでしょ。やればッ! やつてやろうじゃない! ヴァリエールなめんじやないわよ!!」

私は覚悟を決めてリオンに返事をした。

リオンは私の返事を聞くや否や天空の虹翼を加速させ一気に上昇を始める。

「まだ抵抗するのかい? でも無駄だよ。カッター・トルネードッ!」
ワールドはやはりと言うか私たちを逃がす気は無く、唱えていた魔法を放ってきた。

『カッター・トルネード』は真空の刃で出来た竜巻であれに当たったらと思うとゾッとする。

昔、母様の機嫌を損ねた父様があの魔法でズタボロになりながら宙を舞っているのを見たことがある。母様は手加減していると笑顔で言っていたけど、今思えばアレはじっくりといたぶるつもりで手加減

をしていたんだと、私は思った。

「ルイズツ、ボケつとするな！ 今だツ!!」

「ツ!? れ、錬金ツ!!」

私は迫りくる脅威に少しの現実逃避をするもリオンの言葉に意識を戻し、慌てて天空の虹翼と動かなかつた箱の武器をつないでいる金具に魔法を掛けた。

ボンツ!と錬金をした私の掛けた魔法は相も変わらず爆発と言う失敗が起こるが、その爆発で金具が壊れ箱は天空の虹翼から後ろに落ちて行った。

落ちて行った箱はカッタートルネードに当たると真空の刃で切り裂かれて、

ドゴオオオオオオオオオンツ!!!!!!

と目も眩むような光と火竜のプレスを何倍も強力にしたような熱、そして母様のエア・ハンマーを想像させるような衝撃が起きた。

「なんだとツ!!?」

「きやあああツ!!」

突然起きた爆発にワルドは驚愕の表情になり、私はリオンに聞いていたとは言え思っていた以上の爆発に涙目になりながら天空の虹翼のバランスを必死で取った。

「くそツ! よくもやってくれたも…ツ!!?」

爆発の煙が晴れるとカッタートルネードは消えうせ、代わりに忌々しそうに毒つくワルドが目の前にいた。

ワルドは油断していたのか反転して突撃して来た私に再度驚くも、ギリギリで竜を反らしバランスを崩しながらも避けた。

「なんだ? あれだけの事をしてにおいて最後はこの体たらくか」

ワルドは私の突撃に対して落胆したように吐き捨てるが私はそんなワルドの事を無視してそのまま降下しつづける。

ワルドはそんな私の行動に怪訝な表情をしていたが次の瞬間、天空の虹翼に私だけ乗っていることに目を見開き、

「まさかツ!?!」

「はあああツ!」

ワールドが振り返った、と同時に先の大爆発の時に天空の虹翼から飛び上がったリオオンが落下しながらワールドを2本の剣で切り裂きつつ風竜の上へと着地する。

「がアアッ！ き、貴様ああッ!!」

「終わりだ！ 千裂せんれつこうせん虚光閃ッ」

そしてリオオンは着地の屈んだ姿勢から上体を起こす勢いを使ってワールドを短剣で宙に打ち上げると目にも止まらぬ速さで幾度も突きを放ち、ワールドはその攻撃を防ぐことも出来ず全てを突きを受け意識を失い、体中から血をまき散らしながら風竜の上から落下していった。

すごいッ！ 本当にワールドを倒せちゃったッ!! 私は急降下していた天空の虹翼の体勢をなんとか戻してリオオンが乗っている風竜の元へと上昇させつつ、この戦いの結果に目を輝かせて心から喜んだ。
「…むっ？」

「あッリオオン！ って、え？ ちょっと!？」

すると風竜が主人であるワールドが倒され、落下していくのを目端にとらえたのか、背に乗っているリオオンを振り落とそうと体をよじり始めた。

私はリオオンが振り落とされてしまうと思い急いで風竜に近づこうとしたら、リオオンはいきなりこちらに向かって飛び降りたのだ。

「ふッ！」

「きゃあッ!? リ、リオンッ、なんで飛び降りるのよ！ ビックリしたじゃないのッ」

「別にたいした高さではなかったからな。この方が手っ取り早い」

「危ないって言ってるの！ 落ちたらどうするのよ」

「ボクがそんなヘマするわけないだろ」

なんて、リオオンはすまし顔で何でもないように言い返してきた。せつかく人が心配してやってるって言うのにこの態度ッ！ なんなのよ！ まったくもう。

私が心の中で憤っていると、私と操縦が変わったリオオンは天空の虹翼を近くの森の中へと向かわせ始めた。

「え？ ちょっとリオンどこ行くつもりよ」

「どこも何も一旦森の中に着陸する。ワルドとの戦闘でこの機体のダメージが心配なものもあるが、なによりこれ以上飛んでいたところで何もできないからな」

と、リオンは暗に戦艦を落そうなんて馬鹿なことを言うなど私に釘を刺してきた。

私だって無茶な事だつてのは分かっているつもりだけど、でもアレをどうにかしなきゃタルブの村どころかトリスティンが無くなっちゃうかもしれないと思うと、無茶でも無謀でもどうにかしなくちゃと思ってしまう。

私はなんでこんなにも無力なんだろう。

いつもいつも気持ちばかりが先立ってばかりで、実際何かを解決できる力が無い。

フーケを捕まえる時だつてリオンやキュルケ達に助けられて…、アルビオンでも私は震えてるばかりで戦えもしなかった。

今回だつてそうだ。自分の我儘で突っ走つてリオンに迷惑をかけている。

悔しい。なんで私は何もできないの!? 魔法だつて、いつも失敗の爆発で……。

いつそのこと爆発するんだつたらあの戦艦を木っ端微塵に出来るぐらいの爆発ぐらい起きなさいよ!

……なんて、いくら心の中で叫んだつてどうにかなるわけでもなく。私はこの何もできない自分に対しての悔しさや怒りをぐつと心にしまい込んだ。

「…? おいルイズ。なんだそれは?」

「え? 何つて…えッ!」

私が悲しみにくれて目を瞑り、リオンの背に顔を埋めっているとリオンが怪訝な声と表情を向けた。

私はその声に反応して顔を上げ、目を開くと体にかけていたバックの中が光っていた。

「ふえッ!? なに? き、祈祷書!? 始祖の祈祷書と水のルビーが

光ってる？」

私はバックの中に入れっぱなしにしてしまっていた祈祷書と水のルビーをおっかなびつくり取り出した。

祈祷書と指輪は淡く光を放っており、一体何が起こっているのか恐る恐るページを開いた。

なぜいきなりページを開くなどという事をしたのかは私自身分からないが、そうするべきなのだ、私は無意識のうちに行動し始めた。「ルイズ？」

リオンが心配そうに言葉を掛けてきたが私は祈祷書から目を放さずにいた。

祈祷書を開くと白紙だったはずのページに文字が現れ始めた。私はそのことに目を開き驚くも心は冷静であり、現れた『この書開きし者、我が理想と目標を受け継ぎし者なり。選ばれし読み手であれば四の系統の指輪をはめよ。さればこの書は開かれん』という文章に従い一緒に光っていた水のルビーを疑問も無くはめた。

すると次のページに新たな文章が現れ、私はそれを食い入るように読み始める。書いてある文字はハルゲギニアの古代語だったけどこの程度であれば私は難なく読む事が出来る。

「虚無の系統……。嘘……。伝説のツ!? 伝説の虚無の系統じゃない！」私は現れた文章を読みながらその内容に驚き眩く。それはあの伝説の『虚無の系統』に関することだった。

本物の始祖の祈祷書には始祖ブリミル自身が虚無の事を書き記している、とは有名な話であるが実際その記録を読んだ者はおらず、もはや本物の祈祷書は失われていると噂も立つほどだったが……。

なるほど、こういう事ならば誰も分からないはずだ。だってこれは担い手しか読めないんだから。

「……………ねえリオン。お願いがあるの」「ルイズ？」

それから、リオンが森の中へと天空の虹翼を着陸させても私は地面に降りずにそのまま祈祷書を読み続け、そしてある程度読みきると天空の虹翼の状態を確認しているリオンへと声を掛けた。

「私を……、私をあつた戦艦の所まで連れて行って！」

「何を言っているんだ？ そんな事をしてどうする。言っただろ？」

「いくらこの武器が強力でもあんな敵軍のど真ん中に入っては戦艦に攻撃をすることもままならないと」

「分かつてる。だから連れて行ってくれるだけでいいの」

「……なにが書いてあつた？」

「虚無の魔法こと」

「……あの伝説と言われている系統の魔法か。それは信用できる物なのか？ 失敗すれば……」

「大丈夫ッ！ 理由はうまく説明できないけど……。でも絶対大丈夫ッ」

「……はあ、やれやれだ。まったく。そう自信満々で言うからには失敗は許されないからな」

「……ッ！ うん!!」

私の言葉にリオンはため息を吐いて肩を竦めるも、気持ちが届いたのか天空の虹翼に乗り込み、ゆつくりと上昇させ始めた。

「行くぞルイズ。準備はいいか？」

「うん、お願い」

返事をするとりオンは戦艦が浮かんでいる場所へと天空の虹翼を飛ばした。

私はお願いした場所に向かってもらう中、目を閉じ深呼吸を一つして杖を握り掲げる。

そして、

『エルオー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ』

小さく、けれど力強く呪文を紡ぎ始める。

『オス・スーヌ・ウリュ・ル・ラド』

ある程度戦艦に近づくと向こうも私たちに気づき砲撃を仕掛けてきたり、竜騎士達が攻撃しに向かってくるが私はそんな事にせずさらに呪文を唱え続けた。

怖いとか不安は無かった。だってリオンが守ってくれるから。現にリオンは砲撃や竜のブレスなんかを華麗に避けてどんどん戦艦へ

と近づいていく。

『ベオーズス・ユル・スヴェエル・カノ・オシエラ』

私の中で大きな何か生まれ、うねり、行き場求めて回転していく。魔法を使う際に今まで感じていたフワフワ感は無く、むしろ自分の中にきつちりと嵌るような安定感がある。

そういえば誰かが言っていた。自分の系統を唱えると他の系統より大きな力を感じるって…。

『ジエラ・イサ・ウンジュー・ハガル・ベオークン・イル…！』

そして、私がこの長い長い呪文を唱え終ると同時にリオンはあの砲撃やブレスに魔法が飛び交う中を潜り抜けて、旗艦であるレキシトン号を中心にした艦隊を一望できる場所へとたどり着いた。

私は呪文が完成した瞬間、この魔法がどういうものでどれほどの威力を擁するものか理解する。これは目に映る全てを巻き込むもの。そして選ぶ魔法。

殺すか、殺さないか。

破壊すべきは？ 失くすものは？

私は己の中にある気持ちに従い杖を振り下し、この魔法の名を叫ぶ。

祈祷書に記したブリミル曰く、虚無の力の初歩の初歩…

『「エクスプロージョンツ!!」』

次の瞬間、目の前が一瞬にして光に覆われた。

「これはッ!？」

「これが虚無の魔法…ッ!？」

光は1秒にも満たない程度で収まり、私とリオンは目を開ける。

するとそこには全ての戦艦が火を上げて墜落し、戦艦を守っていた竜騎士たちと竜はまるで力が抜けてしまったかのようにどんどん降下していく姿があった。

外伝？ アツシユと老兵と

アツシユSide

「このコボルドの掃討の依頼なんだけど…。アツシユ、あなたが行って来てくれないかしら」

「あ？」

文字の読み書きを覚える為、メイド達に用意してもらった簡単な本の書き取りをしていると別の机で書類整理をやらせていたイザベラがそんな事を言ってきた。

「いやね、丁度シャルロットには翼人共に関する依頼を飛ばしちやつたばかりでね。他の騎士達も…ほら例のアルビオンとの戦争に備えてるのかあちこち飛ばされちやつてるのよ」

俺の怪訝な表情を察したのかイザベラは俺が何か言う前に早口で説明し始めた。

まあ、別にこれと言っておかしな事は言っていないか。このバカ女は最近じゃ何かしらにつけて俺を城から遠ざけて仕事や勉強をサボろうとしやがるからな。

「それで、あたしの方にくる依頼を頼めて、尚且つ腕が立つのつてアツシユぐらいしかいないわけ。と言う訳で、お願いできるかしら」

「…：…わかった。場所はどこだ？」

「ここから南の山地の洞窟に住み着いてるみたいなのよ。詳しい事はアンブランって村にいるロドバルド男爵夫人に聞いて。それでこれが村までの地図よ。さて、じゃあこつちは馬の準備をさせとくからアツシユも支度してちょうだい」

イザベラからの説明に俺は再度分かったと返し、自身の部屋へと身支度を整えに向かった。

しかし妙にこの依頼への前準備が良すぎるな…。依頼と俺が出向く理由はきちんとしたもんだが、やはり俺の目から逃れてサボろうとする魂胆もあるようだな。

…：…準備ついでにいくつか課題を残していくか。

イザベラSide

「うふふふ。行ったわね」

あたしは見送りと称してアツシユが馬で出て行く姿を見届けるとにんまりと笑顔になった。つておつと、姫とあろう者がはしたない顔をしてしまったわ。うふふふふ。

「さて…」

あたしは城内へと踵を返すと小走り気味に私室へと移動し始めた。本当はスキップでもしたい気分だったがさすがにハイヒールでは危ないので自重した。

「あんた達、今すぐここを片付けてお茶とお菓子の準備をしな！ そうさね、茶葉はタルブの村の物を菓子はフルーツのパイでも用意してもらおうかね。そら早くおし！」

あたしは怒気を孕んだ声でメイド共に指示を出した。メイド達は私の声を聞くなり一瞬何とも言えない表情になったあと苦笑いになっていそいそと掃除とお茶の準備をし始めた。

何故そんな表情をしたのかと怪訝に思ったが部屋にある姿見で自分の顔を見て理由が分かった。

そりやあこんな緩んだ笑顔でまるで怒っているような声を出せば不思議に思うわよね。何度か表情を引き締めようとするも直ぐに頬が緩む。

あのスパルタ男が居ないってだけでここまで心晴れやかになるなんて。

あ、別にアツシユが嫌いって訳じゃないのよ。むしろカツコいいし、姫だからって遠慮せずに会話してくれるし、魔法が下手とかお父様の娘だからって言う偏見の眼を向けてこないし、どちらかと言えば………つてそうじゃなくてッ！

ただね、ちよつと厳しいと言うか真面目過ぎる感じがあると言うかね…。もう少し気楽で優しくしてくれても罰はちは当たらないと思うわけさね。

「そこらへんはアツシユが帰ってきたらそれとなく言ってみようかし

らね」

どうしてかしら、眉間にしわを寄せて『あゝ？』って睨んでくるイメージしかわかない上にそこから説教される未来しか浮かんでこないわ。

これはきつと疲れているせいさね。うん、きつとそうに違いない。あたしはメイドが淹れてくれた紅茶を一口含みほうと一息つく。うん、さすがタルブ産だね。特にこの時期のは一段と美味しいわ。

「あ、あのイザベラ様」

と、あたしがホツコリしているとメイドの一人がおずおずと、いやどちらかと言えば気まずそうな態度であたしに声を掛けてきた。

なんだい、せつかくの幸せな時間を邪魔して。ま、今のあたしは機嫌がいいから全然かまわないけどね。

「なんだい？」

「あの、えっと……その」

「何か用があるんだろ？ うだうだしてないで早く言いな」

「す、すいません！ こ、これッ。そのアツシユ様からイザベラ様に……と……」

あたしの言葉にメイドは慌ててアツシユから預かったと言う手紙を渡してきた。

……どうしよう受け取りたくない。

あたしは手紙を凝視した後メイドの顔を見る。するとメイドは目を反らした。

メイドとしてあるまじき行動で昔のあたしならそれを理由に色々とやかしていたが今はそんなことしない。王族としてそんな低俗で野蛮な行動なんてしないわ。このぐらいのことおおらかな心で許すものさ。

後でアツシユに怒られるのも嫌だし……。

「イ、イザベラ様？」

「……くっ」

あたしは苦虫を噛み潰したような気持ちで渋々手紙を受け取り、開いて読む。

内容は無骨で簡潔。まったく、淑女レディに読ませるものとして全くなくてないじゃないのさ。

なんて現実逃避を試みるも手紙の内容が変わる訳でも無く、あたしはチラリと扉近くにいるアツシユの世話係にしているメイドに目を向けた。

メイドはあたしの視線に気づくと苦笑いで一旦部屋を出てるとすぐさま戻ってきた。大量の紙の束を抱えて。

「ううう…」

『課題を用意しておく。俺が戻るまでに終わらせる』

確かにアツシユが何も用意無く出かけるとは思ってなかったけどさ、アレは多すぎじゃないかね？

幸せな時間つてのはあつという間に終わっちゃうものなんだね…。

あたしは涙を目尻に溜めて残ったパイを咀嚼するのだった。…パイ美味しいわあ。

アツシユ Side

「この村か」

城を出てから数日、最後に寄った街から1日半かけて俺はアンブランの村へとたどり着いた。

村はまさに陸の孤島と言ってもいいほどで3方を山に囲まれた盆地のような場所に存在しており、徒歩であったならば3日ほどの時間が掛かっただろう。

「栄えているな」

俺は村の入り口で馬を下り、依頼主であるロドバルド男爵夫人の屋敷へと向かいながら村の様子を観察する。

村の人々は騎士と言うのが珍しいのか子供は目を輝かせて近寄ってきたり、大人も笑顔で挨拶をしてきたりと少し前にコボルドの襲撃を受けたようには見えなかった。

「ふむ」

誰もが笑顔で、本当に争いとは無縁と言うような…。村の様子はま

さに平和であり何も問題が起きていない様子だった。

「こりゃあぁッ!! そのお主ッ。さつきから辺りをキョロキョロと！」

そんな平和という言葉を体現したかのような村の中、場違いなほどの怒声を出しながら古めかしい甲冑を身に纏い、大振りな槍を担いだ老人が後方から早足で近づいてきた。

「怪しい奴めッ。いったい何者か! 名を名乗れい!!」

そして老人は槍の間合いだろう距離まで近づくと担いでいた槍の刃先を俺へと向けてきた。

なんだこの爺さんは？

「ユルバンさん、この方は貴族様ですよ。おそらく、お城からいらした騎士様でしょう」

「むむ……。よくよく見ればマントを付けているな。だが、貴族様といえど、儂わしの許可なくしてこのアンブランに立ち入ることは許されぬ！」

近くにいた村人のが呆れたように窘めるもユルバンと呼ばれた老人はそれでもと、目を見開きまだ俺に槍を突き付け続けた。

「騎士殿、無礼を許されよ。儂はユルバンと申すもの。恐れ多くもロドバルド男爵夫人よりこの槍を与えられ、このアンブラン村の門番兼警士として治安を預かっておる。儂の言葉は男爵夫人の言葉と心得られよ。さて、神妙に名乗られ、当村にやってきた理由を述べていただきたい」

そして爺さんはそのまま一気に口上を捲し立て、俺がこの村に来た理由を問いただしてくる。

門番兼警士か。そう言えば村の入り口に小さな小屋があったがこの爺さんの休憩所か。俺が村に着いた時に居なかつたのは丁度村の見廻りでもしていたつてところか。そして俺を見つけたと…。

しかし警士がこの爺さん1人つてのは……。いや、今は余計な事を言わずに名乗った方がいいな。

「アツシユだ。ここにはゴボルドの討伐の依頼で来た」

「…なんと申した？」

俺は引いていた馬を近くの柵へと繋げて屋敷の門をくぐった。

「ん？ 何か当家に何用ですか？」

「コボルドの討伐の依頼を受けた花壇騎士だ。ロドバルド男爵夫人へと取り次ぎを頼みたい」

「お城の騎士様でございましたか。無礼をしました。遠いところをありがとうございます。ささ、奥様がお待ちでございます。こちらへ」
太った男はどうかやらの屋敷の執事のように要件を伝えると恭しく夫人の元へと案内しはじめた。

「どういう事でございますかッ！」

執事の案内の元、夫人がいると言う書斎へと着くと扉越しにユルバンの爺さんの声が響いた。

「どうやら俺が来たと言う事に抗議をしているようだ。」

執事の男はその声を聞いて困った風な表情になりながらも扉を開けて書斎へと踏み入り、俺の事を夫人と思しき初老の女性へと伝えた。

「これはこれは騎士様。遠いところをご足労いただきありがとうございます。ございます」

「む、これは騎士殿。もしかしてお聞きになられましたか」

夫人は穏やかな表情で挨拶を、逆にオルバンの爺さんは険しい表情で俺に声を掛けてきた。

爺さんの言葉に俺が肯定をすると

「であれば、今聞かれたとおり、騎士様の手を煩わせるほどにことではありません。さつそく王都へお戻り願いたい」

「これユルバン。失礼ですよ」

爺さんの言葉に夫人が叱咤をするが爺さんは聞く耳を持たず、何度も何度も自分だけで十分だと言い張り続け、それに対し夫人もコボルド退治は俺に任せるべきだとお互いに譲らず、そして

「ユルバン。あなたは今より騎士様がコボルドを退治し終わるまで村からの外出を禁じます。これは命令です」

「なッ!? なんですとッ！ それは儂を討伐隊から外すと…」

「そうです。あなたには騎士様がコボルド退治している間村を守って

もらいます。いいですね」

「ぐぬぬ…」

口論の末、夫人はついに爺さんへの命令と言う形で爺さんの行動を制限し、そして爺さんも命令と言われてしまえば何も言えず悔しそうに首を振り俯いて書齋を出て行った。

「失礼を許してくださいね、悪い人ではないのだけれど……」

「ああ、分かっている。気にするな」

俺がそう返すと夫人は微笑みながらお礼を返してくる。

しかし、あの爺さんがきちんと命令を守るかどうか怪しい所だ。直ぐに動くと言う事は無いだろうが用心はしといた方がいいだろう。

その後は夫人から最近のコボルドの行動や住み着いている廃坑の所在やその数などの詳しい事を聞き、そして退治は明日の朝にする事に決まった。

「では、今日はこちらにお泊りになってください。お夕食の準備が出来ましたら及び致します」

夫人は言うど先ほどの執事を呼び客室へと案内するようにと命令し、俺を案内させた。

「ん？」

書齋からの移動中、ふと視線を感じそちらを振り向くとそこには廊下の曲がり角から俺の事をジッと見ている金髪の少女と目が合った。

外伝？ アツシユと老兵と少女と

アツシユSide

「それはお嬢様でございましょう」

部屋までの移動中、俺は先ほど目が合った少女について執事に聞くとそう返ってきた。

「お嬢様は昔から少々人見知りでございまして、特に最近ではほとんど屋敷から出ずに自室か書斎にこもりっぱなしで…。たまには表に出て日の光を浴びる事もした方がいいと提案しているのですが聞き入れてもらえなかったのですが……」

珍しく外から来たお客に興味を持たれたのでしょうか？ と執事の男は少し嬉しそうにしながら話した。

その後も、その娘が部屋から出たと言うのが嬉しいのか執事の男は笑顔を見せなくなっただの、ユルバン殿だけには心を許しているのだと、部屋に着くまでに色々と喋り続けた。

「…つと、アツシユ様ここでございます。部屋は自由にしてもらつて構いませんのでお寛ぎください。ご夕食の準備が整いましたらまた伺わせていただきます」

「ああ、分かった。それとすまねえが、門の所に繋いで来た馬の世話も頼む」

「はい、承知いたしました。では」

執事は一礼すると廊下を戻っていった。

俺は案内された部屋に入り、部屋の中央にある小さな椅子に座り一息つく。

「…娘ねえ」

俺は先ほど、と言うより部屋に入るまで感じていた視線の主である少女の事を思案する。とは言え、人見知りで屋敷に引き籠っていてユルバンの爺さんにしか懐いていないって事しか分からねえから推測しか立てられねえな。

俺は一旦考えを打ち切り、部屋に在った本を手に取り軽く流し見をする。ある程度の読み書きを覚えたとは言え地域や国によつては多

少の意味違いがあり、そう言った細かい所は未だに覚えきれていない。なのでこうして暇なときは本を読んで過ごすようにしている。

「アツシユ様。お食事の用意が出来ました」

本を読みながら暇を潰していると扉がノックされ夕食の準備がととのつた事を知らせに來た。

俺は返事をする本を戻し、部屋を出て執事の案内で食堂と思わしき場所へと向かった。

「どうぞ」

執事が椅子を引き俺は着席する。食卓には俺の他に夫人と先ほどの少女が座っていた。

「ああ、この子は私の娘でエドナと言います。エドナの方は…」

「ゴボルドを退治にきた奴でしょ」

エドナと言う名の少女は夫人の言葉を遮り、ぶつきらぼうに呟いた。

「エドナもう少し言葉を……。ってエドナ、どこ行くの？ まだ料理が…」

「もういい。美味しくないし」

「……はあ。あ、ごめんなさい。騎士様がいらしているから緊張しているのかしら。元々人見知りする娘なもので」

と、夫人は悲しそうにな表情を作りため息を吐いた。

俺は別にかまわんし気にはしないと夫人へと伝え、用意された料理へと手を付けた。

……なるほど。これは確かに。

「どうかなされました？」

俺の食事の手が止まっているのに気づいた夫人が怪訝に思い声を掛けてきたが俺は何でもないと食事を続けた。

「あの騎士様。ユルバンの事でお話が…」

食事をしていると夫人が手を止めて話しかけてきた。

内容はユルバン爺さんの事であり、今夜辺りに俺の部屋に來て討伐

任務に同行させて欲しいと頼みに来るはずだから断って欲しいと言う事だった。

「彼は何十年も私たちの為に尽くしてくれました。そんな彼にもしもの事があれば：私たちは、特にエドナにとつては…」

「安心しろ。言つちや悪いがあんな老いぼれを連れて行くほど俺は酔狂じゃねえ」

夫人は俺の言葉を聞くとうとう頭を下げお礼を言ってきた。

俺としてはお礼を言われるよう事を言つたつもりは無い、正直なところを話したただけなんだがな。

「それと、あの、厚かましいとは思うのですがついだにエドナの事も気にかけてくれませんか？ あ、無理に何かして欲しいと言う訳ではないんです。」

ただ、人見知りのあの娘がお客がいる食卓に来たと言う事自体珍しく、もしかしたら騎士様に興味が在るのかもしれない。ですので、もしですが話す機会があれば少しだけでいいので話し相手になっていただければと…」

「ああ、分かった」

俺が夫人の頼みを二つ返事で了承すると、これにも夫人はありがとうと微笑みながら頭を下げた。

その後、お互いに食事を終え、俺は食事の礼を言い部屋へと戻った。

「騎士殿、ユルバンです。少しお話よろしいですかな」

部屋に戻りしばらくして寝支度をしていたところにノックと共に爺さんが声を掛けてきた。

俺はいいぞと声を掛け返して部屋へと招き入れた。

ユルバンの服装は当たり前だが甲冑を脱いだ平服で、甲冑の上からでは分かり難かったが戦士を名乗っていただけあって年の割に体は引き締まっており、がっしりしていた…だが。

それでも所詮は年の割には、だ。教えてもらった廃坑までの道のりや、大量のコボルド相手には足手まといだ。

「お頼み申す。どうか明日、この儂めもコボルドの討伐に連れて行つてくだされ！」

「駄目だ。足手まといにしかならねえ」

「…ッ!? ……け、決してそんな事にな成りませぬ！ なにとぞ、なにとぞッ…」

「しつかけえッ！ 同行されても邪魔だつてつてんだ。大人しく言われたとおりに村を守ってろ」

「…ぐ、…お願い…申しあげる…」

なんだ？

俺はこの爺さんのあまりの必死さに違和感を覚えた。

「おい爺さん。なんでそこまでする。戦士を名乗ってる以上自分の力量がわからねえって訳じゃねーだろ」

「…：儂は、儂は昔ある失態を犯してしまったのです」

俺の疑問に爺さんは滔々^{とうとう}とこの村で起きた事を話し始めた。

今より10年前、今回の様に村がコボルドの群れに襲われたそう
だ。

当時、爺さんは今と同じで門番としてコボルドの群れの前に立ち向かったものの、多勢に無勢。背後からのこん棒による一撃を受けて昏倒してしまった。

そして目が覚めると爺さんは屋敷のベットの所で治療を受けていたのだと言う。

「幸い、ロドバルド男爵夫人様の魔法よってコボルドは追い払われ、犠牲者は一人も出ませんでした。…：がしかし、当時まだ幼かったエドナ様はその襲撃によって心を痛めてしまい、まるで何かに脅えるように屋敷から出ようとしなくなっていました」

全ては儂が不甲斐ないばかりにこんなことに。村を守るべき戦士の任を与えられながら、無様にも醜態をさらしてしまったのです」
なるほど。だからこんなに必死になってくるって訳か。

ユルバンは話している内に熱が入ってきたのかさらに語り続けた。

今回のコボルドの再来は神が与えてくれた機会だ、魔法の使えなくなった夫人への恩を返す時だなどを言い募った。

……ん？ 魔法が使えなくなった？ そんな事が……。いや、譜術もフオンスロツトが怪我なんかで閉じちまつて、使えなくなったり効果が弱くなったりする事もある訳だからな。全くないとは言いい切れねえか。

「ですから！ 今一度お頼み申し上げる！ なにとぞ儂もコボルドの討伐にッ」

「…わりいが、何度頼まれようともテメエを連れて行く気はねえ。いくらテメエが言い募ろうと足手まといっつゝ事にはかわりねえからな。なにより夫人と約束がある」

爺さんの思いは分かったが、それでも無理なものは無理だと断る。なにより生きていて欲しいと願われているのに死に行かせるわけにはいかない。

俺と同じようなバカなマネをさせる訳にはいかねえ。

「そう…ですか。…やはり、男爵夫人は儂を…役立たずと……」

爺さんは俺の言葉に顔を俯かせたまま何か小さく呟くと、背を丸めたまま夜分に失礼したと弱弱しい言葉と共に部屋を出て行った。

あのまま大人しくしてくれればいいが…。

「これ以上考えてもどうにかなる物でも無いか」

俺は考えを打ち切り、明日に備えて寝るために灯りを消そうと燭台に手を掛けようとするコンコンと小さなノックが響いた。

なんだ？ また誰か来たのか。

「誰だ」

俺は扉の向こうに居る相手に尋ねたが返事は無く、代わりもう一度小さくコンコンとノックをされた。

開けろってか。

俺が眉を顰めて、そう思っている間にまた小さくノックをされた。

俺は仕方なく手に持っていた燭台をテーブルに戻し、扉を開ける。

「遅い」

扉を開けるや否や、この屋敷の娘であるエドナが俺のことジト目で見上げながら文句を言ってきた。

「いきなり来て何言っつてやがっ……おいつ」

「何よ」

エドナは俺が文句を言い返す前に俺の横をすり抜け部屋の中へと入ってきやがった。

何なんだこいつは？

「いったい何の用だ。俺は明日に備えて寝てえんだ。ふざけに来たんならとつとと出でいけ」

「用があるから来たんじゃない。じやなきやあんたみたいな奴の所に来るはずないでしょ？」

「そうか。なら手短にな。大体、俺はお前は人見知りだって聞いたんだが？ この村の人見知りつてのは人の部屋にズカズカと入り込んでくる奴のことを言うのか」

「それは間違いよ。わたしは人見知りなんかじゃなくて、この村とユルバンお爺ちゃん以外の人が嫌いなだけ」

エドナの言葉に俺は人見知りより質が悪くねーか？ と呆れた。が、しかし人嫌いを自称するこいつが他人の部屋を訪ねてきたんだ。よっぽどの話しなのか？

「ふん。じゃあその嫌いな奴の部屋に来てまで何お話だ？」

「……お爺ちゃんがこの部屋から出て行くのを見たのよ。すぐく思い詰めたような背中だった。あんた、お爺ちゃんに何をしたの？」

ああ、そう言う事か。

エドナの口調と表情は糾弾するようなもので、言い訳も謝罪も許さない俺を睨みつけてきた。

「別に何もしてねえ。明日の討伐に連れて行けって頼みに来たから断っただけだ」

「……そう、やっぱり。……わかったわ」

エドナは俺の返答に納得したと小さく頷くも、表情はあまり良くなく暗いままだった。

「まだ何かあるのか？」

「……なんでお爺ちゃんはあんなに戦いたがるのかしら」

「あ？」

「お爺ちゃんはとつても優しくして、わたしの我儘だつてしようがな

いって言いながらもいつも聞いてくれた。でもコボルドの事だけは全然聞いてはくれないわ」

「どうやらエドナも爺さんを止めてたみたいだが、あの爺さんはそれでもコボルドの討伐に執着し続けたのか。」

「爺さんは10年前の事を悔いてるって言ってるってやがった。今回の事はその時の名譽を挽回する機会だと…」

「なによそれ。そんなことしたって意味無いのに。もう…：…終わっちゃってるのに」

「どういう事だ？」

「…何でもないわ。ねえ、あんたお爺ちゃんの同行を断ったって言うけど、お爺ちゃんとは多分諦めてないと思う。明日、無理にでもあんたについて行くかもしれない。その時は…、多少手荒でも止めてちょうだい」

「いいのか？ あの爺さんはお前にとって…」

「だからよ。もうわたしにはお爺ちゃんしか…。それじゃ邪魔したわね」

エドナは俺の言葉を遮って言うと、それを最後にそそくさと部屋を出て行った。

俺はエドナが出て行った扉を見ながらため息を吐いた。まったく面倒な事になりやがった。

まあいい。とにかく俺のはやることをやるだけだ。

俺は今度こそ寝るために燭台の火を消し、ベットに身を倒した。

「起きてッ！ ねえってばッ!!」

俺はドンドンツツと扉を叩く音と大声によって覚醒した。

声はエドナのものだったが昨日の夜と違い焦燥に駆られたものだった。

俺はそんな声に悪い予感が通り、一瞬の微睡も無く起き上がり急いで扉を開けた。

「どうしたッ？」

「お爺ちゃんが居ないの!」

「チツ、あの爺さんやりやがったなツ!」

俺は大きく舌打ちをし、すぐさま着替えと装備を整えて部屋を出た。

クソがツ。予想出来て然るべきことだ。

夫人にも行くことを禁止され、俺にも断られて、そして溺愛しているであろうエドナからも止められて尚、執着がありやがったんだ。1人で向かう事ぐらいしかねない事を気にするべきだった。

「騎士様、どうかなされましたか? それにお嬢様まで!」

俺とエドナが騒いでいるのに気づいたのか執事の男が慌ててやってきた。

「爺さんが1人でコボルドの討伐に行きやがった! 直ぐ追いかける、厩舎は何処だ!」

「なツ!? お1人ですと! 分かりました。今すぐ馬の準備を!」

「時間が惜しい。馬具無しで行く。幸い住処の廃坑まではそんなに距離は無いからな」

本来は馬具無しなど危険すぎていけねえが、緊急だ。

「わ、わかりました。こちらです」

俺が直ぐ案内しろと暗に言ったの分かったのか執事の男は小走りで厩舎まで案内し始めた。

そして俺は厩舎に着くなり俺はすぐさま自分が乗ってきた馬を出し、一気に飛び乗った。

「わたしも行く。乗せて」

俺が馬を走り出させようとした矢先、エドナ突然そんな事を言い出した。

執事の男もその言葉に驚き、何を言っているのかとエドナに声を掛けるがエドナはそれを無視して俺の事をジツと見上げてきた。

「こんな時に何言つてやがる。てめえみたいなガキ邪魔にしかねえだろうが」

俺が邪魔だと一蹴し、再度馬を走らせようとする、エドナ何かしら小さく呟いて持っていた日傘を地面に思い切り突き立てた。

瞬間、目の前の地面が隆起し、岩が壁の様にせり上がってきやがった。

「これでもわたしはスクウエアメイジなの。邪魔にはならないわ」

せり上がった岩に驚き暴れた馬から落馬しそうになる中、俺がなんとか馬を落ち着かせるとエドナはいけしやあしやあと言い放つてきた。

「実力行使って訳かよ。チツ、ほれ、手を出せ」

「最初からそうすればいいのよ」

「口の減らねえ奴だな。しつかり掴まっておけ」

「えっ!? お嬢様!!」

馬に乗ったエドナに執事の男はさらに狼狽え何か言おうとするも、これ以上余計な時間を取られるのも煩わしいので、俺はすぐさま馬を走らせ屋敷を出た。

外伝？ アツシユと老兵と少女とコボルドと

アツシユSide

俺とエドナはアンブランの村を出てから30分と経たずにコボルドの住み着いていると言う廃坑の入り口付近まで到着した。

エドナが言うには厩舎の馬が減っていなかったそうで、爺さんはどうやら徒歩でコボルドの住処までいどうしたらしい。実際、あの爺さんが着ていた甲冑の足跡がここまであった。

「クソツ、あの爺さん一体どんだけ早くに村を出やがったんだよ」

俺は馬を離れた場所に置いてエドナと共に廃坑の様子が窺える場所うかがで呆れたように呟いた。

ここまで馬ではあつという間だったが、徒歩では1時間ほどかかる距離だ。だから途中で追いつけるかと思っただが…。

あの爺さん、どうやら相当早くに屋敷を出たようで全く追いつくことが出来なかった。

「お爺ちゃんって行動的だから」

「歳を考えろってんだ。……見張りがいねえな」

俺は無駄話もそこそこに見張りの無い廃坑の入り口へといつでも戦闘に入れるように周囲を警戒しつつ、素早く近づいて行く。

「…ツ!? お爺ちゃんの!」

同じように辺りを警戒しながら付いて来たエドナが入り口近くに転がっていた見覚えのある槍を見つけて目を見開き拾い上げた。

コボルドってのは人間を攫ってはその群れ独自の儀式の生贄に使う習性がある。ここに爺さんの死体が見当たらねえ以上、儀式の贄として奥に連れて行かれたんだろう。

「は、早く助けなきヤツ」

「落ち着け。幸い…と言っていいが分からないが奴らが爺さんを生贄にするために連れてったんなら、すぐには殺されねえはずだ。むしろ下手に騒いだせいで爺さんをさっさと始末されかねない。慎重にいくぞ」

「…分かったわ」

俺の言葉にエドナはぐつと拾った爺さんの槍を握りしめて早く進みたいのを我慢するように頷いた。

しかしだ、いくらすぐにはとは言っても限度はある。見張りが居ないって事はまだ中で儀式の準備をしているのか、またはその途中か…。

とにかく慎重には言ったが爺さんがどれくらい前に捕まったか分からねえ以上、出来うる限り早く助けねえとな。

「おい、その槍は置いていけ。邪魔になる」

「嫌よ。これは大切な槍なんだから」

「ふざけんな。大体、そんな不釣り合いな槍と今持つてる傘でまともに動けねえじゃねーか」

「別に問題無いわ。いざとなったらゴーレムでも生成して使わせるから」

「……つたく」

好きにしろ、とエドナの態度に俺はため息と共に言葉を吐き出し、廃坑の中へと踏み入った。

坑道内は当たり前だが灯りなど無く、奥へ向かうにつれて当然入り口からの光は届かなくなり暗くなっていく。

俺は用意しておいた小さなランタンの中の火石を灯し、辺りを照らした。

「こりゃあ、迷路だな。目印がなきや迷ってたな」

と、俺はコボルド共が爺さんを引きずっていったであろう地面の跡を見ながら慎重に進んでいった。

「……止まって」

「あん？」

「この先の曲がり角。大きな空間がある」

「分かるのか？」

「地の系統のメイジは触れた地面からある程度の周囲の地形とかが分かるのよ。特に私のようなとても優秀なスクウェアメイジならより広く詳しく地形の把握ができるわ」

エドナはどうだと言わんばかりの表情で俺の事を見てきた。

俺はそんな態度に対し小さく嘆息してからそうか、と一言返しランタンの灯りを消す。すると薄っすらとだが曲がり角から光が漏れ出ており、どうやらこの先の空間が奴らの居る場所ようだった。

俺達はゆつくと音を立てないように進み坑道の切れ目から空間の中を覗き見ると、そこは鍾乳洞となっていた。

鍾乳洞内はあちこちに火が焚かれ中央には大きな篝火と寝台のような大岩があり、大岩の上には爺さんが横たわっていて、それを中心に扇状にコボルド共が集まって何か騒いでいた。

さて、どうするか…。コボルドの数は聞いていた数よりかは少ねえようだが。

爺さんをあの中から助け出せさえすれば、後は廃坑から撤退する際に奴らごと廃坑を潰してやる事ができるが。

「あいつら…」

その呟きに横を向くとエドナがギリツと奥歯を噛みしめて怒りを露わにしていた。まあ爺さんの事を見ていきなり飛び出さない程度には冷静で…

「…ツ許さない!!」

……前言撤回だ。エドナは俺が思っていた以上に怒り心頭だったようで、殺意の含んだ声を漏らすと共に魔法の詠唱をし、コボルドの群れの足元に幾本もの土の腕を生やしてコボルド共に攻撃を始めた。

このバカ、爺さんの事になるとやたら沸点が低くなりやがる。

俺は頭を抱えたくなくなるもそんな事をしている訳もいかず、すぐさま剣を抜いてコボルドの群れへと駆けだした。

突然の事に混乱をきたしているコボルド共を何匹か切り裂きながら爺さんの元へと行き、

「邪魔だツ、魔王絶炎焔!」

近くいた3匹のコボルドを払うように殴り怯ませた後、剣を地面に叩きつけて灼熱波を起こし吹き飛ばした。

「ぐっ…、き、騎士…：…殿? 儂は…」

爺さんはこの騒ぎに目を覚まし、朦朧としながらも声を出した。いくらか怪我はしてはいるがどうやら命に別状は無いみたいだな。

「爺さん動けるか？」

「うむ…。多少頭がクラクラしますが、大丈夫です」

「ならあそこまで行くぞ」

俺は爺さんにエドナが凄いい形相でコボルド共と戦っている場所を示して付いて来いと促した。

爺さんはエドナが居る事に見開いて驚いていたが、今は足を止めている場合ではない事ぐらいいは分かっており、何も言わずに俺の後をついて来た。

「お爺ちゃん、これッ！」

コボルドの群れを倒しながら進んでいるとエドナが持つてきていた槍を足元から生やした土の腕でこちらに投擲した。

投げられた槍は俺たちの近くにいた1匹のコボルドの頭に突き刺さることで止まり、爺さんはそれ抜く。

「エドナ様、ありがとうございます！ これでただの足手まといにはなりませんぞ」

爺さんは槍を構えてコボルドを倒そうと振り回し始めた。

その動きは槍を振るうと言うよりかは振り回されている感がありコボルドには当たってはいないものの、遠ざけて身を守ることは上手くいっている様だった。

そのおかげで俺は後ろをそこまで気にする必要がなくなったため前方のコボルドを倒しやすくなり、一気にエドナの所まで移動するとだ出来た。

「お爺ちゃん！ よかった…」

「エドナ様ッ、こんな老いぼれの為に危険なマネをさせてしまい申し訳ありません」

エドナは爺さんの無事を確かめるように爺さんの手をぎゅつと力強く握りしめ、そして爺さんも詫びを入れながら握り返した。

「わいいが、そう言うのは後回しだ。とつと外に出るぞ」

「おお、これは申し訳ない。では儂が先頭を…ッ!? な、なんじゃ!？」

目的の1つである爺さんの救出を完了し撤退しようとして坑道へと入ろうとした瞬間、壁から土で出来た杭が無数に生え、坑道内を埋め尽

くし塞いでしまった。

エドナSide

「これは…、まさか先住の魔法!?!」

突如として坑道内を埋め尽くした杭を見てわたしは驚きの声を上げた。

先住魔法。亜人達の使う魔法で、わたしたちメイジの使う魔法とは比べものにならないぐらい強力な物が多い。

だけどコボルドみたいな知能の低い奴らが使えるはずは……。

「チツ、やっぱり面倒なのが居たか……」

困惑しているとアツシユが忌々しそうに吐き捨てながら鍾乳洞の奥を睨みつけており、わたしも其方^{そちら}へ目を向けるとそこには他の奴らとは明らかに違う雰囲気と恰好をしたコボルドが現れた。

「まったく、やってくれたな愚かな人間。けちな魔法を崇める愚か者。森で生きるすべを持たぬくせに威張り散らすだけの愚かな毛なし猿」
鍾乳洞の奥からゆっくりと近づいて来た人語を話すそいつは獣の骨と様々な鳥の羽で作られた仮面を被り、そして獣の血で染められてドス黒く変色し悪臭を放つボロ布を纏っていて、わたしはその臭いに顔をしかめた。

「お前がこの群れの神官か」

アツシユはそんな悪臭の漂う中、表情を変えずにコボルドに剣を向けながら言葉を放った。

神官と言う言葉にわたしは昔読んだ本を思い出した。

コボルド・シャーマンは奴らの独自の神を崇^{あが}め祭る、その名の通りコボルドの神官で、普通のコボルドより高い知能を持ち人語を解するのが特徴。

「やめておけ。愚かな人間よ。ここは我が契約している場所だ」

コボルド・シャーマンはアツシユの殺気に対して嘲笑うかのように言い返してきた。

「ふん。だからどうした?」

「ハフツハフツハフ！ 所詮は愚かな人間。その意味すら理解できないか」

「御託はいい。面倒だがここで潰させてもらうぞ、化け物共」

「化け物？ 化け物はお前たちではないか。なにせ10年前に……、いやどうでもいいな」

コボルド・シャーマンの10年前という言葉にわたしはあの日の事が頭をよぎり心臓が早鐘の様になり始めた。

手が震え始めて呼吸も粗くなるのが分かる。落ち着け落ち着けといくら思ってもあの時の事が頭の中をめぐる。

もう大丈夫だと思つてたのに……。

「お嬢様ツ、大丈夫ですか!? ご安心ください、このユルバンが命に代えてもあの化け物から守つて見せましようぞ」

わたしの震えを恐怖からの物と思つたお爺ちゃんがわたしの前に出て槍を構える。

止めて……違うのツ。もう、あんなのは……！

「残念だが贄は新しく街から取つてくるとする。そして儀の後に、再度あの村に我らが宝である土精魂を取り戻しに行く。では死ねツ」

コボルド・シャーマンが叫び、腕を掲げると周りに在った大小の石がわたしたちを包囲するように浮かび上がり、そしてピタリと空中で石が止まり瞬間、石がわたしたちに向かって矢の様に飛んできた。

「お嬢様！」

「え？ お爺ちゃ……!？」

飛んでくる石からわたしを守るためお爺ちゃんがわたしを抱き込んだ。

お爺ちゃんの甲冑は全身を覆うタイプじゃない。こんな事をしてらお爺ちゃんは……ツ！

10年前の光景が蘇る。わたしを守るために……わたしを助けるのに……わたしを……。嫌だツ。もう見たくないツ！ 大切な人が、大好きな人が……死んでいくのは。

だけど今からじゃもう魔法は間に合わない。またあの時と同じように守られて、わたしは大切な人を失くすのか。

わたしは数秒後に目に映るであろう未来を想像し、それをどうにも出来ない悔しきで涙を流し目を瞑った。

そして……、

「はッ、この程度で死ねだど？ 笑わせるんじゃねえ」

そんな言葉と同時に周りが輝き綺麗な音が響いた。

「……ッ!? なんだそれは!? 何故ッ、大いなる力が打ち消されるッ!? 人間、お前は何者だ!」

いつまでたつても襲つてこない石や、コボルド・シャーマンの驚きの声。そしてこの光にわたしとお爺ちゃん顔は顔を上げた。

「え?」

「なんと……」

顔を上げるとそこには驚き怖いっているコボルド・シャーマンと身体中から光を放っているアツシユが居た。

更によく見ればアツシユを中心にアツシユと同じ光を放つ大きな模様がわたしたちの足元に円状に広がっていて、さっきまでわたし達を包囲していた石は全て無くなっていた。

「ぐるぐる。我が契約せし土よッ。鋭き杭となり敵を穿てッ!」

コボルド・シャーマンが叫ぶと、先ほど石つぶて程ではないけれど、それでも沢山の土で出来た杭があちこちの壁から生え、わたしたちを串刺しにしようと伸びて来た。

「ふんっ」

それに対しアツシユは体を捻り剣を水平して回転するように振るう。するとさつき耳にした綺麗な音が鳴って、伸びてきていた杭はまるで大きな衝撃を受けたかのように先端から根元の部分までが砕け散っていった。

何が起きたのかが全く分からない。こんな魔法は知らない。いや、それ以前にこれは魔法なの？ 魔法っていうのは必ず詠唱が必要なのは。それは先住魔法だって同じ。じゃあ、いったいコレは何なの？ 「何だ……。いったい何なのだ人間! 大いなる力を消す化け物ッ!

同朋よ、殺せ! あの化け物を殺せッ!!」

アツシユの使うこの光にコボルド・シャーマンは悲鳴のような叫び

で周りのコボルド共に攻撃を仕掛けるよう命令を出した。

コボルドは一瞬躊躇ためらうも命令に従い、こん棒を構えてアツシユへと向かってきた。

「チツ、めんどくせえ。……おい、エドナ。この廃坑はもう使われてねえんだよな?」

「え? ええ、もう誰も使うことは無いわ」

コボルドが殺到してきているなか、アツシユの突然の質問にわたしは反射的に答えた。確かにこの坑道及び鍾乳洞は昔は村の人達が土石を掘り出していたけれど、今はもうやっていない。

アツシユはわたしの返答にそうかと眩き、手に持った剣を頭上に掲げた。そして…

「なら、ここがどうなるうが問題はねえよな」

そう言った瞬間、足元の模様が更に輝き七色の光が吹き出しアツシユへと集まり始めた。

集まった光はそのまま掲げた剣へと纏わり、それをアツシユが振り下ろすと光は奔流となって群がってきていたコボルド共をまとめて吹き飛ばした。

もうわたしもお爺ちゃんも今起きている事に考えが追いつかず、只々目を見開き呆けるしかできなくなっていた。

「グヴヴァルガッ!! グググガッ、ヴァアッア!!」

こんな状況にもはや人語を話す余裕も無くなっていったコボルド・シャーマンは何を思ったのかひと際大きな声で叫んだ。

するとその叫びに鍾乳洞全体が大きく揺れ始めた。…そんなツ!?
これは…ツ!

わたしは地面から伝わってくる感覚に怖気が走った。鍾乳洞の壁と言う壁がまるでパンのようになり崩れ始めているのだ。

「グゲゲゲ。ギャツギャツギャー!」

耳障りな笑い声を出したコボルド・シャーマンの仮面の奥から除く瞳は血走り、完全に自棄を起こして、わたしたちごと死のうとしいた。

がしかし、アツシユはそんなコボルド・シャーマンの起こしている

崩落に一切の動揺も見せず、どころかその行動を無様だなと見下していた。

「せめて一矢報いてやろうつてか。ふんツ、言ったはずだ。この程度で俺を殺そうなんぞ笑わせるつてなツ！」

アツシユはそう言うのと剣を再度頭上にへと掲げる。

「響けツ！ 集えツ！ 全てを滅する刃と化せ!!」

その詠唱のような言葉に光が剣へと集まり強い輝きを発し始め、そして

「ロスト・フォン・ドライブツ!!」

その叫びと共に剣の輝きが一層増したと思ったら巨大な光の柱が立ち上った。

光の柱は鍾乳洞の天井へと当たると更に強い輝きを放ち、その眩い光にわたしとお爺ちゃんは目を閉じる。そして…

「…えっ？」

光が収まり目を開けるとわたしとお爺ちゃんは目の前の光景に絶句し、呆然となった。

そこには青空があった。いや、正確には崩れてきていた鍾乳洞の天井が消滅していて、その穴から青空が覗いていた。

外伝？ アツシユと老兵と少女と真実と

アツシユSide

俺は周囲の気配を探り危険が無くなった事を確認すると振り上げていた剣を下し、ゆっくりと音素フォニムの放出を抑えながらフォンスロットを閉じた。

「ちと制御に失敗したか」

なるべく抑えたつもりだったんだがな…。

と、俺は頭上に空いた大穴を見て第七音素セブンスフォニムの制御が甘かったことを自省する。

ローレライの一部が身体に入っているためか使う譜術の威力が上昇しているのはいいが、どうも第七音素セブンスフォニムに関してはローレライの影響が強過ぎる。

さらに向こうオールドドラントに居た頃と違い、体の異変が完全に無くなって体内のフォニムが安定しているせいか超振動の威力が比べものにならない程上がっている。

こうも力が強くなり過ぎると今回みたいな事じゃ無い限り使いようがねえな。

「おい、怪我はねえか？」

俺は思考を打ち切りコボルドの全滅を確認した後、最後に2人へと無事か確認を取るとエドナと爺さんは未だに呆けた感じだったがしつかりと返事をした。

俺は返事を聞くと、なら帰るぞと言い返し3人で廃坑を後にした。

「…エドナッ！ ユルバンッ！」

「おおッ！ よくぞ御無事で」

村へと戻ると入り口ですつと待っていたのかロドバルド男爵夫人与執事の男が帰ってきた俺らに駆け寄って来た。

「奥様…。申し訳ありません。俺は奥様の命に逆らったどころかコボルド1匹打ち倒すことも出来ず、尚且つ敵に捕まりエドナ様と騎士殿

を危険な目に遭わせてしまい申した。儂は名誉挽回と仇討ちの事ばかり考え自分の力不足をまったく考えておりませんでした。どんな罰でも受けましょう」

「いいえ。あなた達が無事でなによりです。罰なんて…」

「おい。話しは屋敷に戻ってからの方がいいだろ。俺は大丈夫だが爺さんはボロボロでエドナに關しちやあこんなんだ」

このまま放っておくといつまでも問答しそうな雰囲気の夫人と爺さんに俺は口を挟んだ。

さすがに外の馬は逃げ出していて廃坑から村までは歩いて戻ってくる事になり、その為2人はヘトヘトでエドナに關しては途中から俺が背負ってやるはめになった。

本人は別に大丈夫と言い張っていたがフラフラと足元はおぼつかなく、少し歩きたびに転びそうになったりと放っておけばその内に転んで怪我ををすると思ひ無理矢理背負ってやった。

最初はブツブツと耳元でウザったく文句を言っていたが途中から言葉は途切れ途切れになり、そして村に着く少し前には寝息しか聞こえてこなくなつた。

「あ、そうですわね。では屋敷に戻りましょう」

俺の言葉に夫人は同意し、屋敷へと移動した。

屋敷へと戻ると夫人は執事の男にタオルの用意を命じ、そしてエドナを俺から預かり部屋へと寝かしにへと行った。

俺と爺さんはそれぞれの部屋に行き、用意されたタオルで体の汚れを一通り落としてから俺は客間へと戻つた。

「ああ騎士様。この度はコボルドの討伐に加えユルバンを救っていたいただいた上にエドナ共々無事に帰還させていただき本当にありがとうございます」

客間に入ると夫人がすでに戻っており、俺の姿を見るや深く頭を下げ礼を言ってきた。

「いや、別にたいした事じゃない」

「いえ、此度の事は本当にどれだけの礼を尽くしても感謝し足りない程です。出来れば私個人からの報酬と言う事でお礼の品を渡したい

ところですか…」

「だからそんなもんは……いや、そうだな。報酬を渡したいと言うんだったら代わりに少し聞いておきたいことがある」

夫人の言葉に俺はふとこの村のとある事を、そしてこの先の事を聞こうと思ひ至り、それを報酬として貰いたいと言ひ返した。

「聞きたいことですか？ いったい何を…」

「いつまでこの茶番を続けるつもりなんだ？」

「……茶番。一体何のことですか？」

「麓の街で聞いたんだが今から10年前、この村はコボルドの群れに襲撃されて村人は皆殺しにされたらしいな」

「…ッ!？」

「それ以来この周辺にはコボルドが住み着き麓^{ふもと}の街の住人や行商人達は襲われないように近づかなくなったらしい。実際この村までの道は荒れていて長い間使われていない様子だった。さらに言うなら村までの道中に一度も行商とすれ違わなかった」

「……………」

「…そしてこの村の農産の様子をみたが、どう考えても村人全員が生活をしていくには絶対的に足りていない。行商も来てなく農作の数も少ないにも関わらずこの村は栄えている。村人の行動も変だ。普通畑仕事なんかはそれなりに早い時間から作業し始めるもんだが、今朝方村を飛び出た時に畑が見えたが、誰1人として居なかった」

「そこまで気づいておられたのですね…。分かりました。全てを話しましょう」

俺の疑問に夫人は観念し言葉を漏らし、そして夫人はこの村の真実を話し始めた。

今から10年前、突如として現れたコボルドの群れが村を襲ったそうだ。

襲ってきたコボルドの数は多く、爺さんや夫人、村の男共が奮闘しようとも数で圧倒された。

そして何とかコボルドを追い払う事ができたが、その時にはもう村の人間はエドナと夫人と爺さんだけしか生き残りがいなかった。

しかし生き残ったとは言うものの、夫人はエドナをコボルドからの攻撃から守るために重傷を負い、エドナはまだ7歳の子供。そして爺さんも昏倒しておりいつ目覚めるか分からない状態だった。

こんな状態では無事に街まで行けるかどうかとも怪しく、かと言ってこのままではいつ目が覚めるか分からない爺さんと幼いエドナを残したまま自分は死してしまう。

そして爺さんが目を覚ました時、爺さんとエドナ以外の皆が死んでしまっていると知ったら、その心には生涯ずっと後悔と事績の念で苦しみ続ける様な傷が出来るだろうと。

夫人は考え、そしてある事を実行した。

土系統の優秀なメイジであった夫人は村人のガーゴイルを大量に作りだし、そして平和な…、それこそ誰一人の怪我也犠牲も無い、いつも通りの平穏でのどかな村を作り出した。

「そしてこの村の全てのガーゴイルの核となり夫人の代わりとなる私を作ったのを最後に本当の私は息を引き取りました。それから10年、私達はユルバンとエドナの為だけにこの村を維持し続けているのです」

「…なるほど、な」

全ての話を聞いて俺はレプリカの事を思い出し、何とも言えない気持ちとなった。

もちろんこいつらの存在理由はあいつ等とは全く違く、重ねるべきでないとは分かっている。

俺は軽く頭を振り、余計な思考を追い出し本題の答えを聞くために夫人に促した。

「……私たちは所詮はガーゴイル。私たちは夫人の最後の命の下、いつまでも2人を偽り続けます」

「…老い先の短い爺さんはともかく、エドナを騙し続けるには無理があるんじゃないかねえのか？」

「あの娘には、時が来たら話すつもりです」

夫人は悲しそうな表情でそつと顔を伏せて呟くように言った。

多少の予想はしていたが、こうも予想通りの答えを出されるとは

なあ…。

さて、どうするか。これ以上はどう考えても余計なお世話以外なんでもねえんだが…：…つたく、こう言うのは俺のキャラじゃねえつてのに。

「時がきたら、か。なら丁度いいじゃねえか。今がその時かもしれないぞ」

俺は内心大きくため息を吐いて軽く頭を掻き、顔を伏せている夫人へと言い返した。

「え？ どういう…」

「おいお前ら。盗み聞きしてねえで出てこい」

「やっぱりバレてた」

「その…不法法をお許し下され」

俺が扉へと向いて声を掛けると少しの間後、ゆっくりと扉が開きエドナと爺さんがバツの悪そうな表情で姿を現した。

「あ、あなた達ツ!? いつから…、ど、どこから話を…：…」

「…アツシユがこの村の事を自慢気に語り始めたところからよ」

誰が自慢気だ！ と言い返してやりたかったが、一々こいつの言葉に反応して話しの腰を折るのもバカらしい。

夫人はそんなエドナの答えを聞いて顔を青く染め、そして爺さんの方へと顔むける。

「すみませぬ。僕もお嬢様と共にほとんどを…」

「ユ、ユルバン。これは、違うのです。本物の夫人はあなたを悲しませたくなくて…」

「奥様、いいのです。おかしいとは思っておりません」

夫人はユルバンの寂しさを帯びた表情に動揺し何か言い訳のような事を言い始めるが、全てを言い終る前に爺さんが発した言葉に目を見開き、凍り付いたかのように固まった。

「気づいて、いたのですか?」

「気づいていた…：のかもしれないませぬ。奥様の言う通りで僕は真実を受け入れられずに村の異常に気づいておきながらずっと目を反らし気づいていない振りをしていたのでしょうか」

「ユルバン…」

「ですが、此度の事や先ほどの御話で多少なりとも気持ちの整理が出来ました。ご心配していただき感謝いたします。でも大丈夫です」
爺さんの言葉を聞いた夫人は顔色を戻し次いでエドナを見た。

「わたしは最初から知ってたし」

「…分かりました。ユルバン、エドナ、付いてきてください。騎士様もどうかご一緒に」

夫人は2人の言葉を聞くと覚悟を決めたような表情になり、俺たちを連れて客間から移動し始めた。

夫人に連れられ屋敷を出て、裏手の森の中へと入りしばらく歩くと突如として森の中に在るには不自然に開けた場所へと出た。

「ここは、墓地か」

俺は目の前の綺麗に墓石が並べられた広場を見渡して小さく呟いた。

「ここには10年前に亡くなった村人たち全員が眠っています。そして…」

ここに本物のロドバルド夫人が眠っています、と広場の一番奥。他のよりいくらか立派な墓石の前に俺たちをと案内した。

「…ッ。奥…、様」

「……ん」

墓の前で爺さんは震える声で絞り出すように声を出し、エドナはぐつと爺さんの服を握り顔を俯かせた。

そして2人はゆっくりとした足取りで墓の前まで移動し膝をついて手を組み黙祷を捧げ、俺も2人の後ろから礼儀として目を瞑り小さく黙祷を捧げた。

「これからどうするつもりだ？」

色々あったがコボルド討伐と言う任務を終えた俺は村の門の下

でエドナと爺さんに尋ねた。

「そうね。お爺ちゃんと一緒に村を出ようと思うわ」

「いいのか?」

「未練なんて山ほどあるに決まってるじゃない。でもお爺ちゃんと私だけでこんな山奥の村の復興なんて無理。そりゃあお母さま程の魔法の腕が良ければこの村の大量のガーゴイルを自在に操ってどうにか出来るだろうけど、わたしはそういう細かいのは苦手なのよ」

「爺さんは…」

「確かに寂しい事には変わりはないですが、儂はお嬢様の従者として付いて行くだけです」

2人とやはり故郷を捨てる事に寂しさを感じていて表情に陰りはあったが、かと言って悲壮と言う感じではない様子だった。

まあ直ぐに吹っ切れと言うのは無理だろうからな。

「そうか。……とりあえずコレを渡しておく。何かあればそれを持って城へ来い」

俺は出発前に書いた手紙をエドナに渡した。

「…? 何これ」

「紹介状みたいなもんだ。必要ないなら捨ててもらっても構わん」

「あなた、顔に似合わず相当のお節介ね」

うるせえ。この顔つきはもうクセみてえになってんだ、そう簡単に戻るかよ。

「ふんっ。俺はもう行く」

「あ、ちよつと待って」

俺は踵を返して歩きだそうとしたら、エドナが待ったを掛けてきた。

「あ? なんツ!?!」

エドナの声に振り向いた瞬間、唇を塞がれた。

俺がいきなりの事に驚き固まっている間にエドナはすぐに俺から離れる。

「今のはわたしがあげられる最高のお礼よ。一生大切にしなさい」

離れたエドナは驚いている俺をドヤ顔でそんなふざけたことを

言ってきたやがり、そして俺が何か言い返す前に屋敷の方へとつとと去って行った。

「まったく何考えてんだあいつは」

「……………」

「おい、なんだその目は」

「いえ、別に何でもありませんぬ」

妙に生易しい目を向けてきた爺さんに睨みを利かせた後、俺は大きくため息をつくと再度踵を返して帰路へと就いた。

惚れ葉（恐）

キキSide

ここ最近、出番が全くなかった気がする。

そんなメタ思考をしながら俺はトリステイン学院へと帰るために空を翔けているシルフィーの背に座りポケットと遠くを眺めていた。

今から数日前、レアバードに乗ろうと早朝にチトセの所へと行ったらどういふ訳かりオンとルイズが平和の為に武装して乗って行つたと言う意味不明な理由でまた乗ることが出来なかつた日の昼頃、いつものガリアからの依頼書がタバサへ届いた。

内容はとある村で翼人とトラブルが起きているから解決してとの事。

で、実際行つてみたら村の奴らが贅沢したいがために翼人の住処の木を切り倒して売っぱらいたいから翼人退治してと言う、むしろテメエら退治しろうかと言うものだった。

俺としては村人に命の大切さと共存することの大切さを俺のレアバードに全然乗れないモヤモヤした気持ちと共に、その身に物理的に叩き込んでやろうと提案したが、タバサによって却下された。

まあ、よく考えなくても却下されて当然だった。

そして色々省くが、最終的に俺の変化の術を使った芝居で村人と翼人の確執を失くし、和解させることに成功して任務は完了。

その後、村人の青年と翼人の少女の結婚式を見届け、そして今に至っている。

「…それ気に入ったのか？」

俺は隣で珍しく本を読まずに結婚式で受け取ったブーケをずっと眺めているタバサに声を掛けた。

タバサは俺の質問にコクリと小さく頷いて肯定する。

やっぱり女の子ってのはこう言うのに憧れるもんなんだろうか？

まあ、いいや。

そんなこんなで日も沈み、学院の庭へと降り立つころには夜中になつていた。

「ん〜ツと、さすがに地下の風呂は終わってるよなあ。釜風呂使うか〜」

「準備お願い」

「りようかい」

と、俺は返事をして裏手の庭に行き、置いてある釜風呂の準備をする。

水遁・水鉢すいはちで掌から水を出して軽く洗った後水を捨て、再度水鉢で水を溜めてそして釜に向かって火遁・火龍弾かりゆうだんを使い風呂を焚く。

ちなみに火龍弾は着弾した場所であればらくの間燃え続けてくれるので威力を調整してればいい感じの温度のところで丁度火が消える。閑話休題。

「とりあえずタオルと着替え持ってこなきゃな」

「問題ない」

俺の独り言にいつの間にか横に居たタバサがしつかりとタオルと着替え（自分の分だけ）を持って佇たたくんでいた。

準備は万端だなおい。まあ、いいや。

さて、俺はどうしようか？ 流石に前みたいにタバサと一緒に風呂などと言う都合のいい展開はある訳無いし。

「あ、そうだ。久しぶりに影分身組手やろう」

つい何となく思いつき、そして思い立ったが吉日と言う気持ちで俺は影分身を出し風呂が開くまでの間軽めに組手を始めた。

「…そのニンジュツを私も覚えたい」

「ん？ もう少しチャクラの量を増やしてコントロールが上手になつたらな〜」

「それと出来れば分身の術とか覚えてからの方がいいなあ。感覚が掴みやすくなるし」

俺と影分身が組手を続けながらそれぞれタバサの言葉に言い返す。

タバサは少し残念そうな表情になったけれど、こればかりは地道に修行していくしかない。

「分かった」

タバサはそう呟くと持っていた着替え等を近くにある長椅子へと

置き、そして壁へと向かって行った。

「どうやらタバサもお湯が沸くまで壁登りの修行をするみたいだった。」

そんな感じで風呂が沸くまでの時間を潰していると、バチャツ、ドスツと、水がこぼれる音と何か落ちる音が聞こえてきた。

風呂はまだ沸くのにもうちよっと時間が掛かるはずだし、何よりこぼれる程の水は入れていない。

不思議に思い音のした方を見るとタバサが顔に赤色の液体を引つ被って地面に倒れていた。

「おう、大丈夫か？」

「……」

影分身を解き、急いで駆け寄り倒れてるタバサの安否を確認する。この匂いはワインか？

「どうやら壁に張り付いている時に上からワインが降ってきたようで、避けられずに直撃したようだ。」

俺はタバサを起き上がらせて手ぬぐいで顔を拭いてやる。

「しかし何だってワインを被る様な事に？ 上は何やってんだ？」

「……………ッ」

「ん？ タバサどうし…んグッ!？」

俺は不思議に思い塔を見上げていると急にタバサに両手で顔を掴まれ、キスされた。

いきなりキスされた。ものすごい勢いでキスされた。大事な事なので3回も言いました。

「ジャナクテツ!? え？ ちよ？ 何？ 嬉しいけど意味が分からない。ワインを拭き取ってあげたらお札にキスしてきたの? ……絶対に無いわそれ。」

などなど、俺がタバサの奇行にパニックを起こして動揺して動けなくなっている間にもタバサのキスはどんどんエスカレートしていく。

最初の唇を重ねただけの軽いキスからグイッと舌を入れ始め、そして次に舌を絡ませてきて、更には俺に自分の唾液を流し込んできてと酷くなってきた。

「あつ、えへへへへ」

これは下手な事を言ったら殺られると思い、俺は恐怖心を抑え、引きつった笑みでタバサを抱きしめながらそんな甘い言葉を返した。

そして俺の言葉と抱擁にとても嬉しそうに蕩けたような声を出すタバサの頭を撫でながらギロリと上を睨みつけた。

俺の視線先にはドン引きしているジン、ギーシュ、モンモランシー。そして何を勘違いして目を輝かせているのかトラブルメーカーのチトセが窓枠から此方を見下ろしていた。

「まあまあキキさん！　まさかタバサさんとはそう言う関係だったんですね。いやくなんてお熱いんでしょうか。まったく羨ましいです。このこの〜」

ぶち殺してやろうか。

「お前ら、一体何やらかした！」

「む、何ですかその言いがかりは！　それではまるで最初から私たちのせいだと言わんばかりじゃないですか。言っときますけどね、わたし達は何もしてませんよ？　ただちよつと5倍ほど濃くした惚れ薬の入ったワインを零してしまっただけで、何一つ迷惑になるようなこととはしてません！」

「そうか。ちよつとそこで待ってろ。生きている事を後悔する体験をさせてや…ッ!？」

上を向いて喋っていたらザクリと腹部に熱く鋭い痛みが襲ってきた。

俺は会話を中断し、ゆっくりと視線を下し痛みの原因を見た。

俺の腹にはザクリとクナイが突き刺さっており、ダラダラと傷口から血が滴り服と足元を紅く染め始めていた。

即座に俺は体の中へとクナイを更に差し込もうとしている小さく可愛らしい真っ赤な血で濡れている手をガッチリ掴み、これ以上進まないように止める。

「どうして…」

そして小さくてもしつかりと耳に届く、暗く重い声が聞こえてきた。

同時にカクリとタバサの顔が上がり、タバサの瞳が俺を射抜いた。その瞳は光を一切通さないような何処までも暗く、例え灼熱の炎ですら凍らせるほどの冷たさがあり、そしてヘドロのような強い憎悪と殺意が宿っていた。

「ねえどうして？ あなたは私の事好きっていったよね？ 大好きって言ったわよね！ なのにどうして私以外の女性ひとと話しているの？ なんで私以外の女性ひとの声を聞くのッ!! なんで私以外の女性ひとを見るのッ!? 嘘つき嘘つき嘘つきッ!!」

ヤバイ。このままだと本気で命を狙われ続ける。

とにかく一旦タバサの意識を失わせる必要がある。しかも今の恐慌状態のままじゃなくて最初の状態で…。

「……そうだ。私以外の女性ひとを見るんだったらそんな目、取っちゃえばいいんだ。私以外の女性ひとと話すそんな舌はいらないよね！ 私以外の女性ひとの声を聞くそんな耳失くしちゃえばいいんだよね!! そうすればあなたはずっと私の……んッ!」

そしてタバサはキチった事を言い始めた辺りで俺は腹を決め、タバサが喋っている途中で無理矢理唇を重ねた。

するとタバサは最初は強張っていたが直ぐに体を弛緩させ、手は握っていたクナイを放し俺の背へ回してきた。

タバサの表情は先ほどまでのプツツンしたものから蕩けたものへと変わり、キスも最初と同様にどんどん熱烈にエスカレートして来た。

俺は腹の痛みとか容赦なく唇を重ねてくるタバサの猛攻に耐えながら、印を結び手を頭に当てて幻術による意識の刈り取りをおこなった。

ガクンツと意識を失い、ダラリと手足と涎を垂らし、静かな寝息を立てているタバサをそつと長椅子へと寝かした。

「……はああああああ。……うぐッ」

ほんの数分の間にとんでもねえ気疲れと本気の死を感じた。

ってかイテエエッ!! ここまで深々とクナイが刺さるのなんて何年ぶりだ？ とにかく応急処置をしなければ。

俺はチャクラを刺された場所に集中させ止血をし、そしてクナイを引き抜いて治活再生ちかつさいせいの術を使い傷口を塞ぐ。

後は掌仙術しょうせんじゆつを傷に当て続けて治りを早くする。とりあえずこれで一安心だ。

「はあ、さてと」

俺は再度上を見る。が、そこにはもう既に誰も居らず、逃げた後だった。…おいコラ。

とりあえずあいつらの捕縛は簡単に出来るからいいとして、俺は眠っているタバサへと目を向けた。

白眼を使いタバサの体の中のチャクラの流れを視る。

「……これは酷い」

タバサの体中のチャクラが乱れに乱れており、どこをどう治療すればいいのか本気で困るレベル状態だった。

さすがにこれはきちんとした施術しないと治せないなあ…。

俺は大きいため息をつき、タバサを背負ってとにかく部屋まで移動し始めた。

「とりあえず部屋のベットにタバサを寝かしたらお湯は取りに来よう。はあ、風呂入りたかったな」

まあ、いいや。

さて、今更だけどチトセが惚れ薬とか言ってたし、これはあのイベントってことでいいんだよね？

完全に油断してたなあ。惚れ薬イベントの事は覚えてたけど時期とかは完全に分かんなくなってたし、何よりこの手のイベントはルイズ、チトセ、ジンの3人の内の誰かが惚れ薬を飲むもんだと思ってた。「いや、それ以前に通常の惚れ薬の5倍濃度のワインってなんだよ……」

元々惚れ薬自体が禁薬なのにその5倍……。完全に原因はチトセだよなあ。

まあ、いいや。…全然よくないけど。

とにかくあいつ等捕まえてキツチリとお話ししないとな。

またチトセか…

キキSide

「さて、詳しく話してもらおうか」

「あら？ とりあえずお仕置きが先じゃないの？ こう…手足の先から炙ったりして」

と、俺の言葉に隣に居るキュルケは杖を構えながら中々物騒な答えを返してきた。

「ちよ、待つてくれ！ いきなり何てこというんだ！ まずは話しを聞いてくれッ！」

「そ、そうよ！ 争いは何も生まないのよ？ だから杖をしま…ッひっ!？」

ギロリと、キュルケの鋭い眼光と共にギーシュとモンモランシーの目の前にファイヤーボールが撃ち込まれた。

「何か言ったかしら？」

「ごめんなさい!!」

その後、俺はタバサを部屋に寝かした後、白眼を使って即座にギーシュ、モンモランシー、ジン、チトセの4人の捕縛を開始した。

まずはギーシュとモンモランシー。この2人はキュルケの部屋に匿われていたが、キュルケに事情を話したら笑顔で2人を引き渡してくれて、更に話し合いに自分も参加すると言って付いて来た。

「あの、なんで私まで正座させられているんです？ 意味が分からないんですけれど…」

次にチトセ。この馬鹿は自分は何も悪いことしていないと言うかのようにジンの部屋で普通に寝ようとしていたので掌底を食らわして捕まえた。が、意識を戻してからもこのように状況を理解してくれない。

とりあえず、顔面にヤクザキックを食らわしておく。…ジンに。

「…ちよつと待て!? 今、何故、俺が蹴られた！ 前から思ってたけどお前って俺だけに一躊躇(ちゆうちよ)無く暴力振るうよな！ 何なんだよ、あんたはあッ！ …ごめんなさいしません調子乗りまし

た許して下さいお願いしますその手に持つ刃物をどうかしまってください」

最後に綺麗に頭を床に擦り付けて謝ってきているジン。こいつは俺の能力を事を知っているせいか学院の外へと逃げていたが、実はこつそりと飛雷神のマーキングを付けていたので何の問題も無く強襲し、連れ帰った。

まあその際にちよつと喧嘩になり、ジンが思っていた以上に強かったのでつい本気をだして、ジンをズタボロにしてしまった。

幸い、こいつ自身はニードレスの変トツベルゲンガー身で再生したので事なきを得たのでよかった。いや、タバサの事でイライラしてたからって直ぐに暴力に訴えるなんて……反省しなければ。

で、まあそんな感じでとりあえず全員を捕らえてモンモランシーの部屋へと監禁し、今に至る。

「いや、炙るのも煮るのも抉るのも潰すのも剥ぐのも絞めるのも裂くのもいつでも出来るし、ちゃんと言葉を発せる内は話しを聞くべきだと思っただけだ」

「…あなた結構エグい事しようとするのね。でもそうね。なんで惚れ薬なんて…しかも濃度が5倍とか言う頭のおかしい物を作ったのかは話してもらわないとね」

と、いう事で薬の製作者であろうモンモランシーに惚れ薬制作までの経緯を聞く。キュルケがな。

「その、私の実家はあまり裕福じゃないの。だから私は趣味として作った香水を街までよく売りに行ってお小遣いを稼いでいるのよ。

それでね、今ちようど街は戦勝記念で色々と賑わってるじゃない？

これは商売時だと思っただけと一緒にお小遣いを稼いでいるのよ」
「どうしてチトセと行ったのよ？」

「ほら彼女って容姿だけはいいいじゃない？ だから黙って笑顔を浮かべて貰えてればいい売り子になるかなあって…。それに彼女も街に遊びに行きたがってたし、それで…」

「ふーん。ま、いいわ。続けて」

「えつと、チトセのおかげで思った以上の実入りになったものだから

ね、ちよつと奮発して高価な秘薬を買いながらチトセと一緒に色々とお店を見て回ったの。それで服とかを見てる時にチトセとちよつとした恋バナになってね？ その、ちよつとした冗談で惚れ薬の話をしたら思いのほか食いつてきて…」

「…ねえ、まさか」

「わ、私は別にちよつとした冗談として一晩だけの効果の惚れ薬を作ろうとしたのよッ!? でもチトセが中途半端はよくないって言いながら秘薬の調合し始めて…」

でもその調合がすごいの！ 私も素材を出来るだけ無駄にしないようにとか、もつと効果を高める為の比率とか色々勉強してきてたけど、チトセの調合は今までやってきた私の調合なんかよりも全然無駄が出ないし効率的なの！

彼女が一体どこでこんな素晴らしい調合技術を覚えたのかは分からないけど、これを私も覚えられれば今まで以上に色々な秘薬が、しかも素材を無駄にすることなく作れるようになると思ったのよ。

それをチトセに伝えたら快く教えてくれるって言うから…それで2人してどんどん気分が高揚してきちゃって…気づいたら。ごめんなさい!!」

「はあ」

と、俺とキュルケ頭を抱えながらため息をついた。

もやはこの『何でもない事⇒チトセが関わる⇒厄介ごとになる』の流れは変えられないんだろうなあ。

「え？ だから何なんですかその目は。私は教えて欲しいって言われたから教えただけですよ」

まったく心外です。と、頬を膨らませて可愛らしくチトセはそっぽを向いた。

心外です、じゃねーよ。可愛い分余計に腹立つわッ。まあいいや。「で、それからどうしてタバサがそんな危険な物を飲む羽目になったのよ？ 聞いている感じじゃギーシュが飲むはずだったんでしょ？」

「それが、部屋に呼んでいざ飲ませようと思ったら、いきなりジンがチトセを引きずって入って来て、それからちよつとした騒ぎになってそ

れで最後にはチトセが窓の外に薬入りワインをポイって……」

モンモランシーは話を終え、俺とキュルケはうんうんと何度か頷いた。

そして二人で同時にジンを睨みつけた。それこそ俺がうちは一族に生まれていたら焼死させてやるぐらいの怒気を込めて。

「ちよ、ちよつと待てよツ！ お、俺はただ無用なトラブルを避けようと思つてツ。良かれと思つて行動したんだぞ！ なのに何でそんな目で見られなきやいけねーんだよ!? そもそも悪いのは俺じゃなくてチトセであつて……お、俺は悪くねえ！ ゴオツ!?」

ドクシツ！とジンの顔面に膝蹴りを叩き込む。

素なのかネタに走つたのか知らないがムカツと来た。こちとら真剣に困っているんだ。

なのにこいつは何が俺は悪くねえだ。殺すぞ？ あ？

俺は何度も何度もジンを踏みつけ、とりあえず意識を失くすまで全身くまなくストーンピングし続けてやった。

「さて、話しは分かった。とりあえず聞くけど解毒剤は作れるのか？」

「ごめんなさい、もう一度買い直しに行かないと材料が……」

モンモランシーの答えに俺はだよなあつと心の中でため息をついた。

「じゃあ、明日。朝一で街まで行つて材料買つてこい。金は行く時に渡すからそれで」

「分かったわ。……その、本当にごめんなさい。私が軽率な行動をしたから」

「あー、いや、別にそう何度も頭を下げられるのも……。こっちは解毒剤をちゃんと作ってくれればいいし」

と、俺は素直に謝つて来たモンモランシーにちよつと動揺した。どうもチトセやジン、リオンの影響かルイズ達と仲のいい連中は妙に性格が丸い……と言うか柔らかくなっているとと言うか……。まあいいや。

「まあちゃんとタバサが元に戻るんだつたら私も文句は無いわ。ただし、元に戻せなかつた時は分かつてるわよね？」

キュルケもモンモランシーの謝罪に怒りが冷めたのかため息を吐

に向かつて来ている短剣をタバサの腕を掴んで押しとどめているエルザと言う、そつとじをしたいたい光景が広がっていた。

「つて、待て待て待て!!」

俺は一瞬の思考停止の後、即座に影分身を作りタバサを背後から抱き持ち上げてエルザから引きはがす。

と、同時に俺は震えて泣いているエルザを抱え上げ窓から庭へと飛び降り、タバサの部屋から見えない位置まで逃げる。

「うっ…ひつく。お兄ちゃん。…うっぐ、うえ〜んっ!」

「おーよしよし」

俺は泣きじやくるエルザをあやしてやる。

いやーしかし、タバサのアレのせいですっかりエルザの事忘れてた。

エルザは食事の事もあるし基本的に俺と一緒にタバサの部屋に寝泊まりしている。

そのおかげでタバサとエルザに挟まれて寝れると言う最高の状況になり俺マジめっちゃ幸せ…つと話がズレた。

つまり、事情を知らなかったエルザはいつも通りに部屋に帰ったら何故か起きてしまったタバサと鉢合わせし、殺されかけていたのだから。

とりあえず泣き止み落ち着いたエルザに今のタバサの状態を話して近づかないように言っておく。

「…わかった。お兄ちゃんも気をつけて。あの目はすごく危ない目だったから」

「大丈夫大丈夫、もう経験済みだから。あ、とりあえず血吸っておきな。たぶんまた遠出するから」

俺は笑いながらも腹を刺され済みだと言い、頬を引きつらせているエルザに腕を出して食事をさせる。

しかし、なんでタバサにかけた幻術が解けたんだ? 一応明日の朝までは起きないようにしてたんだけどなあ。うーん、あれか? チャクラの流れが惚れ薬のせいで無茶苦茶になってるせいで幻術の効果が弱くなってるのか? 又は無効化されるとか?

だとしたらめんどくさいなあ。

「はあく、…っあ？ …うわあく」

ふと自分の中に影分身の記憶と経験が入って来た。壮絶な口説き文句と共にタバサを落ち着かせようとして失敗し、そして人様に見せられない表情のタバサに滅多刺しにされたと言う頭を抱えたくなる記憶が…

「ん、どうしたの？」

血をチューチュー吸っていたエルザが俺のげんなりした声と表情に顔を上げて聞いて来た。

「あ、いや。部屋でタバサを止めてた分身がタバサに殺られたから戻らないとなくって」

「…頑張って」

「おう、頑張る」

俺はエルザの励ましに答え、よっこらつと立ち上がり部屋へと足を向けた。

とりあえずエルザにはタバサが治る間はジンとチトセの部屋へ泊まっててと言って向かわせた。

「ロリでメガネ属性でヤンデレとか俺得だし。大丈夫、大丈夫。イケるイケる！」

と、最後に自分を無理矢理鼓舞して俺は覚悟を決めてタバサの部屋へと入った。

ラグドリアン湖へ

リオンSide

「…ん、朝か」

僕は固まった体をほぐしながら起き上がり外を見る。そして…

「…はあ」

と、部屋の中。正確にはベットの上の惨状…いや、珍妙な状態に大きなため息が出る。

ベットの上にはセーラー服とか言われる水兵服に似た物を着たルイズとシエスタが倒れあっていた。

何故こんな状態なのか説明すると、昨夜ルイズとシエスタがこのセーラー服とかを着て突如として現れ、どっちが似合う?と聞かれ、さらに僕の好みは自分だと言い合いになり、そして最終的に騒がしくつかみ合いになったのでピコハンで気絶させた。と言うのが理由だ。「おい起きろ。もう朝だ」

僕はベットで寝ている二人を起こすために声をかけた。

「ん…リオンだめえ。それ…私のクックベリーパイ」

「あんツ♡ リオンさんったら大胆。そんな処を…」

僕は近くにあつた水差しを持ち、そしてそれを食い意地の張ったピクと頭のおかしいメイドの顔へと中身を傾けた。

本当はエアプレッシャーを使ってやろうかと思つたが、さすがに怒りに任せてそんなしようなないことをするわけもなく、おとなしく二人の顔へと水をひっかけて起床を促した。

「うわっぷツ!! な、なにすんのよいきなりツ!!」

「うきやーっ!? え? うえ? なにが!」

顔に水のかかったルイズとシエスタは飛び上がり何が起きたのかよくわかつておらずキョロキョロと首をめぐらした。

「朝だ」

「え? あさ? ……朝ツ!!? あわわわツ!! ね、寝坊! 早く身支

度しなきゃ!! す、すいませんルイズさん、リオンさん失礼します!!」

シエスタは僕の一言で今の状況を理解したのか顔を青くして大慌

てで部屋から飛び出していった。

「まったく。…おいルイズ、いつまでボケつとしている？」

「ちよつと！ いきなり人に水掛けといって何なの言いぐさはッ」

「いつまでも寝ているのが悪いんだ。それよりも朝食を食べる時間が無くなるぞ」

「あ、…もうッ！ 着替えるから早く外出てて!!」

「先に行ってるぞ」

「え!? ちよつ・・・」

相変わらずのルイズの叫びにやれやれと肩をすくめ、僕は部屋の外へと出ていく。

「はあ、まったく」

食堂へと向かう途中、僕は小さく溜息を吐いてここ最近のあの二人について考えを巡らせる。

タルブの村での戦いの後、いつも以上に僕に引っ付いてくるようになったり、突然プレゼントと言いきり色々と渡してきたり、最近では少し傷んできていた僕のマントをルイズが直してあげるわ!と言って勝手に持ち去り、そして半日後にボロボロの布の塊になって戻ってきたり…。釜風呂に入っていたらシエスタが背を流すと言いきなり服を脱いで風呂へと入ってきたこともそうだ。

どうも最近の奇行は常軌を……………いや、誤魔化すのは止そう。

どうやら僕はこの二人に強い好意を抱かれているようだ。

「…どうしたものか」

はつきり言って困惑している。もちろん好意を抱かれて悪い気などは決してない。

が、しかしだ。こうも積極的に来られてもどう対応していいのかわからない。

もしかしてマリアンもこういう気持ちだったのだろうか？

こういうことに頭を抱える事になるとは思ってもみなかったな。

「はあ。……………ん？」

何度目かもわからないため息を吐いていると、ふと廊下の、正確にはある部屋の扉の前に座り瞑想しているキキを見つけた。

見つけたのだが……

「自制心自制心自制心自制心自制心自制心自制心自制心自制心自制心……」

その顔色はお世辞にも言いとはいえずに青白く目の下には濃い隈ができており、何があつたのか顔には噛み跡、首には絞められた跡なのだろうか赤い手の跡がくつきりと残っており、服装もいつも以上によれよれで、そして何かしら小声ですつとブツブツと言っていた。

ジンの奴がああなっているのはよく見かけるが、キキがというのは珍しい。

「おい、どうした？」

少し心配になり、声をかけるとキキには珍しく近寄つた僕に気づいていなかったのか一瞬身体をビクつかせゆつくりをこちらを振り向いた。

「あ、おう。リオンか。おはよう。元気か？ 俺は超元気だぜ」

震える声、引き攣つた笑み。どう考えても元気には見えなかった。

「どうかしたのか？」

「べ、別にどうもしてないぞ。そう、ホント何も無い。なければ良かったのに……。なんでこんな……。こんなの俺の役割じゃない。こういうのはジンのキャラだろ。なんで俺なんだよお」

これはあまり深入りするべきじゃないな。僕はそうか頑張れと、キキに言い返してその場を後にした。

「おう頑張る。欲望には負けない。俺は理性的で常識と良識がある人間。どんなに誘惑されても負けない。負けて手出したら嫌われる。手を、出したら……。手を、出し……たい……」

後ろからまたボソボソとキキの呻き声が聞こえたが僕はなるべく速足で食堂まで移動した。

「もう！ 本当に先に行つちやうなんて信じらんないツ。少しは待つててくれてもいいじゃないのよ」

「お前に合わせて朝食を抜く羽目になるのは御免だからな」

「な、ー、ー、ーッ」

ルイズは猫みたいな声を出して怒りをぶつけてくる。が、前までのような本気さ的なものが無くなっている。

やはり一度こいつらの好意を認めてしまうと、どうしても妙に意識してしまうな。

「? どうしたのよ?」

先ほどまで僕に掴み掛ってきていたルイズは僕があまり反応しないことに疑問を感じたのかキョトンと首をかしげてきた。

「いや、なんでもない」

僕は本当に何でもないように言い返し、ルイズと共に教室へと入った。

「今日は変な日だったわね」

日も落ち、部屋で本を読んでいたルイズが小さくそう呟いた。

確かに、今日は妙に落ち着いた日ではあった。

いつも何かと集まっている奴らがこぞって休んでいた。ギーシュ、モンモランシー、ジンにチトセ。タバサとキキ。まあキキとタバサに關してはちよくちよく休むことはあり、今朝と先ほどキキの様子から何かしらのトラブルが続いているのだろう。

キュルケは授業に出ていたものの、いつものようにルイズに絡んでくることが無く、逆にルイズが絡んでいくほどだった。

「色々あるんだろ。いつもバカみたいに騒がしいんだ。たまにはいいだろう」

「うーん、そうね。珍しく元気のないキュルケつてのも見れたしね。ん、ふあくあ。そろそろ寝ましようか」

「わかった」

「おやすみ、リオン」

「ああ」

ルイズが欠伸あくびと共に本をしまい、僕も読んでいた本に葉を挟み棚へと戻して寢床へと就いた。

キキSide

「ごめんなさい！ 精霊の涙を手に入れられませんでした!! どうか命だけは!」

夜、街から帰ってきたギーシュとモンモランシーが土下座の様な体勢で俺とキュルケに向かって謝ってきた。

「無かったって…。あんた達ねえ、覚悟はできてるわよね? ねえ?」
キツとキュルケが2人を睨みつつ、ペチペチと2人の頬を行ったり来たりしながら杖で叩く。

「しゅツ!?、しようがないじゃないか! 何処を探しても品切れだつて!!」

「しょ、しようよ! 私達だってギリギリまで探したのよ! でもどこも無くて…。再入荷にしてもラグドリアン湖でトラブルが発生してて目処が立たないって言うし。どうにもならなかったんだもの!!」
「だから? なに? ん?」

と、キュルケは無表情で2人の言い訳を切り捨て、杖を先ほどよりも強く振るってベチツベチツと言う感じで2人を叩き続けた。

「ちよツ! まっ、痛いッ。待って、くれたまえ! ホント、まっ…。痛い痛い! ホントごめんなさいって! 止めて!! 痛いってば!」

ちよつとキュルケがガチギレしてて怖いが予想していた事なのでしようがないと思う反面、今日一日待ってる間のタバサの狂悪な誘惑が予想以上に酷かった(どんな誘惑だったかは本人の名誉のため黙秘)ので真面目に探してんの? とイラつとした気持ちもあった。それはまあいいとして。良くはないんだけど…

「なあ、精霊の涙ってラグなんとか湖のトラブルを解決できれば手に入るのか?」

「ん? そうだけど知らないのか?」
「覚えてねえよ」

俺はモンモランシーの言ったトラブルについて隣にいるジンに話を聞く。多少口調が荒いのは許してほしい。結構マジで精神的にキてる。

ジンも俺の顔と喋り方を見てうわーって表情してるし。

「えつと…、精霊の涙つてのは正確に言えば水の精霊の体の一部の事でだな。それでそれを手に入れるには当たり前だが水の精霊に分けてもらう必要があるわけで…」

「あー、なるほどなあ。その水の精霊がトラブル起こしてるから手に入れられない、と」

俺は大体察して納得した。そういえばそんな感じだった気がする。どんななんだったかは全く思い出せないけど。

「まあ、そんな感じだ。で、水の精霊を説得してトラブルを解消してやれば精霊の涙をまた手に入れられるって訳だ」

そこら辺は覚えてる。なんとかの指輪？ を取り返す代わりに涙を貰えたんだったけなあ。

……じゃあ話は簡単じゃん。

「よし。その湖行ってトラブル解決して涙貰おう」

俺はそう宣言し、そして行くよな？ と、皆を一瞥した。

「へッ!? ちよ、ちよつと何言ってるの？ そんなの無理に決まってるじゃないのッ！ あなた水の精霊がどれだけ気難しくて面倒臭いのか分かってるの?」

「いや、全く分からん」

「バカじゃないの!?! これだから平民つてのは…。良い？ 水の精霊つてのはね私達人間とは全く別の価値観持ってるの？ しかもすんごくプライドが高くて我儘というか自分本位というか…兎に角、水の精霊にとって人間の事情なんて関係無いの。だから例えばグラドリアン湖に行ったとしてもトラブルの解決どころかそれ以前に水の精霊にすら会えないわよ」

俺のテキトーな返答に対し、ぜえ…ぜえ…とモンモランシーが一気に捲まくし立てた。

その剣幕にすつと俺は目を逸らした。なんかごめんさい。

「あんた妙に水の精霊に詳しいわね?」

「あ、えつと…。あたしの家はトリステイン王家と水の精霊との交渉役を何代も務めてきていたのよ。……まあ、今は別の家が交渉役に

なつちやっただけど」

キュルケの質問にモンモランシーは微妙に気まずそうに答えた。

まあそんなことより、

「交渉役だったってことは呼び出せるんだろ？ なら問題無いんじゃない？」

「あのねえ…。確かに一度だけ会った事あるから大丈夫だけど」

俺の質問にも妙に歯切れ悪く答えるモンモランシーの肩に突然ガシツとキュルケが叩きつけるように手を置いた。

「ねえ、アンタさあ文句言ってられる立場だと思ってるの？」

「はいっすいません！ 全力で協力させてもらいます!!」

キュルケの睨みとドスの利いた声によってモンモランシーの態度は一転し、協力してくれることになった。

うん。女の子って怖いね。

まあそんなことは置いといて、とりあえずの計画をテキストに話し合う。

そして……

「んじやこんな感じでいいか？」

と、大体の話をまとめてジンが締めくくる。

「わかったわ」

「了解した」

「それじゃあ明日ね」

モンモランシー、ギーシュ、キュルケが返事をしてそれぞれ部屋に帰り、

「んじや俺も」

「おう。…その、頑張れ？」

ジンの言葉に笑顔と殺意をぶつけて俺はドロロンツと影分身を解いた。

「ふう…」

と、ジンの部屋に送った影分身を戻した俺は小さくため息をつく。

「ん？ どおしたの？」

俺のため息に俺の胸に倒れ込んで引っ付いていたタバサが俗に言

う甘ったるい砂糖菓子のような、多分一生聞くことは無いような声色で話しかけてきた。ホント誰だよレベルである。

俺はそんなタバサを撫でながら先ほどまで話し合っていた事を思い出し、意を決してタバサに話しかける。

「な、なあタバサ…」

「シャルロット」

「…えっと」

「シャルロットってよんでくれなきゃいや〜」

プク〜つとタバサは頬を膨らませつつその瞳を潤ませ甘えた声で我儘を言ってくる。

「……シャルロット」

「うん」

鈴を転がしたような可愛い声と笑顔で男の本能を刺激してくるが、俺は我慢ができる子だ。

「シャルロット。俺、シャルロットの両親に会いたいなあ」

「……なんで？」

一瞬にして部屋の温度が下がった気がした。さっきまでの甘デレ空間が一気に殺意と冷気で満ちていく。

ってか両親相手ですら嫉妬対象って…。今朝よりさらに悪化してる気がしないでも無い様な有る様な。うん悪化してるな。

「ほ、ほらシャルロットと恋仲の身としては親への挨拶は必要な礼儀だろ？ 大切な一人娘を貰う訳だし？ な？」

俺の言い訳にタバサの目に光が戻り、能面の様な表情は崩れてニヤアと言うような崩れた笑顔となり、手に持っていたナイフを床へ放り再度抱き付いてくる。

「んっもう〜。そうよねえ、わかった。じゃあいついく〜？」

「お、おう。善は急げって言うし明日にはでたいなあ。忍術使えばあつという間だろし、シャルロットには家まで案内頼めるか？」

「うんッ！まかせて」

そう言っただけでタバサはぎゅーつと俺の胸に顔を嬉しそうに埋める。

ああ、可愛い。色々とやらかしたい気持ち在必死に抑え、俺は目を

瞑
つ
た。
。

遭遇

ジンSide

昼の空。太陽は天高く昇り、暖かな陽光を俺達へと注いでいる。……などと言う戯言はどーでもいいとして。

俺達は今とあるお屋敷の上空、シルフィードの背の上でのんびりとしていた。

「いやー、実はラグドリアン湖を見るのは初めてだったが、噂に違わない雄大で美しい湖だったね!」

「そうですねえ、中々に綺麗でしたね。幼い頃トランスバール水族館で見た宇宙電飾クラゲと同じぐらいに」

ギーシュとチトセがここに来る途中に眼下に広がっていたラグドリアン湖の事を語り合っていたり。

「ってか宇宙電飾クラゲってなんだよ……」

「確かに雄大って言えば雄大だけど……さすがに村が半分以上水に沈んでるのは雄大過ぎじゃないかしら?」

「いやどう見たってアレは異常でしょ。私が昔行ったときはさっき見たのよりもっと小さかったわよ」

と、キュルケは呆れた感じに、モンモランシーは何か落ち着きが無いように下を見ながらキュルケの言葉に答えた。

さて、何故こんな感じになっているのかというと、昨夜の話し合いでキキがタバサの実家がラグドリアン湖の近くにあるからそこを拠点にラグドリアン湖のトラブルの解決しに行くと言ったのが始まりである。

その後キキはまるで用意していたかのように、というか用意してあった考えを一通り説明し、そして俺達はその計画を了承し今に至るわけだ。

「ね、ねえ。ミスタ・アルベルト。ちょっと聞きたいことがあるのだけれどもいいかしら?」

「ん? いいよ。後俺のことはジンって呼んでくれても構わないよ」

先程から妙に挙動が不審なモンモランシーが声を掛けてきたので

俺は笑顔で答えた。最近キャラ崩壊が酷いが一応俺は超エリートで頭も良く性格も良いイケメン凄腕メイジである。

断じて不憫不幸キャラやチトセのお守りキャラではないッ！決して無いんだッ！！

おっと少し熱くなってしまった。

「そ、そお？ それならお言葉に甘えて…。あ、それで聞きたいことってというのは、ここってガリア側の領地よね？」

「ああ、そうだね」

「えと、あの私の記憶が間違っていないならなんだけど…、ラグドリアン湖のガリア側の領地って確かガリア王家の直轄だったような？」

「うん間違っていないよ」

「えーと、それでそのお屋敷がタバサの実家って事は、その彼女もしかしてだけどまさか王族の関係者…ってそんな訳ないわよねえ？」

だって彼女家名を名乗らないし。あ、あれよね？ お屋敷の使用者の娘さんとかよね？ そうよね!!」

と、モンモランシーは自ら喋っている内にドンドンと顔を青くしていき、思い当たってしまったタバサの正体を否定してほしいと涙目になって迫ってきた。

そんな彼女に俺は優しく笑いかけ…

「その、モンモランシー。君の事は忘れないよ」

あからさまに目を逸らして残念そうに言い返した。

「……………おわった。我が家終わったわ。…あ、あああ、あゝ」

モンモランシーは俺の回答にその場で突っ伏して泣き始めた。

いや、まあ本当は大丈夫なんだけどな。

タバサの実家であるオルレアン家は後継者争いの色々で王族としての権利や地位を剥奪されている訳で、この事が明るみに出ても多分モンモランシーが捕まってその煽りでモンモランシ家が色々マズイ立場になるだけ…あ、全然大丈夫ではなかった。

「自業自得よねえ。ま、路頭に迷うことになったら友達のよしみでウチの使用人として雇ってあげてもいいわよ？」

それにしてもまさかガリア王家ゆかりの出だったなんてねえ。何

か事情があつて名を隠してるとは思つてたけど、こういうことなのね」

キュルケは蹲うずくまつて震えているモンモランシーの背をポンポンと叩きながらしんみりと眼下の屋敷、オルレアン家を見つめた。

「ん？ あ、来た」

キュルケにつられて屋敷を見ると丁度屋敷から黒く小さな鳥の様な物が飛んできた。

俺はキキに言われていた通りに渡された巻物をほどこき中の白紙を外へと開く。

飛んできた黒い鳥の様な物は開いた白紙の上へと迷いなく着地するとまるで糸を解いたように形を崩して白紙に広がり文字となつて行つた。

「へえ、これはすごいマジックアイテムだね。彼の居た国では優秀なメイジがいるんだね」

とギーシュ達はこれを見て感心したように声を上げた。

キキの使う忍術は基本的にマジックアイテムを使っていると本人から嘘の説明をされていた。

本人曰くその方が色々面倒がなくて楽だそうだ。確かにその通りである。

「どうやらもう大丈夫みたいだ。降りて訪ねて来てくれて。シルフィード、お願いできるかな？」

「きゅい」

シルフィードは鳴き声一つゆつくりと地上へと降下していった。

「これはこれはお越しいただきありがとうございます。お嬢様からお話は伺っております」

そう言つて俺達を出迎えてくれたのは背筋がピンツとしている若々しい印象をもった老執事だった。

名をペルスラン。ローエン・ペルスランと言うらしい。

俺はこの事に対し何も言わないしツツコまない。

「おう。来たな」

客間に通されるとキキが一人でくつろいでいた。

「あら？ あの娘は大丈夫なの？」

「なけなしの特性睡眠薬を飲ませて眠らせてある。明日の朝まで何があっても絶対に起きない。むしろケチらないで最初から使っておけばよかったと後悔してたりもする。しかも口：ペルスランさんがどう見ても指揮者コンダクターな人にそっくりなせいで実は見透かされてるんじゃないかと言う恐怖と言うか罪悪感がヤバイ」

とキキは大きなため息を吐いた。

しかしその割のはくつろいでいるように見えるのだが、キキって言動が少し滅茶苦茶なところ多いよな。

実は結構精神が不安定なアレな奴っぽい？

「ね、ねえ。わ、私はどうなっちゃうのかしら…。や、やっぱりその、打ち首になっちゃったり…」

俺がキキのアレさ加減に悩んでいると顔を青くしてビクビクしていたモンモランシーがキキにタバサにやってしまったことについて自分はどうなってしまうのかと質問した。

「え？ あく。そこら辺は適当に誤魔化しておいたから公的には何もないと思うぞ。まあ、ただ解毒後にタバサにこの二日間の記憶が残ってたら本人から報復されるかもだけどなく」

「そ、そうなの!? ま、まあ本人から多少の折檻で済むなら…。よかつた〜」

モンモランシーはキキの言葉を聞いて顔色を戻してその場にへたり込み安心したと一息ついた。

しかし、タバサちゃんはあるな事にされてただの折檻ですむのだからか？

「で、モンモランシーの折檻やらなんやらは後にして、この後はどうするの？」

「とりあえず湖に行くしかないだろ」

「ふむ、ならばはやくいこうじゃないか。先ほど上から見たラグドリアン湖もとても良かったが近くで見るのもまた別の風情があって…」

「ならお弁当を作っていきましょう！ やはりピクニックにはお弁当です」

「ピクニックじゃないから！」

ギーシュとチトセの言葉に俺とキュルケがハモってツツコミを入れる。

チトセはともかくギーシュも何気に観光気分だった。

でも確かにギーシュもどちらかと言えば巻き込まれた側の人間だったし、実際観光目的もあるのかもしれない。

……つてなわけで俺達はラグドリアン湖までやってきた。

もちろん弁当なんて無い。実際チトセが作ろうと他人様の家の厨房へと駆けだそうとしたが物理で止めた。フラグメント・パワー使って殴り倒した。

結構加減無しで後頭部を殴打して一生目覚めないように祈ったのにタンコブ一つ作っただけでケロっとしてやがった。

「広いな〜」

キキがそう言つてラグドリアン湖を見渡した。

他のみんなも上空からでは無い、近くでまで来て見たラグドリアン湖の異常な広さに驚嘆の声を上げていた。

「で、これって何がどういう感じなの？」

とキュルケは当たり前前の疑問を口にした。

そりやそうだ。俺とキキは原作を知っているからラグドリアン湖のトラブルって言うのがある理由によって精霊が増水させていると解っているが、他の皆はそんな事知るはずがない。

さて、どうやってそれを教えるか……。

「とりあえず湖畔こはんに沿って歩いてみよう。さっき向こう側に動く何かが見えたし」

俺がどうするか考えていたらキキがある方向を指さして行動方針を提案した。

「何かって…、何だい？」

「何だろうな？」

「いやいや、キミは相変わらずだね!? 大体向こう側って、距離があつ

て全然見えないじゃないか。ホントに見えたのかい？」

「ん、眼は良いからな」

「眼が良いって、そんなんで見える距離じゃあ…」

「そんなの行ってみれば分かるんじゃない？　ごちやごちや言ってるより今は動いてみるのが一番でしょ」

そう言つてキュルケはキキとギーシユの言い合いを止めて歩きだした。

ギーシユはまだ何か言いたそうだったけれども俺も含め皆がキュルケの後に続いて移動し始めたので諦めたように項垂れて最後尾を歩いて来た。

「あら、何か居るわね？」

「本当に居たわね」

しばらく歩きキキが示した地点の近くへと来た頃、キュルケとモンモランシーがそこそこ遠くの方に動く何かを発見した。

そして俺達は更に近づいていくと動いてるその形が見えてきた。どうやらそれは馬と人のようで、向こうも歩いて近づいていく俺達に気づいたのか立ち上がりこちらを振り向いた。

容姿は赤い長髪に黒地に赤いラインの入った独特な衣服を着ており、腰には剣が下がっていた。

………つてかき、こいつ、

「おひさ〜」

「なんだ、お前か」

アツシユだった。

あのテイルズオブジァビスのアツシユだった。

あ、いや確かにアツシユだけど別に本人様つて訳じゃないか。いつもみたいにそっくりさん…

「あ、因みにご本人様だから」

俺の表情から何か察したのかキキがボソッと耳打ちして来た。意味が分からない。なんで本人いるねん。

「あら知り合い？」

「ああ」

「それにしてもカツコイイ殿方ね。それにその真っ赤な髪。私とお揃いで情熱的で素敵だわ」

「いきなり何ってんだ？ それよりも確かこの湖の指令は飛ばしてねえはずだが、なんで居るんだ？」

「指令？ いや俺達は……」

と、俺が混乱している間にキキはアツシユにこちら側の事情を説明していた。

「なるほど。だからいつものチビが居ねえのか」

「ああ。ところでアツシユは何でここに？ さっき指令って」

「俺はこの湖の増水の調査だ。増水で村一つ沈んだ事で看過できなくなったみたいだな。原因の水精霊をどうにかしろって話が来たんだよ」

「ってことは精霊に用があるのはお互いさまって事か」

キキとアツシユはお互いに何か精霊をどうにか出来る手段をどうする？と、こちらの事を置いてきぼり気味で話を進めていく。

「ねえ、2人だけで話進めないでよ。私達にも分かるように説明しなさいよ」

「ん、そうだな。…えつとこいつはアツシユって言って、ガリアの姫のイザベラの近衛騎士兼花壇騎士団の副団長で、偶にこうやって国として看過できなくなった出来事の解決に出張ってたりするみたいな奴だ」

キキの説明に皆ポカーンと口を開けた。

水の精霊

キキSide

その後、アツシユの正体と言うか肩書き的な物を教えた皆の反応はとても面白い物になった。

特に面白かったのはモンモランシーが辞世の句っぽいものを行いながら入水自殺を凶ろうとして皆で止めた事だ。

いやー、自分が生きてたらモンモランシ家がー！って暴れるわ暴れるわ。

まあ、そんなことはいいとして。

とにかく色々騒がしくなったのも落ち着き、再度アツシユと水の精霊をどうするかと言う話へと戻った。

「まあ、なんにせよ水の精霊って言うのとコンタクト取らない事には話は進まないよなあ」

「何か手があるのか？」

「ん。ほらさつき錯乱して湖に入って行った奴いるだろ？ あいつの家なあ、元水の精霊との交渉役なんだ。だからなんとかしてくれるんじゃないか？」

「ほう？ どうなんだ？」

と、俺の説明にアツシユは地面にへたり込んで呆けた顔をしているモンモランシーへと問いかけた。

「え？ あ、はい。私の家は代々交渉役を承っていました。今は訳あつて外されてしまいました。が盟約は切れていないので呼べば来てくれると思います」

モンモランシーはしおれながらもアツシユへと丁寧に言葉を返す。

「なら呼び出すのを頼めるか？」

「あ、はい。大丈夫です。すこし待っていてください」

モンモランシーはアツシユの頼みに素直に頷いて立ち上がると湖の畔へと近づいた。

しかしやっぱアレだな。権力って言うか肩書きって偉大だよなあ。モンモランシーどころかギーシユとキュルケも妙に大人しい。

まあただ……

「うわあ、なんですかこの毒々しいカエルツ。中々良い毒を出しそうでいいですね！ 毒出しますか？」

チトセはいつも通りだけどなあ。

なんでそんなに毒に興味深々なん？ 毒が手に入ったとしてそれを何に使うのさ。

…まあいいや。

で、そんなこんなでモンモランシーが自身の血を付けたカエルを湖に放してから十数分ほど経った頃、水面がまるで水遁を使った時の様なうねりを見せ何かの形が出来始めた。

「きた？」

「らしいな」

それを見て俺とアツシユはやつとか、と言う感じで一言発し、

「なんだかスライムみたいですね。経験値とか入りそうです（笑）」

「お前は少し黙っておけ！」

チトセはその動きを見て馬鹿にしたように笑い、ジンがいつものように怒鳴る。

「おお、アレが噂に聞く水の精霊か」

「私も初めて見るわね」

ギーシユとキュルケは2人とも初めて見る水の精霊に感嘆の声を上げていた。

「わたしはモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。水の使い手で、古き盟約の一員の家系よ。カエルにつけた血に覚えはおありかしら。覚えていたら、わたしたちに分かるやり方と言葉で返事をしてちょうだい」

俺達がそれぞれ物珍しく見ている中、モンモランシーが一步前に出て水の精霊に対して言葉を放った。

すると水の精霊はモンモランシーの言葉を了承したのか、先ほどまでの前衛芸術的なよくわからない形から一旦崩れ再度ぐねぐねと動き、そして水の精霊はモンモランシーの容姿とそっくりに形作った。「覚えている。単なる者よ。貴様の中に流れる体液を、我は覚えてい

る。貴様に最後に会ってから、月が52回交差した」

モンモランシーの姿をとった水の精霊は最初何かを確かめるように様々な表情を作った後、無表情に戻ってからあらためてモンモランシーの問いかけに返答して来た。

水の精霊が覚えていてくれたことにモンモランシーはよかつたあ、と安心したように一息つくと俺とアツシユの話聞いて欲しいと説明し、後ろに下がって行った。

んじや、とりあえず俺から話してみようかな？

俺はアツシユに自分が先にいいか？ と人差し指で自分を指して許可を貰う。

「あー、話しと言うかお願いなんです、体の一部を分けてもらえないでしょうか？ 俺の主を治療するのに必要なんです」

俺は水の精霊に精霊の涙を貰えるようにお願いした。

……簡潔過ぎた？ まさかのここにきて地味に口下手が災いしたような気がする。

現に水の精霊はさつきから一言も発しない。つてか視線を俺からアツシユへと移動させたし……。

「…俺の番か？ 俺の話したのは、この湖の増水を止めてくれて事だ。もし何か理由があるって言うなら教えてくれ。もし俺に出来る事なら可能な限り協力をする」

と、アツシユも結構簡潔に要件を伝えた。

おや、アツシユもこんな感じならさつきの俺も別に変じやないか？ 変じやないよな？ まあ大丈夫だろう。

そんな事より、俺とアツシユの話聞き終えた水の精霊は黙ったままその表面を波たたせ始めた。

そして、

「よかろう」

と、波が収まった水の居精霊はいともあっけらかんと俺達の要望を了承した。

なんだよ、モンモランシーが気難しいとか何とか言うから構えてたのに。

まあいいや。

俺がそんな感じで内心ホツとしていると水の精霊は更に言葉を続け始めた。

「本来であれば、単なる者の言葉など捨てるどころ。だが、その共生せし者とその言葉あれば、我はお前らの願い聞き入れよう」

水の精霊はアツシユを見ながら言った。

あー、これってつまりアツシユが居たからこんなに簡単に話が進んでるって事か。

…おお、超ラッキー。やっぱり俺、普段の行ないが良いからなあ。

「では、その理を繰る単なる者」

水の精霊は俺を向いてそう言った。

どうやら俺の要望から聞いてくれるようだ。と言うか理を繰る単なる者って何よ？ 俺、そんな意味の分からない設定いらんんですけれどもー。…まあいいや。

俺は水の精霊に言われた呼称に関して考えるのを止め、腰の忍具入れから水筒を取り出して蓋を開けて水の精霊はへと口を向けた。

「うおっ」

水筒を向けた瞬間、水の精霊は身体の一部を切り離すとそれを飛ばしてきた。

俺は多少驚きながらもしつかりと水筒へとキャッチ(?)する。

よし、後は屋敷に帰って解毒剤をモンモランシーに作らせるだけだ。

「では、共生せし者。汝の要望通り水を引かせよう。代わりに我が要求をお前らに叶えてもらおう」

と、次に水の精霊はアツシユへと顔を向け話を進め始めた。

「ああ、構わねえが少しいいか？ さつきから俺に対して『共生せし者』って言うが、もしかして俺の中のコイツが分かるのか？」

「分かる。我が同朋をお前に感じる。そしてただ有るのではなく共にある事も」

「…そうか。話を遮って悪かった。続けてくれ」

アツシユは水の精霊との意味深な会話を終わらすと話の続きを促

した。

アツシユの中にあるもの……。話の内容から推察するにアレだよな？ 第七音素集合体^{ローラライ}。

アツシユが一体どんな経緯でこっちに召喚されたのかは分かんないけど、精霊でアツシユと一緒に言うところぐらいしか思いつかない。

なんていうかあ……カツコイイなーそれ。

つとか俺が思っていたら水の精霊とアツシユの間では話がトントン拍子で進んでいた。

「では我が秘宝。『アンドバリの指輪』を頼んだ。もし、約束を反故にしたならば、如何な理由を語ろうとも我は秘宝を取り戻すまで再度水を増やし続けようぞ」

「ああ、分かった」

と、アツシユは水の精霊との約束を承諾し、そして水の精霊は用は済んだとばかりに水分身が解ける時の様にその姿を崩し、湖へと帰って行った。

「結構簡単に済んだな」

「そうだな。だが、俺の方はこれから大変になりそうだ。クロムウエル。アルビオンで新皇帝やってる奴だったか……。死人を操ることのできる指輪。戦争に利用するにはうってつけだな」

俺の言葉にアツシユは小さく一息つきながら答えた。

確かに大変だろうなあ。まあ頑張ってくれとしか言いようがないけど。

「んじや、お互い目的達成ってことで。アツシユはこの後どうすんだ？ 直ぐに城に帰るのか？」

「そうだな。あの2人を放つとてくと喧嘩ばっかして勉強を一切しねえからな。爺さんの奴は全く止めようとしねえし」

「2人？ まあよくわかんないけど姫様さんにはこの事は内緒でお願いな」

「言いやしねえよ」

俺の頼みにアツシユは一言、呆れたように返すと馬に乗り去って

行った。

「さて、屋敷に戻ってタバサを元に戻すぞ。つてことでモンモランシー解毒薬頼んだぞ」

「え、ええ。これだけの量があるなら簡単にできるわ」

アツシユを見送った後、俺達もさっそく解毒薬を作つてタバサを元に戻すためにモンモランシーに水筒を渡して屋敷へと足を向けた。

ただ帰る途中、チトセが

『これだけの量が有るんですから、解毒薬だけに使うなんてもつたいないですよ。…あ、そうだ！ 実は私ちよつと作つてみたい薬があるんです。なので後で分けてもらつてもいいですか？』

などと言うどう考えてもやらかしそうな発言をしていたので屋敷に着いたら幻術かけて意識を奪つておこうと心に誓つた。

——おまけ——

【とある日のプチ・トロワ】

アツシユがとある山奥の村で任務を終えてからしばらく経つた後のこと、いつものようにイザベラへ政治や兵団の運用やらなんやらと教育している時だった。

メイド 「失礼します。あの、アツシユ様。実はアツシユ様に会いに来た、と言うお方がいらつしやたらしいのですが…」

イザベラの部屋のドアの向こうから声が掛かった。

アツシユは一瞬「なに？」と首を傾げ、ドアを開きメイドを部屋の中に居れた。

アツシユ 「おい、俺に客との事だが、どんな奴らだ？」

メイド 「えっと、わたしは衛兵の方からアツシユ様を呼んでくるようにと言伝を預かつただけですのでお姿は…。なんでもこの手紙を渡せば分かるとの事らしく…」

懐から預かつたらしい手紙を取り出しアツシユへと渡した。

アツシユ 「ああ、こいつはあ…。なるほど分かつた。言伝ご苦労だった。お前はもう戻つていいぞ」

手紙を見てこの小宮殿に来た者に思い当たり、メイドを下がらせた。

アツシユ 「少し開けるぞ」

イザベラ 「はいはい、ご自由にどうぞ。でもアツシユに客って、珍しいなんてもんじやないわね。あんた外でまた何かやつたんじやないでしょうね。前に貴族連中からとんでもない量の陳情ちんじょうの書簡が届いたんだけど？」

アツシユ 「あゝ？ 知るか。俺は間違ったことをしてるつもりはねえ。それよりも俺が居ねえからってサボるんじやねーぞ」

イザベラ 「そんな怖いことしないわよ。ベーっだ」

ふくれっ面のイザベラを後あとにアツシユは来訪者が待っている門へと移動した。

|||||

エドナ 「遅い。乙女の肌は弱い。こんな日が強い場所に長時間いさせるなんて男としてどうなの？」

門の近くへとアツシユが歩を進めると邂逅一番文句を浴びせられた。

アツシユ 「日傘さしてるくせに何言ってるやがる」

エドナ 「そうゆう問題じやないのよ。まったく」

ユルバン 「はっは。お久しぶりですなアツシユ殿。つと言ってもひと月も経ってませぬが」

アツシユ 「まったくだ。まさかこんなに早く来るとは思ってもみなかったぞ」

目の前に居る2人に呆れたようにアツシユは言い放った。

エドナ 「しようがないじやない。あの村から来たっただけで気味悪がられて色々不便なのよ」

アツシユ 「…はあ、そうかよ。村の方はどうしたんだ？」

エドナ 「村はそのまんまよ。元々10年も村を維持し続けてたんだもの。これからも維持しておいてって命令しておけばガーゴイルたちは土石の魔力が切れるまで維持し続けるわ」

何も問題ないわと言う様にドヤ顔でエドナは語る。

エドナ 「さて、じゃあアツシユ。約束通り頼らせてもらおうわね。とりあえず当面はお爺ちゃんと住める場所を提供してくれればいいわよ?」

アツシユ 「ツチ、似合わねえことはするもんじゃねえな。……ついて来い。とりあえず部屋を用意させる」

ユルバン 「すいませんなアツシユ殿。お世話になります」

|||||

アツシユ 「つつーことで、しばらくの間こいつらを住ませるが文句ねえな?」

イザベラ 「あるに決まってるじゃないのよッ! 何勝手に決めてるのさッ。大体ここは私の小宮殿なのよッ!」

メイドにエドナ達の部屋の用意を頼んだアツシユはイザベラへと事の顛末を伝えた。

エドナ 「あら? 一国の姫のくせに器が小さいわね。噂通りのボンクラっぽいし」

イザベラ 「はあッ!!? ど田舎の木っ端貴族の娘っ子が姫である私になんて言いざまなの! 不敬罪よ! 今すぐその首を刎^はねっ…て、ちよつとーッ、何アツシユの後ろに隠れてるのよッ。しかもそんなに引っ付いて!! 離れなさい!」

エドナ 「いやよ。大体わたしたちはアツシユの正式な客人なのよ。いくらお姫様だからって礼儀を欠くなんてどうなのかしら?」

イザベラ 「アツシユの後ろに隠れて言う奴が礼儀がどうのなんてちゃんちやら可笑しいわね!」

アツシユ 「だあーッ!! うるせえ! 人を挟んでぎやあぎやあ喧^{やかま}しいんだよッ。テメエらそこに並べッ! 大体お前らはなあ……」

自分を挟んで喧嘩し始めた2人にアツシユが眉間に深い皺を寄せ叫び、そして長い長い説教をし始めた。

これ以降、このプチ・トロワでは2人の娘が1人の騎士を巡っての悶着が色々と起こるのだが、これと言って話を考えてないので脳内補完で適当に妄想してください。

治療完了

キキSide

屋敷に帰り、モンモランシーにはさっそく解毒薬の調合を始めてもらった。

もちろんそれに参加しようとしたチトセを当身で意識を奪わせてもらった言うまでもない。

これでやつとタバサも元に戻る。

「でも戻ると分かると少しもつたない気がしてくるのってなんでだろうなあ?」

あの狂気を孕んだ愛が少し恋しく思ってしまう。

あんまり認めたくないけど俺ってやつぱMなのだろうか…。

まあいいや。

でだ、俺の性癖なんかはどうでもいいとして、モンモランシーが調合している間にタバサの母の治療を行うため俺はタバサのお母さんが眠っている寝室へと侵入した。

「とりあえず診察して、問題無ければ採血して血中成分の分析してつと。原作通りの薬物による精神錯乱ならそれで多分解毒剤の生成できると思うんだけどな….:….:うっわ」

なんてもし原作通りじゃなかったら厄介だなあ的な事をあえて言葉に出せば逆に何も問題無く大丈夫かも、と思ってたけどダメだった。

この世界が原作通りなわけが無い事は分かってたし、だからタバサのお母さんの病状や原因も原作通りじゃないかもな….:….:予想はしてたけど、まさか心臓に変な石が埋まってるとは….:。しかもそれが精神錯乱の原因っぽいし。

「いくら物理法則とか現代医療とかその他諸々に喧嘩売ってる医療忍術つても、さすがに臓器云々に直接手出す施術するには機材とか道具とか色々足りなさすぎだしなあ」

せめて輸血と一時的にでも心臓の代わりに血液の循環をしてくれる何かがあればなあ。

こんな事なら生まれ変わる時の特典で変な自分ルールでスペックだけ上げるんじゃないかとベクトル操作でも貰っておけばよかつ…あ。

「あー、丁度いいのいるじゃん」

俺と同じ特典付きのが。

ってなわけで、客間でデルフの手入れをしていたジンに事情を説明して手伝いをしてもらうことにした。

「ええ〜。どうしよっかなあー」

頼んだらニヤニヤしながらそんなことを言ってきた。

どうやら俺から頼み事をされていると言う状況に優越感を覚えているらしい。ぶっ殺してやろうか。

まあ、今はいい。

どんなにムカつこうとタバサのお母さんの手術にジンの持つ特典。NEEDLESの能力の1つである変ドツベルゲンガー身が必要であることは絶対だし、今は頭を下げて機嫌を取ってやるしかない。

こんな事ならどつかで貸し残しておけばよかった。こいつからの頼みや迷惑に関しては今回のも含めて金でチャラにしちやったからなく。

「…といえ貸し1で頼むよ」

「はあくあ。しよーがないなー。そんなに言うなら手伝ってやろうかな。ま、俺に感謝してな？　まあ友達の頼みだし特別に協力してやるよ」

ものすごくウザい。

そしてお前のことを友達だとは一度も思ったことは無い。…と言う本音は隠し、笑顔でありがとなど社交辞令を返して協力を得た。

で、まあそんなこんなでジンとタバサのお母さんの手術を開始した。

結論から言えばめっちゃヤバイ事が起こりかけ、久々に超必死に俺ができる限りの全力の技術を持って何とかした。マジでヤバかった。

具体的に言うと…

「なんで肉体が変質し始めて化け物になりかけるんだよ」

「知^{原作}ってる話しと全然違う…。ほぼ人間一人分の細胞生成したぞ。ああ、カロリーが足りねえ」

と、そんな感じである。

原因の心臓に埋まっていた、正確に言うならほぼ融合していた石を心臓ごと身体から切り離したら突如としてタバサのお母さんのチャクラと石から出ていた謎エネルギーが異常な流動を始め、細胞を変質させ始めたのだ。

俺は変質し始めた細胞や臓器を医療忍術で止めたり、戻したり。手遅れなのは切り取ったりして何とか食い止め、ジンには特製の兵糧丸を食わせ変^{ドツベルゲンガー}身で切り取った部位の修復再生させたり減った血液を補充させたりし続けさせて事なきを得た。

「つてか、このバケモノ化見て思い出したつて言うか思い至つたと言
うか。この石もしかしてエクスファイアだったり？」

「え？ エクスファイアつて確か…T O Sの？」

「うん」

「なんで、そんなもんがあんだよ」

「知るか」

いや、なんとなく察しは出来る。つまりはガリア王、又はその側近ないし使い魔的なポジションにシンフォニア世界からやってきた本物が居ると言う厄介な状態なんだろう。

確かエクスファイア作ってる組織は…えっと、ディザなんとかだったはず。人間牧場とか言うの作つて人間を豚があ！ とか罵つてる奴ら。

リオンがルイズに召喚されたから敵はステイニーかステイニー2のボス系だと思つてただけだなあ。

あ、いやタルブの村にモリスンさん出現したつて言うし、ティルズシリーズなら何でもつて感じか？

……まあいいや。つてかもういいや。

考えても如何こう出来る訳じゃないし考えても無駄だよなあ。うん、考えるの止めた。もうメンドイ。

俺は思考を放棄し、とりあえず手術に使用した道具や切り取った生ものを片付けはじめた。

キュルケSide

水の精霊から秘薬を貰ってから1日が経った。

今、タバサに昨夜モンモランシーが調合した解毒薬をタバサの使い魔の彼が飲ませるために部屋に入って行ったわ。

本当は私も付いて行ってちゃんと正気に戻るか確認したかったのだけど、あの状態のタバサの視界に入るのは少し危ないならここは我慢しなきゃね。

それから少しして部屋の中からドタドタと小さな物音が聞こえ始めて、そして…

「分かった分かった。じゃあキュルケ連れて客間で待ってるから」

と、部屋からまるで追い出されるように使い魔の彼が出てきた。

「どうしたの？ タバサは…」

「ん、あー、とりあえず元にはちゃんと戻った。ただ身だしなみにちよつとアレだから直してくるって」

「……分かったわ。元には戻ったって言うならそれでいいわ」

まあ彼が妙に言い含んでるのが気になったけど、彼が部屋から追い出されたって事は惚れ薬の影響は無くなったって見ていいはずだし。

なら彼の言葉を信じて大丈夫でしょ。

私はそう結論を出し、使い魔の彼の後に続いてタバサの部屋の前から客間へと移動した。

タバサSide

私は部屋から遠ざかる2人の足音を確認してから扉から耳を放し、そして部屋全体にサイレントを掛けて音が一切外に出ないようにした。

それで私は…

「~~~~~ツ~~~~~
!!!!??」

大声で叫んだ。多分生まれてこの方出したこともなかったし、自分でもまさかこれほどの声を出せるとは思わなかった程の大声だ。もちろんサイレントによって音は消されていて外にも一切漏れ出ることは無い。

だからこそその大声だ。

「~~~~!! ツ!? # \$ % & ツ!!! ~?」

もはや自分でも何を言葉にして叫んでいるのが分からない。

いや、言葉なんて本当に出しているのか怪しい。そのくらい自分は錯乱していた。

だって当たり前だ。いくら惚れ薬で心が狂っていたからってアレは無いッ。

心が狂ってる間の事はつぶさに思い出せてしまう。キキを見る度に罪悪感や羞恥に思考を支配されて彼の顔をまともに見れなかった。彼に対してあんな酷い事をしてしまった。

刺殺しようとしたり、絞殺しようとしたり、撲殺しようとしたり、斬首しようとしたり、氷漬けにしようとしたり、他にも……。

さらには彼に対してあんなはしたない姿を晒したッ!

なんだあの獣の様なキスは!? キスって言うのはもっところ…: 雰囲気、つてそうじゃない!

他にもあの娼婦みたいな言動はなんなのだろうッ!? あんなはしたない言葉を使ってはしたない姿で彼を誘惑しようとしてッ!

今でも頭をよぎる自分が出したと思えない妖艶な声に言葉。

何が『一つになりたいの』だ、『あなたと気持ちよくなりたい』だとか、あまつさえ『キキのお【自主規制】を【自主規制】して【自主規制】なの』なんてッ!

さらにそれに加えて彼に私のあんな場所を……、

「ツツツ!!!」

あり得ない。あり得ちゃいけない。私はそんな女じゃない!

ああ、夢であってほしい。

でも夢じゃない。

私は顔を真っ赤にしながら恥ずかしさを紛らわすために部屋中を

ゴロゴロを転がしては止まって悶えてを繰り返して何とか平静を戻そうとするが全くできず、しまいには情けなさで恥ずかしさで涙が出てきた。

それからどれくらいたったのだろうか…。

私はベットの所で布団にくるまりしばらくの間、うずくま蹲ってやっと落ち着きを取り戻せた。

「……………」

のっそりと布団から顔を出して大きく深呼吸。

息を整え、いつも通りに行動できるよう落ち着いた思考をより冷静にしていく。

今まで北花壇騎士団として経験し鍛えた心構えがこんなところで役に立つとは。

「ん」

どうやらサイレンの効果も切れているようで、叫んで少々枯れてしまった私の声が耳に届く。

私はベットから降りて姿見で今の自分の顔を見た。

「酷い顔」

私はそんな自身の顔に呆れ小さく呟き、ため息を吐いた。

とにかく落ち着いたものの、こんな顔では人前になんて出れない。

私はテーブルに置いてある水差しからタオルに水を含ませて顔を拭いた。

「ふう」

私は色々と酷くなっていた顔を綺麗にして一息つく。

さすがに目元辺りが多少赤くなってしまうているが、これはどうしようもない。

キュルケのように化粧が上手ければ隠したりなどできたかもしれないが、私は必要ないと切つて捨ててしまっていたので、例え手元にあつたとしても無理だろう。

ともかく、一旦はこれで良しとするしかない。

私は部屋を出る前に最後にもう一度深呼吸をして客間へと移動した。

キキSide

ガチャリと、客間の扉が開くとそこからタバサが姿を現した。

「タバサ！ ああ、心配したのよ。朝、彼が解毒薬を飲ませて元に戻ったって言うのに今の今まで部屋から出てこないんだもの。もしかしたらまだ何処か不調なんじゃないかしらって、モンモランシーにどう責任取ってもらおうかと話し合ってたところなのよ？」

タバサの登場に誰よりも早くキュルケが近づいてタバサを抱きしめた。

それを機にモンモランシーにギーシユ、チトセ、ジンと良かった、大丈夫かとタバサの近くにより思い思いに声を掛けていった。

「だから大丈夫だって言ったのに。まあこれでまたいつも通りだな」

と、俺も何だかんだと言いつつ、ひと安心とタバサに近づこうとして

「……………」

ススーツとタバサに距離を取られた。

そんなタバサの行動に俺とジン以外の皆は頭に？を浮かべて俺とタバサを見合った。

まあ確かに薬に侵されている間の事はきっちり覚えているはずだし、こんな反応になってしまうのも無理はないよな。

「……………」

「……………」

俺も色々あったタバサとの距離をどうするかと悩んでいると、俺の顔を見ていたタバサは俯き、顔が少しずつ赤くなっていった。

……………あ、これマズイかも。

俺は色々やっちゃった事を思い出し、皆が、特にキュルケとチトセが余計な事を聞く前に誤魔化そうと口を開けようとしたが、

「あら？ どうしたんですかタバサさん。キキさんを見て急に顔を赤くして。まるで、つい勢いで思いつ切りやってしまったものの、いざ

冷静になつて思い出すと凄く恥ずかしくなつてしまつた、みたいな表情をされて？」

チトセが一足先に余計な事を。しかもあり得ない程ピンポイントで当ててきやがった!?

そしてそれを聞いたタバサも、まさにボンツと言う擬音が聞こえてきそうなほどに一気に顔を赤く染め上げ、全身でチトセの言葉を肯定しちやつてる反応を見せてしまつていた。

「ドウイウ、コトカシラ?」

キュルケがヤバイ目で俺を睨んできた。

なので俺は様々なシユミレーションを刹那の内に思い描き、その結果として、

「だって、我慢できなかつたんだものツ!!」

開き直つて正直にぶちまけることにした。

最初は我慢してたがちよつと触るぐらい、軽くさするぐらい、少し揉むぐらい、とやつていつてたら自制が効かなくなつた。ホント男けだものつて獣なんだから。やーねー。

なんて冗談交じりに言つたが、キュルケの目に浮かぶ怒りは和やわらぐどころか更に強くなつていき、

そして俺は次の瞬間火だるまとなつた。

リオンとルイズのターン

リオンSide

「んん♡、やっぱりこの店のクックベリーパイは最高ね」

「はあ、それはいいが一体何件店を回るつもりだ。この店で4件目だぞ」

「別に何件回ろうといいじゃない。姫さまとの約束の時間までまだあるんだし。それに、そう言うリオンだつてしつかり食べてるじゃない」

「別に僕はちよつと小腹がすいていたからで…」

「ならやっぱりかまわないじゃない」

そう言つてルイズはパイの残りを美味しいと顔をほころばせて咀嚼した。

僕達は今、城下町へとやって来ていた。

何故城下町へとやって来ているのかと言うと、数日前に僕とルイズの下に戴冠し、女王となったアンリエツタから話しがあると手紙が送られて来た事から始まる。

ルイズはなんだろう？ などとふざけたことを呟いていたが、このタイミングだとしたらタルブの村の事しかないだろう事は明らかだった。

そして昨日、平常日であるため学院から特別外出許可を貰い、今朝早くから張り切っているルイズに連れられ城下町へと来た。

約束の時間は夕刻となっており、朝早くからくる必要は無いのだが、ルイズが折角だからと言ってこのように城下町の甘味が美味しいと有名な店を巡らされている。

「さて、じゃあ次は南地区の方にある『凶戦士のパルミエ』ね。あつちの方は中々行く機会が無いから気になってたのよね」

「なんだその名前は…。ちゃんとした菓子なんだろうな？ 何故だかとしてつもなく不安を掻き立てられるのだが」

「大丈夫よ。あ、でもそのお店の色々と面白い噂は聞くわね。旦那さんは若い頃騎士になろうとして軍艦に密航して処刑されそうになっ

たとか、奥さんは実は貴族だったけど家の事情で捨てられたとか」

まさかこの世界であいつらと似たような話しを聞くとは…。

僕はフツと小さく苦笑をもらった。

「どうしたのリオン？」

僕の表情に首を傾げてきたルイズに何でもないと一言返した。

そしてルイズの案内で次の店へと向かい、例の店に着いて店員を見た僕は何とも言えない気持ちとなった。

それからなんやかんやと街を巡って時は過ぎ、約束の時間となった。

城へと着き、門番の衛士にルイズがアンリエッタからの手紙を見せるとすぐさまアンリエッタの部屋へと通された。

始めはいつものルイズとアンリエッタの茶番があり、それが終わるとすぐさま本題へと入った。

内容は想像通り、タルブの村での戦闘に関してだった。

僕達が戦っている時、奇しくもアンリエッタもタルブの村付近まで近衛騎士団を率いてやってきており、騎士隊へと指示を出している時、空が輝き艦隊が轟沈していく光景を目撃した事。

そしてアンリエッタとマザリーニ枢機卿は直ちに事の詳細を調べ僕たちの事に気づいた事。

他にも虚無の魔法に関してや、それに伴う危険性。

今現在はアンリエッタとマザリーニ枢機卿の2人だけが既知である事などを話し、そしてアンリエッタはルイズにこの先虚無を口外したり使わないようにと言いつつ含めた。

が、しかしルイズはそんな言葉に少し考え込み、

「おそれながら姫さまに、わたしの『虚無』を捧げたいと思います」

と、またアホな事を言い出し始めた。

更にルイズは自分が持った虚無の力はアンリエッタとこの国を救うために手に入れたどうのと使命感と決意に満ちた表情で毅然と語った。

僕はそのルイズの語りに大きいため息を吐き、頭を押さえた。

きつとこうなるだろう事は多少想像はしていた。…してはいたが

実際にそうなるまでを見ていると頭が痛くなった。

まさに力を持って酔いしれてしまっている典型的なパターンだ。

ほんの数か月の付き合いだが、ルイズの最も質たちの悪い癖と言つていいだろう。

また悪いことにアンリエッタもルイズの言葉に感銘を受け、あつさりとルイズの言葉を許諾してしまった。

しかもそのまま自身の直属の女官にしてしまう始末。もう手に負えん。

「まったく。……ん？」

僕が再度2人のバカを見て呆れていた時、コンコンと扉がノックされた。

「誰です。来客中です。控えなさい」

アンリエッタは女王として声を張り、扉の前に居ると思われる人物に叱咤した。

「これはこれは済みませぬな。少々急ぎの要件でしたので、不作法とは思っておりますがお許しを」

「……誰です？」

閉じられた扉の向こうから聞こえたしわがれた声に、アンリエッタは先ほどとは違う困惑した声で再度聞き返した。

すると返事の代わりに言う訳では無いだろうが、扉が開きそこに1人の老人が佇んでいた。

「……………」

「えっ……」

僕は現れた老人を見るなり驚きに体を固め、ルイズは信じられないと目を見開いた。

「あ、あなたは!?!」

「久方ぶりにお会いするの、アンリエッタ姫殿下。いや、今はもうアンリエッタ女王と呼ぶべきですかな」

現れたそいつはアンリエッタの驚きに柔和な笑顔を向けながら冗談交じりに挨拶をしてきた。

「い、いえ。わたくしなんて女王と言われてもまだまだ若輩で…。そ、

そんなことよりも…、貴方はワールドに討たれて死んだはずだと。生きておいででしたか、ジェーム陛下」

「ええ、お恥ずかしながら」

「陛下、一体何が。あ、どうぞこちらへ、今椅子を……」

「そんな必要は無い」

アンリエッタがジェームス1世を部屋へ招き入れようとした時、僕は剣を抜きながらアンリエッタの言葉を遮り、2人の間へと身を割り込ませてジェームス1世へと剣先を向けた。

「リオンさん、何をツ!？」

「姫様下がってくださいッ」

「ルイズまで。何が…」

アンリエッタが僕の行動に声を荒げるが、珍しくも状況を察したルイズがアンリエッタを下がらせた。

「おや、いきなり剣を向けるなど以外に荒っぽい方ですな…。私はただ話をしようとしているだけだと言うのに」

「白々しいな。ならその背後に倒れている奴らはなんだ?」

「え? 背後…:ツ!!? クロエツ! エレノアツ!」

僕の指摘にジェームス1世の後ろの廊下にアンリエッタが改めて目を向けると、やっと倒れている騎士に気づき名を叫んだ。

パツと見では流血している様には見えないが…、何をされているかわからない以上早急に診^みた方が良いだろう。

「…ふむ、面倒臭がらずに処理しておけばよかつたかのう? ま、些細な事じゃな。計画には支障はないしの」

「計画? 何を…ツ!?!」

僕が疑問を口にしようとした瞬間、ジェームス1世の姿が陽炎の様に歪み消え、と同時に強烈な突風が巻き起こり室内がかき回された。

「きやあつ!!」

「姫様ッ!」

そして突風によって僕らが動けなくなっている所、消えたジェームス1世と入れ替わるよう一人のフードを被った男が現れた。

その男は一旦身を沈ませると室内を荒れ狂う風を見事に利用して

素早くアンリエッタへと近づき、勢いそのままにアンリエッタを担ぎ上げて窓を破壊し、外へと飛び出した。

「くそッ!」

男が出て行った後、風が止み動けるようになった僕はすぐさま窓から乗り出し、辺りを見回した。

「リオンあそこッ!!」

僕と同じように身を乗り出していたルイズが叫び、ある方向を指さした。

そこには城の騎士達が駆る竜に追い回されている大きなグリフォンが飛んでおり、その背には男とジェームス1世、そしてぐったりとしているアンリエッタが乗っていた。

「騎士に追われているわ。あれならそのうち…」

「いや、ダメだ。アンリエッタが背に居るせいでまともに攻撃できない。そして奴らからすればアンリエッタを盾に一方的に攻撃できる」

僕の私見にルイズがはっと表情を硬くし、そして案の定騎士達は攻めあぐね、ジェームス1世らは騎士達を魔法によって撃ち落としていた。

「リオンッ!?!」

「わかっている。僕たちも行くぞ」

僕はそう言ってルイズと共に城の外へと走り出した。

逃走&追走

リオンSide

「リオンもつと早くッ！ 姫様が連れて行かれちゃう!!」

月夜が照らす街道。馬を走らせている中、僕の後ろにつかまっっているルイズが叫んだ。

「無茶を言うな。これで精一杯だ！」

「そこを何とかしなさいよッ！」

ルイズの無茶苦茶な要求に苦言を言い返しながら僕は限界まで速度を上げている馬が脚を踏み外して倒れないように注意を払いながら、前方の空を駆けるグリフォンを追いかけていた。

あれからルイズと2人して城外へと出て空を見上げると、ジエームス1世らは騎士達をほとんど片付けて逃走寸前の所であり、僕はルイズと共に急いで厩舎へと向かった。

厩舎内はグリフォンを追うために大慌てで馬の準備をしており、僕らは丁度馬具を付け終わり乗ろうとしていた騎士の1人に近づき、そしてルイズがアンリエッタに貰った権限をさっそく使って馬を奪い外へと駆け出たのだった。

「この方角…、奴らラ・ロシエールに行くつもりかッ。マズイな船に乗られたらもう追う手段が…」

「そんなッ。そうだ！ 私が魔法でッ」

「バカか、お前はアンリエッタごと吹っ飛ばす気か！」

「うぐつ。じゃあ、どうするのよッきやつ!?!」

「はあッ！」

ルイズが騒いでいるさなか前方の空から拳大の氷の飛礫つぶてが現れ、僕はギリギリのところまで馬の手綱を操り避けた。

どうやら中々引き離されない僕らの事を鬱陶しいと思い、攻撃を仕掛けてきたようだ。

「ひゃあッ！ あうッ。うぐッ!?!」

なにやらルイズが背中中で何やら奇声を発しているが気にはしていられない。

更にグリフオンの上から氷の飛礫や空気の塊が飛来してくるのを僕は避けて何とか追いつがって行こうとするも、如何せん上空から一方的な攻撃に晒されてしまっているために相手からの攻撃を避ける度に距離がどんどん離されてしまっていく。

「ダメだ。離されるッ」

「ちよつ、何とかしなさいよりオン！」

「無茶をッ」

と、そうこうしているうちにもグリフオンとの距離は離れて行き、ついには夜の暗がりの中見失ってしまった。

ワルドSide

「彼らは撒けたか？」

僕は被っていたフードを払い、後ろに乗っているジェームス1世に声を掛けた。

「ええ、この距離まで離ればもう馬では追いつけないでしょう」

ジェームス1世は私の言葉に返しながら杖を仕舞うと憎々しげにアンリエッタを睨みつけた。

「ふつ、そんなにその女王が憎いか？」

「ええ。我々の王族としての誇りと矜持を汚し、己が我儘の為に刺客を送って我が息子を騙し、無様に生き延びさせるとは…。まったくもって度し難い。同じ始祖ブリミルの血に連なる者としてこれほど許しがたいものは有りませんよ。連れ帰った暁には皇帝殿の前に跪かせ、大いなる虚無と始祖ブリミルの名の下に断罪を…」

ジェームス1世はそう言うてくつくつと生前にはけっして浮かべることの無かった暗い笑みを湛えた。

何故ジェームス1世が怒りに身を焦がしているのか。それは彼とガイウス将軍がクロムエルの虚無によって生き返された際に起きた記憶違いが始まりだった。

ガイウス将軍は生き返って直ぐにジェームス1世に、言いつけを守り手紙を託してウエールズを生き延びさせた事を伝えたのだが。

なんとジェームス1世はそんな手紙書いていないし、死に際には僕に一瞬で絶命させられたのでガイウス將軍へも言葉を交わしていないと言うのだ。

そして僕も確かに刺客ではあったがジェームス1世を手にかけて覚えは全くない。

そのことからあの場には僕以外にも何かを企んでいた者がおり、ウェールズを騙して生き延びさせたと言う事から、もしかしたらアンリエッタが私情に走り刺客を放ったのでは？　と言うような推察が出来上がり彼は怒りに震えアンリエッタ、ひいてはトリステインへの断罪を胸に誓っていた。

「ま、好きにすればいいさ。こちらとしてはアンリエッタが手中にあると言う事実がツツ!!?」

僕はジェームス1世から目を離し、ラ・ローシエルの外れにある拠点へとグリフォンを加速させようとした時、真横から強烈な衝撃を受けた。

「くっ、攻撃だ?!?」

「な、何がッ」

「アンリエッタを落さないように注意しろ!」

僕はジェームス1世に叫ぶと、ふらつくグリフォンを立て直して攻撃が来た方角を睨みつけた。

「世を騒がし、要らぬ戦乱を起こす悪しき者よ!　この私、ウルタス・ブイが始祖ブリミルの名の下に正義の鉄槌を下そう」

睨みつけた先、風竜の背に立った1人の覆面の男が剣先を此方へと向けてそう言い放ってきた。

「ウルタス・ブイとは…。演劇の練習は他でやって欲しいものだね」

僕はウルタス^{正義}・ブイ^{味方}と名乗る覆面の男へと呆れたと言う表情を作りながらも、腰のレイピアを素早く引き抜き、覆面の男へと油断なく突き付け返す。

「……なんだ？」

グリフォンを見失ってしばらく、もしかしたらと思いとりあえずはラ・ローシエルまでと馬を走らせていたところ、前方から戦闘らしき音が聞こえてきた。

「え、なに？ 誰か戦ってる？」

僕は馬を加速させ音のする場所へと急いだ。

「せいッ！」

「はあッ!!」

戦闘音のする場所へ近づいて行くとそこでは竜に乗った覆面の人物とグリフォンに乗った男…いや、フードが取れ素顔を晒したワルドが戦っていた。

「ワルド！」

「やはりあいつだったか」

僕とルイズはフードの男の正体にそれぞれの反応を表しつつも、馬を更に走らせて僕の晶術の有効範囲まで近づいていく。

「ルイズ、アンリエッタを受け止める準備をしておけ！」

「え!? ちよつと何する気!!」

僕はルイズに指示を出すと馬から飛び降りて、上空で入れ替わりに動き回るグリフォンへとよく狙いを定めて詠唱を始める。

「ちっ、下からくる！ 迎撃をしろ!!」

ワルドがジェームス1世に指示を出すが遅い。

「デモンズランスー！」

僕は右手に発生させた暗黒の槍を振りかぶりグリフォンへと投げつける。

「グギャーッ!!!」

ジェームス1世は高速でグリフォンに向かってくる槍の対処に間に合わず、槍はグリフォンの翼を貫き、斬り裂いた。

片翼を裂かれダメになった事と痛みとでグリフォンは大きく身によじりバランスを崩しながら墜落していく。

もちろん背に乗っていた3人は振り落とされるがワルドとジェー

ムス1世は自力で落下を防ぎ、意識の無いアンリエッタは…

「れ、レビテーション！」

ルイズが必死の形相で杖を振り、魔法を発動させて上手く受け止めた。

「この馬鹿リオンツ!! なんて真似するのツ! 姫様が死んじやったらどうするのよ!!」

「騒ぐな。何のために指示を出したと思っている」

ルイズはアンリエッタを抱きかかえながら顔を真っ赤にして叫んでくる。

まあ多少は無茶をしたとは思っているが、下手に慎重になるよりは最良な手段を選んだつもりだ。

「無茶苦茶よツ! それに私には魔法を撃つなって言っときながらあんたは何の躊躇も無くグリフォンに使うなんて、バカじゃないの!?! 外れて姫様に当たったらどうする気よツ!!」

「はあ。僕を爆発でしか攻撃できないお前と一緒にするな。大体、僕がこの程度の距離で外すはずないだろ」

「む。でも、もしきっきのレビテーションが失敗しちゃってたら……」

「あの日からコモン・マジックが使えるようになったつとバカみたいにはしゃいで、部屋に居るのにドアの鍵すら魔法を使って開けてた奴が何を言っている?」

「ぐぬぬぬぬぬ……」

とルイズに僕が言い返してやると奇妙な唸り声を出して睨んできた。

ちなみにあの日とはタルブ村での戦いから帰った次の日のことで、使えるようになった理由としてはルイズ自身が系統魔法に目覚めたからかもしれないとの事だ。

「いや、少年よ。さすがに今のは私も苦言を呈させてもらいたいものだ」

と、先ほどまでワールドと戦っていたもう覆面の人物がやたら演劇口調で僕たちの横へと風竜から降りてきた。

「え？ そのお声は、うえ…」

「私の名はウルタス・ブイ！ 通りすがりの正義の味方さ」

ルイズがその声から覆面の人物の名前を言おうとすると、覆面の男は大きな声で名乗りを上げた。

さすがに自分の身がバレるのはマズイとは理解しているらしく、前回のカツラと付け髭の空賊姿とは違い今回は覆面を使い、更に作り声で誤魔化そうとしている様だ。

ただ…

「さすが、アルビオンの元王子だ。風竜の手綱さばき、そして空中戦での剣さばきと、あの聖堂で戦った時とはまったくの別物で骨が折れるよ。ウエールズ」

「おお、ウエールズよ！ よもやこんなにも早く会えるとは思ってもみなかったぞ」

「…わ、私はウルタス・ブイ！ ウ、ウエールズなるアルビオンの王子とは別人だ!?!」

それが上手くいつているかどうかは別物のようだ。

ウエールズを追って上から降りてきたワルドとジェームス1世はウエールズの名乗った偽名を完全に無視して本当の名前を遠慮なく連呼していた。

「何を言つとるか。その風竜の手綱さばき、そして空中戦での剣と魔法による見事な技。何より、この私が大切に誇りに思う息子の声を忘れてるとでも思っておるのか!」

「ぐッ」

と、ジェームス1世の言葉にウエールズは言葉を詰まらせた。

はあ…、せつかく変装しているのにそんなあからさまな態度を取っていたら意味がないだろう。

「まったく、落ち着けウエ…ウルタス・ブイ。一々相手の言葉に反応していたらボロしか出ないぞ」

「む、そうだな。すまないリオン君。ゴホンッ。ちち…ジェームス1世はあの日、アルビオンにて刺客に殺され、そしてその遺体はガイウス將軍と共に誇りを抱いて敵軍へと向かった。

それ故にジェームス1世が生きているなどあり得ない。偉大なるアルビオン王の名を騙る貴様は一体何者だ！」

ウエールズは咳払いをして一旦落ち着いた後、大振りな仕草でジェームス1世へと剣を向けて糾弾するように声を上げた。

するとウエールズからの言葉にジェームス1世は俯いて小さく笑い、そして顔を上げ、

「確かに私はアルビオンにて卑劣な手によって殺された。しかし、私はかの皇帝の扱う伝説によって新たなる命を貰い生き返ったのだよ」と、その言葉を皮切りにアルビオンでその身に何が起きて、そして何故彼がレコン・キスタ側の協力をしているかと言うのを説明し始めた。

現在のアルビオンの状況。新アルビオン皇帝が使う虚無の魔法による死者の蘇生。

そしてジェームス1世の暗殺と手紙の真実。

「ウエールズよ！ 我らはそんな愚劣なる女アンリエッタによって謀れたのだ！

つまりお前がその女を守る理由など無いのだ！

ウエールズよ。アルビオンは虚無の御力をもつ皇帝により始祖ブリミルの加護をもって新たに生まれ変わる。そして、それを支える事こそが元アルビオン王族であった我らの新たなる役目なのだ。

さあ、そのようなふざけた被り物など脱いで私と共に来い」

ジェームス1世は最後にそう締めくくるとその手をウエールズへと招くように差し出した。

姫様奪還

ルイズSide

ジェームス1世から聞かされた驚愕の内容に私は目を見開き一歩後ずさった。

だって、今聞いた話が本当ならとんでもないことだもの。

私以外にも虚無の系統に目覚めている人がいると言う事もそうだが、何より生き返った陛下は姫様がウエルズ様を亡命させるために自分の暗殺を命じたと言う。

確かに姫様は幼い頃から血が頭に上り切ると、頭がどうにかなってしまっただんじやないかと思うような暴挙に出る事がしばしばあったけど……。でも、暗殺なんて末恐ろしい事をする人じゃない！

「ジェームス1世陛下！　姫様はその様な恐ろしい事いたしません！　何かの間違いです」

私は姫様の名譽の、ウエルズ様を思う心の為にジェームス1世陛下へそう叫んだ。

「……ツうるさい小娘が！　なら誰がウエルズにこのような生き恥を晒させる様な無様な事をさせているッ！」

しかし、陛下は目を血走らせ怒りを言葉にしたのではないかと言う程の強い叫び声で言い返してきた。

その表情にはウエルズ様も顔をこわばらせて黙ってしまった。た。

でも確かに今ウエルズ様が生きていらつしやるのはあの陛下の手紙のおかげ。だけど本当はその手紙は偽物で、ワルドも陛下の暗殺をしていないって言うって、それからそれからえっと……。あーッもう！　何が何だか！

「はあ、言いたいことはそれだけか？」

私が混乱し、ウエルズ様も動揺して口ごもってしまった中、リオンがいつものようにため息を吐きながら呆れたふう陛下に言い返した。

「何だと？」

「言いたいことはそれだけか？」と言ったんだ。まったく、2人もこんな与太話をバカ正直に聞いてどうする？」

「え？」

「む？」

と、リオンはやれやれと首を竦めて私たちに言った。

え？ 与太話って：つまり陛下の喋ったことは嘘？

それはウェールズ様も同じ思いだったようで、驚き呆けたような雰囲気を出していた。

そしてリオンの言葉を聞いて呆けた私たちとは逆に、その表情を更なる怒りに歪めた陛下は

「貴様ツ。私の話しを戯言と抜かすか！」

と、叫んだ。

「当たり前だ。まさか敵対していた相手に蘇された奴が、真つ当な記憶や意識を持たされているとも思っているのか？」

「リオン君、どういうことだい？」

「そのまんまの意味だ。奴らの蘇生の魔法がどれほどの束縛性を有しているか分からないが、敵の人間を蘇させたとしてそのままにしておく訳が無い。何をしでかすか分からないからな。」

となれば取る対処は行動の制限か記憶や意識の改竄だ。ここまで言えばもう解るだろ？」

と、リオンはウェールズ様の疑問に丁寧に説明した。

そしてその説明にウェールズ様は目元を険しくしながらなるほどと頷き、ジェームス陛下とワルドを再度睨み返した。

「…あははは。中々面白い推理だけどそれは見当違いというものさ。」

ジェームス1世

彼も言っていた通り、僕は彼を殺してはいない。更に言えば僕はクロムエル猊下が彼を蘇らす所を見ていたが、意識を操る魔法を使っていた様子はなかったよ」

「ふつ、蘇生の魔法そのものに意識や記憶を弄る効果が含まれていないと無い言い切れるのか？ 虚無の魔法は伝説で誰も詳細はわからないと聞いているが？」

「…君の減らず口は相変わらずだな。おいジェームス1世、今回はこ

こまでだ。退くぞ」

ワルドはリオンを忌々しげに睨みつけると会話を打ち切ってジエームス陛下へと声を投げかけた。

「何をふざけた事を言っておる!? ここまで退くことなどできようものか！ せめてもアンリエッタの命をいたただくまではッ！」

が、ワルドの言葉にジエームス陛下はそんなふうには叫び返して姫様を憎悪の目で睨み続けていた。

「冷静になれ。貴様一人でその2人を相手に何が出来る？ いくらその身体だとしてもただでは済まないぞ」

「くっ、ウェールズよ！ 真実を見極めるのだ!! いつか必ずその女の、トリステインが行った非道を暴き、お前の目を覚まさせてやる」

「と、言う訳でさらばだ諸君。ウル・ウオータル……」

ワルドがそう言うて呪文を唱え始めると彼の目の前に一抱え程の大きさの白い煙の玉のようなものが現れ、そして……

「霧の爆弾」

ワルドのその一言で玉が爆発を起こして辺り一帯が白い煙で包まれてしまった。

これってもしかして霧？ と、私は肌に貼り付く湿り気から白い煙が濃い霧であると分かった。

まあ分かったところでどうすることもできないのだけけれど……

そんなことよりワルドの作り出した濃霧はワルドとジエームス陛下の2人の姿を完全に隠してしまった。

「ッ!? ウインドッ!!」

その霧の中、2人の姿を見失ったウェールズ様はすぐさま風の魔法を放ち、充満していた濃霧を吹き飛ばしてワルド達が居た場所へと目を向けたけれども、そこに2人の姿は影も形も無かった。

「ルイズ、何ともないか？」

霧が晴れ、ワルド達の気配が無いのを確認したのかりオンは剣を仕舞いながら近づいてきて声を掛けてくれた。

「う、うん、大丈夫」

「そうか」

私の返事にリオンは小さくまるで安堵するかのように息を吐いた。
あれ？　もしかして心配してくれてたのかしら？

私はリオンのその小さな挙動に気づき、自分の事を心配してくれていたことに内心嬉しくなりちよつといい気分になった。

「敵は去ったか。ならば私も行くことにしよう」

私はその言葉にハッとニヤけかけていた表情を引き締めウエルズ様を見た。

ウエルズ様は空に待機させていた風竜を呼び寄せ、すぐにでもこの場を去ろうとしており、私はそんなウエルズ様の後ろ姿を見て、胸の中がもよもよと嫌な気持ちになった。

だってウエルズ様は大好きな姫様を救うために下手な変装までして駆け付けてきたと言うのに、その姫様とは一言も言葉を交わさずに去ろうとしているんだもの。

せっかく愛しの人があんなにも近くに居るのにそんなのって無い！

もちろん本当はウエルズ様が生きている事を知らせてはいけな
いと言うのは分かっているつもりだけど…。

でも、それでも、と私は我儘と分かっている、少しだけでもいいから姫様に声を聞かせて欲しいと思いい、その背中へと

「待ってください!!」

声を掛けようと思ったら突如として私の後ろから何かが地面へと落ちるような重い音と共に声が響いた。

「ひ、姫様!？」

そこには馬から急いで降りようとして失敗したのか、転げて土まみれになってしまっている姫様が居た。

姫様はどうやら目を覚ましたばかりのようで、多少ふらつきながらも立ち上がって歩きだし、私の横を通り過ぎて変装して顔を隠しているウエルズ様のへと近づいて行った。

「……ウエルズ様、なのです…か?」

「人違いだトリスティンの女王よ。私はただの通りすがりの者だ」

弱弱しい声で姫様はウエルズ様の背へとその言葉を投げかけ、そ

れをきつかけに2人は言葉を交わし始めた。

「……いいえ。そのお声。そのたたずまい。忘れるはずがありません。貴方はウエルズ様以外ありません！なぜ、なぜ生きておられると知らせてくれなかったのですか!? 貴方が生きていると分かっていたら私は私の全てを使ってあなたの事をツ」

「アンリエッタ女王、それはやってはいけない事だよ。君は今や国を率いる身なんだ。滅多な事をそう簡単に口に出すべきではないはずだ」

「あ、……ごめんなさい。軽率な言葉でした」

「それと、君が私のことをウエルズと言う人物と勘違いしているよ。うだが、人違いだ。私の名はウルタス・ブイ。今回はたまたま悪漢に攫われていた君を助けたに過ぎない、ただの通りすがりの義賊だ」

「分かりました、ウルタス・ブイ様。今は…、今はそう呼びましょう。……次はいつ貴方様にお会いになられるのでしょうか？ これっきりと言うのは寂し過ぎます」

「次、私に会う事など無い方が良い。私は正義を成す者。私に会うと言う事は君が今回のように危機に陥っている時だ。そんな事ない方が良い」

「そう、ですか」

「たがもしもツ！ もう一度君の身が危険に晒されるような事があるのならばツ。私は、すぐさまその危機から君を救い出すと宣言しよう」

「ツ!? はいツ、その時は…お待ちしております」

ウエルズ様は最後に少しだけ振り向き姫様の顔を見ると、素早く風竜へと飛び乗り、そして2つの月が輝く空へと舞い上がり飛び去っていった。

「姫様…」

「……さあ、お城へ帰りましょう。きつと大変な騒ぎになっているとこでしょうね。ああそれと、お二人にはお話を伺いたいことがあるので今夜はお城へ泊まってもらいますからね?」

そう言つて、ウエルズ様の去った空から顔を下し、いつもの柔ら

かな表情に戻った姫様と共に私とリオンは城へと戻っていった。

オルレアン家にて

キキSide

俺がキュルケの制裁によって火だるまにされてからしばし、なんとか火を消して体中に煤を残しながらキュルケへと土下座しながら誠心誠意の謝罪をもって許しを請うた。

「燃えるのと炭になるのどっちがいい？」

が、残念なことに謝罪は受け入れてもらえず、俺はキュルケに頭を踏まれ死刑宣告をされた。

まあ、あのぐらいの炎ならなんとか耐えられるんだけどな。でも死ぬほど熱いし息が出来なくて苦しいのでご勘弁願いたい。

いやあ、ホントどうしよう。……もう逃げちやおうか？

「落ち着いて」

そんな最終手段を講じようと思っていたらタバサがキュルケへと待ったをかけてくれた。

タバサは今回の事については自分にも色々と非があると俺の擁護と説得をしてくれた。

まあそのおかげで、渋々と言う感じでキュルケは俺への制裁を取りやめてくれた。

ただ怒りは静まることは無いらしく、俺の頭から足を退けるも俺を指さしながら如何にダメで屑で最低な男かをキュルケが大きな声でタバサに言い聞かせ始めた。

確かに我慢するとか耐えるとか言つときながら、まったく我慢できずですぐ手を出したけどさあ……。

と、くどくどとキュルケの嫌味とも罵倒ともとれる言葉を聞きながらすいませんと頭を垂れていると、カタツと部屋の扉が開く音が聞こえた。

「えつと……」

皆が音と女性の声に反応して扉の方を見るとそこには静々と多少困惑気味な表情を浮かべたタバサのお母さんとその後ろに付き添うようにペルスランさんが居た。

皆が突然現れた女性に誰？ と疑問に思っている中、タバサだけは信じられない物を見たように驚愕に表情を硬め、

「お…かあ…さまっ…」

と震える声で呟いた。

「シャルロット」

そのタバサの呟きにタバサのお母さんは小さく微笑み、タバサの本来の名前を呼び返した。

タバサはその表情と優しい声音に目を見開くと手に持っていた杖を床に落とし、最初はふらふらとした足取りでゆっくりと動き始めたが直ぐに駆け足になり、そして大粒の涙を流しながら母親へと抱き付いた。

それからしばし…、

落ち着いたタバサによってキュルケ達には自身の家の事情を、お母さんに対してはキュルケ達の事を簡単に説明された。

そしてお互いの事情がある程度理解し合った後、タバサのお母さんがお茶でも飲みながらもつと話しを聞きたいと言う感じとなつて…

「…：…そうなのですか。まずはわたしの心を治していただき、ありがとうございます
どうぞございます」

「いえいえ。タバサ…じやくてシャルロットさんとの約束ですし、それに人を助けるのは当然ですよ」

「あら、そうなのですか？ 娘の貞操を不当な方法で奪った事への罪滅ぼしかと思っていました」

「…：…いや、それはアレで…：その…：その事については重々反省してまして」

「反省したと言葉にするのは誰でも出来る事なのですよ？ 相手にきちんと反省の意が届いていなければただの自己満足でしかない事を理解していますか？」

「…：…すみません」

今現在、俺はタバサのお母さんによつて説教され始めていた。

いや、説教と言うより責め立てられていると言った方が正しいか。

「先ほどから『はい』か『すいません』ばかりですが、わたしの言っている事を聞いているのですか？」

「はい、きちんと聞いております」

「本当でしょうか？ 他の皆さまから話を伺った感じでは、貴方はどうやら腹芸がとてもお得意のように見えましたので疑わしいわ」

腹芸が得意なんじゃなくて表情や感情のコントロールが上手なだけなのだが…。

なおタバサ以外の皆は俺の説教が始まったあたりから部屋から早々に退出しており、助けは誰も居ない。

「はあ…。大体、婚姻前の男女が寝所を共にする事すら信じがたいのに、あろうことが肌を重ねるなど…」

と、タバサのお母さんは大きなため息をつきながらも次々と言葉で責め立て続けてきて、説教が一息つくころには日が沈んでしまっていた。

もちろん俺は投げつけられる様々な言葉に反論などできようはずもなく。説教が終わるまで唯々ただただ身を小さくしているしかなかった。

タバサSide

「では食べ過ぎには気をつけるのですよ？」

お母さまがそう言って私の手を取って言葉をかけてくる。

そんなお母さまの問いかけに、わたしはもう子供ではないと小さく嘆息しながら大丈夫と返した。

あれから数日経ち、私たちは学院へと帰るために今朝早くに屋敷の前へと集まっていた。

本当はもつとお母さまと色々話をしたりお茶をしたりと過ごしていたかったけれども、元々予定には無い実家への帰郷。

しかもこんなにも長期の滞在は王家に怪しまれてしまう可能性があり、そのせいお母さまの心の回復を悟られてしまって、またお母さ

まに何かあつたら大変だ。

それとキキ曰く滞在中の間お母さまの身体の様子を見ていた結果、もう問題は無いとのことだったので私たちはなるべく早くに帰る事となった。

あとギーシュとモンモランシーがこれ以上学院を休むと色々マズイからと泣きつかれたのもある。

と、そういう事情もあり、今お母さまとペルスランに見送られていた。

そして私はいくらか言葉を2人と交わしてシルフィードへと向かうとした時

「あと、学院へと戻ったら必ず彼と部屋を別にするのですよ。必ずです。いいですね？ 母が見ていないからってうやむやにしないこと、いいですね？」

最後にと、お母さまが先ほどよりも大きく声を出しながらシルフィードの背に乗っているキキを睨みつけながらそう言ってきた。

これは多分私にはなくキキへと言い含めているのだろう。

実際キキをみると凄く気まづげな表情で項垂れていた。

「…わかりました」

と、私はとりあえず返事をし、そして今度こそシルフィードへと乗り学院へと帰っていった。

夏季休暇

キキSide

タバサの実家から帰って来てはや2週間程が過ぎた。

その後、学院へと帰って来てから俺は本当にタバサの部屋を追い出される事になった。

今では学院端にある使用人用の寄宿舎に寢床を移すことになり、そこで寝泊まりをするようになった。

ちなみにエルザのご飯吸血のこともあるので、エルザと一緒にである。

と言っても本当に寝泊まりだけで、それ以外は大体今までと同じでタバサのそばに居る感じである。

それで他に変わった事は1週間前から学院が夏季休暇に入った事。それと変わったとは違うけど、ちよつと面倒になりそうな事が起きた。

学院に帰って来てからしばらくした日の朝の鍛錬の時、リオンから俺の世界で死者の蘇生技術はあったのか？ と言う質問を受けた。

突然の質問に俺は理由を尋ねたら、多少言い渋った感じだったけど少し前にあったお姫様の誘拐事件のことをざっくりと説明してくれた。

そしてそれを聞いた俺は表情に出さなかったけれども、内心は大変動揺していた。

いやだつてあの時色々やったの俺だし…。

さすがに俺が何かしたとは微塵も勘づいてはいないみたいなので、下手に嘘はつかずに俺の世界の死者蘇生術の1つである『穢土えどてんせい転生の術』の事を教えた。

ただ術の説明に少しの誇張や多少誤ってるかもしれない自己解釈的な部分が含まれているので正確に相手に伝わったかどうかは分からないですけどねッ！

特に蘇った人の記憶の事とか意識の事とか。

まあそんな感じの説明を聞かせたりオンは考えごとをする様にあごに手を添えて瞑目した。

その姿は普通にカツコ良く絵になり、羨ましいと思った。このイケメンめ。……まあいいか。

それから後リオンは何かに納得したのか軽く頷くと俺にお礼を言い、その日の鍛錬を終わりにした。

ちなみに、夏季休暇に入った次の日からリオンとルイズは共に街へと出かけてから戻ってきていない。

たぶん原作の何かしらのイベントがあったはずだけどよく思い出せないので気にしないことにした。

何かあればジンから話が来るだろうしな。

まあ、そんなこんなでこの夏季休暇中の学院は暇である。

ガリアからの依頼も全く来ず、授業も無く、日がな一日タバサと本を読んでいるぐらいで基本暇である。

なんてすばらしい日々なのだろう。怠惰な生活最高である。

まあ、多少不満があるとすれば休みに入ってから街に一人で遊びに行けていない事ぐらいである。

出かけようとするたびタバサと一緒に行くつもりなので鼻屑にしていた店に行けなくなったのだ。

「ねえ、シャルロット！ 街へ遊びに行きましょう」

そして今日も暇を飽かして本を読んでいる中、タバサの部屋へと遊びに来ていた……まあ正確に言うならタバサの使う魔法で涼みに来ていたキュルケがそんなことを叫んだ。

「……タバサ」

「ああ、そうだったわね。学院じゃあタバサのままの方がいいのよね。そんなことよりこんな暑い寮にこもってちゃ頭がおかしくなっちゃうわ」

と、キュルケがタバサの体を揺らしながらわーわー叫ぶ。

ちなみに、暑いとは言われているが生前の日本や少し前までいた火の国の湿気の強い夏に比べれば、この地域は乾燥しており、どちらかといえば爽やかでとても過ごしやすい。

「帰省しないの？」

「そりゃあゲルマニアの方はここより涼しいかもしれないけどね。帰

るとまあ色々大変なの知ってるでしょ？ 手紙では自由にしなさいって書いて来てるけど、あの両親のことだから帰ったら絶対にお見合いさせられるわよ」

と、タバサの質問にキュルケはやれやれと肩を竦めて首を振った。そんな設定だったっけ？ と俺はキュルケの話しに対して原作の内容を思い出そうとするが、全く思い出せないので考えるのをすぐやめた。 まあ思い出したからってどうなるって訳では無いしね。

「そんな事よりもツ！ とにかく街へ行きましようツ。 もう決めたわ。 遊びに行くわよ！ さあ出発よ！」

まあそんなどうでもいい事を考えていたら、いつの間にかキュルケはタバサの手を引き、ベットから引つ張り上げて部屋を出て行ってしまった。

相変わらずアクティブだなあとキュルケに感心しながらも、置いていかれるのも寂しいので俺はいそいそと2人の後を追って部屋を出た。

タバサSide

時刻が夕刻に差しかかった頃に私たちはトリスタニアの城下町に着き、キュルケを先頭にチクトンネ街をフラフラと歩いていた。

「さて、どこに行こうかしら？」

と、キュルケは辺りを見渡しながらどの店に入ろうかと誰に聞くでも無く言葉にした。

「ねえ、やっぱりブルドンネ街の方に行きましようよ。 態々チクトンネ街に来なくなたっていいじゃない」

とキュルケの言葉をきっかけにモンモランシーが眉をひそめながら文句を言った。

ここチクトンネ街は賭博場や酒場が多く軒並みをそろえているのだが、その中にはいかかわしい酒場や非許可の賭場などもあり、モンモランシーには印象が悪いようだ。

私としては料理が美味しければどこだろうと問題は無い。

「何言ってるのよ。表通りのお店なんて新鮮味がなくてつまらないじゃない。せつかくなんだし面白そうで美味しいお店の方がいいでしょ？　ねえどこか知ってるお店ない？」

しかしキュルケはモンモランシーの文句など一切気にせず、モンモランシーの隣を歩いてるギーシユへたずねた。

たずねられたギーシユはにやつと笑い、そして

「いや実はね。ちよつとした噂の店がってね。1度行ってみたくて思ってたんだが……」

「へんな店じゃないでしょうね？」

と、噂の店の事を話そうとしたら何かを察したモンモランシーの咎めるような視線と言葉に遮られた。

「全然へんな店じゃないよ！」

ギーシユは首を振り、すぐさまモンモランシーの言葉を否定するが、その表情は少しだけ引きつっており多少の後ろめたさを感じられた。

嘘はついていないが完全に潔白ではないと言う事だろう。

ちなみにこの2人が何故私たちと一緒に城下町に来ているかと言うと、出かける間に寮で一悶着起こしている所に出くわし、そしてついでとばかりにキュルケが誘ったのだ。

「どういう店なの？」

「えと……」

「やっぱりへんな店じゃないのよおっツ!!言っでごらんさいよおっツ！」

モンモランシーは質問に言いよどんだギーシユを怒りの形相で睨み、その首をしめあげた。

「ち、違うんだ。本当にへんじゃ、ないんだよ。女の子が、その、とても可愛らしい恰好でね、お酒を……ぐえっ」

「へんな店じゃないのツ!?!」

その店の誤解(?)を解こうとギーシユが店の事を話すも、モンモランシーは納得できず更に怒りの表情を浮かべ、ギーシユの首を力強く絞り始めた。

ふとその時、私はキキの表情を盗み見た。

何故突然そんなことをしようと思ったのかはわからない。それでも私は目端でキキの表情を見た。

その時のキキはいつもの締めりのないへらへらした表情ではあったが、どこか違和感を感じた。

どこが？ と聞かれると上手く説明できないが、強^しいて言うなら目尻がいつもより少しだけ下がっていて、そして頬が微妙に引きつっているような感じと言うぐらいだ。

私はそんなキキに疑問を持ったが、別段大したことはないだろうと思いきキから目を離して前を歩くキュルケ達の後に続いた。

「あそこが噂の店だよ」

しばらく歩くと先頭を歩いていたギーシュが一軒の店を指さした。

その店は他の店よりかは少し大きいと言うぐらいで他に特徴がなく、いたって普通の店のように見えた。

「ん、見た目は普通ね。まあいいわ。じゃあ…」

「なあ、突然だけど別のいいお店知ってるからそっち行かないか？」

と、キュルケが店に入ろうと扉に手を掛けようとした時、突如としてキキがそんなことを言い出した。

「ええ？ いきなり何よ？ 今更違う店に向かうなんて面倒じゃない？」

「そうだよ。せっかくここまで来て違う場所に行くなんて…。ねえモンモランシー？」

「別にこんないかがわしそうな店じゃ無ければ私はいいわよ」

キキのその言葉に皆が疑問符を浮かべながらキュルケ達は、何故今更そんなことを？ という様にキキに言い返した。

もちろん私もキキの言葉に驚き疑問を持った。

だが私の場合はキュルケ達とは違い店を変えようと言った事よりも、キキが自分から皆へ話しかけたことに強い疑問を持った。

彼は本人も言っていたが自身が言いたい事を喋るのは大丈夫だが、誰かと会話するのはとても苦手だと言っていた。なんでも相手の意図に合わせて話しを続けることが不得手だとか。

なので、彼がこのように唐突に複数の人に話しかけると言う事自体とても珍しいのだ。しかも、ほぼ決まっていた事を覆すような事を言うなんて……。

怪しい。

何がとは言わずもがな、彼はどうやらあのギーシュが案内した店に入りたくないようだ。

それは何故？ 彼にとってこの店に入られるのがとても困るからだ。

何故困る？ 何か彼にとってやましい事があるからだ。

やましい事とは？ 隠し事だ。……何を隠しているのだろう。

いや、態わざと考えをぼやかすのはよそう。

彼はこの店を常連なのだろう。しかも特定の人物を目的としている。

もちろん証拠なんてない。ただの勘だ。

イラっと、心の中に黒い感情がともった。私の事を差し置いて別の女性と会っていたとは少し話をしなければ……つと、そうじゃない。落ち着け私。

店がそういう雰囲気だからと言って、会っているのが女性とは限らないではないか。

私が知らないだけで男性の飲み仲間がいるのかもしれない。

だが、でも、と私は悩み、答えの出ない考えを一旦止めてふと顔を上げると、キキを嫌っているキュルケはともかく、ギーシュとモンモランシーはキキによる例の詐欺師紛いの話術で店を変えようかと思見を出し始めていた。

このままでは別の店へと移動することは確実になるだろう。

色々考えたが、とにかく彼がこの店に関して隠し事をしてい言うのは確定だ。

ならば私のやることは一つだけ。

私は皆が話している間に気配を消し、素早く店の扉へと近づいて……そして、

「「「!?」」」

カタンツと態と音を大きく立てて扉を開いた。

話し合っていた皆は私が扉を開けて入ろうとしている事にポカんとした表情で止まっていたので

「早く入る」

と、一言声を掛けて私は店へと入店した。
すると

「あらま。まあタバサが入っちゃったしやっぱりもうここでいいわよね」

と、キュルケが入り、

「うむ、まあそうだね。入ってしまったのならいいか」

「何でもいいわよ」

と、ギーシユとモンモランシーが入る。そして…

「……え、いや、別の、別のね…」

「早く入る」

「……おうう」

最後に動揺しているキキを睨み、無理矢理入店させた。

魅惑の妖精（狂）

タバサSide

「いらつしやいませ。何名様でしょうか？」

いつまでも店に入りたがらなかったキキを連れ込んだ後、店内を少し見回していると近くに居た茶髪の私たちと同じ年ほどの少女が私たちに気づき、声を掛けながら駆け足気味に近づいて来た。

「5人よ。一番綺麗な席に案内してちょうだい」

「はい5名様ですね。お席の方はどこもチリーつない程綺麗にしていますからご安心を。それでは……ん？」

と、キュルケの注文に少女は淀むことなくスラスラと返答していたが、ふと私の背後を見て何かに気づいたように言葉を止めた。

そして、

「あッ、キキ殿！ お久しぶりですね！ ジェシカさんがここしばらく顔出してくれてないって寂しそうにしてましたよ？」

と、明るい笑顔でキキへと話しかけた。

「違うんだタバサッ、これにはちよつとした認識の違いがッ……ごめんなさい」

少女の言葉に表情を引きつらせたキキは私と目が合った瞬間に早口で言訳を並べ始めようとしたので、少々きつめに睨んで黙らせた。

さて、詳しく話を聞こうか？

ジェシカSide

「え？ わたしとキキ君の関係？」

「そう」

と、わたしの目の前でキキ君に抱き付き、そして彼の脇腹へ黒い刃物押し付けている青髪の貴族の少女が目を怪しく光らせながら聞いて来た。

アリーシャから貴族の子弟の団体さんから指名で呼び出された時は何かと思っただけでそう言う事かと、わたしは今の状況で大体の事を

「何してるんですかッ!? 店内での刃傷沙汰は困ります! やるんだったら外に出てやってください!」

しばらく騒いでいたらアリーシャが何事かと様子を見に来て、すぐさまタバサちゃんをキキ君から引き離した。

引き離されたタバサちゃんの目は、それはそれは恐ろしいほど冷たく暗い感情が渦巻いているのが見えた。

あらら、ちよつとやり過ぎちやっみたいね。てへ。

「ジェシカ…、お前…」

解放されたキキ君が恨みがましい声と視線を向けてきたので、
「てへぺろっ!」

と、最近街で流行っている失敗した時の可愛いポーズを試してみた。

キキ君はわたしのその可愛さにぐうの音も出ないのか、唾然とした表情をした後、テーブルに頭を落した。

「で、実際のところどうなの?」

「詳細に」

と、赤髪の子が聞いてくるとタバサちゃんもグイッと詰め寄ってきた。

「どうって言われても…。最初はホント気前の良いただの常連さんだったのよ。色々注文してくれるし、チップ沢山くれるし、お酌の時のわたし達の間もケチらないで頼んでくれるしでね。」

で、こっからが本題なんだけどね。キキ君ってお酒弱くて、しかも泥酔した際の酒癖が悪いつて言つて、いっつもワインをグラス一杯しか飲まないのよ。

だからわたしね、ちよつとした好奇心で店で一番強いお酒をキキ君がいつも飲んでる奴と入れ替えて飲みさせてみたの。そしたらキキ君あつという間に泥酔してね。

まあそっからが凄いのなんのつてツ。人間が変わるつてまさにああいうこと言いうんだなあ。

ヘラヘラしてた表情がキリッつてなってね。いきなりあたしの肩を抱いて寄せたと思つたら、ものすごく情熱的に口説いて来たのよ。

いつつもヘラヘラして飄々としてる風を装ってるけど、実際はただ単に人見知りで喋るのが下手クソだから他人とのコミュニケーションを笑って流して誤魔化してる陰気で根暗なキキ君がよッ!

もうそりゃあ凄いのなんのって、それでわたしもいつもお金を沢山貰えてるし一晩ぐらいはって思っちゃって…。

で、まあ、なんていうか、キキ君の身体って逞しいって言うか男らしいって言うか、なんか色々あるじゃない?

と、そう言う訳なんだけど…ね?」

わたしがキキ君との馴れ初め、と言うか惚れちゃった訳を話すと赤い髪の子は眉を寄せてええく? と表情を曇らせ、タバサちゃんはどううんと何かに納得したのか何度か頷いていた。

「いや、ちよつと待って。それは…何か禁薬的な物でも飲まされたの? 今の話しにアナタがコレに惚れる理由が全く無いのだけれども?」

「えへへ、キキ君って性格はちよつと問題あるけど、それがまた好いと言うかイジリがあると言うかね。

泥酔して手を出して朝起きた時のキキ君の『うわあ、またやっちゃった』って言う自己嫌悪の表情がたまらないって言うか…。

にもかかわらず、またやって来てはお酒って言う免罪符を自分から飲んで一晩過ごすっていうクズさダメさ加減って言うか…。そこがね….:うふふ」

「タバサ聞いたでしょ!? 今すぐコレ首を落すべきだわ! この娘も相当ヤバイ気がするけどそんなことは置いといて、コレの本性がもう救えないようなクズだってわかったでしょ? って何彼女の話しに共感するように頷いてるの!? お願い目を覚まして!」

ルイズSide

「なんかとても酷いものを見たわ」

魅惑の妖精亭の厨房。そのカウンターでげんなりとした表情で私は呟いた。

何故私がこの店にいるのかと言うと、とある高貴な御方から拝命したちよつとした極秘任務の為と言っておくわ！ 諜報作戦中なの。こういう酒場で働きながら色々な情報を集めてるのよ！

決して考えなしにお金を使って文無しになったとかじゃないの。リオンに泣くまで説教された上での労働とかじゃないの。変な勘ぐりしないでよね!!

んん、ちよつと感情的になったわ。

そんなことより、キュルケ達が突然店に入って来た時にはびっくりしたけど、ジエシカが相手してくれたみたいでよかったわ。

こんなヒラヒラで下着みたいなのエツチな支給服であいつの前に出たら一生笑いにされるに決まってるからね。

それにしても

「ちよいちよい変な事言うなあとは思ってたけど、確信したわ。ジエシカってヤバイ人なのね」

私はキュルケ達が座っていた席からお皿やグラスを引きあげてきたアリーシャに話しかけた。

「普段はまともなんだ。ただ、好きな人に対して気持ちのタガが外れやすだけなんだ」

「いや、あれはそんな生易しい様子じゃなかったわよアリーシャ」

と、キュルケ達を2階の宿部屋へ案内してるジャシカをジト目で見ながら言い返した。

「でも…普段はあんなんではないし、とても気立てが良くて世話焼きでいい人なのだが…」

「まあ、分からないでも無いけど実際に今のを見ちゃうと…」

「あー…」

「なに、わたしの話？」

私とアリーシャが話していると、その話題の本人がやってきた。

「あー、まあそうね。…その、何て言うか例の人にそのこと言わなくて良かったのかなあって」

私はやってきたジエシカのお腹を見ながらそう言った。

その、ジエシカのお腹には例のタバサの使い魔の人との子がいるの

である。

最初聞いた時は結婚もしていないどころか、恋人同士ですらないのに子供を作ってしまうなんてと大きく取り乱したものだけどジェシカは全然気にしていないどころか、その人との子が出来た事を嬉しがっているようで、私は何も言えなくなってしまったのだ。

「あ、この子のこと？ 本当はさっき言い出そうとしたんだけど、実はもっと驚かせられるタイミングで明かそうかなって思って止めたんだ」

驚かせるタイミングって、普通子供が出来たってだけで驚くと思うけど…。

私はジェシカから漂ってくる只ならぬ気配に嫌な予感を覚えながらもついどんなタイミングと聞き返してしまった。

するとジェシカはまさに花が咲き誇ったような満面の笑顔で、

「え？ うつつつぶ。それはねえ、……キキ君とタバサちゃんが結婚式を挙げた時に、キキ君の子よって生まれたこの子を見せてあげるのよ！ きつとすつごく驚くと思うのよね！」

と、宣った。

それは驚くでしょうね。そして花嫁の衣装が新郎の返り血で真っ赤に染まるでしょうね。

ルイズの夏休み

ルイズ side

【ダエグの曜日／フレイヤの週／ニューイの月】

今日、姫様から極秘の任務を承った。極秘なのでここに詳しく書くわけにはいかないけど、とても重要な任務だ。

私は姫様の一番の親友として姫様の期待に応えて見せるわ。

【コルの曜日／ヘムダルの週／ニューイの月】

今日は最悪な1日だった。

任務のために用意してもらった資金が400エキュー程度と少ないと不満を口にしたらリオンに怒られた。意味が分からない。どう考えたって少ないと思う。

さらにカジノで増やそうと提案したら罵倒された。使い魔のくせに主人を罵るなんてどうかしている。リオンはもつと常識があると思っていたのに。

しょうがないのでリオンに宿を探させて居ない内にこつそりとカジノで増やそうとしたら全額スった。戻ってきたリオンに日が沈むまで説教された。泣くまで説教された。泣けば許してもらえるのか？ と更に説教された。

その後、偶々様子を見ていたスカロン店長が不憫に思ったらしく私たちが魅惑の妖精亭に住み込みで雇ってくれた。

【エオーの曜日／ヘムダルの週／ニューイの月】

今日、私は驚くことが沢山あった。

昨日は私は泣き腫らしていたと言う事もあり、仕事は今日からと言う事になった。

まず驚いたことはこのお店で働くときの服装だ。何あの服!? あんなピッチリして肌も晒してスカート短くてはしたない事この上ない。文句を言ったけど店長の笑顔威圧の前に引き下がるを得なかった。あとリオンが黙々と皿洗いをしている姿が何故だか面白かった。

次に1年前ほどから手紙の返信が来なくなっていたアリーシャと再開したことだ。アリーシャから家を追い出されたと聞いた時は我がヴァリエール家の力でどうかしようと言ったら止められた。もう気にしていないらしいし、今はもう恋人もできたとか。詳しく聞くと古代遺跡を巡って研究してる好奇心旺盛な人物らしい。

次はこの看板娘のジェシカ。彼女はちよつと頭がおかしい。最初はちよつと口が悪いけど気立ての良い世話焼きな人だと思っていたけど、好きな人の話しになったら笑顔で歪んだ愛を語り出した。はつきり言つて引いた。ちなみに相手の男のクズさにも引いた。

【オセルの曜日／ヘイムダルの週／ニューイの月】

今日は私の人生において一番の危機だったかもしれない。

今日やつと仕事にも慣れ始め、お客を怒らせる回数も皿を割る枚数も格段に減った頃、奴らがやってきた。そう、キュルケ達だ。

キュルケにこんな姿で働いている所なんて見られたら一生イジられるに決まっている。私は慌てて姿を隠してやり過ごそうとしたけど杞憂に終わった。

キュルケ達はどういう訳かジェシカを呼びだして自分たちの席へと座らせた。

何だろう？ と気になって接客中に様子をチラチラと窺っていたら、タバサが使い魔の人を殺そうとしたり。それを見てジェシカが楽しそうに笑ったり。タバサが使い魔の人を締め上げたり。それを見てジェシカが微笑んだり。と、とても関わり合いになりたくない状態になっていた。

実際一緒にいたギーシュとモンモランシーは離れて静かに食事をしていた。

アリーシャに聞いた話だとタバサの使い魔の人が例のジェシカの好きな人でお腹の子の相手だとか。

でもジェシカの話聞くに彼はタバサの事が好きなのはで…。気になって今後どうするのか聞いたらとんでもない内容が返ってきた。ふと、シエスタが好きそうな話だなあと思い浮かんだ。

【オゼルの曜日／エオローの週／ニューイの月】

今日は最高の1日になった気がする。

今日はチップレースの最終日だった。週初めから私の華麗なる活躍によって私は見事1位になることが出来た。けっしてこれは嘘ではない。念を押して書くけど嘘じゃないので深読みはしないこと。

そしてレースで優勝して手に入れた『魅惑のビスチェ』。あの店長が着たのでちよつと拒否感あったけどちやんと洗ってあると言う事なので、とりあえず試しに来てりオンに見せてみた。

ビスチェを着た感想を聞こうと思ったらりオンの奴少し私を見たらすぐ顔をそむけた。最初はムつとしたけど、なんだかいつものりオンらしくないと思いいく見たらかすかに顔が赤くなっていた。

赤くなっていた!! あのりオンが!! 私を見て!!

これは詳細に日記に書かなくてはいけない事案であり、一生大切なあれでの事でもうすぐ…（以降、解読困難な文字列が数ページ続く）

【ラーグの曜日／ティワズの週／ニューイの月】

今日はりオンとデートをした。今日はりオンとデートをした。

大切な事は2回書くと良いと、昔ジンが言っていた気がするので書いてみた。

昨夜と言っても妖精亭の仕事終わりが基本、日が昇る直前ぐらいなので正確には今日の早朝だったりするんだけど、夏季休暇に入ってから遊びに行っていない事に気づき、りオンに出かけようと提案した。

私は芝居を見たことが無く、しかもちようど今、噂の『ウルタス・ブイ物語』が公演していると言うのだから見に行くしかない。

なんでも公演されると、あちこちの貴族の間で駆け落ちが続出るとか、思い人同士で一緒に見ると一生添い遂げられるとか、様々な噂が流れる芝居だ。

そのせいなのかは知らないけど国から規制がかけられており、年に決まった時期しか公演されないとか。

そして、今がその公演の期間中なのである。これは見に行くしかない

い。

と言うことで思いつ切りおめかししてリオンとデートした。

芝居の内容は噂に違わぬ良いものだった。いつか私もリオンに…

〔イングの曜日／ヘイムダルの週／アンスールの月〕

今日、いきなり姫様がやってこられた。しかも雑な変装をして。なんでバレ無いのが不思議である。

何故突然来たのかは秘密らしく一切教えてもらえなかったけど、姫様は明日まで匿って欲しいとの事でとりあえず私が寝泊まりしている屋根裏に詰め込んでおくことにした。

子供の頃に作った犬小屋みたいね、とはしゃいでいた。

その後、『あ、ごめんなさい。こころイズが寝ているのよね。今の言いかたではまるでルイズが犬みたいって言ってるようなものね』とほざいて来た。とりあえず、殴った。

〔イングの曜日／ヘイムダルの週／アンスールの月〕

今日の事は詳しく書けない。けど、文句ぐらいは書いても良いはずだ。

いつものようにヒラヒラの支給服に着替えて、仕事へと向かおうとしたら、いきなり姫様にリオンと一緒に店から連れ出された。

せめて着替えさせてと頼んだが時間が無いと言って聞き入れてもらえなかった。街中をあの恥ずかしい恰好で歩かされた。許さない。

ここで待つて、と先月リオンと行った劇場の横の厩舎で3時間待たされた。馬臭い。許さない。

そしてまた説明もなく、馬車に乗せられ高等法院長の屋敷へと連れてこられたと思ったら緑色のバケモノと戦わされた。イライラし過ぎてエクスプロージョンを撃ったら屋敷の半分が消し飛んだ。

姫様に命じられたと責任転嫁してやった。姫様と一緒にリオンに説教された。やっぱり許さない。

くおまけ？く

カツカツカツと薄暗い地下道を1人の初老の男が走っていた。

「ちっ、小娘風情がなかなかやりおる。だが、屋敷に戻ってしまえば問題無い。財を土産に亡命してしまえば……」

と、初老の男が苦虫を噛んだような表情でそう呟いた。

この男、リツシユモンと言い、高等法院と呼ばれる司法機関の長であったのだが、トリステインに勝ち目無しと裏切っていたのだ。

しかし、それが今しがたアンリエッタ及びその近衛銃士隊によって暴かれ、逃走を図っていた。

「待てッ！ リツシユモン！ このまま逃げられると思うな！」

しばらくするとリツシユモンの後方から淡い光と共に3人の人影が駆けてきていた。

「ぐっ、平民風情が調子に乗りよって」

リツシユモンが追ってきた人影を見て小さく罵る中、ドーンツと銃声が鳴り響きと同時にリツシユモンの足元が小さく弾けた。

「そこまでです。これ以上の逃走は無意味です。大人しく投降してください」

リツシユモンを追ってきた3人のうち槍を構えた赤い髪の少女エレノアがリツシユモンへと言葉を向けた。

「ふぎけるな！ 平民風情の下賤な輩が騎士気取りでこの私に投降しろなど。貴様らなど、あの女の庇護が無ければ何も出来ぬくせに」

「黙れこの裏切り者！ 隊長、捕縛の許可をッ」

「許可する。だが抵抗が激しい場合、…殺害も許可する」

リツシユモンの言葉に黒髪の少女クロエが眉間にシワを寄せ、そして隊長と呼ばれた女性アニエスが銃を捨て、腰から新たな銃と剣を引き抜きいてエレノアとクロエへと命令を出した。

「殺害だと？ ふんッ、殺されるのは貴様らだ。良い事を教えてやる。ここはもう我が屋敷内の地下だ」

「？ だから何だ？ 言っておくが貴様の屋敷もすでに陛下の命によって抑えられている。逃げられはしないぞ」

「だからどうした？ あの方から与えられたこイツらで貴様らと上

の奴らを片付ければよいだけだ」

リツシユモンはアニエスの言葉にニヤリと嫌らしい笑みを浮かべながら懐から水晶のような物を取り出すと足元へ叩きつけて砕いた。

次の瞬間…

『グガアア、アアアアアアアアッ!!』

と、地下道内に強烈な咆哮がどどろき、そして…

「ひッ!？」

「な、なんだっ!？」

「リツシユモン！ 貴様ッ。なんだそのバケモノは!!」

リツシユモンの背後から得体のしれないバケモノが2体現れた。

ソレは人の倍ほどの大ききで肌の色は毒々しい緑色をしており、そして頭部と思わしき場所には赤い目玉のような物が1つ付いていた。

「なあに、ちよつとした魔獣だ。そこらの騎士などよりはるかに強い。もしもの時にとある御方お譲り頂いたのだ。今しがた、この2体以外の残りも上で解放された。

くつくつく。逃げられると思っっているかだつて？ それはこちらの台詞だ！ さあ、バケモノ共ッ。あの下賤なバカ共を殺ッ：ガッ!？」

あ…：あ、あ。な…：ぜ？ ……ッ!？」

ぐちやりと、リツシユモンが単眼のバケモノをアニエス達へとけしかけようと腕を振り上げた瞬間、単眼のバケモノは思い切り腕を横へ振り抜き前にいたリツシユモンを壁へと叩きつけた。

そして間を置かず、もう1体が壁へともたれかかっているリツシユモンの頭へと手を叩きつけその頭部を潰した。

『ア、ア、アアアアアアッ!!』

リツシユモンを殺したバケモノ2体は不快な叫び声を出すと、その赤い1つ眼をアニエス達へと向け、強い殺意をまき散らしながら3人へと移動し始めた。

「クロエツ、エレノアツ、動きは緩慢だが力は凶悪だッ！ 攻撃は全て避けるつもりで戦え。決して防ごうと思ふな！」

「了解」

向かってくるバケモノにアニエス達は武器を構え、迎撃の体勢を

取った。

バケモノとの戦闘が始まり、最初の内はアニス達が攻勢に出て優位に動いていた。

だがバケモノはいくら攻撃を受けようにも、痛みを感じていないのか防御や回避などせず、一心不乱に攻撃を繰り返し続け、さらにはアニス達が与えていた傷も異常な速さで塞がり回復し、気づけばこの戦いの優勢はバケモノへと移っていた。

そして…

「きゃッ!？」

「エレノアッ!!」

エレノアがバケモノの攻撃をかわし切れず武器を弾かれ、その身を石床へと倒されてしまった。

バケモノと言えどその隙を見逃すわけもなく、丸太のような太い脚を振り上げエレノアへと踏み出そうとしていた。

「…や、ああっ」

エレノアは己が身を潰そうとする足を見上げ、反射的に身を竦め目をつぶり、死を覚悟した。

が、しかし…

「怪我は無いかい？ レディ」

突然の浮遊感と、ここには居ないはずの男性の声にパツと目を開けると、目の前には覆面で顔を隠した人物がいた。

「あなたは？」

「私はウルタス・ブイ！ この世の悪を裁き、平和の世を願う正義の味方さ」

エレノアの問いに男はまるで演劇役者の如く大仰にマントをはためかせながらそのように答えた。

「さて、美しきレディ達よ。この私も助太刀しよう！ この禍々しい怪物共をいざッ！」

「え!? ま、待ってください！ 私もッ」

ウルタス・ブイは言うや、腰から独特な雰囲気を持つ剣を引き抜き、アニスとクロエを助けにバケモノへと駆けて行き。エレノアも慌

てながらも丁度都合よく近くに転がっていた自分の槍を拾い上げ、後を追った。

しかし、バケモノは異常な回復力と防御を一切無視した猛攻があり、そう簡単には倒せるものではない。アニエスもたった1人、どこかの誰だか知らないが助けに入ったところだと思っていた。

「…？ どういうことだ。バケモノの傷が治っていないか？」

「それにバケモノの動きが遅くなっている気がする」

しかしアニエスとクロエが言う通り、ウルタス・ブイが加勢に来てからバケモノの傷が回復していかず、その動きも元々緩慢であったのも合わせてとても遅くなっていた。

「よく分からないが今がチャンスだ。一気に攻めたせるぞ！ クロエ、エレノア合わせろッ」

「了解ッ！」

アニエスの号令の下、クロエとエレノアがバケモノの片割れの左右に陣取り、

「覚悟を決めよ…荒ぶる心、無風なる水面みなもの如く、鎮まれ…、斬る!!
我が剣の前に安らかに眠るがいい。無想神烈閃むそうじんれつせん！」

「参ります！ 奥義！ スパイラル…ヘイル！」

お互いタイミングを見計らい、渾身の技をそれぞれバケモノに叩きつけた。

そして最後、バケモノの正面に陣取っていたアニエスが剣を構え、「見せてやる！ 貫け！ 斬ッ！ 空ッ！ 天ッ！ 翔ッ！ 剣ッ！」

一息にバケモノへと近づき力強い突きを放ち、次いで斬り降ろし、斬り上げ、突き上げ、飛び上がりアツパーを叩きつけ、そして最後に跳躍しながら一気にバケモノを斬り上げた。

「やるじゃないか！ 私も負けてられないな！」

もう片方のバケモノの相手をしていたウルタス・ブイがアニエス達の華麗なる剣技を見てそう言うと、一旦バケモノから離れ、構え直し、そして…

「あるべいん流奥義、冥空斬翔剣！」
めいくうざんしょうけん

バケモノの懐へ踏み込み、斬撃を2度喰らわせ、トドメに飛び上がりながら斬り上げ、バケモノを絶命させた。

「ふう、何処のどなたか存じないが、助かった。礼をここに」

バケモノ2体が完全に沈黙した事を確認するとアニエスは剣を仕舞い、ウルタス・ブイへと頭を下げた。

「おっとお礼にはまだ早い。まだこいつらの残りが上の方で暴れている。こつちだ、出口に案内する。付いて来なさい」

「わかった。2人ともまだ行けるか？」

「大丈夫です」

「まだまだいけます」

ウルタス・ブイの言葉にアニエスはエレノアとクロエに怪我や疲れは大丈夫かと、言外に確認すと2人は何でも無いと不敵な笑顔を浮かべ言い返した。

そして4人はウルタス・ブイの案内で地上への出口に向かって移動していった。

ルイズの帰郷

ルイズSide

「今日、ついに魔法学院にもアルビオンへの侵攻作戦が発布されたわ！それに伴い姫様から私たちに特別任務が与えられたわッ！いいリオン？ 私たちは姫様の、ひいてはトリステインのためにこれに参加し、レコン・キスタ倒してアルビオンを救うのよ!!」

夏休みも終わり早2ヶ月。アルビオンのレコン・キスタとの睨み合いもついには終わり、国はアルビオンへの侵攻をついに決定した。

そして今日、その知らせが学院にも来たわ。

そして知らせを持ってきた騎士の1人から姫様からの手紙を私は受け取った。内容は推して知るべし。

私は手紙を読み終えるやりオンに事の重大さや、如何に姫様から厚い信頼をされているかと言う事を説明し、このように声を大にして言い聞かせていたのだけでも…

「ついに頭がおかしくなったか。そんなものに僕は関わるつもりは無いぞ」

これである。何故分かってくれないのだろうか。こんなに名誉で素晴らしい任務を与えてくださる姫様になんの不満があるのだろうか？

「不満とか、それ以前のレベルの問題だ。何故お前はアンリエツタが絡むと思考が幼稚になるんだ？」

「誰が幼稚ですって!!？」

「お前以外誰がいるんだ？ はあ、まったく。何度も言うがその任務とやらは断るんだ。たかがお前1人が入ったところで何も変わらない。むしろ邪魔が増えるだけだ」

はあ、まったくは私の方よ。何も変わらないですって？ バカ言わないですよ。私にはこの虚無の魔法があるのよ？ 足手まといどころか私はトリステインの秘密兵器と言っても過言じゃないんだから。

「ルイズ。お前、まさか自分は虚無の魔法が使えるから大丈夫とか思っていないだろうな？」

「は、はあッ!!? そんなこと思っでないわよ! そう言うリオンこそなんでそこまで反対なのよ? この任務はとても気高く誇り高い名誉あるものなのに」

「戦争は遊びじゃない。人が死ぬんだ。そして殺すんだ。気高いとか誇りあるなんて言葉で飾って行くような場所では決して無い」

そんなことは分かっている。それでもヴァリエール公爵家の娘だもの。それにアルビオンでのことやタルブの村での戦いも経験した。確かに怖かったけど、でも、ジエームス陛下の事やあの夏休みの緑色のバケモノの事とか、レコン・キスタの魔の手がこの国の深い所まで来てしまっていると分かった以上、見て見ぬフリなんて出来ない。「…私はそれでも姫様の役に立ちたいし。この国をあんな奴らのせいでこれ以上無茶苦茶にされたくないの。だから私は何を言われたって姫様の助けになるって決めたの」

私は私の気持ちを真っ直ぐリオンにぶつけた。リオンはムスツとしたまま話を聞いていたけど、最後には諦めたようにため息を吐き、「もう好きにしろ」

と、言ってくれた。

「…ッ! ありがとうリオンッ。後はお父様たちへの報告ね。姫様からの直接の任務だつて言ったらきつと大喜びするに違いないわ」

私は嬉々として机に向かい手紙をしたため始めた。

それから数日後……。

「…………おおおんのッおばかルイズ!!!」

「ぎやあああッ! ごめんなさい姉様ッあああ!」

私は突如として部屋に上がり込んできたエレオノール姉様に大折檻を受けていた。

何故突然こんなことになったのか…。

従軍すると言う旨の手紙を実家に送って、それから実家から帰ってきた手紙に従軍はまかり通らぬと言う内容が書いてあったから、ふざけるなど思い、もう無視して従軍の為の準備をしていただけだと言う

のに…。

「どう考えても、それが原因だ」

とはリオンの言葉。

「なんでよ！ 私は覚悟を決めて祖国トリスティンの為に戦いに行くと言うのに、それを行くと言ってお父様たちが悪いとおぼぼお！ いひやひへぶおへいひやわッ！」

「なに生意気なこと言っているの！ このちびルイズツ!! ええっ？ 生意気な事を言うのはこの口なのッ」

「びやあああッ!!」

姉様に頬をつねり上げられて激痛が走る。とにかく痛い。と言うか引つ張り上げ過ぎてもうつま先立ち状態なのだけど！ ほっぺが千切れるッ！

エレオノール姉様は昔からこうだ。いつつも私をいじめる。何かある度に怒って、頬をつねってちびルイズお馬鹿ルイズって…。

「ところでおチビ。…その彼は一体だれなの？ どこの御家柄の子なの？ とにかく部屋に男を入れてるだなんておチビのクセに生意気だわねえ！」

「いやああッ!? ちょよ、ちょっとまって姉様！ エレオノール姉様ッ。違うんです！ 彼は私の使い魔でそう言うのではないんです！」

「はああ？ 使い魔？ 貴族の子弟じゃない」

「違います貴族じゃありません平民です。そして使い魔なんです！」

「なに訳わかんないこと言ってるのよちびルイズ！ どう見たって… まあいいわ。とにかく今日わたしが貴方を迎えに来た理由は分かっているんでしょね？ ほらさっさと行くわよ！」

えッ？ 何が!? と言う暇もなく私はエレオノール姉様に引きずられて、私は庭に止めてあった馬車へと放り込まれた。

「おチビの使い魔(?)。貴方あなたはあつちの馬車に乗って。それと…ああッ、丁度いいわ。その貴女あなたも来なさい」

「えっ？」

そう言つてエレオノール姉様はリオんとたまたま通りすがったシエスタをもう一つの馬車へと有無を言わずに乗せると、私の乗って

いる馬車へと乗り込み…、

「じゃあ行つてちょうだい」

御者へ一言命令して馬車を走らせ始めたのだった。

「ところであの使い魔(？)の彼っていったい何者なの？」

「ふえ？ 何者って…どういう」

学院を出立してから2日目、姉様が突然リオンの事を聞いて来た。

「そのまんまの意味よ、このちびルイズ」

「なんべつねふんでふか!?」

「そんなことは気にしなくていいの。とにかく彼は一体何者なの？」

あなた確か、平民だつて言ったわよね？ でもこの二日間見てて思ったけど、彼とても身のこなしがとても綺麗だわ。さらに作法もきちんとしている。どう考えてもそれ相應の教育を受けてる動きだわ。一介の平民が一朝一夕で出来る動きじゃない。どういう事か説明しなさいな。ちびルイズ」

「え、ええ〜」

と、私は抓られて赤くなった頬を撫でながら困惑気味に声を出した。

だつてどう説明しろと言うのだろ。別の世界からやってきた剣士？ 元領主の息子？ 何言つたつて信じてもらえない気がしない。そして抓り上げられる未来しか見えない。…どうしよう。

「えつとですねえ。リオンはその、えつと、…あつ、そう、ロバ東・アルの・カリイ世エ界から使い魔召喚の儀でやってきたんです。彼、元々はロバ・アル・カリイエの貴族なんですけど、なんでもとある理由でお家が潰れてしまい、いわゆる傭兵のような事をしながら暮らしていた所を、私が召喚したんです」

「ふーーーーーーーん」

あ、これまったく信じてくれない反応だわ。どうしようどうしようどうしようッ!?

「何を隠してるのか知らないけど、まあ今はいいわ。屋敷に着いたらお母さまとお父様にお説教してもらいますからね。覚悟しておきな

さいね！」

「ううう」

私はお説教と言う言葉にお父様とお母様の怒った顔を思い浮かべ、頭を抱えた。

お父様は上手く甘えれば何とかなるとして、お母様は……場合に よっては骨と言う骨がへし折れるかもしれない。

私はお母様の説得するにはどうすればいいか悩み続け、そしてそのままに何も思いつけず、気づけば屋敷へと辿り着いたのだった。

ルイズの日常

ルイズSide

実家に帰省してから10日目。

私は自室でいつものように目を覚まし、ゆつくりとカーテンを開ける。

窓を開けバルコニーへ出れば澄んだ空気と少し冷えているけれど清々しい風が吹き、開けた放たれた窓から部屋へと駆け抜け、さつぱりした気持ちにさせてくれるような気がした。

私はそんな気持ちのいい空気を大きく吸い込み…

「学院にかえりたあ〜い」

と、雨期のじとじと〜とした空気のような気持ちで大きなため息と共に言葉を吐いた。

何故こんな気持ちなのか。それは家族全員に戦争に行くことに反対され、戦争が終わるまで敷地から出ることを禁止された事も勿論なのだけ…。

そんなことよりもリオンが何故か家族全員にやたら気に入られてしまったことが、このどんよりした気持ちの一番の原因なのである。

もちろんお父様達がリオンに良い心象を持ってもらえたのは私としても本当は嬉しいの。本来ならねッ！

でもそれで私はいいい気になって、調子に乗り…、

『リオンと一緒になら危険な事なんて何も無いわ！ 私たちがレコン・キスタから国を守って見せるの!!』

と、啖呵を切ったのが災いの始まり。

父様がお城から戻られ家族全員での夕食の席で発した言葉を皮切りに、お父様とお母様からの説教が始まり、しかもその説教の最中にリオンの奴が私が虚無の系統だと言う事を家族のみんなにバラしやがったものだから更に大騒ぎになった。

そしてその事でまたお説教が長くなって、お母様に至っては私が親に嘘をついたと言う事に大層お怒りになり…

『親に平気で嘘をつく様な子だとは思いませんでした。少々躰け直さ

なければいけないようですね（クワツ！）』

と、私は母様のその鋭い眼光と杖を向けられ、中庭へとエアハンマーで叩き出された。

その後、母の魔法により空を舞い上がり、時に渦巻き、揺さぶられ、吹き飛ばされ、そして屋敷より高く跳ね上げられた辺りで記憶が無くなり、ふと目が覚めると早朝の中庭でボロボロで土まみれの無残な姿で朝日を浴びていた。

そして、その日から敷地からの外出を禁止された。

この軟禁生活の間、エレオノール姉様には暇なら勉強しろだの魔法の練習をしろだの顔を合わせる度にグチグチ嫌味を言われ。

お母様にはリオンは毎朝早く起きて剣の鍛錬をしているのに彼の主として暇を持て余しているだけの生活をして恥ずかしくないのかと朝食の度にお小言を聞かされ。

お父様もリオンは素晴らしい人物だから私もそれに見合った器量たしなや嗜みを持ちなさいと、やっぱりお小言を聞かされ。

そして味方だと思っていたちい姉様すら『確かに彼の言葉は辛辣だけど、でも貴女を思っている事なのよ。彼は本当に心が優しい人よ』と、リオンの味方になっていてはないか!!

「ねえッ！ これちよつとおかしくない!? ここは私の家なのに何で私ががこんなに肩身の狭い思いしなくちやいけない訳ッ」

「普段のおこないではないかと思えますよ。ミス・ヴァリエール？」

「ミス・ヴァリエールはこの家に3人いるから誰だかわかんない」

「ほんと最近どんどん言動が酷くなってませんか？ ルイズさん」

「シエスタまで!? 私の何がどこが酷いって言うのッ！ もー！！」

もうッ、みんなまるで私が問題児みたいな扱いして何なのよッ！

リオンなんかここ最近、私を見る度に大きなため息吐くのよ!? 信じらんない。もうこんな生活なんて続けてられないわッ。もうこんな家にはいたくない。逃げたい。一体どう……

「……………そうだわ。実家ここから逃げちやえばいいんじゃない」

「いきなり何言ってますか?」

「そうね。まずどうするべきかしら？ リオンは冷淡に見えて実際は世話焼きだから私が逃げれば追って来てくれるから別にいいわね。

姉様たちは何も問題ない。ちい姉様はお身体が弱いから無理はできないし。エレオノール姉様はちよつと前から塔にこもって魔法の研究中。まだ暫くは出てこないはず。

お父様は先日また城へと招集されたから、しばらく留守になる。

と、いうことはお母様にさえ見つからずに家を出れば勝ったも当然……。ふふふ」

私の華麗で可憐で完璧な頭脳が今生において最高の思考の冴えを發揮している気がする。

ああ、今まさに完璧な策が沸いては消えていくわッ。見ていてくださいお母様。このルイズお母様をギャフンと言わせて見せるわッ！

「誰か！ 誰か来てくだ「エクスプロージョン」ぎやあつ!!?」

大声を上げようとしたシエスタをボンツという小気味よい小爆発で意識を刈り取る。

「まったく油断も隙もありはしないわね。私の計画を邪魔しようとするなんて。まあいいわ。シエスタ、貴方は私の親友として手伝ってもらうわね。うふふふふふふふふふふ」

さあ、大脱出よッ!!!

リオンSide

「一体何がどうなったらこうなるんだ…」

僕はヴァリエール家の正門を呆然とした表情で見上げながら呟いた。

「すいません。私が無理やりにも止めていけば、こんな酷いことには…」

「…あなたのせいじゃ無いわ。わたしがもう少しルイズの気持ちを察してあげられていれば…」

僕の横ではシエスタとカトレアが悲嘆ひたんの表情で顔を俯かせていた。

「何を言ってるの？ おチビがこうなったのも当然の報いじゃない。お母様に盾突いたらこうなるなんて分かってる事じゃないの。ほらかトレア、あまり長く外に出ると体に障るのだから部屋に戻りなさい。おチビのメイド、あなたもポケっとしてないでカトレアに付き添いなさい」

そんな悲嘆に暮れていた2人にエレオノールが後ろから慚然と言いつ放った後、ボロ雑巾のようになって正門の上部に逆さで磔にされているルイズの姿を見て大きいため息を吐き、屋敷へと足早に帰って行った。

何故ルイズがこのような

実家に帰省してから10日目。

私は自室でいつものように目を覚まし、ゆっくりとカーテンを開ける。

窓を開けバルコニーへ出れば澄んだ空気と少し冷えているけれど清々しい風が吹き、開けた放たれた窓から部屋へと駆け抜け、さっぱりした気持ちにさせてくれるような気がした。

私はそんな気持ちのいい空気を大きく吸い込み…

「学院にかえりたあ〜い」

と、雨期のじとじと〜とした空気のような気持ちで大きなため息と共に言葉を吐いた。

何故こんな気持ちなのか。それは家族全員に戦争に行くことに反対され、戦争が終わるまで敷地から出ることを禁止された事も勿論なのだけど…。

そんなことよりもリオンが何故か家族全員にやたら気に入られてしまったことが、このどんよりした気持ちの一番の原因なのである。

もちろんお父様達がリオンに良い心象を持ってもらえたのは私としても本当は嬉しいの。本来ならねッ！

でもそれで私はいいい気になって、調子に乗り…、

『リオンと一緒になら危険な事なんて何も無いわ！ 私たちがレコン・キスタから国を守って見せるの!!』

と、啖呵を切ったのが災いの始まり。

父様がお城から戻られ家族全員での夕食の席で発した言葉を皮切りに、お父様とお母様からの説教が始まり、しかもその説教の最中にリオンの奴が私が虚無の系統だと言う事を家族のみんなにバラしやがったものだから更に大騒ぎになった。

そしてその事でまたお説教が長くなって、お母様に至っては私が親に嘘をついたと言う事に大層お怒りになり…

『親に平気で嘘をつく様な子だとは思いませんでした。少々躰け直さなければいけないようですね（クワッ！）』

と、私は母様のその鋭い眼光と杖を向けられ、中庭へとエアハンマーで叩き出された。

その後、母の魔法により空を舞い上がり、時に渦巻き、揺さぶられ、吹き飛ばされ、そして屋敷より高く跳ね上げられた辺りで記憶が無くなり、ふと目が覚めると早朝の中庭でボロボロで土まみれの無残な姿で朝日を浴びていた。

そして、その日から敷地からの外出を禁止された。

この軟禁生活の間、エレオノール姉様には暇なら勉強しろだの魔法の練習をしろだの顔を合わせる度にグチグチ嫌味を言われ。

お母様にはリオンは毎朝早く起きて剣の鍛錬をしているのに彼の主として暇を持て余しているだけの生活をして恥ずかしくないのかと朝食の度にお小言を聞かされ。

お父様もリオンは素晴らしい人物だから私もそれに見合った器量たしなや嗜みを持ちなさいと、やっぱりお小言を聞かされ。

そして味方だと思っていたちい姉様すら『確かに彼の言葉は辛辣だけど、でも貴女を思っている事なのよ。彼は本当に心が優しい人よ』と、リオンの味方になっていてはないか!!

「ねえッ！ これちよっとおかしくない!? ここは私の家なのに何で私がおんなに肩身の狭い思いしなくちやいけない訳ッ」

「普段のおこないではないかと思えますよ。ミス・ヴァリエール?」

「ミス・ヴァリエールはこの家に3人いるから誰だかわかんない」

「ほんと最近どんどん言動が酷くなってませんか? ルイズさん」

「シエスタまで!? 私の何がどこが酷いって言うのッ! もー」

!!

もうツ、みんなまるで私が問題児みたいな扱いして何なのよツ!

リオンなんかここ最近、私を見る度に大きなため息吐くのよ!? 信じらんない。もうこんな生活なんて続けてられないわツ。もうこんな家にはいたくない。逃げたい。一体どう……

「……………そうだわ。実家ごごから逃げちゃえばいいんじゃない」

「いきなり何言ってますか?」

「そうね。まずどうするべきかしら? リオンは冷淡に見えて実際は世話焼きだから私が逃げれば追って来てくれるから別にいいわね。」

姉様たちは何も問題ない。ちい姉様はお身体が弱いから無理はできないし。エレオノール姉様はちよつと前から塔にこもって魔法の研究中。まだ暫くは出てこないはず。

お父様は先日また城へと招集されたから、しばらく留守になる。

と、いうことはお母様にさえ見つかからずに家を出れば勝ったも当然

……。ふふふ

私の華麗で可憐で完璧な頭脳が今生において最高の思考の冴えを發揮している気がする。

ああ、今まさに完璧な策が沸いては消えていくわツ。見ていてくださいお母様。このルイズお母様をギャフンと言わせて見せるわツ!

「誰か! 誰か来てくだ「エクスプロージョン」ぎやあつ!!?」

大声を上げようとしたシエスタをボンツという小気味よい小爆発で意識を刈り取る。

「まったく油断も隙もありはしないわね。私の計画を邪魔しようとするなんて。まあいいわ。シエスタ、貴方は私の親友として手伝ってもらうわね。うふふふふふふふふふふ」

さあ、大脱出よツ!!!

リオンSide

「一体何がどうなったらこうなるんだ…」

時刻は昼を過ぎた頃、僕はヴァリエール家の正門を呆然とした表情

で見上げながら呟いた。

「すいません。私が無理やりにも止めていけば、こんな酷いことには……」

「……あなたのせいじゃ無いわ。わたしがもう少しルイズの気持ちを察してあげられていければ……」

僕の横ではシエスタとカトレアが悲嘆ひたんの表情で顔を俯かせていた。

「何を言ってるの？ おチビがこうなったのも当然の報いじゃない。お母様に盾突いたらこうなるなんて分かってる事じゃないの。ほらかトレア、あまり長く外に出てるのと体に障るのだから部屋に戻りなさい。おチビのメイド、あなたもポケつとしてないでカトレアに付き添いなさい」

そんな悲嘆に暮れていた2人にエレオノールが後ろから懽然と言いつ放った後、ボロ雑巾のようになって正門の上部に逆さで磔はりにされているルイズの姿を見て大きいため息を吐き、屋敷へと足早に帰って行った。

哀れな姿になっているのか。

簡単な話し、ルイズが言いつけを破り屋敷から逃げ出そうとしたが失敗し、ヴァリエール夫人によって折檻された。ただそれだけだ。

騎士達との午前の鍛錬を終え昼食を取っていた時、外から爆音や地響きに驚き駆け付けてみればこの有様だった。

脱走に無理やり付き合わされていたシエスタが言うには、やたらと自信満々に完璧な作戦を考えてあると言っていたらしいのだが……。

この見るに堪えない姿を見れば、その完璧な作戦が一切成功しなかったのは想像に難くない。

「……。そういえば人間は長い時間逆さ状態だと死ぬと聞いたことがあったな。……はあ、まったく。こんな訳の分からない事で迷惑を付けてくれるなど言いたいものだ」

僕は大きなため息をついてルイズを騎士達と門から降ろし部屋へと投げ込んだ。

出発

リオンSide

ルイズが逆さまになってから数日が過ぎた。

あの頭の痛くなる出来事以降、ルイズの生活はもはや監禁と言って差し支えないようなものになった。

具体的に言えば、杖を取り上げられて寝所が地下室になり、部屋の扉は錠が掛かった鉄扉となり、食事と散歩には夫人がルイズに首輪を掛けて行われると言うような、色々アレ過ぎて見ているこっちも本当に頭が痛くなってくる光景が日々行われている。

しかもタチが悪いことにルイズはそんな目に合っても脱走することを諦めておらず、虎視眈々と夫人の隙を窺っている。

「この国の貴族は基本的に頭がどうかしている奴らしか居ないのか？」

と、僕はルイズの今日の午後の散歩風景を屋敷の書斎から見下ろし、呆れながら眉間を抑えて呟いた。

「まあ、本来ならそんなことは無いと言いたいところではあるのだが、実際身内がアレでは否定などできるはずが無いのがな……。妻も昔から感情的になると色々やかして後に引けなくなると、とことん突っ走る悪癖があつてな。娘たちもそう言う気があり、特にルイズは一番性格が似てしまつてな。はっはっはっは……。……はあ」

僕の呟きに答えたのは同じように散歩の様子を見ているヴァリエール公爵であり、その大きなため息には強い疲労の色が見える。

まあ自分の妻と娘があのような状態ではしようがないのだろう。

「で、自分に話とは？」

「ああ、そうだな。立ったままというのもなんだ、茶を入れさせている。こっちへ」

ヴァリエール公爵はそう言って窓辺から離れ、お茶が用意されているテーブルへと僕を促した。

「まあ、話しと言うのは他でもない。ルイズと共に学院へと戻ってあげて欲しいというものだ」

「…よろしいので？ 言つては悪いが、あいつは屋敷を出て学院に行けば、確実に虹翼を使つて戦争に向かう。一応止めはするが、言う事を聞かないのは公爵殿が一番分かつてると思ふのだが」

「分かつてはいる。しかし、屋敷であのような生活をさせ続けるのも如何なものかと思うのも事実。はつきり言つてあの光景を見る度、胃が痛い。」

城で会議でキチ○イ老人共の妄想戯言に付き合わされて疲れているのに、家に帰つてみれば妻と娘が理解に苦しむ行動をしているツ！。もう私の胃は限界だ。

君に丸投げするようで悪いのだが、ルイズの事は任せる。

丁度、明後日に友人が訪ねて来て3日程滞在する。あいつの帰りにルイズと共に荷物に紛れてここを出るといい。妻の事は私が相手をしておくから心配は無い。では任せたよ」

公爵はそこまで捲し立てるとカップに残っていた紅茶を飲み干すとスツと立ち上がり、足早に書齋を出て行つた。

それはまるで僕から断りの言葉を聞くまいと逃げる様だった。

「いや、様だったではないのか。：はあ、気持ち分からない訳では無いがな」

しかし、えらく信頼を持つてもらえたものだ。僕の何が公爵たちにここまで強い信用を与えたのか分からないが、使い魔と言う身の上で屋敷で好待遇の生活をさせてもらつていた以上、公爵の頼みを無下には出来ない。

僕はしようがないと、公爵と同じように残つた紅茶を飲み干し書齋を出た。

そして、後日。

アルベルト卿と公爵に呼ばれた奇抜な恰好をした緑髪の大男が来訪し、しかも見知つた顔が一緒に来ていた。ジンとチトセだ。

どうやらアルベルト卿とはジンの父親らしく、ルイズの様子を見る為とチトセがルイズに会いたがつた事も兼ねて一緒に来たらしい。

ただ、

「しかし何故彼女はあんなドレスを着ている？」

「いいかりオン？ 世の中あえて我儘を聞く方が被害が少ない事もあるんだ。決してあいつに俺が屈したわけじゃない。決しだ」

「そうか」

と、無表情で何処を見るでもなく視線を彷徨わせながら力強く言うジンに、僕は一言そう返すことしかできなかった。

それから3日はチトセとルイズが屋敷に火を放とうとした事以外に特に騒ぎなど無く、公爵の計画通りにアルベルト卿たちの帰りの日に僕とルイズは荷物に紛れ、シエスタはジンに任せて馬車に乗り込ませてもらい、ヴァリエール邸を後にした。

キキSide

と、言う中々に混沌とした話をジンとリオンから軽い気持ちで聞いて後悔してから1週間程が経った今日この頃、ルイズとチトセが何か叫びながらレアボードに乗って天高く舞い上がり飛び去って行った。

「もうホント元気がいいなあ」

「元気がいいで済ませられる問題ではないッ」

「何やってんだよおッ!! 責任取らされんの俺なんだぞ!? これ以上の負債は本気で取返し付かないんだって!」

呑気に呟いた俺の横で、リオンは頭を押しさえ大きいため息を吐き、ジンは青ざめ絶望に染まった表情になって頭を両手で抱えていた。

「まあ、なんと言うか、応援しかでき…そだ。これ饞別に忍具。使い方と効果は…えーつと、コレに書いてあるから。饞別だと思っつて使ってくれ」

俺は応援だけではと途中で思い直し、ポーチ内の誰でも使用できるタイプの忍具セットを即席で書いたメモを渡した。

あ、文字は一応ハルゲキニアの文字を使っつてある。これならジンが読めるし大丈夫だろう。

「助かる。おいジン。いつまでも頭を抱えてないであの大馬鹿共を追うぞー!」

「ハッ！ そ、そうだ。お、追わなきや！ 息の根止めなきや!!」

息の根は止めてあげるなよ。と言うツツコミは心な中に留め、目が血走っているジンはリオンと共に厩舎へと駆けて行った。

「主人公って大変だよなあ」

なんて冗談交じりで眩き、俺は再度ルイズ達が飛んでった空を見上げた。

もちろんそこにはルイズ達の姿は影も形も無い。って言うか、皆が里帰り中に暇を持って余して乗り回してた時のレアバードより機動力がヤバイぐらい跳ね上がっている気がする。

「あれ、無事に帰ってくるかなあ？ ……無理かも」

まあいいや。良くは無いけど。

そんなことより、ジンに今後のゼロ魔の展開聞くの忘れてたなあ。

えっと……、

「まあいいか。何かあったら適当に対策・処理すればいいか」

この世界において俺が負けるとか苦戦とかありえないしね。

まあ確かに場合によっては先に色々手を打って面倒臭い事を失くしておきたいってのはあるけれども…、まあいいや。

「うおおおおお!! 待ってろチトセツ!! 岩に埋め込んで海の底に沈めてやらあつ!!」

「ジン落ち着け！ お前はそうやって感情的になればなるほどドツボにハマる事をそろそろ理解しろ」

と、鬼のような形相のジンと珍しく引いた様子のリオンが俺の横を馬で駆けて行った。

俺は心の中で頑張れ！ と応援をしつつ、ジンはやっぱり碌な目に遭わないんだらうなと思った。

「腹空いたし、飯食いに行こ」

空腹を自覚したら腹の虫が鳴った。

俺は昼食を取りにいつもの厨房裏へとタラタラと歩いて行った。

夕刻時、もう半刻もすれば完全に日が沈み夜のとぼりが訪れるとい
う中、私達は数日前にクロムウエルから命じられた任務の為にロサイ
スの港に停泊しているちよいと風変わりな船に乗り込み出航を待っ
ていた。

クロムウエルに命じられた任務は至極簡単。トリステイン魔法学
院に行き占拠し、トリステインに対して政治的に優位に立つこと、ら
しい。

まあ簡単な話し、学院のガキ共人質にしてトリステインを脅そうつ
て魂胆である。

「それにしても面倒な事を任せてくれたもんだよ。ったく」

「陛下の御命令だ。文句を言うな」

「何が御命令よ。あんただって不満たらたらじゃないのさ」

「…それでも、だ」

と、私の言葉に腕を組み壁に背を預けていたワルドの奴は仕方がな
いと言葉を吐いた。

今回の任での私達の仕事は、とある傭兵団を秘密裏に目的の学院ま
で案内することであり、難しい事など一切ない、それこそ子供の使い
走りでも出来る仕事だ。

ワルドの奴は自身がそんな使い走りの配達屋みたいなことを命じ
られた事に不満を持ち、少し不貞腐れている様子だが、私としては危
険なところに飛ばされるよりかはマシだと思っている。

じゃあ何で私はため息を漏らし文句を漏らしているのかと言うと、
この傭兵団のせいだ。

「あいつらまともに仕事すると思うかい？」

「報酬は十分払っている。それにしくじった時の私達だろう？」

と、ワルドは目の前の傭兵団の連中を見て言うが、私としちゃあコ
イツ等の相手なんぞ御免被る。

裏の界限でも悪名高い傭兵団『アドリビトム』

街の裏組織、荒くれ者の傭兵団、盗賊に空賊。そう言った金の為な
ら他人の命なぞ知ったこっちゃないような連中の中でも尚、鼻つまみ
者、はみ出し者。

そういう連中が一体どういう理由か知らないが、集まった集団。それが奴らだ。

狐のような面のニヤケ男、珍しいピンク髪の子白目の男、身の丈ほどもある剣を背負った男、まるで娼婦のような露出の多い服の小娘。他にも各々くつろいでいる奴らを含め、皆が皆独特の雰囲気纏っていた。

私も盗人として裏で色々やってきてコイツ等の噂なんかは耳に入っている。

そして実際に会ったことで私はその噂が誇張されたデタラメな物でないと言うのが本能的に分かってしまった。

例えばメンヌヴィルという大男。白炎の二つ名を持つ傭兵の世界では知られた男であり、その狡猾さと残酷さ、そして生き物を自らの炎で焼くことに至上の喜びを覚え、その実力は一人でオーク鬼の集落へ行き全滅させたと言う。

例えばアリスという女がいる。こいつは外見は清純な乙女と装っているがその腹の内は真っ黒。人の心や記憶を操作する禁制の薬や魔法等を使い依頼をこなすらしい。

その昔、魔獣の討伐依頼を受けた際に偶々森たまたまに行く途中にすれ違ったという農夫を丁度いいと操り、大量の火薬を背負わせ一切の躊躇なく巢穴へ潜り込ませ自爆させたという話がある。

そんな狂人まがいな奴らであり尚且つ、その実力は誰しもが耳に聞く程。

そんな連中の集団、もし万が一の事があり、敵対するような事にもなったらゾっとするよ。

「帆を張れッ!!」

と、私が顔を少し青くさせていたら野太い船員の声が聞こえた。どうやらいつの間にか日も沈み、出港の時間となっていたようだ。

ゆっくりと港を離れ十分に距離を取ったこの銀色の船は、船側に有るドラゴンの翼のような帆を広げると一気に加速し、私たちをトリステインへと運び出した。